東方世界で今を生きる。

マネー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方世界で今を生きる。

【Ｎコード】
Ｎ４５８４Ｉ

【作者名】
マネー

【あらすじ】
人間と妖怪の狭間に立つ者が東方世界で送る幸いな今を求める。約束を守るために、生きる。愛したヒトが教えてくれた『生き方』を探す物語。東方ｐｒｏｊｅｃｔの世界、幻想郷。たどり着いたそこで平穏な日常を生きる。所謂幻想入りです。世界観にＦａｔｅ的な解釈がありますが、それなりに考えてますのでご安心を。

プロローグ：この世界で約束を。

――――紅い、紅い血が滴り落ちる。

自分の血のはずだった。

この手を伝う血は――――

「ごふッ！」

最愛のヒトの血。この身が愛したヒトの、血。

「ぁ……、な、ぜ？　なぜ？　何故ッ！？　君の爪が私を貫く方が早いはずだッ！

何故！　私の剣が君を貫いて！　いる、んだ……。なぜ――」

――君はそんなにも優しく微笑んでいるんだ？

「ふぅ……、は、ぁ……。言った、はずだぞ？　『生を求めるな。死を求めよ』と。
愛したお前に殺されるのだ。これ以上に幸いな死を、我は知らん。」

――それは、君が教えてくれた事。

「それは……。～～～ッ！」

――君は、幸いを持って死へと向かう。ならば、何故泣き顔でいられようか。

無理やりにでも、微笑む。それが、君への餞なのだから。

「……ふふ……。最後だ、我侭を一つ、いいだろうか。」

剣をその胸に突き立てた私の腕の中に収まりながらも、君の妖艶な笑みは、私の心臓を高鳴らせた。

「……！　あぁ。構わないよ。」

「……我の子で、双子が居てな。力を持っているやもしれぬ。何時の時代に生んだかは定かではないが、
おおよそ、鎌倉時代であろう。陰陽師や、あるいは同族にも狙われ

かねん。
頼まれては、くれぬか。」

心当たりがある。俺が、私として生まれた場所。最初に愛した、あの子が居る時代。

「……名前は？　いや、それは過去の話だ。行く術がない。」

彼女の元に行くには、絶望的なまでの時間を越えなくてはならない。
そんな事は私には不可能だ。
君が魔術を使っても、それだけの時を超える事は出来ない。

「７０年ほどなら、遡れる。本来なら不可能だが、この場で行使すれば、届く。なに、死ぬゆく身だ。最後の命を燃やし尽くそうとも問題はあるまい？」

千年城。この城の名。この城のでの一年は外での千年。だからこその、千年城。

「名は、夜風（よるかぜ）と夜水（よみ）だ。大体５２年ほど戻ればいいだろう。」

隔絶した世界だからこそ、君を封印出来た。そんな場所。

「……分かった。」

行かねば、この身は存在し得ない。ならば、行くのは必定。頼まれたのは俺との子ではないけれど。最初に愛したヒトだから。私を人からヒトにしてくれたヒトだから。そこに、不満はない。

君は陣を組み上げる。死に掛けで、尚その速度は異常。恐ろしく緻

密で、脆い、魔方陣が組みあがる。
理解しきれない。だが、そこに不安はない。

視線が絡み合う。唇が触れそうなほどの、至近。
陣は組みあがり、君の送る魔力が術式を起動させる。

「では、な。」

「ああ。」

不意に君は言う。

「あぁ、餞別だ。くれてやろう。」

「え？」

唇がそっと、触れる。最後の口付けの味は。

――――鉄の味がした。

プロローグ：この世界で約束を。（後書き）

誤字とかあったらどこが間違ってるか教えてくださいｏｒｚ

第一話：別れた先で。（前書き）

ううむ……。色々と厳しいか。実は処女作。見苦しかったらごめんなさい。

第一話：別れた先で。

――――その不意打ちは卑怯だと思うんだ、沙夜（さや）。

「最後の最後にそれか。全く、だから惚れた女には勝てないんだよ。ったく。」

奇妙な格好に黒のショートヘアの男――コウは髪をかき上げながら呟いた。

「さて……。今はいつだ？　いや、ここは……どこだ？」

時間跳躍だけでも規格外の魔術行使だというのに、空間跳躍まで付与したのか、君は。一体どれだけ規格外なんだろうか。

根源的な時間軸を失った彼女だからこそ、”時間”というものを誰よりも理解してるのだろうか。

時間軸を失うという事は、自分の中の時間を失う、つまり悠久の時を得るということ。基点となる存在に依存しなければ同じ時間に留まれないという事。

失って初めて気づく、などという言葉があるように、時間もまた失って初めてその本質を理解出来るようになるということなのだろうか。

そこまで考えて、否、考えすぎていた事を気づかされた。

「全く。人目に付かないのは騒ぎにならなくていいが……。山の中、というのが中々意地が悪いとは思わないか。代わりに君のような存在と態々出会うような場所にされたのでは、と勘ぐってしまいそうだ。」

忍び寄ろうとしていた者は、足音を、そして姿を隠す事を止めて、立ち上がる。エサのその奇妙な格好の異様さに歩みを止めてしまう。だが所詮はエサにすぎない。

必要なのは、あのエサをどうやって解体するか。ただその一点のみ。

そのままゆっくりと重心を沈めてゆき、飛び掛る準備をする。だが飛び掛る、と決めたその瞬間に発せられたエサの一言は出鼻を挫くには充分だった。

「……これでも妖怪に属するんだが。いや、そうか。この服が欲しいのか？　確かにこれは西暦２３００年ほどの頃に買ったものだがな。デザインは２０００年頃からそれほど変わっていないはずだぞ。」

よく分からない事を喚くが、コレは妖怪だと言った。ならば妖気があるはず。相手の力量を読み間違う者は長生きできない。コレはどれ程の存在なのかを観察する。

「ただの黒いＴシャツに、Ｇパン。ついで、紅いジャケット。確かに珍しいと感じるのは無理も無い。だがこれは勘弁してくれ。ヴェアウルフ。む？　ヴェアウルフでは通じないか？　人狼、狼男、というのを西洋風に言っただけだ。」

人狼にはソレの言葉は入ってこない。そんな事よりも何故、と考え、有り得ない、と結論付ける思考が頭の中を満たす。

妖気とは妖怪ならば生まれながらに多少なりとも保有しているもの。長く生きれば、身に付くものでもある。妖怪と名乗るものであれば保有していることに不思議はない。

だが、ソレは気を保有している。アリエナイと喚き散らしたくなる。ただの気ならば妖怪とて扱えるものは居る。人間が主に扱うものだが、別におかしいことではない。

ソレが保有しているのは”破魔の気”だ。有り得ない。

破魔の気は陰陽師共が自分よりも高位の妖怪と戦うために編み出した妖怪だけと対象とした対妖怪の気。だからこそ妖怪がそれを扱う事など有り得ない。

破魔の気を保有する存在が妖気を纏う。陰陽師の破魔の力。これを違う方向性に利用すれば、なるほど、

長い寿命を得るかもしれない。だがこれほどの妖気を纏うまでに生きる事など出来はしない。出来て３００年。それ以上は人間の魂が持たない。

破魔の気と、妖気を同時に保有している”妖怪”など聞いたことが無い――――！

「どうした？さっきから固まって。」

理解の出来ない存在が自分を下から覗き込んでいる。本能が危険だ、と喚いたのか。思わず吹き飛ばそうと、腕を振るう。

「おっと。危ないじゃないか。」

そんな言葉とともに危なげなく避ける、人間には有り得ざる運動能力。確かに妖怪なのだろう。
人狼は己を恥じる。確かに妖気を感じる。

上位に位置するこの身にはわずかに届かなくとも充分な妖気が。そして有り得ざる破魔の気を保有している。

確かに恐ろしい。だがそれがなんだというのだ。これの妖気は自分に及ばない。

これの破魔の気は平均的な陰陽師よりも多少多いだけ。そんなもので自分に対抗する事は出来ないと判断する。これだけの事であれほど接近され、声を掛けられるまで気づかない程に動揺させられるとは。

失態だ、と思う。同時に、油断してはならないとも思う。敵であると認識しなくてはならない。

「まぁ、待ってくれ。私は態々君と争いに来たわけじゃないんだ。ここが何処なのかを教えてくれないか。出来れば今がいつなのかも

頼みたいが、知らんだろう？」

あれの言葉を気にする必要はない。あれはこの自分の縄張りに侵入した。圧倒的なまでの妖気を纏っている訳ではない。寧ろ自分よりも弱い。ならばこの場から逃がす理由などない。エサにもなる。

重心を落とし、隙を探し、いつでも飛びかかれるように準備する。爪を伸ばし、妖気で硬化し刃と成す。

「ふぅ……。聞きたい事があるだけなんだが……駄目か？」

地を這うかのように姿勢を沈め、後ろ足の強力なバネで一気に獲物に接近する。

獲物を切り裂くための準備は終わった。後は切り裂くのみ。

「やれやれ……。餞別は、どれくらいかな？」

水を凍らせ、剣にしたようだが、もう遅い。僅かな妖気で作られたそんな剣ではこの斬るための爪は防げない。

射程範囲に捕らえ、脚のバネで上半身を持ち上げながら腰を捻り、腕を鞭のようにしならせる事で斬る力を上乗せする。逆袈裟。剣を構えても剣としての役目を果たせぬのなら意味はない。

――殺った！

「ふぅ……。聞きたい事があるだけなんだが……駄目か？」

爪を出して、攻撃準備万端か…。仕方あるまい。水で大剣を作り出す。一度に操れる水の総量はこの大剣分。非常に少ないが、一度凍らせ、固定された存在にしてしまえば、他に水を扱うことも出来、何より氷の剣に気を込めれば生半可な武具では話にならない耐久度と切れ味を誇る。

「やれやれ……。餞別は、どれくらいかな？」

妖怪が妖怪の血を飲んでもその力を得る事など有り得ない。だが、純粋に妖怪が力を送るためにその血を送ったのならば、有り得ない話ではない。さらにベースの体が人間ならば、その適応力は底知れず。

耐えられるか否かは本人次第だが、ほぼ確実に変質する。

沙夜の血で得たものは妖力器官。文字通り妖力を生成する器官。生成できる量はそこまで多い訳ではない。だがこれで妖気の総量は大妖怪には及ばずとも、中位の妖怪を遥かに凌駕する。

――終わりだ。

人狼には理解が出来なかった。確実に殺った。しかし、その目は驚愕に見開かれ、目や鼻、耳から血液を垂れ流し、理解する間もなく意識を手放した。

「……やっぱりこれだけの妖気があるだけで違う。」

コウがしたのた体内の水分を逆流させるというもの。直接相手に触れなければならない。相手よりも妖気で上回っていなければならない。妖気で簡単に補強されてしまう。等、まともに戦闘行為で扱える代物ではない。

だが人狼は爪に妖気を集めていたが故に防御が浅くなっていた。本来なら避けられないはずの一撃を避けたのはペーパー式の魔術、空間転移の構成術式を予め用意しておき、いざという時に魔力を通すだけで一瞬で発動するように紙か何かに準備しておくというもので対応する。

さらに剣を囮にしたことで魔力を通す時間を確保する。

これにより、一瞬で人狼の後ろに移動し、体内の水を操った。

ただそれだけで中位、あるいは上位の妖怪を殺せた事に若干の感動を覚え、何よりそれを可能としてくれたヒトへの情愛が浮かんでくる。

「ほんと……。いい女だよ。私には勿体無いくらいだ。」

不意に腹の虫が聞こえた。己の腹から聞こえた事には多少なりとも辟易とさせられた。妖怪のつもりでも精神は人間なのだ。腹は減る。

さて、腹いっぱい食ったし……。村でも探すか。

第二話：妖怪の山の鬼神（前書き）

うーん、やっちまった感がｗ　訂正加えました。無くても同じですが。

第二話：妖怪の山の鬼神

山を降りてすぐに麓の付近に村があった。

立ち入ってみれば、少々雰囲気が暗い。何か……いや、あのヴェアウルフに襲われていた、というところか。目に見える家屋は、家屋らしきもの、という表現が一番正しいだろう。

――寂れている上に人の気配が異様に少ない。ここは……滅ぶんだろうな。

しばらく歩いていれば、老婆が一人。

「もし、ご老体。すまないが、今がいつなのか教えては頂けないだろうか。」

怪しい人を見るかのような目で私を探るように見てくる老婆。己が格好の異様さで妖怪を一瞬立ち止まらせるほどに浮いている服であることに思い至る。

――しまった。この服は目立ちすぎる。

どこからか服を手に入れなくては、と内心で焦っていると一応は答えてくれる気になったようで、老婆は口を開く。

「……寛弘7年だよ。」

寛弘7年。寛弘とは一体いつだ。私が記憶しているのは弘安までだ。まぁ、いい。少なくとも1300年よりも昔だという事は分かった。彼女が生まれる前だというのはほぼ確定したし、良しとしよう。

「そうか。感謝する。」

そのまま立ち去ろうと会話を切り上げるが、大事な事を聞き忘れていた事を思い出す。

「すまない。もう一つ教えて頂きたい。ここは何処なんだろうか。」

すると老婆は哀れんだ視線を寄越しながら再度口を開いた。

「あんた、大丈夫かい？　北に行けば京の都があるから、行ってみれば気まぐれな陰陽師様が見てくれるかもしれないよ。」

北に行けば京。

――奈良あたりか。関東は少々遠いな。仕方が無い。歩いて行くか……。

「いや、大丈夫だ。妖怪を狩って回っていたのでな。どこまで来たのか分からなくなってしまったんだ。」

――これなら妖怪退治で稼げるかもしれん。やる価値はある。

すると老婆は目を見開き、怪しげな格好をした男がやってきた方向にあるものを見て、自分なりに理解したのか。
恐る恐るではあったが聞いてきた。

「ぁ……あの、もしかして、貴方様は陰陽師様なのですか？」

「いや。ただ妖怪退治を仕事にしているだけだ。そんなに気にされなくとも大丈夫だ。」

その答えに陰陽師に、それも妖怪退治を仕事と出来るだけの有能な人、つまり高い立場にある陰陽師に失礼な事を言ってしまったのではないと安堵したのか、ため息をついた。

「くくく……。それほど心配なさらず結構。私は口調など然程気にしないので。」

今のやり取りでそれなりには心を許したのか、幾分態度を軟化させたが、神妙な表情をして話し出す。

「あ、あんたねぇ……。まぁええさ。頼みたい事もあるしのぉ？」

「……あの山の人狼の事か？　それならば既に狩ってある。もう問題はないだろう。」

行き成り頼みたい事を終わらせた、という男の言葉を老婆は信じられないようで、何度も念を押して問うてきた。

「ほ、本当にあの化物をやっつけたのかぃ！？　嘘じゃないだろう

ね！」

「勿論だ。死体が残ってるかは知らないがね。」

男の断言に漸く信じることが出来たのか、呟くように老婆は語り出した。

「……そうかぃ。あれは退治されたんかぃ……。あれにはこの村の若い衆がたーくさん食われたんよぉ。皆、家族を食われたァ、ゆぅてなぁ……。ほんに……悔しくて、悔しくてのぉ。」

「……そうか。」

同情などは表にだしてはいけない。その気持ちを理解出来るのは己だけなのだから。

「あんたぁ、なんていうんだぃ？　礼くらいさせとくれよ。」

こういう神秘の溢れる時代は多くの人間が涙を呑んでいるのだろう。そして、この身もまた、神秘の側に居る。忘れてはならない。

「……コウ、という。」

「一宿一飯の恩。感謝の言葉もない。」

そう言って、深く頭を下げる。老婆は笑いながら、本当に、悔いなど知らぬと言わんばかりの澄んだ笑みを浮かべて言った。

「気にしなさんな。どうせこの村にはもうあたしみたいなババァしか居らんさ。若いので残ってたのは皆京に行っちまったからねぇ。あたしらが死んだら廃村になるだけさね。」

短い一生を駆け抜ける。その有り方が美しいと言ったのは誰だったか。

「……そうか。達者で。」

「あいよぉ。あんたものたれ死ぬんじゃないよ！」

そんな元気のいい声が背中に掛けられる。向かうは――――東。

徒歩にて東に向かう。所々にある村で妖怪退治をしていると言い、退治や交渉等をしてそれなりに問題の無い片付け方をして生計を立てながら関東へと向かう。

１０年もそんな生活を続けていれば噂の一つや二つは出てくるようだ。その全てに尾ひれが付いていたのは仕方の無い事なのだろうか。

そんな中、退治に向かった先で妖怪との交渉をした。

その妖怪が言うには、この辺りには妖怪の山という鬼神の治める山があるという。何か遭ってからでは遅い、との事。ありがたい忠告なので退治を続けながら妖怪の山の場所を退治対象、もしくは村民に聞きながら東北を目指した。

元八ヶ岳。妖怪の山。鬼神が居るという山を見つけた。

挨拶くらいは必要だろうと、山へと登る。

――これは……すごいな。これほど多くの妖怪が住み着いているとは。鬼神の名はソレほどまでに大きいということか。

「お待ちください！ここは妖怪の山。鬼神の治める山です。勝手に入山する事は許されていません！」

――射命丸　文。鴉天狗。この時はもう妖怪の山に居るのか。

「この辺りで仕事をしたい。その許可を鬼神に頂きたい。」

「む、む？　ぇーと、それでしたら大天狗の方に申告されれば済むので、そちらでお願いします。」

――申告すれば良い、か。恐ろしく社会性が高いのか、それとも適当なのか。だがどちらにしろ無理だろう。

「いや、鬼の方々にこそ言うべきことでな。大天狗を通してでも構わないが、鬼神殿に逢わせてもらいたい。」

「ぇえ？　えっと、その私ここに来てからまだ日が浅くて……。」

周りでそれとなくこちらを伺っていた妖怪（男）の視線が急に痛くなってきた。意外とアイドルしてるじゃないか。

「妖怪退治に関しての案件だ、と大天狗に伝えてくれ。それが仕事だ。」

「ぇ、あ、はい、分かりま……って、えぇぇぇぇ!?」

さっさと行け。

「よく来た。わらわが鬼神『鬼子母神』よ。」

鬼神との面会を許された。

額に一本角、そして側頭部に前に突き出るかのような二本の角。服装は浴衣姿だが、自己主張の激しい胸がその姿に艶やかさを感じさせる。ただし、その眼光の鋭さがただの女性では無い事を証明している。

その横に座るのは天魔。天狗の長。山伏の装束に、長い鼻。その瞳には老獪さが滲み出ている。典型的な天狗の姿だろう。

この場に居るのは鬼子母神、大天狗が二人、天狗の長『天魔』、何故か射命丸文。

そして

「お初に御目に掛かかります、コウ、と申します。」

胡坐をかき、膝の前に手をついて深いお辞儀をする。上座に座る鬼子母神、そして天魔から感じる妖気はまさしく異常。

――規格外もいいところだ……。

「良い。面を上げよ。」

「は。」

返答した瞬間に圧倒的な圧力が掛けられた。その圧は妖気を解放しただけで起きたのだろう。空気が軋み、悲鳴を上げているのが聞こえる。異常なまでの力に世界が悲鳴を上げているのとすら感じる。

――なんという妖気！　……このまま平伏させる腹か！　私は、己が生き方を変える気はないぞ？　鬼子母神！

深呼吸を一つ。それだけで、俺に掛かる圧力を”あって当然のもの”と脳に、そして体に認識させる。魔術師ならば、感覚を理解しつつも無視出来なくは話にならない。

「失礼致します。」

「……ほぅ」

何事も無かったかの様な振る舞い。感嘆の声を上げたのは鬼子母神か天魔か。しかし文はその圧力で平伏してしまっている。大量の汗を流し、身体を震わせている。まだ若いのだ。これに耐えるのは至難だろう。

「これはすまぬ事をした。許せ。」

鬼子母神の顔に浮かんでいる表情は、喜。

「……私に言うべき事ではないでしょう。彼女の退出を。」

天魔は申し訳なさそうに、鬼子母神は今気がついた、とでも言わんばかりだ。

「むぅ、可哀想な事をしてしまったのぅ……。深山の、文を休ませてやっとくれ。」

一人の大天狗が文を退出させる。その表情は少々硬い。

「ふ、ふふふ……。さて、妖怪退治を仕事としたい、との事だが？」

感情は喜、一色。よほどこの身の程知らずな話が面白いらしい。瞳の奥でこちらを探るのは天魔。

「……私が頂きたいのは、退治を依頼され、報酬が確かであり、尚且つ、その依頼が真摯なものであれば、例え鬼であろうとも容赦なく退治させて頂く事の許可。鬼という種族ではなく、その地に住む

鬼個人のみに対しての行為であり敵対行動ではないので態々こちらを襲う必要は無い、という証明が欲しいのです。」

言い放つ。鬼という種族と敵対しないために。

第二話：妖怪の山の鬼神（後書き）

とりあえず、ちゃんと理由はあります。喧嘩を意味もなく売っていい相手ではありません。

第三話：誇りと愛

言い放つ。その瞬間に荒れ狂う膨大な妖気。

「く、くく、くはっ、くははははっはははははははははははははは！　ふは！ふ、ふはははははははははははははははは！」

狂ったかのように笑い出すのは鬼子母神。天魔は余りの有り得ないお願いに絶句する。

「くはははははは！　くくッ！　はぁ、はははははははははは！　く、くくッ！　お前はこの鬼子母神に！鬼の母たるたるわらわに！　我が子が死ぬのを無視しろと抜かすかっ！」

自殺行為などという生ぬるいものではない。自らの首を自らで貫くのとなんら変わりない行為を平然と行うこの妖怪がなんなのか。理解の範疇にはない。何がしたいのか。何が目的なのか。

天魔は、この存在を危険な”モノ”を見極める。

「その通りにございます。鬼という種族は誠実な種族。では、依頼

があろうとも人間が望むのは自分達が迷惑する範囲から消えてなくなる事。その近辺から去れば問題はないでしょう。鬼を退治して欲しいという依頼が来たのならば、その様に勝負を持ちかけます。」

「ほぅ……。確かにそれならば問題あるまい。だが、それだけなら態々話を持ちかける事もすまい。答えよ。何故そんな話をする必要がある？」

問いかけるは天魔。鬼子母神は笑みを浮かべている。見たもの全てを震え上がらせるかの如く、憤怒の感情を宿らせて。

「鬼は誠実。嘘はつきません。約定を違える事も致しません。」

「……当然よ。」

今更取り繕うかのような発言に、殺意とともに膨大な妖気が吹き荒れる。部屋に居る大天狗ですらもが顔を青くし、しっとりとした汗で衣服を湿らせている。

――もし感覚を誤魔化す魔術が使えなかったら。もし、ちゃんととした理由を持たずに、この怒りを静められるかもしれぬ術が無く、真っ向からこの力と意思の奔流を受けなければならなかったのなら。

「だからこそ、鬼を殺さざるをえない状況が起こりうるのです。」

「言うてみよ……！　下らぬ戯言であるのならばその身を八つ裂きにしてくれよう……ッ！」

――恐ろしい。

「人間が鬼に勝負を持ちかけられる。それ自体は有り得ない事ではありません。では、人間がその鬼に勝利し。その命を要求していたのなら。鬼の命を手に入れたのならば、その鬼という存在の全てを手に入れたも同義。その命を散らさせず、仕えろと言った場合。それを拒否出来るのでしょうか。」

鬼子母神は笑みを消し、一切の表情を消した。

「人間が、過ぎたる力を持ったとき。その力を使わずにいられるでしょうか。その力が絶大とも言えるものであるのならば、その力を持って暴虐を成す事が、有り得ないと言い切れましょうか。」

「貴様――――」

鬼子母神の言葉を切っていい放つ。

「傀儡である事を望まれたのならば、勝負を受けてくれるでしょうか。その命を賭して、戦うのではないでしょうか。」

部屋に静寂が戻る。鬼子母神は言い返せない。人間の陰湿さを知っているから。鬼にとっての約束の重みを知っているから。言い返せない。

天魔は考える。何故、このコウ、という妖怪はそのような事を知っているからといって、態々鬼を殺す許可を求める？　既に暴虐を成す人間の手に落ちたというのならその旨をそのまま伝えれば良い。

では、何故――――まさか！

――――――先を知っているのか？

先見の法であるのなら、そうなる事自体を防げば済むはず！では――――！

「確かにッ！　確かに！　その方法を使えば、或いは鬼を縛れるやもしれん。そうなってしまうのならば、殺してしまう以外に術はないのかもしれぬ！」

鬼子母神は叫ぶ。鬼として。そのような暴虐を、略奪をするために生きるなど認められない。

「だが！　それでも我が子を！　殺す事を良しとする母などおるまいッ！」

そして、一人の母として。何よりも深い愛を持つが故に、我が子をみすみす死なせるなど、認められない。だから相反目する二つの想いをその胸に宿すから、叫ぶ。

「――――認め、られぬッ！」

その誇りを尊ぶが故の、そして、子を愛するが故の、その苦悩。その苦悩が流させる涙は

――美しい。

コウはその涙を流す鬼子母神を想う。これほどまでに誰かを愛せる貴女は、間違いなく、何よりも美しい、と。なればこそ、己を恥じる。これほどに高貴なるお方を苦悩させている原因は、疑いようもない、この私だ、と。己の傲慢さがこの方に涙を流させたのだ。

コウは、この瞬間に、間違いなく鬼子母神を尊敬した。

天魔は恐怖する。妖怪の山を治め己が全力を以ってしても勝てると言えない相手、鬼子母神。その鬼神を

――崩しおった！

妖怪の山に住むものの誰もが見たことが無いであろう姿に。誇り高く、誰よりも強い鬼神の心をただの言葉で崩したこの妖怪に脅威を

覚えた。

今戦えば間違いなく己が勝つだろう。そうと言い切れるほどに、その精神は揺れている。

――こやつは危険だ。間違いなく、損得に関係なく、己の意思のみで世界と相対する事を選べるッ！

天魔は確かに畏怖を覚えた。コウのその在り方に。

――どういうことッ！？

萃香には理解出来なかった。

母の強い怒気を感じて、霧となり、母が客人と面会をしている部屋へと向かう。母がここまでの怒気を発するのはいつ以来か、或いは初めてか。そんな無謀な事をした馬鹿の顔を拝んでやろうと、ゆっくりと中を覗いてみれば、

「――――認め、られぬッ！」

母が、泣いている。

自分達、鬼の母は誇り高く、誰よりも強い。そして、娘である自分に無償を愛を与えてくれた。
そんな愛する母が。敬愛する母が、泣いている。

いつも誇り高く、誰かに甘えある事もない、常に毅然とした母が己の弱さとも言える涙を流している。

驚愕があった。歓喜もあった。だが自分でも抑えられるほどの感情が湧き上がる。

――――憤怒。

母を泣かせたのは、誰？　天狗？　違う。此処では鬼の方が上として在る。天魔は確かに自分よりも上だ。だが母はそれをさらに上回る。何より、あの天魔が鬼に対して諍いを求めるなど、有り得ない。

ならば。

――アイツだ。

想いは抑えきれず、吹き荒れる。

「ママを泣かせたのはお前かぁぁぁあああああ！」

第三話：誇りと愛（後書き）

ママと母さんで悩みます。流石に疲れたｏｒｚ

第四話：母の誇り（前書き）

ちょっとだけ訂正。大して変わってませんが。

第四話：母の誇り

「ママを泣かせたのはお前かぁぁぁあああああ！」

弾丸のような速度で飛び出す。そこに着地に意識を割く余裕はない。

奔る妖気は力となってコウを襲う。

想いをそのまま形にしたかの様な真っ直ぐな拳。

――受けるのが礼儀。

そうは思っても受けるわけにはいかない。鬼子母神にこんな話までして許可を取り付けるためにも。こんな所で死ぬ訳にはいかない。

即座に妖力器官を回し、妖気を水増しする。

幻想郷において最強の一角にある伊吹萃香の想いそのものとも言える、情け容赦のない全力、否、死力を注ぎ込んだ一撃。如何に妖気の総量を増やそうとも、インパクトの瞬間に後ろへ全力で跳ぼうと

も。

接触した部分の骨は折れる。妖気だけでは足りない。そう思い、やってくる衝撃と激痛を覚悟する。

接触の瞬間。空気が、弾けた。

全ての音が途切れる。世界が停滞したかのような永い、一瞬。その間にも萃香――彼女の爛々と輝く眼はずっと、私を捉えていた。

――――世界に音が戻る。

鳴り響くのは、雷鳴が如き轟音。萃香の一撃を受けて吹き飛ばされたコウの身体は襖を破壊し、木々をなぎ倒す。

――折れていない？

コウの脳裏に思い浮かぶのは幻想郷最強という言葉。それは遥か未来の事だと思い出す。今はまだ、それほどの力を出せないのか、制御できないのか。どちらにしろ、今はまだ。

「お前がぁっ！」

思考に没頭するのは悪い癖だ。彼女の罵声で意識を現実へと向ける。跳んで来るだろう鬼の力を受け流さなければならない。そう考え、構え直す。

だが、その鬼を押さえ込む存在が居た。

「伊吹殿。如何に高位の鬼と言えども、斯様な場でその様な振る舞いをされては困る。」

天魔の神々しい輝きを放つ錫杖が萃香の一撃を完全に止めていた。

「なッ！　じ、邪魔を――ッ！」

「萃香。」

愛する母の声に、悪戯が見つかった子供のように身体が一度震える。恐る恐る、声の聞こえるその方向へと顔を向ける。叱られるのだろうか、と考えた。だが、母のその表情は今まで見たこともないほど綺麗だと思ってしまう程に晴れやかだった。

その顔にもはや涙を流した様子は見られない。いつもの様な、不敵な笑みも浮かべていはいなかった。

とても、穏やかな微笑み。

「ぁ……。」

思わず、声を溢してしまった。娘である自分が見惚れてしまうほどに、優しい微笑みに。

「こんの、戯けがぁぁあああッ！」

先ほどの穏やかな表情とは一転、拳骨と共にお叱りの声が空気を震

わす。

「あだッ！？」

見間違いだったのだろう。そう考えてしまうほどの変わりように萃香は戸惑ってしまう。その態度は子を叱る親が一番嫌うものだというのに。

「～～～ッ！　で、でもママ、あいつが――」

二度目の鈍い打撃音が虚しく響く。

「言い訳などいらぬッ！　お前はもっと考えてから行動しろと言っとるだろうが！」

言葉もない、とはこの事だろうか。先ほどの鬼神としての威厳に満ちた立ち振る舞いから一転して教育ママか。しかも熱血系入ってる。

「行き成り攻撃を仕掛けるなど――」

「鬼ならば大胆不敵に構えて――」

「大体、客人が居る時にこの部屋を覗こうとする事自体が――」

しばらく終わりそうに無い。

「……天魔殿。随分と落ち着いて居られるようだが……？」

落ち着いている、といよりも居直っているのではないだろうか。何故に茶を入れてるのだ。天狗の長。

「……何、割りと良くある事でな。こうなっては少々時が掛かる。お主もどうだ？　それなりに良い茶葉だが、遠慮は要らんぞ。」

鬼子母神。神から教育ママへのランクダウン。

――確かに尊敬出来ると思ったんだがなぁ……。

萃香説教中。

「鬼子母神殿。その子の退出を。」

人間の負の性質を見るには幼すぎる。だから臭いものには蓋をしろ、と催促する。

「はぁ！？　何言ってんのさ！　あんたみたいな――」

「萃香。」

萃香は私の隣で項垂れる。１時間の説教のあとでも口を挟もうとする元気がある。さすがは鬼だ。そんな些か間違った関心をしていると鬼子母神が口を開く。

「その必要は無い。お前には萃香と戦ってもらう。」

その言葉に萃香は目を輝かせ、コウは眉を顰める。

「……何故、私とこの子で戦えと？」

納得の行く理由があるのだろうな、と意思を込めて睨み付ける。

対する鬼子母神は不敵な笑みを浮かべて受け流す。

「鬼とは、強きものを指す言葉。力を示さなければその意思を認めない。なればこそ、ここに示せ。お前の力は鬼と対等に戦えることを。力あるものに破れ、その命を散らすのならば、不満はあるまい。」

鬼子母神は己を律する。

「鬼とは、強きものを指す言葉。力を示さなければその意思を認めない。なればこそ、ここに示せ。お前の力は鬼と対等に戦えることを。力あるものに破れ、その命を散らすのならば、不満はあるまい。」

己が意思を無視されただの力として行使されるだけの存在と成り果てる。そんなものは誰であろうと拒むだろう。鬼であるのならば、醜い欲求のためだけに使役されるよりも死を選ぶだろう。

生きてさえ居れば、助けに行けるのだ。それだけの力が己には備わっている。

だが、助けられるのは契約を破棄した場合のみ。それは、鬼としての矜持を壊す。

ならば、殺すしかない。安寧は死という安息のみ。

認めたくない。己が子を殺される事に不満が無いわけがない。

この手で殺してしまいたい程に腹立たしい！

――しかし、わらわは”鬼”である。鬼の母。鬼子母神。ならば、”鬼”に徹しよう。私情など、手の届く範囲にいる我が子にのみ向

ければ良い。

萃香がこの”母”のために憤った。それで充分だ。

鬼達は、子で在る前に”鬼”である。ならば、母として在ってはならぬ。

わらわは、母で在る前に”鬼子母神”なのだ。

伊吹萃香は息を呑む。

母のその毅然とした態度に。発せられた言葉に。それだけで理解出来てしまった。

優しい母だから、涙を流したのだ。鬼である事を求められるほどに強大で、影響力は計り知れない存在、鬼子母神。本当は、母として護りたいと願っているのだろう。

だから萃香は誓う。

――強く。もっと強く。

母が護る必要など無い、と。そう断言出来るほどに。自分の知る誰よりも偉大で、誇り高く、そして優しい。そんな敬愛する母を超えるために。

「鬼とは、強きものを指す言葉。力を示さなければその意思を認めない。なればこそ、ここに示せ。お前の力は鬼と対等に戦えることを。力あるものに破れ、その命を散らすのならば、不満はあるまい。」

そう言い放つ鬼子母神の、その偉大さに舌を巻く。恐ろしいとすら思う。

――あれほどまでの愛を示しておきながら、尚それを上回るのか、貴女の”鬼の誇り”は！

「……分かりました。場所をお借りしたい。」

ならば示そう。この身は、この意思は、鬼に匹敵し得る”妖人”だと。

第四話：母の誇り（後書き）

進んでいるようで全然進んでませんね。でも止められないなぁ…。
いいキャラすぎるよ鬼子母神（ぁ

第五話：コウ対萃香　前哨戦

妖怪の山。

辺り一面に岩山の見える見晴らしのいい橋。特別なモノがあるわけでもないこの場所に、多くの鬼達が集まっていた。雲ひとつない快晴だからか、空気が澄んでいるからか。かなり遠にではあるが、天狗の姿も多く見られる。

大天狗、鴉天狗、白狼天狗。鬼。さらには河童が川の中から姿を覗かせている。

良い場所だ、とコウは思う。

これだけ見晴らしのいい場所ならば妖怪の山の大抵の場所から見ることが出来る。何かしらを宣言するには絶好の場。少なくとも鬼達からは歓迎されないはず。殺気くらいは送ってくる事もあるかもしれない。

鬼を殺す許可を得る。鬼の敵ではない。この二つの立場を両立させなければならない。出来なければ残るのは死。ここで負ければ事後承諾すら取れない。賭けではあるが、やらねばならぬ事だ。

この場に私を連れてきた対戦相手の萃香はといえば、周りに居る鬼達と談笑している。酒を勧められているのか。萃香は勧められているだろう酒を――

――遠慮しただと!?　い、いや落ち着け。ここは現実だ。ディスプレイの中ではないのだ。何より２０００年ではない、その遥か昔に存在している事を忘れてはいけない！　本物に会えたからか、それとも鬼子母神と相対したからか……。いかん、昂ぶっているな。

魔術ではなく意思で感情を押さえ込む。下手を打てば死ぬ現実だ。理解しろ、と己を律している間に、辺りに居た妖怪は談笑を止め、皆が一点に目を向けている。

一拍遅れて気づいたコウは、ゆっくりと振り向き、その威容を目の当たりにする。

その姿はまさしく威風堂々。天狗の長、天魔を引きつれこの場に姿を現すのは鬼子母神。

「――皆、よくぞ集まった。今日、わらわに客が来た事を知るものも居るであろう。その客人はわらわに求めた事について、言わねばならぬ事ある。それを知らしめんが為に斯様な場を用意した。」

鬼神の語る言葉に耳を貸さぬ存在など、この山には存在しない。

――もう、後戻りは出来ない。ただ、前へ！

「客人の名はコウ。こやつがわらわに求めたのは『鬼を殺す許可』よ。」

空気が張り詰める。私がコウだという確信が持てないのだろう。まだこちらを伺うだけに止まっている。天狗の多くは矢張りと言うべきか。絶句している。己の上司に当たる存在だ。

鬼子母神は笑みを浮かべている。どこか作り物めいてると感じるのは私だけだろうか。

「――そこに佇む男がコウよ。」

殺気が、否、殺意が物理的な圧力を伴っているのではないと錯覚するほどの重圧が妖怪の山全域から向けられる。これだけの数から飛ばされる意思は、或いは鬼子母神の威圧すら超えているかもしれない。

だが、動じる姿を見せはしない。してはならない。山に住む鬼達に認められなければ、鬼子母神一人の許可を貰っても、その意味は半減する。

「わらわはこやつの言う『鬼を殺さなくてはならない可能性』の話を聞いた。」

殺さなくてはならない。このフレーズに意味もなくただ鬼を殺す許可を求めた訳ではないと理解したのだろう。多くの殺気は抑えられた。

「わらわは、それが確かに鬼を殺すに足る理由だと認めた。」

鬼子母神が鬼を殺すに足ると認めるほどの理由。これには山が戸惑いの感情に包まれた。鬼だけでなく天狗、河童達に至るまで理解が及ぶ者はいない。そんなモノが在りうるのだろうか。信じられない。そんな言葉が冷静に考える事を許さない。

鬼子母神はその理由は話さない。永く生き、人間の在り方の変わり方を見ているものでなければ理解出来ないと考えられるからだ。人間がそれだけの事をする、或いは出来ると考える事は難しい。年月を重ねた鬼でも理解出来るかは怪しい。若い鬼達では尚更だろう。

「しかし！　殺す理由があろうとも！　それは我ら鬼が終わりを託す資格にはならぬッ！　我らは鬼！　強き事こそが我らが意地よ！　ならば、我らに終わりを齎す者もまた強き者でなくてはならぬのだッ！」

混乱した思考は纏められる。

――鬼子母神が認めたのだ。ならば、あの妖怪が強き者であるのならば認めよう。

鬼達にとって強さとは絶対的なもの。勝負をして、勝ったのならば認めない訳にはいかない。では、誰が戦うのだ？

「この者と戦うのは、伊吹萃香！　お主よ！」

「――――はいッ！」

辺りに響く、まだ幼さを残す高い声。

伊吹萃香。まだ幼い鬼であるが、その力は山の妖怪達も認めている。今はまだ粗がある。それにも関わらず鬼の中でも上位に名を連ねる強者。

「両者！　前へ出よ！」

鬼子母神は審判に徹する。天魔もまた、同じく審判に。

「……まさか、あんな事をママに言ってたなんてね～。」

「まぁ、確かに無謀だろうな……。」

橋を挟んで両岸に立つ。円形の空白が空き、その周りの岩場には鬼、天狗が陣取り、水中から眺めているのは河童。

「理解してたの？　馬鹿だね～、死にたがりにしか思えないよ？」

「だが、変えられん。私が私として在る為に。」

――戦う前の軽口は、気分がいい。

そう思ったのは萃香か、コウか。

「ふぅん？　私には関係ないけどね。」

「その通りだ。私の意思は私のものであり、君などが奪って良いものではない。」

その言葉に萃香は闘志を湧き上がらせる。安い挑発であろうとも、今だけは言う権利がある。

「言ってくれるね……ッ！　けど、その意志は叶わない！　私が叩き潰すんだからねッ！」

「出来もしない事を出来るなどと吼えるのは見苦しい。弱く見えるぞ？」

もはや言葉は不要。持っていくのは闘志だけでいい。お互いの認識が一致する。

他に要るものがあるとするなら、それは――

「始めよ！」

――合図！

――合図！

駆ける。お互いを求めて。視線はお互いを捉えて離さない。

一呼吸の間に１０Ｍの距離を消す。

あいつは私が殴った時にかなり吹き飛んだ。後ろに跳ぶ事で衝撃を軽減させたからこそ少ないダメージで助かった。それは、後ろの跳ばなければ助からなかったということ。私の一撃を耐える身体は無い。

ならば、どれだけ喰らおうとも、こちらの一撃を当てさえすれば。

一気に流れはこっちに来るはず。なら、私が取るべき戦法は――

――接近戦！

萃香の一撃は重い。妖力器官で妖気を全力で生産し続ける。負けな

いための絶対条件。これが無ければ、一撃で骨まで届く。出来る限り萃香の打撃を貰わないようにしなくてはならない。そして、妖気だけでは彼女に対して致命傷になり得る打撃を繰り出せない。だが消耗戦になれば負けるのはこちら。

何よりこの場でそんな戦法を取るわけにはいかない。自分から攻めて、打ち倒す。これが最低条件。そして、前提として殺してはならない。氷の剣を使えば致命傷を狙えるが、致命傷しか狙えない。これでは使えない。

切り札は使えない。鬼を殺す時に対策を練られては厄介だ。知られないからこそ、生きる手。使ってはならない。

――まずは近接戦！　萃香の体技を知らないのでは話にならない。

コウは手数で、萃香は威力を頼りに対峙する。

萃香の拳が風を切り、轟音を鳴り響かせる。コウは重心を乱す事なく身体を滑らせるかの様にかわし、掌打を加え、身を翻す。コウの繰り出す打撃のみが乾いた音を鳴らしてるかと思えば、轟音が肌で感じ取れるほどに空気を振動させる。

コウの絶え間なく繰り返される掌打。嵐や台風を連想させる程凄まじい萃香の豪腕。コウが回り込めば、萃香が振り向き迎え撃つ。それはお互いを喰らい尽くすという意思のぶつけ合いであるのに、コウは萃香と、萃香はコウと、二人だけの世界で確かに踊っていた。

二人だけのダンスは、多少の違い、規模の大小あれど、遥か未来で行われる生粋のアウトボクサーとインファイターによるボクシングそのもの。

コウの脇腹、心臓、咽喉を狙う、雷撃を連想させる高速の三連打が萃香を襲う。対する萃香は、前傾姿勢を取り、左腕一本で三箇所への掌打を防ぎ、腰に右腕を溜める。周囲の熱を拳に集めて発火させカウンターのアッパーとともに爆炎の塊を射出する――！

――　妖鬼ー密ー

熱を感じ、尋常ならざる反応速度で退き、本来ならば喰らって然るべき攻撃を回避するコウ。確実に喰らわせたはずの一撃を回避された事に驚愕を隠せない萃香。コウはその硬直を見逃さない。

知覚の外から放たれた”水”による一撃は萃香を捉える。直前で攻撃に気づいた萃香は水に込められた妖気の少なさから脅威ではないと判断し、意識から外す。水と同時にコウから放たれた”掌打”を捉える。

そう行動した時に、既に顔の至近に到達した水が高速で眼に向かって放たれた。

「あ！？　ぐぇ！」

水で視界を潰され、放たれた掌打を捉え損ね、水と同時に拳打へと形を変えた打撃が萃香の顎を襲う。衝撃とともに半分になった視界が脳とともに揺れる。萃香は薄れる思考の中で行動を選択する。

顎を打たれ意識を薄れさせている内に決めようと一気に接近を試み

るコウ。バックステップしながらコウの拳打を掴み損ねた右腕で放たれる裏拳、そして、バックハンドで振り上げれる左拳と入れ違う様に懐を目指す。

「ぐガッ！？」

コウは”しなる打撃”を顎に受け、頭をカチ上げられると同時に危険と嫌って跳び退る。何をされたのかを確認するために視線を萃香へと向ける。

萃香は一つ大きく呼吸し、意識をクリアにする。

――危なかった。これが無かったらあれで負けてたかも。

視線を僅かに落とす。その視線にあるのは”鎖”。左腕のリストバンドから垂れる鎖。滑って飛び出してくるように、勢いよく腕を振り上げることでリストバンドの内側に仕舞ってあった鎖が飛び出したのだ。

――仕切り直しだね。油断してたかな、あんな手で来るなんて予想外もいいとこだよ。

視線に映るのは鎖。先ほどまでは確かに見える位置には無かった。

鎖を辿れば、リストバンド。

――仕込み鎖、だと？　……思っていた以上に”鬼”という種族は強かだったようだな…。

予想外の手段での反撃に鬼という種族に対する評価を修正する。

「まさか、こんな戦い方で来るなんて思ってもみなかったよ。鬼は皆ガチンコでぶつかって来るからね」

萃香は仕切り直す前に、軽口を叩く。勝負を楽しむのには会話だって必要なのだ。

「……仕方あるまい。私の身体は君達鬼の様に取り分け頑丈だという訳ではないんだ。」

鎖によって切れた口内の血を吐き出して、忌々しげに吐き捨てる。まだまだ成長途中だというのに体術のレベルが高い事に驚かされたコウ。

「あれ～？　そうなの？　それは大変。鬼の私には分からないね～。まーいいよ、そんなに大変だって言うなら、能力で勝負してあげるよ。」

不敵に微笑む萃香。その表情は、鬼子母神にどこか似ていた。

「……そうかぃ。それはありがたい。君程度の鬼の能力ならば楽に済ませそうだ。」

笑みの質を壮絶なものへと変質させ、萃香は挑発に乗る。

――この緊張感が、堪らない！

「へぇえ？　非力な妖怪は知らないようだね。なら教えてあげる。鬼の力、萃める力、太古より存在し続ける鬼の力を！」

第五話：コウ対萃香　前哨戦（後書き）

難産すぎると思うんだ。戦闘描写。

第六話：コウ対萃香　能力戦（前書き）

タネ明かしは次回以降。

第六話：コウ対萃香　能力戦

「あれ～？　そうなの？　それは大変。鬼の私には分からないね～。まーいいよ、そんなに大変だって言うなら、能力で勝負してあげるよ。」

冗談ではない。自分はもう能力を使用している。雷を操る程度の能力。これがこの身体の妖（あやかし）としての力。そして妖力器官の一つ、水生成器官。

萃香のカウンターアッパー、妖鬼一密一　は本来の身体能力だけではかわせなかった。気づいたのが遅すぎた。はじめに萃香の豪腕を間近で感じ、その拳速に危険だと思った。だから反射神経の電気信号を微弱な電流で代用し、反応速度を速めたのだ。

常時使用しても問題はないだろう。それだけの量を蓄電してある。だが、鬼は身体は非常に強靭だ。雷撃を使用する事がないとは言えない。

だから水で隙を作り出し、そのまま畳み掛けて終わらせるつもりだったというのに。

「……そうかぃ。それはありがたい。君程度の鬼の能力ならば楽に済ませそうだ。」

萃香が笑みの質を変えたのを瞳に映しながら一人愚痴を頭の中で溢す。

――制限の多い試合だ。

魔術は魔方陣を作らなければならない。空間転移を封じた紙は充分にあるが、多くの妖怪に能力以外を知られるのは流石に痛い。

そして如何に若く経験が浅いと言えども流石は萃香。未来の”山の四天王”の名は伊達ではないらしい。妖力器官を三つ全て使用しなくては打倒できないだろう。逆に言えば、今ならまだ、それで行ける可能性がある。

「へぇえ？　非力な妖怪は知らないようだね。なら教えてあげる。鬼の力、萃める力、太古より存在し続ける鬼の力を！」

――さぁ、行こうか。

萃香は格闘戦でのコウの特徴を考える。

自分というパワーとタフネスを併せ持つ相手に対して、速度と手数を以って相対してきた。
コウの速度は自分では捕らえきれない。いや、速度自体はそこまで速い訳ではない。
巧いのだ。

強靭な身体と尋常ならざる体力を持つ鬼に対して掌打をして、身体の内側から弱らせる戦い方。さらにはその殴り方。受ければ致命的な威力で放たれる攻撃の回避行動。常に死角に向かいつつも確実に急所を狙える位置取り、その際の移動に至るまで全ての行動が、非常に滑らかだった。

だからこそ、妖鬼ー密ー　を回避した反応速度の異常さが際立っている。

流れる様な動きで重心を乱さずに動き続けたコウを、確実に捉えたはずだった一撃。流れるようなリズムだからこそ、そのタイミングに放たれたアッパーカットを避ける事は不可能な状況までもっていけた。

不可能を可能にした回避能力。

こんな事が出来るのではいつまで経ってもこちらの一撃は届かない。今の自分の近接能力では捉えきれない。一番得意の、唯一と言ってもいい近接格闘技能たるカウンターでも点での攻撃は避けられたのだ。持久戦をすれば負ける。掌打は着実に内臓への負担となっているのだから。ならば、コウを捉えきれる手は？

――全てが一撃必殺の面制圧！

萃香は己の妖気の大部分をこの攻撃に使う。普通に戦ってはいずれ力尽きるのみ。ならば、もはや様子見など不要。

萃香の初手は弾速の速い火球。人の頭よりも大きな火球を間を空けずに連射する。同時に髪を媒体に自身の分身を発射する。妖鬼一疎一！

一体一体の威力は低いが数がある。何より操作出来る利点は大きい。火球を外側に避けられないように、そして接近できないように飛ばしていく。さらに、コウの後方、左右の少々離れた、しかし遠くない位置に弾速の遅い火球を飛ばし、下がれなくする。

これで、前方に妖鬼一疎一、左右を、そして後方を――。

鳴り響く音の正体はまさしく”花火”だろう。弾速の遅い火球の炸裂音と共に球形にコウの居場所を圧迫する。

――次は、超高密度燐禍術ッ！

地面で跳ねる事によって分離拡散する溶岩弾を噴出させる。これが上からも襲ってくる弾幕となる。大きな力を使うと妖鬼一疎一の精密な操作は出来ないが、逃げ場のないコウになら自分の小さな分身を操れなくても問題は無い。

「駄目押し行くよッ！」

周囲の熱を萃めて火の玉を作り前方へと投げつける技、元鬼玉。さらに萃め続けて火の玉を巨大化させ強力な獄炎となった元鬼玉を、未だ溶岩弾の消えぬ、コウの居るはずの場所へと投げつけるために腕に力を込める。

――これで、終わりだよッ！

コウは長期戦になると予想していた。萃香は自分が動いてこちらを捕捉する事は出来ないと悟ったはず。

同時に、火力が不足している事も。妖気だけでなく、破魔の気まで”併せて”使えば、今の萃香ならば同等まで持っていけるだろう。

しかし、その手は却下。破魔の気がなければ退治は出来ても殺せない。知られてしまえば警戒される。どの”鬼”を殺すことになるのかは不明なのだ。使えない。

火力の足りぬ相手に鬼が体力を心配するとは考えにくい。こちらの動きが少しでも遅くなれば捕捉出来るのは確かだ。ならば、火球などで牽制し、接近する事をあえて許した上で、致命的なカウンター、それも点ではなく面の攻撃を加えてくるだろう。圧倒的な身体機能を誇る鬼に攻勢に出られてしまえば自分のペースで戦えない。

戦闘とは、支配するものだ。予測するものではない。

愛する、そして誰よりも強く在った沙夜の言葉が脳裏に浮かぶ。

（――――戦闘を支配するとは、相手の力を受けることもあれば出させないことも、全て含め、――出来ればこの戦闘が終わらなければ良いと思いながら戦い続けることだ。）

まだ若く、拙い部分が多くあろうとも、萃香は強者。彼女の戦術眼は本物だ。だからこそ、

――終わらなければ良い。こんなにも楽しいのだから。

そう願いながらも前へ。この戦闘を終わらせるために。終わらせないために。

だから、萃香が賭けに出た事に驚いた。

かなりの速度で己へと飛んでくる火球を余裕を持たせて回避する。ギリギリで回避しても熱は危険。回避しつつも前へ。誘い込んでいるのだろうと当たりをつけ、ただ、前へ。

コウも萃香も、近づかなければ話にならない。そう思っていたからこそ、”小さな萃香”が避けようとした方向、さらには前方に展開していることに思考が一瞬硬直する。

持久戦になれば、勝率は低いと悟ったか。現状で最も勝ちを拾える可能性が高い策を取った萃香の戦術眼をまだ、過小評価していたと痛感する。同時に己の戦闘を支配する事が出来ていたなかった事もまたコウに未熟さを思い知らしめる。

失態を悟り、舌打ちしつつも体勢を整えるために後方へと跳ぼうと確認した瞬間に”黒い火球”が炸裂音を辺りに響かせる。

――囲まれた！

前方に妖鬼一疎一、後方、そして左右に花火。それも中心まで業火が詰まっている。充分な妖気で満たされる火炎は煉獄を連想させる。これでは通れない。前方の小さな萃香なら行けるかもしれないが、花火に含まれる妖気を遥かに上回る妖気を込められているソレは、間違いなく一つ一つが爆弾。

上に道が残っている。だが、そこを封じない理由がない。見上げれば、やはり膨大な妖気を込められた溶岩弾が落ちてきている。先の近接戦で見せた運動性能では確実に回避できない様に計算された弾幕の密度に最後の妖力器官を起動させる。

風生成器官。一度に生成出来る限界量は台風並みにもなる最大の妖力器官。ただし、限界までの風を集めるには２０秒ほどの時間が掛かる。この弾幕を吹き飛ばすだけの風は集まらない。

それでもコウは風を集め続ける。萃香に大きな一撃を喰らわせるために。

同時に空気抵抗を極限まで引き下げ、自分の動きに対して追い風に

なるように風を繰り、運動能力を引き上げる。それによって、弾幕の隙間に身体を滑り込ませる行動を間に合わせる。

巨大な溶岩弾を生み出し、妖気を今も込め続ける作業に思考を割いてるのだろう。妖鬼一疎一たる小さな萃香達の動きが直線的になっている。

弾幕の隙間に身体を滑り込ませても、数が多く、人型の身体が通れるだけの隙間など存在しないように配置されている妖鬼一疎一を避けきるのは不可能だったが、今なら迎撃しても避けられることはない。

――これで追尾性があったら魔術を使わされていた。

だが、そうはなら無い事へと安堵を感じつつも表に出さない。

水生成器官で水を作り出し、風で熱を奪い、凍らせる。そして作り出した氷の大剣に己の妖気を注ぎ込む。込めた妖気の量は充分。生み出されるのは如何な名刀でも及ばぬ魔剣。

無銘の魔剣は静かに、しかし確実に襲い掛かる小さな萃香を殲滅する。

巨大な溶岩弾が地面で跳ね返り、小さな溶岩弾として分散し、壁となる。だが、分散した小さな溶岩弾だけでは壁としての役目を果たせない。ぽっかりと空いた穴に向かうだけで、

イージーに前に出られる。

最後に萃香から放たれるだろう極大の火の玉。橙色に光るそれは太

陽を思い出させるほどの熱量を持っている。あれを防ぐ手立ては無い。今の移動速度なら避けきれるかもしれない。

だがコウに避けるという選択はない。風はある。ただしチャンスは一度。失敗は許されない。萃香から放たれるその瞬間のみ。

――今！

萃香は元鬼玉を投げつける。これで終わりだと思いながら。

萃香が投げつけた元鬼玉が、突如として爆発的に膨れ上がる。轟音を上げ、炎は萃香の意図を遥かに超える規模で荒れ狂う。

萃香の制御を離れた炎の塊は、彼女自身にも牙を向いた。たとえ鬼であろうとも、これだけの熱量と衝撃を受けて無事ではいられない。

コウは全速で駆け寄り、爆発による衝撃波を全身に叩きつけられて地に倒れた萃香の首のすぐ横に剣を突き刺し、鬼子母神に勝負ありの宣言をさせようと声を上げる。

「……ふぅ。これで――」

硝子が割れたかの様な音に割り込まれる。同時に先までのを遥かに

上回る規模の妖気が吹き荒れる。

「なっ！？　がぁっ！！」

岩のようなものに吹き飛ばされるコウは疑問とともに顔を向ける。

――なんだ！？　剣を割られた？

瞳に映るのはその妖気を猛らせ、巨大化した萃香。

その身体に血を流しながら、鬼の力を解放した萃香は意思を言葉にする。鬼であるために、意思を曲げぬために、宣言する。

「――――負けたくない……。まだ、負けちゃいないよッ！」

第六話：コウ対萃香　能力戦（後書き）

マジで話が進みませんｏｒｚ　ここまで展開させるプロットは存在してなかったというのにｗ　次で決着つけさせます。妖怪の山を降りる所までは書きたいとおもっちょります。人物設定少し出しますか。

第七話：コウ対萃香　死力を尽くした後は。（前書き）

実質４８時間で約７０００ＰＶ感謝です＾＾励みになりますねー。

第七話：コウ対萃香　死力を尽くした後は。

まだ、侮っていたのか、私は。

当たり方は最悪ではないが、右腕は粉砕骨折。肋骨を2～3本。巨大化した萃香の一撃による被害はかなり大きい。

萃香を倒した、そう確信してしまった。炎を操る能力であるのなら、熱量だけを萃めていたのなら、あの手は使えなかった。能力を知っていたからこその手。

大量の酸素を操り、過剰燃焼を引き起こす。そうやって、元鬼玉を暴走させ、大爆発を間近で起こさせる。あれだけの炎の塊だ。そうすれば、鬼であろうとも昏倒する。そこに間違いは無い。

――そう思い込んでいた代償がこれか。意志のみで立ち上がってくるとは――！

「――――負けたくない……。まだ、負けちゃいないよッ！」

負けたくないという君の意志。それも分からない事ではない。君は強い。その意志が、勝ちたいという願いのみで立っているのだから。

だが、私は負けられんのだ。負けるわけにはいかない！

巨大化した萃香が迫る。その動きは鈍重なものになっている。ただし、その巨体が生み出す破壊の規模は桁違いに大きい。

もう一撃喰らえば。機動力を奪われればそこで終わりだろう。だが、萃香はもはや意識がないのだろうか。私の発する妖気を追って打撃を繰り出すのみ。そこに技巧はない。

本能ですら戦うことを選ぶ”鬼”である萃香に敬意を覚える。それが礼儀だと、巨大な拳を回避しながらも己の中で宣言する。

――見せる事の出来る、全力を見せてやろう――――！

氷の大剣ではおそらく通らない。全力で風を生成し、身体の周りに溜める。込める妖気は3割。水を生成し、水溜りにして凍らせる。

準備を整え、己の身体を囮にして誘う。

その間にも襲う暴虐そのものにも思える拳を回避しながらも、笑みがこぼれてしまう。気づけば、萃香の表情にも”笑み”が見える。

全く。人間から化け物だと言われようとも、本物の化け物と対峙する時にこそ。

――己の矮小さを実感させられる――――！

萃香が拳を振るために、脚を一歩踏み出す。そのにあるのは凍結し

た地面。こんなものでは倒れない。

――ここだッ！

風を噴射し、妖気を込めた風を纏い、弾丸と化す。狙うは氷を踏みしめる、左足。

激突と同時に空気を震わせる爆音が鳴り響く。右腕を空振りし、左足をとられた萃香はバランスを崩し、地に伏す。

「ふっ！」

呼気を吐き出し、呼吸を整える。

うつ伏せになり、地に手を着いている萃香に飛び乗り後頭部に狙いを定める。

充電してある電気は雷（かみなり）5回分。残る妖気のほぼ全てを注ぎ込み、拳と共に雷撃を奔らせる。

「おお……！」

叫びをあげ、届け、と願う。見たか、と誇る。

妖怪の山で行われた祭りの様な決闘の終わりを告げる極光が溢れだす。見るものを圧倒する、神の怒りが如き雷撃は、雲を貫き天へと奔る。

コウは、カミナリ特有の、重厚な音が鳴り響く中に妙な音を聞いた。何かの叫びのようなものだ。そしてそれは、

「――――まけたく、ないよぉ……」

巨大だった身体は小柄なものへと戻り、地に伏して涙を流す少女のものだった――。

次の日の朝。

鬼子母神の私室。和室という言葉がしっくりと来る部屋の壁に掛けられているものは何故か刀剣類。宝剣というものだろうか。妖気どころか、神気すら纏っているものもある。

部屋に居るのは、鬼子母神、天魔、コウ、そして萃香の四人。

コウの腕、肋骨の骨折は、鬼の薬師という方に貰った薬を飲んで、塗って寝たら一晩で治っていた。萃香の打撲系のダメージも同じく一晩で治った様だ。理解出来んほど高性能な塗り薬に脱帽だ。

故にこの場に怪我らしい怪我をしている者は居ない。

「コウ。わらわが認めよう。お主が強き者であると。やむを得ぬのならば、鬼を殺す事を認めよう。それ以外であるのならば、わらわ自ら殺してやるが。」

決闘はコウの勝利で終わり、要求は通る。その許可を出す鬼子母神の表情は不敵な微笑み。最後に怖い一言を付け加えるのはやめて頂きたい。

「……ありがとうございます。」

深く頭をさげ、感謝を意を示す。社会性のある世界では、カタチで証明しなくてはならない。ただ、それだけの事。

「我ら鬼が認めた強き者には名を許そう。」

「名、ですか？」

「わらわの名よ。鬼子母神は名ではない。称号に過ぎぬ。わらわの名は桔梗。九鬼　桔梗よ。名を許したのだ。その意味、努々忘れぬ事だ。」

名を許す。鬼に、鬼子母神に認められるということ。その表情の真剣さに、その重みを実感させられる。

「――紅（コウ）。有り難く、頂戴いたします。」

「で、どう責任を取るつもりか、言ってみよ。」

行き成り振られた話の脈絡の無さにどう答えるべきか分からず、止

まる。

「――どう、とは？」

「とぼけるでない。萃香を泣かせた事だ。」

「ブッ！！」

萃香が飲んでいたお茶ごと吹き出す。向かいに座る天魔の顔面に直撃。勿論熱々のお茶です。いい茶葉使っているというのに、勿体無いぞ萃香。

「わらわの眼前で娘を傷物にされた挙句、涙を流させたのだ。忘れたとは言わせぬ。」

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌ；ｐ：@！？」

「ちょ！？　ちょっとママ何言ってるのッ！？」

「答えよ。」

あくまでスルーなんですか、そうですか。つーか身を乗り出さないでください。顔が近いですよ。

「求められる責任の方向性にもよります。」「あちぃッ！」「ちょ、コウも何答えちゃってんのよ！？」

これで無視しろ、というのは無理だ萃香。態度としては、チンピラの『ぁあん？』のそのままの行為だが、それをしているのは鬼子母神だ。洒落にならん。

「ほぅ……。言うてみよ。」「熱いッ！だが足りぬッ！」「いやっ！だから無視しないでよ！ねぇ！？」

顔を突っつき合わせている。それこそ簡単に口付けすら出来てしまうほどに近い。だというのに桃色な雰囲気など欠片ほども存在しないのはどういう事だろうか。

桃色展開でも困るが。

「決闘相手としてならば、どこが悪く、どこが良い。その辺りの指摘位はしましょう。勝負を臨まれるのなら、時々相手になりましょう。友人を泣かせたことにならば、誠心誠意謝罪しましょうか。」

「わしを火傷させたくばこの三倍は持って来いというのだッ！」

『お前は黙れ』

喚く天魔に、奇しくも声を合わせて鬼子母神とコウが注意、否、警告する。萃香は責任の取り方という自身に関係のある話なので口を挟まず聞くようだ。

「ならば、女を泣かせた男としてはどうする？」

「……裏切れない相手が居るので、泣き寝入ってもらうしかありません。」

鬼子母神はその言葉に面食らったのか、乗り出していた身体を座布団の上まで戻し、考え込む。萃香としてもその返答は予想外だったのか驚いているようだ。

「……お主、操でも立てておるのか？」

復活した天魔の問い。操を立てている。それに間違いはないだろう。だが、そのヒト以外を愛してはいけないと自分を律してる訳ではない。

「……どう、でしょうか。操を立てている、と言っても間違いではないでしょうが……。」

答えに窮する様子を見て、天魔は一度下した”危険”の評価を訂正する。

――己のために、世界の相対する戯けではないが、想う誰かのためにならば、と言ったところかのぉ。

危険な訳ではないが危険ではないという事でもない。こやつと共にある者次第。

「お前は死んだもののために今を棒に振るつもりか？　愚か者め。」

鬼子母神の辛辣な物言いを否定できないのも事実。

「……そうかも、しれませんね。それでも、愛しているんですよ。しばらくは誰かを愛する事なんて考えられませんよ。それでも私の心が欲しいというなら惚れさせてもらうしかありませんね。」

惚れさせられたとしても、自分から想いを打ち明けることはしないだろう。それがコウという存在の在り方なのだから。

「ね、ねぇ、良い所、悪い所があったんでしょ？　教えてくんない？」

重くなった雰囲気に耐えられなかったのか。萃香が流れを切ってコウに問う。鬼子母神は憮然とした表情のまま言い放つ。

「……教えよ。萃香に勝ったお前の意見だ。萃香も耳を貸すだろう。」

「……近接格闘がカウンターのみというは良くないだろう。如何に威力があろうとも当たらないのでは意味がない。」

萃香の類稀なる戦術眼。これが無ければもっと早く終わらせられたはずだ。

「あんな速いのに当てられる訳ないじゃんかー！　ぶーぶー」

「なら教えてもらうといい。運のいいことに君の母君は鬼神だぞ。」

「ぇ〝！？　い、いやー、ママちょっと厳し……。」

コウの”最強の鬼神”に教えてもらえ、という言葉には嫌な思い出が付随するらしい。

「ふふふふ……。そうだな。喜べ萃香。わらわ自ら鍛えなおしてやろう。」

「……」

教育ママ再び。その威力は凄まじい。萃香の口からエクトプラズム

が。ぉおう、壮観なり。鬼の魂ぞ。

会談という名の雑談を前に佇まいを整える。

「鬼子母神、九鬼　桔梗殿。天魔殿。この度は大変申し訳ありませんでした。あれだけの暴言を吐いたこの身に温情を頂いた事、感謝のしようがございません。これ以上、貴方様にご迷惑をお掛けする訳にもゆきませぬ故、これにて失礼致します。」

急な態度の変化にもやはりというべきか、鬼子母神、天魔は対応する。

「うむ。では早々に立ち去るが良い。」

「それが良かろう。わしら天狗とていい顔はせんしのぉ。」

「では。」

「えっ？　行き成りすぎるでしょ、それ。なんだったらあたしんトコ来てみる～？」

未だ立場というものを知らない萃香にその辺りの機微を求める事は筋違いなのだろう。

「伊吹殿。申し出はありがたいのですが、私にはやらねばならぬ事がありますゆえ、何卒、ご勘弁を。」

「うげぇぞわぞわするからやめれー。なによ、その気色の悪いしゃべり方は！　さっきまでみたいに適当でいいから、ね。友達でしょー？」

――友達。そういえば、友達なんて居ないな。

「……分かった。だが、やらねばならん事があるのは事実だ。私は行く。」

「そ、そう。」

「……時々、幼い友人を訪ねる事ならあるかもしれんな。」

「……お、おうよ！　次は負けないからねッ！　必ず来なさい！」

いつからだったんだろうか。そんな言葉が嬉しいと思うようになったのは。だから、

「また会おう、萃香。」

つい、再会を願う言葉で返してしまった。

次に会った時は半殺しで済むんだろうか。……鍛えておこう。

第七話：コウ対萃香　死力を尽くした後は。（後書き）

戦闘描写で力尽きた感がしたらごめんなさい、多分その通りです。

第八話：妖怪嫌いの村で。（前書き）

今まで矛盾とかないかなぁ。もし有ったら教えてくださいｏｒｚ

第八話：妖怪嫌いの村で。

百年以上も退治屋をしていれば、時には非常に腹立たしい依頼とてある。

コウは妖怪の山を下山し、幻想郷を離れて１００年近く日本全土を当てもなく渡り歩いていた。年号も保安2年―（１１２１年）という、やはりいつなのかわからない時代になった。

その旅も目的地が思い浮かばなくなれば、妖怪の山に行って鬼子母神と共に萃香に稽古という名のイジメを施されたりなど、適当なものだった。

鬼子母神に絞られるのが萃香だけではなくコウもであったのは忘れたい記憶だ。萃香の憔悴を見てれば自分の苦行は苦行ではないと思い知らさせるが。

「――――か!?」

「聞いているんですか!?」

――あぁ、余りの煩わしさに嫌な記憶を思い出して現実逃避してしまった。

「あぁ、聞いている。だが退治する必要があるのか？　その”鬼”とやらがあなた方に危害を加えた訳ではないだろう？」

偶然立ち寄った村は妖怪の山の南にかなりの距離を行った所にあり、幻想郷と呼ばれる妖怪の巣窟の様に思われている土地からは多少外れる位置にある。

「必要だって!?　あれは鬼なんですよッ!?　妖怪と一緒に暮らしていたなんて!」

「そうよ!　今まで騙していたのよ!?　いつ襲ってくるか……!」

話は簡単だ。捨て子だった子を拾ったはいいが、余裕のある家なんてほとんど無く、面倒を見ていたのは独り身の女性が一人。それでも村の仲間だと仲良くやっていた。だが、いつの間にかその子の頭に角が生えていた。つまり妖怪である。

妖怪の脅威に晒されながら生きているからだろうか。”妖怪”であるならばその時点で恐怖の対象なのだろう。

「はいはい、私なりになんとかしよう。それで構わないね?」

気持ちも分からない訳ではないが、こうまで一方的なものは些か以上に腹が立つ。

「ええ！　お願いします！　あの化物が居なくなるんならそれで充分ですよ！」

これ以上ここに居たくはない。その母屋を出て、立ち去る。

――彼らの話ではその”鬼”という子は北へと行ったとのことだが……。

とりあえず、その子と会わなければ何も出来ない。村を出て北へと足を向ける。しかし、そこに一人の女性が駆け寄ってくる。まだ何か言いたいことがあるのだろうか。

「お、お待ちくださいませ、退治屋様！」

息を切らせながらもはっきりとした口調で呼び止めてくる。立ち止まり、話くらいは聞いてみようと考え直す。他の村民とは雰囲気が違う。

「……私は様付けされるような者ではない。ただの退治屋だ。」

「では、その退治屋さんにお願い申し上げます。」

その瞳に映し出されているのは、覚悟。深々と頭を下げて

「あの子を、見逃しては頂けませんか？」

僅かに震える声で、懇願する。

北へ行った。その情報を頼りに北へと向かったのはいいが、その北とやらに竹林があるのだが。いや、もはや竹で出来た森だろう。規模が図りきれない。上空から見れば違うんだろうが、そんな事までしなければその全容は把握できないだろう。

「しまった。……迷った。」

これでは探しようがない。仕方ないので風を作り出し空に出ようと風生成器官を起動しようとした瞬間に、視線を感じた。視線の主を探せばそこには、

――兎？

そこでこちらもじっと見つめているのは、兎。だが、問題はそこではない。

――何匹居るんだ……？

視界に居るだけで５０匹は居るだろう。その全てが自分へと視線を向けているという異常事態に対応を考えるが、思い浮かばない。し

かもつい、現状の悩み事が口を出てしまった。

「すまないが……、角を生やした子供を捜しているんだ。知らないか？」

話してから自分の行動を省みて、意味の無い行動だと思い自嘲的に小さく笑う。

「……馬鹿か、私は。」

しかし、口に出したと同時に、意味の無い行動ではなかったのだと示すかのように兎たちが一斉に動き出す。バラバラに散るのではなく、全ての兎が同じ方向を目指しいてる。

「これは……！？」

しかも、一定距離離れると進まずそこで止まってコウを見つめてくる。まるでついて来い、と言うかのように。その瞳に急かされるかのように兎を追っていく。

一体どういう事なのかは分からない。だが兎が確固たる意思を以って対応している事は確かだと分かる。

――ついて来い、ということなのだろうか……？

なんらかの罠かもしれない。ただ善意で案内してくれているのかもしれない。その判断は難しい。だが、あからさまな悪意というのも感じられない。

それしか手がかりが無いのも事実。なのでついていく。もし本当に

連れて行ってもらえるなら御の字だ。
駄目で元々なのだ。

１０分ほどだろうか。余り長い時間ではないが、短くもない時間走り続け、漸く視界に竹林以外の景色が映る。生い茂る竹林の隙間から覗ける色は黄色。

――なんだ、あれは。

隙間から見える僅かな彩りではその全容を把握できない。しかしすぐこの竹林を抜けられる。そう判断できるような位置まで走れば、先導してくれていた兎達は散り散りに竹林の奥へと引き返してゆく。ただ一匹を残して。

その残る一匹に対して走りながら感謝の言葉を送る。何が目的であれ、迷っていたのを助けられたのだ。

「案内ご苦労！　感謝する！」

言葉を送った兎はもう視界に入らない。

――抜ける。

開けた視界にまっさきに映る景色は黄色一色。

眼の前に在る訳ではない。だがそれでも視線を送らざるを得ない。

そこには、それ程までに美しいひまわり畑が広がっていた――。

「案内ご苦労！　感謝する！」

そんな言葉を言いながら走り去ってゆく男を見る兎たちのリーダー、てゐは苦笑する。

――ひまわり畑に送った事を感謝されてもねー。

始めは迷い人を契約通りに永遠亭に近づけさせぬように追い返す。ただそれだけだった。だが、その男の溢した言葉の”角を生やした子供”ならば見覚えがある。ほんの少し前に白い長い髪の人間と一緒に居たがこの”迷いの竹林”で迷っている様子はなかった。

向かっている方向がひまわり畑だったから良かったがあの人間が永遠亭の方向に向かうのならばなんとかして追い払わねばならない。そうはならず助かったのは自分なのだろう。あの人間は人間なのに”妖気”を纏っていた。”知恵”を授けて貰って日の浅い自分でどうにか出来るとは思えない。

そんなヤツと一緒に居た子供を探しているなんて時点で危険人物だ。
あの男が迷っているのを探しにこられたりしては堪らない。この竹林の外のイザコザは外で解決してもらうのが一番いいのだ。
その向かう先に非常に強力で恐ろしく好戦的な妖怪が居ようとも。
――まぁ、どうなってもあたしには関係ないしね。
そう考え、てゐは兎たちの統率に戻った。

竹林を抜け、少し先に在る見る者を圧倒するひまわり畑に到着したコウは身を潜める。目的のひまわり畑を眺めるには絶好の位置にある巨木では三人の者たち相対している。
――どういう状況だ!?
目的の子供は木の根元で身体を隠すようにして対峙する二人を覗いている。対峙するのは銀髪の女と翠色の髪をして日傘を差している女。
記憶で見たのが二次元の絵であろうとも、普段であれば気づいたか

もしれない。対峙している二人が藤原妹紅、そして風見幽香であると。

だが今は”角を生やした子供”の保護をしなくてはならないという目的を優先したが故に、その二人の隙を窺うのみで済まし、見逃した。その二人が誰なのかを。

幼い、角を生やす少女――上白沢　慧音は絶望も中に母(きぼう)を見た。

自分を拾ってくれた村の人たちが、優しくしてくれた人たちが自分に向ける眼に。昨日まで、一緒に遊んでいた友達。仕事をすれば頭を撫でてくれた大人の人たち。その全てが態度を豹変させた。

優しいかったはずの眼は、恐怖に濁っていた――。

村人は皆妖怪の恐ろしさを知っている。自分も教えられた。北に行けば妖怪の山という鬼神の治める山があるから、絶対行ってはいけないと。そう言っていた時と同じ眼。

そんな眼を向けられ、ただひたすらに否定する。自分は妖怪ではないと。襲ってくる妖怪なんかとは違う、自分は人間だと。だが、誰一人として、話などしない。それどころか、眼をあわせようともしない。

そこまでされて思い出す。自分を愛してくれる母が居る。母なら自分を人間だと認めてくれるはずだと。

家に帰り、母に主張する。自分が人間だと。妖怪ではないのだと。

その言葉を聞いた母は自分事を抱きしめてくれた。頭を撫でてくれた。自分の愛する娘だと言ってくれた。嬉しかった。今まで生きてきた短い人生の中で、一番だと確信出来る程に。

だから愛してくれた母のために、愛する母のために村を出ることを選んだ。

妖怪退治をしている人が村に来た。その人は真っ白な髪と、真っ赤な眼をした綺麗な女の人だった。妹紅さんと言うらしい。他の村人が私の退治を依頼したと教えてくれた。

母が懇願してくれた。自分はどうなってもいいからこの子に手を出さないで欲しい、と。嬉しかった。けれど、とても悲しかった。母が自分の代わりに死ぬ事を望んだことが。自分がそんなにも迷惑を掛ける存在なのかと悔しくなった。

「安心しな。あたしはその子を殺すつもりなんてないよ。私と来るか聞こうと思ったんだよ。」

だから、妹紅さんが言った事が理解出来なかった。

「安心しな。あたしはその子を殺すつもりなんてないよ。私と来るか聞こうと思ったんだよ。」

藤原妹紅はその少女を想う。

妖怪である。それは人間から排斥されるに足る理由なのだろう。しばらく容姿に変化が全くない。ただそれだけで人は自分を危険視した。その時に向けられる感情は恐ろしいものがある。

こんな幼い少女一人では、母が護っていても限界があるだろう。ここに居ても辛いだけ。それどころか、害意は自分だけでなく、護ってくれる人にも向けられる。そうなって先にあるのは破滅だけだ。

「なん、で……？」

震える声で尋ねてくる。口で答えても信じてはもらえないだろう。だから見せる。己の人外の証を。

「あたしも似たような経験をしたからね。」

小太刀で首を掻っ切る。その異常な行為に、親子は息を呑む。悲鳴を上げないのは人死に慣れているからだろうか。

「……大丈夫。ほら、な？」

そういって見せるのは確かに切ったはずの傷の無い首。

「あたしはね、随分と昔に不老不死になったんだよ。ただの人間だけど、老いもしなければ、死にもしない。誰もが口を揃えて『化物』って罵るんだ。」

「あたしはね、随分と昔に不老不死になったんだよ。ただの人間だけど、老いもしなければ、死にもしない。誰もが口を揃えて『化物』って罵るんだ。」

そう言って、自分で掻っ切った首をさする妹紅さんは自嘲気味に笑られました。

「妹紅さん、とおっしゃいましたね。貴女は娘を、慧音を護れますか――？」

この方は、娘を非難しない。なら。

「ああ、あたしが居る間は確実にな。あたしが居なくても、独りで生きていけるように、最低限の力の使い方は教えるさ。」

あぁ、良かった。断言してくれた。もう私ではこの子を護りきれません。誰かに頼るしかないのも、頼れる方が尋ねてくださったのも、何かの運命なのでしょう。

「では、妹紅さん。娘を、お願い致します。」

「あぁ、わかった。」

ありがとうございます、妹紅さん。これで、憂い無く逝けそうです。

「お母さん!?」

ごめんなさい、慧音さん。弱い母でごめんなさい。貴女を護りきれない情けない母でごめんなさい。ただ、願うなら。

「慧音。貴女は妹紅さんについてお行きなさい。母は貴女が幸せに暮らしていける事を願っていますよ。だから、貴女は私の事を忘れなさい。」

「ぅあ……お母さん……。ごめんなさいッ!。こんな私でごめんなさい! でも、忘れません! 私はお母さんの事を、愛していますッ! いつまでも、愛していますからッ!」

今、この母を愛すると涙を流してくれる貴女に、

「……仕様のない子ですね、慧音さんは。私も貴女の事を愛していますよ――」

――天下無敵の幸福が在らん事を。

二人が隠れながら、去った後。

「カカさん、あの〝鬼〟っこはどうした？　退治屋さんは？」

「退治屋様でしたら、北に逃げたあの子を追って行かれましたよ。」

「逃げただぁ！？　あんの妖怪めッ！　今丁度別の退治屋さんが来ているんだ！　こっちにも頼むぞ！」

「おうさ！」

訪ねてきた村人の皆に嘘で答える。

――あぁ、慧音さん。もう一仕事やらねばならないようです。

「お、お待ちくださいませ、退治屋様！」

――どうか、貴女が幸いだと誇れる人生を送れますように。

第八話：妖怪嫌いの村で。（後書き）

どんどん文章量が増えている……！　そして更新ペースが落ちる、と。これは孔明の罠だッ！

第九話：縁は異なもの味なもの。（前書き）

言うの忘れてたゼッ！　ちょっと時間が空く様な事があっても必ず完結：はどこになるか分かりませんが、続けます。東方二次作品で完結はどこに持っていくべきかは後で考える。

第九話：縁は異なもの味なもの。

コウはひまわり畑の中に身を潜めて妖気を纏う二人の激突を待つ。

その瞬間こそ、最大の機会（チャンス）。風生成器官で膨大な風を静かに生み出して身に纏いつつ、妖気を抑え、気配を気取られないように己の存在を小さくする。

――あと少しだから、逸るな。もうすぐだから待つんだ。

退治する二人の激突という合図を、逸る心を抑えながらひっそりと待つ。

あの二人が何を話しているかは聞こえない。風で拾えば聞こえるだろうが、緊張を高め、警戒心の塊のような者には気づかれてしまうかもしれない。その事実がタイミングを計りづらくしている。

やがて銀髪の女が何かを言い放ったその瞬間に、翠色の髪をした女の抑えられていた火の玉のような闘争心が妖気とともに一気に燃えさかる。一泊遅れてその手に炎を宿し、銀髪の女も呼応するかのように妖気を高める。

一瞬の均衡が音の空白を生む。

どちらからか。重心を落とし、お互いがお互いを滅するために飛び出そうと脚を踏み出す。

――ここッ！

風を爆発させる。空気抵抗をほぼ消去し、突風のような追い風を作り、横目に見える景色が尾を引く速度で木の根元に居る慧音へと走り抜ける。

予想外の出来事に二人は跳び退る。その行動を見て、成功を確信する。今二人は跳躍して後ろへと動いてる。今から追いすがっても間に合わないッ！

「慧音ッ！ここを離れるぞ！」

「えッ！？　あッ！」

返答など聞かず慧音を腕に抱え、すぐさま身を翻し、妖怪の山方面へと跳ぶ。ただ飛ぶより燃費がよく、しかし速度は大して落ちない跳躍選んだのは慧音の心への負担を多少は考慮した結果だ。跳躍ならまだ理解の範疇を超えない。規模は超えていたとしても。

「お前ぇえッ！　慧音をはなッ――！」

後ろから追いすがる銀髪の女。だが声は、

「――――――――」

翠髪の女が何かを呟いたと同時に放たれた白い極光の中身に飲み込まれた。その光景を見た慧音は声を張り上げる。

「妹紅さんッ！？　そんなッ！」

「黙っていろ！　舌を噛むぞッ！」

その言葉を封殺し、この場から離れるために全力で跳ぶ。あの極光を放った妖怪の身に纏う、行き成り膨れ上がった莫大な妖気がコウの頭の中で特大の警鐘を鳴らす。慧音の言葉に耳を貸す余裕など無い。

――アレはヤバイ！　ヤバイヤバイヤバイッ！　ヤバ過ぎるだろうがッ！

膨大な妖気と共に、その怒気を多分に孕んだ尋常ならざる殺意を向けられたことに自然と恐怖が沸き起こされる。

ただひたすらに跳ぶ。その恐怖を振りまく”化物”から逃げるために。

半獣らしき子供を抱えて逃げる”風を使う男”をひまわり畑で見上げる風見幽香は口の端が釣り上がるのを自覚する。

その感情は憤怒か歓喜か。

「ふふっ。うふふふふふ……！」

哄笑を上げる様はまさしく魔王が如く。

――貴方の”風”は１７３もの花（いのち）を散らしたわよ？　またいらっしゃいな。次は、必ず殺してあげるから。

逃がした獲物を殺す様を、命乞いしてくる様を思い浮かべ、その至福の時を願う。”次”を想いながら”今”堕とした愚か者の死体を肥料にでもしようと眼を向ければ、

「……あら？」

殺したはずの女の死体がない。確かに殺したはずだ。マスタースパークに飲まれたのは確かなのに。どうやったのかは分からない。分からないが――、

どうしようもなく可笑しい。とても楽しく、同時に途轍もなく不愉快だ。

「一日に二人も逃がすなんてね……。……ふふふっ！　あはははははははッ！」

”花を燃やすと言った女”と”花を散らした男”

――次は殺すわ。必ず殺す。

天に満月の輝く雲ひとつ無い空を見上げながらひまわり畑で花の王（フラワーマスター）

は狂ったように嗤う。いずれ訪れる日を想いながら。

逃げた先で見つけた小さな小屋へと駆け込む。

安堵を息をつき、極度に緊張した身体を解す男性。慧音はその様子を見ながら彼が誰なのかを問う。

「あ、貴方は誰なんですか？　なんでこんな事を？」

汚い木の上に座る自分に薄汚れた座布団を寄越し、彼も同じく薄汚れた座布団に座る。

「簡単に言えば、依頼を受けたからだ。」

「依頼って、村の――」

「違う。私が受けた依頼は村のではなく、君の母君の依頼だ。」

「え……。おかあ、さんの？」

母は何を依頼したのだろうか。自分の事はもう妹紅さんに頼んだはず、とそこまで考えて先ほどの光景が脳裏を過ぎる。

「アッ！　そうだッ！　妹紅さんが！　光の中に飲まれて――！」

「……待て。その妹紅、というのは藤原妹紅の事か？」

どうなったのか。如何に死なないと言っていた妹紅さんでもあんなモノを喰らったら死んでしまうかもしれない。

「そ、そうだよッ！　妹紅さんは！　妹紅さんはどうなったの！？」

何故妹紅さんの事を知っているかは分からない。妹紅さんは有名な退治屋さんなのかもしれない。だが、そんな事より彼女の安否が知りたい。

「大丈夫だ。その藤原妹紅というのが私の知る藤原妹紅であるなら間違いなく生きている。恐らく、蘇生してここへと向かってきているだろう。」

「どうしてッ！　そんな事が――――」

言えるのか。そう問おうとした瞬間にこの小屋の扉が音を立てて開かれた。

「慧音ッ！　無事か！？」

「ぁ……。も、こう、さん？」

そのには傷一つ無い妹紅さんが居た。

どうして生きているのか。怪我はないのか。身を案じる言葉が浮か

んでは消え、浮かんでは消える。

「もこうさん……。妹紅さん！　妹紅さんッ！」

結局、ただただ名前を叫び、抱きつく。無事で居てくれた。自分を探しに来てくれた。それだけで充分に嬉しかった。

「よかった……。慧音、無事だな？」

「はい……。　はい……！　妹紅さんもよくご無事で…。」

「あたしは死なないよ。……で？　そこのアンタは何なんだ？　何で妹紅を攫った？」

安心したからだろうか。自分が上げようとした声にその音が重なったのは。

「あ、妹紅さん、待ってください。あの人は――」

静寂な空間に余韻すら残して鳴り響くのは私の腹の虫の大きな催促。

「ぁ……。」

「……。」

「……。」

顔が紅く染まっているのが分かる。これは流石に恥ずかしい。

「……。」

「……。」

「あの……、黙らないで下さい……。」

消え入りそうな声になってしまったのは察して欲しいという気持ちの顕れなんじゃないだろうか。

「くッ！　くっくくく、くはははははは！　ふはははっ！　あっはっはっはっはっはっはっは！」

「ぷっ！　は、ははッ！あはははははははははは！　この瞬間にそれはないでしょ！」

「わ、笑わないで下さいよぉ～！」

穴があったら入りたいです。

「で、結局アンタはなんで慧音を攫ったわけ？」

三人で同じ釜を囲んでいる。用意したのはコウ。釜は妹紅さんの物

で、お米はコウの出したもの。箸は各自のもの。お粥のようなものを調理したのは慧音。

「攫ったとは人聞きの悪い事を。私は慧音の母君の依頼を受け、それを実行しただけだ。」

「あの、お母さんの依頼って何なんですか？」

先ほど聞き忘れた問いを改めてコウに投げかける慧音。

「あぁ、それがな――」

「あの子を、見逃しては頂けませんか？」

僅かに震える声で、懇願する着物を着こなした女。

「……貴女は？」

「失礼しました。私は、慧音の育ての母にございます。」

「母、か。既にもう一人の退治屋がその子を追っているらしい。見逃せ、と言われてもな。」

「それでもお願い致します。報酬が要るであれば、この身体、好きにして頂いて構いません。」

この村では妖怪は災害と変わらない認識がなされている。だから、娘といえども妖怪の為にそこまで出来る女の覚悟を見たいと思った。

「ほぅ……。それは魅力的な報酬だ。」

そう言って一歩、近づく。身体は強張り、何かを言おうと口を開く。さぁ、その躊躇う口は何を言う？

「……！　もし、見逃して頂けるのでしたら、一生涯。貴方様にお仕え致します！　その間、私を好きになさって結構です！　ですから、お願いいたします……！」

そんな事を言い放ち、頭を下げる。

「――――！」

――己の一生すら義理の娘のために棄てるかっ！

「く、は、はははははは！　凄いね、貴女は。」

その笑い声を、その言葉をどう捉えればいいのか分からないのだろう。困惑した声が掛けられる。

「あ、あの……？　退治屋さん？」

「顔を上げろ。」

身体を緊張か、或いは恐怖に震わせながら顔を見せてくる。

そんな”女性”の頬に手を沿え、その口を貪る。

「ん！？　む……ぅ……。」

一分間の間、その口内を舌でたっぷりと犯したコウは身体を離す。

女性は気丈にも嫌悪の感情など欠片も見せずに言う。

「ふ、ぅ……。依頼を受けてくださったという事で構いませんね。ありがとうございます。」

「いや、その依頼は受けん。」

「なッ！？　それでは――」

「だが貴女は気に入った。貴女の娘は確かに私が助けよう。報酬はさきの口付けで充分だ。」

女性の言葉を遮り、自分の意志を告げる。

「……！」

コウは絶句する女性に名を問う。

「私は、紅（こう）という。貴女の名前は、なんと？」

漸く私の言っている言葉に理解が追いついたのだろうか。その凛とした姿は見るものを惹きつける”何か”があった。

「――華香と申します。」

「……その名は覚えておこう。もう二度と逢う事はあるまい。」

そう言ってコウは探しに行く。北へ。

「あの……！」

「ではな。」

「――という事ガッ！？」

話を終えた瞬間に頭部と腹部に強烈な打撃が加えられる。妹紅の拳と慧音の頭突きという打撃が。

「あんたはなんて事してんのよ！？」

「お母さんになんて事してるんですか――！」

「ま、待て……！　あれは正当な報酬で――！」

僅かな言い訳も怒れる女性には火に油。例えソレが正論であったとしても。

「喧しい――！」

「うるさーい！」

「ぬあぁあああ！？」

第九話：縁は異なもの味なもの。（後書き）

最近の子は早熟だから問題ない（キリッ　　だっておｗｗｗｗｗ

第十話：人間と妖怪の狭間に立つ者たち。

鉄拳制裁は終わり、引き続き食事に戻る三人。感情は納得してはいないが。

「それで？　何故――」

「なんだよ鬼畜。」

「なんですか変態さん。」

話を続けようと口を開けばこれだ。しかし、こんな事で聞くべき事を聞かないわけにはいかない。

「……何故、あの妖怪と対峙していた？　あの妖怪と何か因縁でもあるのか？」

「あー……。」

ばつの悪そうな態度で眼を合わせようとしない所を見ると、何か疚しい事でもあるのだろうか。

「……何か、言いづらい事でも？」

「ぁ、いや……。そういう訳じゃないだけど……。」

改めて問うても話そうとしない。ならば、と慧音へと眼を向ける。

「慧音。何があった？」

素直な子だ。この子なら話してくれるかもしれない。

「え？　あの、よく、分からないんですけど……。それでもいいですか？」

「……よく分からない、とは？　いや、いい。どうして対峙する事になったのか流れだけでいいから話してくれ。」

よく分からない。それだけではまさしく不明だ。だがそれでは困る。あの妖怪が何を目的としているのかが分からないのでは、今後アレとどう向き合えばいいのかすら決められない。

「はい。簡単に言いますと、竹林から出てひまわり畑へと向かったんですが――」

「待て。そこで何故ひまわり畑へと向かう？」

そこが分からない。あの竹林で兎達が案内したのか。それとも何か目的があったのか。

「あ、えっと…。そのー……。」

「いいから話せ。」

「はいッ！　私がひまわり畑を見てみたいと言ったからです！」

僅かばかり眼で威圧したら素直に話してくれた。やはりいい子だ。
だがその理由はどうなんだろうか。

「……。まぁ、いい。ひまわり畑に行って、何故あの妖怪と？」

多少の落胆を感じる。流石にその理由が元であんな殺意を向けられたのだ。
おそらく今後も変わらず敵認定されている事だろう。第一級危険地帯になってしまった。

「えと……、ひまわり畑に着いたら、あの大きな木の所で眺めていたんですけど。その……妹紅さんが……。」

「……妹紅さんが？」

「……そんなに珍しいなら持って行こうかって言ったら、突然襲ってきて……。」

「……。」

翠の髪に、チェック柄のワンピースと日傘。さらには花を持っていく、という発言に対して過剰反応。
これだけの条件が出揃っていて分からないほど忘れてはいない。
黙り込んだのを怒りを抑えているのと勘違いしたのか、慧音は恐る

恐るというように声を掛けてきた。
妹紅は分かっているのか、全く眼を合わせようとしない。

「あ、あの……、コウさん……？」

「――慧音。」

「はいッ！？」

「その妖怪の名前か、称号の様なものは何か言っていたか？」

「あ、えと……、確か、フラワーマスターとかって――」

「妹紅。」

言葉が終わる前に発せられたその声に含まれる怒気に、慧音は口を噤んでしまう。

「どうしてくれるッ！　貴様が要らん事をしてくれたお陰で眼をつけられてしまったろうがぁ！」

「仕方ないでしょ！　こんな所にあのフラワーマスターが居るだなんて知らなかったんだよッ！
大体あの女に眼ぇつけられる様な真似したのはお前じゃないか！
なんであたしに言うんだよ！？」

爆発。だが二人とも茶碗も箸も持ったままだ。飯を粗末にしないのはいい事ではあるのだが。

「戯けこの阿呆ッ！　貴様がどれだけ気をつけようとも相手はあの

フラワーマスター！
慧音を巻き込むように立ち回るに決まっているだろうが！　それを防ぐのにアレ以外手があったか！」

「う！？　いや、でも……！」

流石に慧音に害があると言われれば妹紅には返す言葉が無い。

「その上、挑発しただろう。君の一言を聞いた瞬間に妖気が跳ね上がったぞ。」

「あ、あは、あははは、あはははー」

乾いた笑いは己の失敗を思い知らされたからだろう。あの白い極光は恐らくマスタースパーク。
しかも殺す気２００％だ。そんなものの直撃を貰ってしまえば普通ならばトラウマものだ。死ぬのが普通なのだろうが。

「……全く。もういい。過去の事を弄繰り回しても仕様の無い事には違いない。これからの方針を決めよう。」

「自分が穿り返したくせに。」

「何か言ったか？」

「いーえ。とんでもございませんー。」

悪態の一つくらいはつかせて欲しいと思う妹紅であった。

食事を終えてお互いの目的、行動を話し合い、誤解が無いように情報を共有する。
残るはこれからどこへ行くか、という事一点のみ。

「で、あんたはどこか当てはあんの？　あたしは普通に旅を続けながら生き方を教えるつもりだったんだけど。」

「……慧音。君はどこに行きたい？　何か希望があるのなら出来る限り合わせよう。」

これは本人の意思を無視していい事ではない。
どこか行きたいところがあるのなら優先してあげたいと願うのは傲慢なのだろうか。

「え？　私ですか？　何かといわれてもどこに何があるかとか知らないんですが……。」

しかし、それには前提として地理に造詣が無ければならない。

「ふむ……そうか。私も旅はしていたんだが、しばらく住居として借りられそうな所など現状は妖怪の山くらいしかない。
……あの孤児を集めた社（やしろ）はまだ無いだろうし……。」

幸いにも、迂闊な最後の呟きは二人の叫びにかき消されて誰の耳にも届かなかった。

「いっ、今なんて言った――!?」

「え？　ぇえぇぇえええ――!?」

「ん？　何をそんなに驚いているんだ？」

「お前ッ！　妖怪の山の連中と――!?」

首元を掴んでくる妹紅に、最早絶句して言葉がでない慧音。
勢いよく掴まれたので呼吸を阻害されている。

「ぐ!?　ええぃ、離せッ！　妖怪の山がなんだ？　そんなに可笑しい事か？」

力ずくで妹紅を引き剥がし、気道を確保するコウ。

「可笑しいに決まってるだろ！　なんでただの人間が――いや、妖怪!?」

その考えが妹紅に構えを取らせる。その際慧音を腕で庇うのを忘れない。
対したコウは座ったまま。空気が冷えていく。そんな錯覚を覚えてしまう。

「はッ！　……妖怪では、何か可笑しいか？」

コウは嘲るかのように、警戒する妹紅の行動を笑い飛ばす。

「……可笑しいに決まってるよ。　妖怪がなんで妖怪退治なんてしてんのよ？」

コウはやはり、心底可笑しいと言わんばかりの表情を浮かべながら問う。

「では、藤原妹紅。――君と、一体何が違うのかな？」

――不老不死の人間。それはもはや妖怪ではないのか、と。

「ッ！？　違うッ！！！」

一つ、静寂が支配する世界に木の軋む音がする。

「何が違う。老いず、死なず、悠久の時を過ごし、尚且つ時を経る毎にその身に纏う妖気は強まっていく。
一体何が君を人間だと証明出来るのだ？　一体何が君を妖怪ではないと証明する？」

「違う！　違う！　違う！　それでもあたしは人間だッ！　人間を襲う妖怪とは違うんだッ！！！！」

また一つ、木の軋む音が耳に届く。そして妹紅は気づく。自分の耳を打つ、その音の正体に。

――これ、あたしの、足音だ。後ずさる足音……。

もはやコウに表情は無い。ただ淡々と事実を話しているだけだとい

う印象すら覚える。

「人間を襲う妖怪。確かにそういう種も居る。だが同時に、人間を襲う必要などない妖怪もまた、確かに存在している。故に人間を襲わないという事象は妖怪ではないという事象に繋がらない。では――」

「止めて！　妹紅さんを苛めないでッ！」

見ていられなくなったのだろう。慧音はコウと妹紅の間を割り込ませ、精一杯コウを睨み付ける。

しかしコウは何も言わず、静かに慧音の眼前へと移動する。

「ッ！　妹紅さんは人間だよッ！　だって――」

コウは健気な少女の頭を撫でる。出来る限りに優しく。

大丈夫だと、意思を伝えるかのように。思わずコウは微笑んでしまうが、すぐにその表情は消える。

見間違いだろうかと、慧音が疑問を抱いた時にはコウは横をすり抜けて妹紅と相対していた。

「では、藤原妹紅。人間とは、なんだと思う？　妖怪とは何だと思う？　妖気を持っていれば妖怪か？妖怪と交友を持っているなら妖怪か？　人間を襲うのならば妖怪か？　それとも超然とした能力を持っていれば妖怪か？

――否。否だよ藤原妹紅。妖気など、永きを生きれば誰であろうと身に付くものでしかない。妖怪と言われる存在は生まれながらに持っていようと、それは最早技術に過ぎない。

では妖怪との交友？　それこそ下らん。妖怪の気まぐれは人間と

も友誼を結びうるものだ。何よりその者を知っているのであればその者と同じ者であるなど、まさしく論外だ。

ならば、人間を襲うものこそ妖怪なのだろうか？　それを是とするなら世界に人間など存在しなくなるぞ。一番多く人間を襲っているのは人間だからな。

常識を超える力持つ者。これが妖怪か？　違うだろう？　人の世の中にはその常識の埒外に居るモノを打倒しうる存在が生まれるのだぞ？　ソレを妖怪と呼ぶか？呼ばないだろう？

そもそも力を持つ存在とはなんだ？　妖怪？化物？神？　本当に？　何故妖怪では無い者が妖怪を妖怪だと言えるのだ？　化物も、神も同様だ。そう呼ばれているだけで、それはただの”力を持つ人間”ではないのか――？」

問うのではなく、語りかける。この言葉に、間違いがあると言ってみろとでも挑発するかのように。

「そっ、そんなこと――」

やっとの思いで絞り出した声はさらなる声に塗りつぶされる。

「分からない？　分からなくて当然だ。こんなものに解など存在しない。君は藤原妹紅（ふじわらのもこう）。この子は上白沢慧音（かみしらさわけいね）。私は紅（こう）だ。それ以上でもそれ以下でもない。

我思う。故に我在り。かつて――、……ある人間が言う言葉だ。全く以ってその通りだろう？」

かつて、という言葉をいずれに直そうとして、止めたのは知りようのない事だから。

言う、と言ってしまったのは現実という知識を知るが故にだろうか。

「でもッ！　お前は――」

「私はコウだ。元はただの人間で、今は妖怪でもあり――、しかしその心は人間だと信じる、ね。」

「え――？」

妖怪だ、と続けようとした言葉に被せるように続けられた言葉は、やはり妖怪であると認める言葉で。
しかし、ただの妖怪では無いという信じがたい言葉。

驚愕の声は誰の発したものだろうか。慧音か、妹紅か。

木の軋む音が三人の耳を打つ。小屋全体から響くような、しかし不安を煽るような事の無い音を遮って声を発するのはコウ。

「人間である。妖怪である。……些細な事だと思わないか？」

もうコウの表情に先ほどまでの感情の欠落した虚無を感じさせる表情は無い。
そこに浮かんでいるのは優しげな、ソレで居てほんの少し寂しそうな、そんな綺麗な微笑み。

「……そう、だな。ごめん、あたしが悪かったよ。」

「妹紅さん……。……ッ！」

――そんなに睨まないでくれ、慧音。私に非が無いわけではない事くらい分かっているとも。

「いや、それはこちらだ。随分と言い過ぎてしまった。すまない。」

言いながら頭を下げる。だが、そのに容赦の無い言葉が投げかけられる。

「でもまだなんで妖怪の山に住居を借りられるかを聞いてませんよ？　コウさん。」

頭を上げて慧音のその顔を覗いてみれば、

――そんな蔑むかのような眼で見ないで欲しいのだが。

「――という事が有ってな。そんな訳でそれ以来萃香や鬼子母神殿とはそれなりに交遊があるんだ。」

等とのたまうこのフザケタ男に妹紅が思った事は、

――アホだ。アホが居る。

「む。なんだ、その眼は。阿呆を見るかのような眼は止めて欲しいんだが。」

「アホだろ、どう考えても。」

即答される。しかし無理はない。鬼神に立ち向かうなど、自殺志願者でもやらない。

「あの、妹紅さん。どういう事なんですか？」

聞くのは慧音。鬼神という存在は御伽噺と変わらないが故に実感がわかない。
何より規模が想像できない。存在の格が違いすぎるのだ。

「ん？　そうだな。簡単に言うと、蟻が一匹で人間の村に入って、その村で一番強い筋骨隆々とした人間の男に、お前の子供を殺していいかって聞くのと同じだな。」

「……。」

コウはやはり可哀想なものをを見る眼で見られる。

「……分かった。阿呆でもいい。とりあえず、妖怪の山も行く場所のひとつとして考えられるという事だけ頭に入れてくれ。問題は慧音がどこに行きたいか、だからな。別に行きたくないというならそれでも構わない。その場合はどこか、しばらく安住出来る静かな場所を探すから。そこで慧音を鍛えればいい。」

事実、自分がどれだけ危険な事をしたかを理解しているが故に反論など出てこない。

「そうだな。慧音がしたいようにするのが一番だしね。……なぁ、今日はここに泊まるんだろ？」

「ん？　そのつもりではあるが、どうする？　暖を取れないのでは……、そうだったな。木材を探してこよう。君が火を点けるのなら問題ないだろう。」

そう言ってコウは小屋を出ていった。

「慧音。今すぐ答えを出さなくていい。けど、正直あんまりここの長居したくはないの。だから明日の朝。朝になったら答えを聞かせて。妖怪の山に行くか、行かずに他のところを探すか、ね。」

「はい……。分かりました……。」

「ふ……。あたしも木材探し手伝ってくるね。」

妹紅もまた、慧音の残し小屋を出て行く。

「まさか、あんたが噂の『鬼殺し』だったなんてね。」

唯一の光源の満月は雲に覆われ、地を探すコウの表情は窺い知れない。

「……そういう君は『紅の自警隊』だそうだな。」

「ぶッ!?　ちょ、ちょっと！　なんでその事知ってるんだよ!?」

「これでも旅はしていた。京の方にも何度か行ったことがある。噂くらいは聞くさ。」

そう言って小さく笑うコウの声に、一切感情を感じられなかったのは何故だろうか。

「あっ、あたしの事はいいんだよっ！　お前さ、慧音が妖怪の山に行かないって言ったらどうするのさ。そんな事、実は考えてないだろ?」

「そんな訳あるか。妖怪の山は他の場所より安全だから提案しただけだ。妖怪の総本山と言っても過言ではないから嫌がる可能性を無視したりもしない。駄目なら駄目で他に静かな寂れた神社でも探すとも。」

言って、枯れ木を一つ、また一つと拾い集めていく。

「そ。なら、別にいいんだけどさ……。……慧音、さ。なんで半獣なんだろうな。」

お互いの足音だけが良く響く中、妹紅は問いかける。

「……ワーハクタク。先天的にそうだったというには些か不自然な

のは確かだな。なんらかの原因があるかもしれない。」

「分かるのか？」

「いや。流石に本人に聞いてみなければなんとも言えないよ。」

「……そっか。」

天に雲に覆われながらも満月の輝く中。人間と妖怪の狭間に立つ者たちの、最初の夜が更けていく。

第十話：人間と妖怪の狭間に立つ者たち。（後書き）

もう４０００文字は超えないと少ないと自分でも感じる今日この頃。
今回は大体５８００くらい。１００００は超えないようにしますｗ

第十一話：決める者と決められる者。

結局、慧音は妖怪の山に態々行く必要はないと選択した。

コウ、慧音、妹紅の三人は幻想郷の地を離れてしばらく定住しても問題ないだろう寂れた神社などを探す旅に出る。

コウと妹紅だけならば２０年もあれば日本全土を廻れるだろうが、旅のノウハウすら持たない慧音を育てるための旅路なので慧音に合わせていた。

慧音の記憶力は非常に高いだった。どんな木の実が食べられる、どういう場所ならば野宿に適している。人とであった場合の対応など、その全てを一度覚えたら忘れない程に。

慧音の獣人状態は何かの情報、或いは記憶とでも言うべきものが見え隠れするらしい。だがはっきりとした物は見えない。それに関しては、まだ能力が安定していないのだろう。

慧音の獣人化は満月の日にのみだったので、満月の前後二日間は野宿。それ以外では近場の村に泊まらせてもらい、妖怪退治の依頼があった場合は、コウか妹紅のどちらかが退治に、もう一方が慧音と共に待機という形を取っていた。

しかし慧音は、自分が一人で生きていけるようになるための旅であるので退治を見学させて欲しいと懇願し、この願いを二人は条件付で受理した。

条件は、妹紅か、コウと戦った二分以上立っていられる事。二分あ

れば何かに遭ってもどちらかが駆けつけるまで生きていられるからと説明すれば納得したようだった。

ただし、その場合も戦闘に参加する事は禁じた。随分と慧音が渋ったが、結局片方が退治をし、残りは慧音の護衛という形で落ち着いた。

しかし戦闘訓練は落ち着ける場所を見つけない限り軽いものか出来ないと言えば、慧音の脚はかなり速まったが、そう簡単には行かず体力を消耗したからか、風邪をこじらせるという結果に。

三人の拠点となる寂れた社を見つける頃には既に三年が経過していた。

その頃にはもう慧音に敬語で話すを止めさせた。仲間に堅苦しい言い方は止せという考えを押し付けた。少々妹紅に対しての敬語全般、コウもさん付けで呼んでしまう事も全て矯正。少しずつではあるが効果は出ている。

妖怪の中で生きる事の方が多いのだ。下手に出ていると思われる口調は危険があるかもしれないからだったか、面白がっていたかは定かではない。

そして漸く発見した社を住めるように改築し、食糧を確保。慧音は漸く拠点を出来た事で本格的な戦闘訓練に入れると浮かれていたようだった。

戦闘訓練は妖気の扱い方を妹紅が、体術をコウが教えた。

コウは妖気を風や水、雷に込める事に使うのほとんどであり、純粋

に妖気だけで攻撃を成す妖術は扱えないのだ。ついでなので妖術を教えてもらおうと決めた。

体術は全くの逆で、妹紅は問題外。今まで妖術と不死性に頼りきりで、身体の動かし方からさっぱりだったのだ。基本から慧音と一緒に教えられる事になった。

早く覚えて、私が妹紅さんに教えてあげますね、とは慧音談。

その時からしばらくの間は妹紅の猛練習ぶりが目に付いた。

ちなみに妖術に関しては覚えようとした方向性が違ったので危険な事は言ってこなかった。慧音が実践的に、コウが学術的に発展させようと躍起になっているというのは性格から考えれば皮肉なのかもしれない。

妖術の扱いを教える妹紅、体術を教えるコウ、実は一番生活力溢れる子の慧音。三人での生活はやる事をやりながらも楽しく過ごしていた。

静かな５０年の年月が流れる。

慧音がある程度の妖怪ならば一人でも問題なく倒せる実力を身につけた頃には時々妖怪の被害に遭っている村へ向かい、依頼を受ける。

そうやって実戦経験を積ませていた。もちろんコウか慧音がいつでも助けに入れる状況の上でだが。

この日もそうやって、慧音に経験を積ませようと思っていた。

「随分ざわついてるな。何かあったのか？」

口調も変わり、いつしか体も丸味を帯びて女性らしい身体つきになった慧音は、村全体の騒がしさを示す。隣を歩くのはコウと妹紅。そんな三人に村の男が声を掛けてくる。

「なぁ、あんた達退治屋さんか？」

「そうだ。何があったんだ？」

問うのはコウ。

「あぁ、それがよ。なんでも若い女の格好をした妖怪が出てな、自分を倒せるヤツをつれて来いって言ったんだってよ。あんた達も退治屋なんだろ？　腕に自身があるなら行ってみたらどうだ？　もう何人かの退治屋が向かってったがなぁ。」

「それでか。活気付いてるのは村人ではなく退治屋連中だったか。」

慧音の口調が男性的、或いはコウに似ている事を不思議には思った

ようだが関与しないのだろう。

村の男は眉を顰めるだけだった。

「いや、違うぞ慧音。退治屋が来る事によって村に金が落ちる。よって村人は出来る限り多くの金を使ってもらおうと必死なのさ。だからこそこれだけ活気付くのだ。」

「む……？　そうか、なるほど。」

慧音の口調がコウに似るのは必然だった。舐められないように、という事でそれなりの口調で話してみろ、と言われた所で手本も無しに出来る事じゃない。そして丁度良い所に手本(こう)が居た。

初めは慧音がコウの口調を真似て話しているのを見て二人は笑い転げた。礼儀正しく、素直な子という印象から余りに遠かったからだ。

「おっちゃん、その妖怪ってのはどこに居るの？　それ教えて貰わないと分からないよ。」

しかし半年もその口調で話し、その上見た目は、そして中身すらも理知的な雰囲気のある女性なのだ。自然とその口調が自然なものだと思うようになる。

「いやぁ～。それを聞きたきゃあ飯でも食ってきな？」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、してやったり、という雰囲気で迎えてくれる村の男。

「げっ。おっちゃんそれはちょ～っちずるくない？」

妹紅も分かっているんだろう。半分笑いながらも口で非難する。

「はっはっは。商売上手と言ってくれ。」

「くくッ、ふはははは。確かに商売上手だな。では貴方の店に行こう。なに、綺麗どころ二人が人の視線を独占させてくれるんだ。半額でいいな？」

そうコウが言えば男は目を丸くさせ、すぐ気のよさそうな豪快な笑いで応えた。

「……ふ、はっはっはっはっは！　おめぇさんにゃ敵わねェよ！いいぜ、半額にまけてやる。そん代わり店先で食いな！」

綺麗だ、と言われた事のない慧音が俯き加減なのはご愛嬌だろう。

ある店の表に二種類の視線を独占する三人は居た。

「コウ。その、なんだ。こういう視線は慣れないんだが……。」

「慣れろ。君の容姿は優れいてる。どこに行こうとそこに人が居るならその類の視線は送られるだろう。慣れておかないと大変だぞ。」

団子を頬張りつつも慧音の哀愁すら感じさせる小さな声をあっさり

と切り捨てるコウ。その事でさらに男の視線の半分はコウに向かうのだが平然と無視している。その事に時折舌打ちすら聞こえる。

「そうだなぁ……。慧音も慣れといた方がいいよ。いつの時代も変わんないからねぇ……。」

「……ハァ。」

やはり団子を頬張りつつ意味のない答えを寄越す妹紅に、慧音はため息をついて落胆を示すが無視される。別な思考で頭を満たす事で無視しようと試みる。

「気にしないのが一番だ。いつの間にか慣れるだろう。店主に教えてもらった情報は三つ。」

指を三本立て、一つずつ指を折りながら説明するのはコウ。その表情は戦士としてのモノになっている。

「一つ。自身を打ち倒すものを求めている。二つ。この村から西へ３０分行った所にある大木の下で待っている。三つ。命からがら逃げ出した目撃者によれば、眼が覗いて来る、だそうだ。何か思う所は？」

「そうだね～。目的がよく分からないね。自殺志願者なのかな？」

妹紅の疑問も最もだろう。態々自身を危険に晒す行為に意味があるなら自殺か、或いはそれだけの価値があると自身が信じるものの為の行動。

前者ならば、まだいいが後者の場合は本人のみ分かるものだという

事が往々としてある。

「眼が覗いて来る、というのはどういう意味なんだろうな。心を覗かれるというなら面倒だが。」

「いや、まずそれはないだろう。さとり妖怪は基本的に自分から暴れる事を望まない。そうだな……。実際に眼が見てくる、とも考えられる。」

慧音の疑念に答えるのはコウ。

「だ～～もうっ。考えたって分からないモンは分からないよ。もう行かない？」

考えるのが面倒になったのだろうか。団子も食べ終えた妹紅は最早だれ気味だ。

『情報は大事だぞ、妹紅』

「うっ。」

奇しくもコウと慧音の声が重なる。

「だが、考えても仕様のないことは確かだな。これだけでは何も分からん。慧音。どうしたい？」

「とりあえずは行ってみる。私がどれだけ出来るのかを確かめたいからな。」

コウの質問に対する慧音の答えは簡潔だ。その言葉を合図に三人は

代金を置いて立ち上がる。向かう先は西の大木。

コウは己の失態を悔いる。眼が覗いてくる。これほど分かりやすい情報はなかっただろう。これに気付けなかった、否、気付こうとしなかった事が悔やまれる。隣に立つ二人は、その威容に呑まれている。鬼神や天魔との邂逅が無ければコウとて危ういだろう。

西へと向かい、たどり着いた大木の根元に立つのは一人の女性。

その足元に倒れ伏す7人の侍や、退治屋だと思われる人間達。

豪奢な装飾のされた桃色の日傘。

六十四卦の「萃」が描かれた服を着ている。

「あら、いらっしゃい。貴方達が次の人間かしら?」

言葉と共に、女性の足元の空間が裂けた。中に覗くのは、覗いてくるのは、眼。

人間達が、多くの眼が覗いている空間へと落ちて行く。裂け目が閉じれば、後には何も残らない。

ほとんど妖気は抑えられている。だが、異空間を覗かせた瞬間に感じられた妖気は尋常ではない。

「……ん？　クス。クスクス……。貴方達、面白いわね？　自己紹介といきましょうか。私の名は紫。八雲紫（やくもゆかり）よ。貴方達はなんていうのかしら？」

「……ん？　クス。クスクス……。貴方達、面白いわね？　自己紹介といきましょうか。私の名は紫。八雲紫（やくもゆかり）よ。貴方達はなんていうのかしら？」

上白沢慧音はその威容に、そして恐怖に呑まれていた。

咄嗟に口から出た叫びは本能。恐怖に呑まれた魂が、死にたくないという本能から叫ばせた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

叫びと共に走り出す。

だが、その死への疾走を止める者が居た。コウだ。

コウの背が、慧音の眼の前にあった。慧音の身体を受け止めて尚、揺るがない背が。

――あ……？　こんなに大きな背中だったかな……？

その瞬間、確かに慧音は恐怖を忘れた。
もう、呑まれない。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

藤原妹紅は、その叫びに我に帰る。
脳裏に描かれるのは地に伏した慧音。その身体は血に濡れている。
妹紅は慧音の死を幻視した。

しまった、とも、間に合わない、とも思った。

だが、小さな衝撃音と共にその幻は消え去った。

コウがその背中に慧音を護っていた。

まるで子を護る親のようにも見えたソレは、一枚の絵の様にも感じた。

「……妹紅、慧音を頼む。」

聞こえたコウの声に絶望は感じない。その事が妹紅に気力を戻らせた。

憔悴している慧音をその腕に抱えながら、コウへと問う。

「大丈夫、なんだよな？」

声は震えてはいなかっただろうか。

「まぁ、なんとかなるだろう。」

何の気負いもないかのように、いつもの様に答えるコウを、頼もしいと思うことになるとは考えていなかった。

――コウ。あんたが居てくれて本当によかった。ありがとう。

「まぁ、なんとかなるだろう。」

そんな事を言いながら、内心ではどうにかして交渉に持ち込めないかと焦っていた。

内心の焦りを表に出してはいけない。妹紅と兎も角、慧音が不安に感じるようであれば心が折れかねない。何より八雲紫相手にそんな隙を晒すわけには行かない。

「すまない、お待たせした。私の名はコウ。先ほど君に向かおうと

したのが慧音。抱えているのが妹紅だ。よろしく頼む。」

――さて、どうすれば殺されない？

八雲紫は内心、この出会いを運命だと思った。

「すまない、お待たせした。私の名はコウ。先ほど君に向かおうとしたのが慧音。抱えているのが妹紅だ。よろしく頼む。」

――こんな所で、こんな存在に出会えるなんて……。

「そう。ごめんなさいね。そっちの子にはちょっと辛かったわよね。」

半獣に、妖気を纏う人間。そして何より、破魔の気すら持つ”妖怪”。これほど異常な逸材はそうは居ない。これだけの存在が人間につけば、均衡が生まれる。

「いや、これも良い経験だ。これから妖気に中てられる事はまず無くなるだろう。」

自分だって影響が無いわけではないだろうに、健気にも表には全く出していない。その精神力は驚嘆に値する。ますます欲しい。

けれど、愚か者は要らないの。貴方は、どうかしら――？

「そう言ってもらえると嬉しいわ。それで？　貴方達はここへ何をしにきたのかしら？」
――さぁ、答えなさい。貴方は妖怪であれば容赦なく殺すのか否か。

「いや何、ここに『自分を退治できる人間を寄越せ』などという不気味なヤツが居るから追っ払ってくれ、との事でな。出来たらここから去ってもらえないかと頼みに来たのだよ。」
――否。私は避けうる闘争は回避する。

「それはごめんなさいね。でももう問題ないわ。欲しいものは見つけたから。」
――私にも欲しいモノはあるのよ。

扇子で口元を覆う紫。晒している眼は何の感情も示さない。

「ほぅ。それは良い事だ。それが何か、聞いても？」
――何を差し出せば見逃して貰える？

「ええ、構わないわ。欲しいのは、貴方達だもの。」
――貴方達自身よ。

「……ふ、む。何故、と問うても？」

――何故そこまで私達を欲する？

コウは余りと言えば余りの答えに困惑する。

「クスクス……。聞けば必ず答えてくれるなんて考え無い事。少しは自分で考えなさい？」

――何故？　自分で考えない愚者なら必要ないのよ？

「……。均衡が欲しいのか？」

――人間と妖怪の橋渡しをしろと？

「ふふふっ……。いいわね、貴方。幻想郷へいらっしゃい。歓迎するわよ？」

――合格よ。貸し一つで住居くらい提供するわ。

漸く感情の見えない顔に妖艶な、しかしどこか胡散臭い微笑みを浮かべる紫。

「申し訳ないが、私は既に鬼神殿の客分だ。改めて招く必要はない。」

――君に貸しを作るなどゴメンだ。

「あら、そうだったの。確かに妖怪の山は良い所だけど、人里は嫌かしら？」

――妖怪と仲良くするのは構わないけど、人との関わりを持たないのは看過出来ないわ。

「……。差別があるのなら嫌だね。何より私には、やらねばならない事があるのだ。」

――ならばその辺りの配慮はしてもらう。それに私は長く居られな

いのだ。

コウの渋面が悔恨を感じていると示している。

「あそこは私が保護しているから大丈夫よ。そのやるべき事って何なのか教えてくれない？」

――私の紹介があれば問題ないわ。それよりどういう事かしら？下らない事なら消すわよ。

紫が柔和な笑みを浮かべながら、しかし眼だけは鋭くさせて問う。

「……約束だ。決して違えてはならない約束がある。」

コウの表情は無。しかし儚いとそう感じさせる。

「約束、ね。まぁいいわ。その時が来たらいいなさい。貴方達が来るのを楽しみに待ってるわ。」

コウの言葉に”想い”を感じて禁じる事は出来ないと判断する。しかし、禁じる必要はない。交渉は成立したのだ。

「じゃあね。また会いましょう。」

言葉と共に”スキマ”へと飛び込む。これで妖怪と人間の共存する楽園に一つ近づいたと喜びながら。

「大丈夫か、慧音？」

脅迫紛いの交渉を終え、肩で息をする慧音に駆け寄る。

「はぁっ、は、ふぅ……。すまない、もう大丈夫……ぁ。」

「……。」

妹紅は慧音を無言で抱きしめる。５０年も一緒に過ごしていたのだ。母が子を想うかのように心配なのだろう。

「……うん、ありがとう、妹紅さん。」

その微笑ましい光景を眺めつつも、コウは今後の行動を告げる。

「妹紅、慧音。一晩身体を休めたら幻想郷の人里に向かおう。」

「それしかないのか？　律儀に行く必要なんてないでしょ？」

妹紅の疑問も最もだ。だが、今回は相手が悪い。

「いや、彼女相手にそれは無理だ。どこへ行こうと捕捉されるだろう。」

「……そっか、無理かぁ……。」

「慧音、立てるか？」

「ああ、よっと。ありがとう、妹紅。」

コウの言葉を受けて、妹紅の手を借りて立ち上がる慧音。流石に疲労の色が窺える。

「じゃ、帰ろうか。」

「ああ。」

「ん、そうだな。」

もう、危険は去ったのだ。

承安４年　（１１７４年）　幻想郷へ。

第十一話：決める者と決められる者。（後書き）

実はちょっと眩暈が。風邪かなぁ……。

第十二話：新たなる住処。

幻想郷へと向かう。その途中にある、慧音の拾われた村。

「すまない。この家に住んでいた女性は？」

慧音が若い村人に問う。

あれから５０年以上経っている。もはや慧音の容姿を見て慧音だと判断出来るもの、或いは知っている者すら居ないかもしれない。

「あー…、カカばあさんだったらちょっと前に逝っちまったよ。」

あの女丈夫でも寿命には勝てないだろう。

「そ、う、ですか……。どこに埋葬を？」

やはり死に目に会えなかったのは辛いのだろうか。俯いていて表情は見えない。

「ん、あぁ。あっちの空き地だ。」

「ありがとう。」

そう言うだけで慧音は歩き出す。妹紅とコウは何も言わない。いや、言えない。この村で唯一の味方であり、誰よりも愛する母の死を看取れなかったのだ。心中には色々な感情が渦巻いている事だろう。

「妹紅、君は行ってくれ。私はここで待っている。」

「駄目だ。お前も来い。あぁ、あんた、もういいよ。ありがと。」

「お、おい妹紅？」

教えてくれた村人へと挨拶も終わらないうちにコウの腕をしっかりと掴み慧音の向かった先へと向かう。

コウの上げる声は無視する。今は慧音の事だけを考える。

向かった先には何もなかった。

そこに埋めたのだと思われる土の盛り上がりがあるだけ。その小山の前に膝をついて、祈りを捧げいてるのは慧音。

その光景は、とても神秘的で、触れたら壊れてしまうのではないかと感じてしまう。

「……慧音？」

どれだけそのまま見ていたのだろうか。妹紅が声を掛けるまで、コウは全てを忘れていた。

「ん？　あぁ、なんだ？」

そう言って振り返る慧音の表情に影はない。自然な微笑みが浮かんでいた。

「え？　あーっと、その……。大丈夫、か？」

余りの自然体に妹紅は戸惑う。何を言いたかったのかを忘れてしまったのか、ただ単純な問いかけになってしまった。

「……お母さんの事なら心配ないよ。今でも覚えてるから、あの日のこと。」

――慧音。貴女は妹紅さんについてお行きなさい。母は貴女が幸せに暮らしていける事を願っていますよ。だから、貴女は私の事を忘れなさい。

――仕様のない子ですね、慧音さんは。私も貴女の事を愛していますよ。

脳裏に浮かぶのは最後に見た母の姿。ただ自分の娘の幸福だけを願ってくれた、最愛の母の微笑み。

「私は、幸せだから、お母さんもきっと。」

――笑っていてくれる。

それは、独りよがりな願いなのだろうか。そう思いたいだけかもしれない。それでも、母が言ってくれたのだ。幸せに生きろ、と。ならば、自分の思う幸いを追いかける。

「さ、行こうか。」

向かうは幻想郷。

「ほら、妹紅、コウ。置いていくぞ？」

憂いのない様子の慧音に、妹紅とコウは顔を合わせ、思わず笑みを溢す。

「待った、先に行くなよ？」

「そうだぞ慧音。あたしたちを置いてくなよ！」

三人は歩き出す。

――行こうか。

里が視認できる距離に到達する。

「……あれが人里か？　前はそんなもの――」

コウの呟きに答える声がある。ただし、妹紅でも慧音でもない女の声。

「その通りです。以前は何も無かった場所に紫様が人間の里を作り上げたのです。」

いつの間にか三人の後ろに、閉じていく異空間を背に相対するのは九本の尻尾を持つ妖怪。

「……君は？」

コウの問いにも律儀に答えてくれる。

「紫様の式神、八雲藍（やくもらん）と申します。紫様の命であなた方を人里に用意した家へとご案内します。」

一度頭を下げ、コウ達の前を歩く藍。その後を着いていく三人。そんな中、妹紅が気になったのだろう。九本の尻尾を指差しながら問う。

「それって狐の尾っぽだよね。あんたってもしかして九尾の狐？」

「はい。見ての通り、九尾の狐です。」

その答えに、九尾の狐すらも式神にしている八雲紫の底知れなさに慄く。慧音も似たような反応をしている。コウが交渉して和解出来なければどうなっていただろうか。

藍の案内で人里の家へ。

「紫様、到着しました。」

藍が虚空へと呼びかける。答えるものはただ一人。

「そう。ありがとう、藍。ご苦労様。いらっしゃい、待ってたわよ？」

妖艶な、そしてやはり胡散臭い笑みを浮かべながら待ち受けるのは八雲紫。裂け目を抜けて現れる。

「それはどうも。それで？　ここはあたし達が住む家なのか？」

少なくとも今は敵にならないと分かっているからか、妹紅の口調に遠慮はない。

「ええ。この家は好きに使ってもらって構わないわ。」

「……それで？　何のためにここに来た？」

コウの問い。問われた紫は簡潔に答えた。

「挨拶よ。ようこそ、幻想郷へ。」

「……そのためだけに来た、と？　そうか……。君は寝ていて式に任せるだけだと思ったが、ふむ。意外と礼節というものを知っているね。」

紫の胡散臭さは行動の全てに何かしらの意味を感じさせる。コウとて例外ではない。だからただの挨拶であるという言葉自体が意外だったのだ。しかし驚いた様はどこかわざとらしい。

「……貴方には礼儀というものを叩き込んだほうがいいみたいね？」

「遠慮しておこう。君は底意地が悪そうだ。」

「うわ……。」

妹紅の口から音が漏れる。これだけ危険な相手にいつもの様に話せる事はやはり感嘆に値する。

「あら残念。貴方はこれから鬼神の処に行くのでしょう？　伝えておいて上げるわ。」

二人して表情にさしたる変化が見られない。それが気味の悪さを感じさせる。

「そうか。それは助かる。」

「じゃあね。幻想郷で楽しくやりなさい？　行くわよ、藍。」

そう言って紫は藍を引き連れて空間に裂け目を作り去っていった。

「慧音。大丈夫か？」

紫が去っていき、コウはまず始めに慧音の安否を問う。

「あ、ああ。もう大丈夫だ。なんか耐えられる。」

「……慧音。」

それでも多少辛そうに見える慧音を妹紅が支える。

「……そうか。妹紅、慧音を頼む。私は鬼神に挨拶してくる。」

妹紅が居れば安心なのだろう。そのままコウは妖怪の山へと去っていく。

「あぁ。慧音、家に入ろう。」

「ああ、うん。」

妖怪の山へと向かったコウは

「待て！　ここは鬼神様の治める山！　部外者が許可無く入山する事は認められていない！」

白狼天狗に止められていた。妖怪の山に住み着いている妖怪ならばコウを知らない者はまず居ない。居るのならば、あの決闘を知らない、つまりそれよりも後に入山した者だろう。

「君は？　いつこの山に？」

「何故貴様のような不審者に――」

「待ちなさい椛！」

白狼天狗の凶行を止めたのは文。紫が伝えると言ってから時間は然程経っていない。鬼神の許可が伝わっていなかったのだろう。

「この方は問題ないから大丈夫。コウさん、申し訳ありません。この子は犬走椛（いぬばしりもみじ）。最近この山に来たばかりで貴方の事を知らなかったんです。部下の無礼な行動、失礼しました。」

そう言って頭を下げる文。

「気にしていないよ。昔は下っ端だった君にも部下で出来たんだな。おめでとう。」

「えっ？　あ、ありがとうございますっ！」

「文先輩、お知り合いなんですか？」

椛が聞き難そうに文に問う。自分が失態を犯した事で文に謝罪させた事を気にしているのだろうか。

「え？　えーと知り合い、というかなんというか……。」

「昔ここへ初めて来た時に少し話した程度だ。射命丸、あの時は巻き込んですまなかった。」

「あ、いえ、こちらこそ。それと、文って呼んでください。皆そう呼んでますから。」

話が和んでしまうが用があるのは桔梗にであるので案内を頼む。

「分かった。では文、鬼神殿の処へ案内してくれ。」

「あ、ハイ。じゃあ椛、私は行くから哨戒任務に戻りなさい。」

しっかりと先輩として行動できている。ちゃんと成長しているようで安心だとコウは思った。

「はい。」

「では行きましょう。」

「失礼します。コウ殿をお連れしました。」

襖の向こうから答えが来る。

「入れ。」

「どうぞ、コウさん。」

「ありがとう、文。」

コウの感謝に破顔する文。そんな文に笑みを返しコウは襖を開け、室内へと足を踏み入れる。

「お久しぶりです、桔梗さん。」

迎えてくれる部屋の主はやはり尊大で、しかし偉大で、

「ああ、久しいな、紅。」

美しいままだった。

その頃慧音と妹紅は家の構造を把握したので、二人で人里を散策していた。

「結構賑やかっていうか、雰囲気明るいなここ。」

「そうだな。あの村とは段違いだ。妖怪の坩堝だといわれる幻想郷の中でこれだけ活気があるなんてな。」

この里でも美人二人の、しかも見ない顔が歩いているのだ。珍しい上に眼の保養だ。随分とこちらを見てくる人間が多い。

「……流石に鬱陶しいかなこれは。慧音、どこかの店にでも入ろうよ。」

「……そうだな。む？　妹紅、あの茶屋はどうだ？」

慧音の指が指し示す先には一軒の上品そうな茶屋。

「あ、ホントだ。いいじゃない？　行ってみよっか。」

「分かった。」

それなりの高級店なんだろうが、妖怪退治を生業にずっと生きてきたのだ。金なら充分すぎるほどある。

「お邪魔するよー。」

「はい、いらっしゃいませ。こちらへどうぞ。」

妹紅の声で二人に気付いた店員の案内で奥へと進む。

「ご注文はございませんか？」

「団子と茶を頼む。」

「あたしは握り飯で。」

「はい、少々お待ちください。」

こんなにも落ち着ける場所があの社以外に在っただろうか。人として生まれながら人では無くなった二人だからこそ、この穏やかな時間を尊び、感受する。

人々の声を聞きながら、穏やかな空気を感じていれば、いつの間にか注文した団子と茶、握り飯が置かれていた。記憶の奥底に鍵を掛けて仕舞ったはずの優しい世界を思い出してしまったようだ。

「……なるほど。」

「ああ。あの性悪（ゆかり）とは違っていい感じだ。」

これ以降会話も無く、しかし息苦しさなど感じない、里の喧騒あれど静かな時間を食事をしながら全身で感じていた。

そんなところに先ほどの店の子が話しかけてきた。

「あの……相席の方がいらしても構いませんか？」

「あたしは別に。慧音は？」

「私も構わない。」

「ありがとうございます。」

そして連れてこられた上品な着物を着て、柔らかい感じの物腰で人間はこう言った。

「初めまして、ですよね？　私、稗田阿未（ひえだのあみ）と申します。」

上座に座る鬼子母神（ききょう）は言う。

「紅よ。ここ５０年何をしていた。萃香はお主がおらんと泣き喚いておったぞ？」

それは貴方の扱きが多少は減っていたからですよ、と言いたくても言えない。そんな事を言えばこの身に降りかかる事は間違いないからだ。

「……然様で。それは嬉しいですね。」

「嬉しいと言うならもっと嬉しそうな顔をして見せよ戯けめ。まぁ良い。萃香も四天王入りも目出度い事だが、紅。女狐（ゆかり）が言っておったのだが、あの人里に住み着くというのは真か？」

萃香の四天王入りという快挙すら流して桔梗は問う。女狐、と言った瞬間の表情はなんとも言えないものだった。やはり八雲紫という存在は頼りになるが、好かれ難いようだ。

「……事実です。しばらくしたら旅に出ますが。」

「旅に関しても気にせずとも構わぬ。帰ってくるのだろう？　ならば良い。それよりも土産話を聞かせよ。此度の旅では良い拾い物をしたそうだが？」

「ええ。慧音というワーハクタクと、妹紅という蓬莱人です。」

ワーハクタクはどうか分からない。しかし蓬莱人には流石にかなり驚いたのだろう。珍しく表情に表れている。

「蓬莱人とはな……。」

その言葉にどこか懐かしさが込められている気がした。

「ご存知なのですか？」

「随分と昔の事よ。それを作れるという者に会った事がある。しかし地上に存在しておったとは……。」

流石にこれには驚いた。蓬莱の薬を作れる者とはまず間違いなく八意永琳だろう。彼女が地上に居た最も遅い時期を今から遡って最低３５００年ほど前。嫦娥が薬を飲んだ時期までだとしてだ。

桔梗の規格外の強さにも舌を巻くが、それほど過去から存在していたとは。

「いや、すまぬ。年を取ると昔を懐かしむ事が増えて困りものよ。して、お主らはどの様なものを見てきたのだ？　なに、時間はあるのだ。教えてくれぬか。」

「……いえ、お気になさらず。どういうものを見てきたか、ですか。そうですね、では――」

鬼殺しであろうとも。桔梗にとって子を殺す者であろうとも紅は名を許した、友なのだ。

久しい邂逅での会話は終わらない。

妹紅と慧音は横に並び、その向かいに座る稗田　阿未と名乗る少女に応対する。

「へぇ、一度見たものは忘れないか。だからあたし達が来たばっかりだって分かったんだ？」

「はい。あなた方が紫さんの紹介でいらした妖怪の方だとは思いませんでした。」

阿未はそう言ってお茶を一口。

「妖怪と知っても気にしないのだな。」

慧音の心に傷を負わせた問題では気になるもの仕方が無い事だ。

「そうですね。紫さんの紹介ですから、危険はないと分かりますよ。」

「……アレの紹介なんだ。」

「……。」

妹紅と慧音の紫への印象は最悪なのだ。当然の反応だろう。

「それよりももう一人のコウという殿方とやらのお話を聞いてみたいです。」

「ん、ああ。アイツは……そうだね。とりあえず第一印象最悪だったなぁ。」

「……そうだな。私に取っても最悪に近かったな。」

コウの話をする二人の顔は苦笑気味だ。最悪、等と言ってはいるが、今はそんな事を思ってないのだろう。阿未はコウというヒトの事を詳しく聞きたくなった。

「その、コウという方の事。詳しくお願いできますか？」

如何に短命であろうとも乙女は乙女。他所の色恋沙汰は大好物なのだ。

「……さて、非常に楽しい時間でしたが二人が心配しますので、そろそろお暇させて頂きます。」

出されたお茶を飲み干して切り出すのはコウ。

「ふむ。仕方あるまい。楽しい時間はすぐ終わってしまうものよ……。」

「また暇が出来ればお茶でも飲みに来ます。」

「それはありがたい。楽しみに待つとしよう。」

立ち上がり、部屋を後にする。

「あぁ、桔梗さん。萃香におめでとうと伝えておいてください。それでは、また。」

「ああ、分かった。」

山の頂から見える風景は絶景。その絶景を見る絶好のポイントに立ちながら帰る頃を思う。

――ちょっと遅くなっちまうなぁ……。

話し込むに当たって場所を変えた妹紅、慧音、阿未の三人の居場所はコウ達の家。

「もう……ほんと勘弁して……。」

「……私はそんな……そういう眼で見ている訳では……。」

机に突っ伏す妹紅。顔は俯いていて見えないが何やらぶつぶつと呟いている慧音。

この惨状を引き起こした阿未と言えば、

「お二人ともコウさんの事が大好きなんですね！　そんなに想える人が居るなんてうらやましいです！」

満面の笑みだ。最後の一押しになりかねない口を開いた瞬間に戸が開いた。

「ただいま。……む、貴女は？」

コウの行き成りの登場に恋愛話をさせられていた二人は眼を合わせられない。

「初めまして。稗田　阿未と申します。貴方がお二人の――」

「お帰りッ！コウ！」

「阿未さんはもう遅いから帰った方がいいッ！」

「……どういう状況だ？」

阿未の不要な一言をコウに聞かれないように必要以上に声を張り上げる妹紅と慧音。状況についていけないコウ。

阿未は慧音が送って行く事になった。家に残っているのはコウと妹紅のみ。

「どうかしたのか？　顔が紅いが……大丈夫か？」

「……気にしないでくれ……。」

意気消沈、という言葉がしっくりくる妹紅に、これ以上の詮索をやめる。

「ま、構わないが。飯の用意をして来る。」

「……ああ、材料なら買ってきた。そっち置いてあるから。」

「分かった。」

食事の用意に向かうコウ。

「なぁ、コウ。」

「ん？　なんだ、妹紅。」

「……いや。やっぱいい。」

「…？　そうか。」

妹紅は机に突っ伏し、コウの調理を続けている音のみが響く。

「む。帰ってきたな。」

「え？」

「慧音だ。」

戸が開く音と同時に姿を見せるのはコウの言葉通り慧音だ。

「……ただいま。」

死に体と言っても過言ではないではないだろうか。随分は疲れた様相で慧音が席に着く。

「お帰り。丁度飯だ、よっと。」

コウが鍋を置き、箸を配る。

「あ……。あ、と。……ありがとう。」

慧音はやはり、少々紅い顔で戸惑いながらコウと相対する。

「……いや、気にしなくていいぞ。家族だからな。」

顔が紅いのを無視する事に決めて席を決め座布団に座るコウ。

「……。」

「……。」

「む？　どうした？」

妹紅と慧音はコウの顔を見る。

確かに頼りになる男だと思う。阿未との話で随分と男性を意識させられてしまったが、なるほど。

家族。

これほどしっくりくるものはない。

「いや、なんでもないよ。頂きます。」

「ああ、気にしないでくれ。頂きます。」

「……そうか。頂きます。」

家族と一緒に食べる食事ほど、美味しいものはない。本当にそう思う。

第十二話：新たなる住処。（後書き）

次回はどうしよう。さらっと流して話を進めるか、幻想郷での生活について書こうか……。正直超悩む。

や、あらすじ的には生活の話を書くべきかなぁとも思うんだけど、先に勧めてストーリー知りたいっていうのもあるだろうし……。

あぁ、くそwとりあえず、なんくるないさぁ☆

第十三話：厄日

今日は最悪だ。

この日は間違いなく厄日だ。

この日が厄日ではないというならこの世に厄日など存在しない。

鍵山雛という存在を全否定できるほどにだ。

初めから、という事はないだろうが……。それでも貴様が絡んでいるのではないかと勘ぐってしまう程には最悪だ。それで？　貴様は私に何を望むのだ？

――八雲紫。

夕方頃。

妖怪の山にて。

桔梗と将棋をしに来た帰りに散歩しよう、等と考えて玄武の沢を選んだのが始まりだった。

玄武の沢。

川の水はやはり澄んでいる。

草木は生い茂り、生気に満ち溢れている。対岸の崖には玄武岩の柱状節理が見られる。その上から流れている滝の数は多く、まさしく絶景と言えるだろう。

「……やはり、いい場所だ。」

小さく呟いた言葉は風に流され、誰の耳にも届かないはずだった。

「ソ～だね～。良い所ダよ？　ああ、うん全く以ってヒック、素晴らシい場所だよねぇ？」

コウの身体は電流が走ったかのように震え、動きが止まる。言葉と共に肩に置かれた手によって。

「……や、やぁ萃香。久しぶりだね。元気にしていたか？」

一瞬ドモってしまったが振り返りながら平静を装い、明るく、努めて明るく挨拶をする。が。

――まずいまずいまずいまずいまずい！　どうする！？　間違いなくキレているぞコレは！　私が一度として来なかった５０年の間にも桔梗の訓練という名の拷問を受け続けていたのだ！　稀にでも私が萃香の負担を減らしていたのが仇となった！　一人で逃げたと思い、その鬱憤は溜まりに溜まっている！

内心の動揺は尋常ではなかった。

なぜなら萃香は強いのだ。かつてですら強かったのにここ１００年２００年で一気に成長した。鬼子母神という最強の鬼に扱かれていたのだから。

昔から体術がどうしてもカウンター気味に放つ妖気ー密ーに頼り気味だったのだ。幾ら格闘戦をコウと繰り返してもそう簡単には直らなかった。

しかし人里に赴き気分転換に、と酒を勧めてしまったのが運の尽き。酒を飲んだ事がなかった萃香はその魅力に取り付かれてしまい、恐ろしい程に飲みまくった。しかもその酒が絡み酒であり、ヤケクソで格闘を教えろとコウに飛び掛ってきたのを裁いている内に変化があった。

酔拳、と言ってもいいのだろうかと悩んだが、その動きは読みにく

い事この上ない動きに変わっていた。既に場所は妖怪の山。周りの鬼共は止めやしないので逃げたが。

その日の事を桔梗はいつの間にか耳にしていたようで、桔梗は萃香が酒を飲んでいるいる事は何も言ってこなかった。丸一日組み手を強制された事には辟易としたが。

そんなこんなで萃香の山の四天王としての身体捌きはほぼ完成。それでも経験が足りないと扱かれていたのだが。

そんな萃香を５０年以上も放っておいたのだ。最早その拷問の精神的苦痛はコウへの憎悪に変換されている。

「全く以ってテ元気だね～。ヒック。ママとの楽シい時間をありがトうコウ。だからここで死にさらせ。」

等と割と危険な事をほざく萃香は以前の決闘時には持っていなかった瓢箪を持っている。その瓢箪の中の酒を飲む事はやめないようだ。

「うぉお！？」

言葉は不要とばかりに火球や花火、妖気一密一、挙句麒麟術までも撃ってくる萃香の攻撃を避ける。

この危険地帯から逃げるのに手を抜く事は出来ないので妖力と風を生成し、最大速度で逃走を図る。

「まっ、待て萃香！　そんなに慌てると下着が見えるぞ？　今日”も”白か。色気が足りんよ色気が。」

その際に感情を逆撫でするのを忘れてはいけない。如何に平常心を奪うかが大事なのだ。

「ッ！！？　～～っのッばかぁぁあああああ！　”も”って何よ”も”ってぇえええ！」

成果は上々。ただし火に油を注いだのは間違いなし。動揺してる間にも高速で跳ぶ。

「まぁぁてぇぇえええ！　ヒック！　待てって言ってるでしょーが！　戸隠れ山投げぇっ！」

萃香は怒りのまま辺りの石や岩を萃めて巨岩にし敵へ勢いよく投げつける。

「げッ！？　そこまでやるか君はッ！？　全く……ッ！」

飛んで来る巨岩を弾けるだけの風を背後の集め、爆発させる。その風圧によって自分はさらに遠くへと跳ぶ。巨岩はなんとかその場に墜落させる事が出来た。

「ふはははは！　さらばだ友よ！」

「こんのぉエロがっぱぁあああ！！！」

それは河童諸君に少々失礼なので止める事をお勧めしておこう。ついでに言うなら酒臭いぞ。

「ふぅ……。撒いたか。」

空を見上げれば視界には綺麗な三日月が見える。

随分と追いすがっていたが、流石に速度の差が大きく次第に見えなくなっていった萃香を想いつつ現在地を確認する。

「これは……。」

その瞳に映る景色は一面の花畑。白い花を咲かせる鈴蘭畑だった。

「……無名の丘……。」

萃香との鬼ごっこか、それとも鈴蘭畑に眼と取られていたからか、気付けなかった。

「あら、奇遇ね。」

その言葉に振り向きながら飛び去る、つもりだった。

中途半端にしか振り向けず、地に落とされた。

「ごッ！　ごぷ……。」

左の腋腹から右の肺を貫く傘の先端が、血に濡れた傘が、口から零

れた血でさらに濡れる。

傘を持つのは風見幽香。その表情は嗜虐的な笑みに染まっている。

「あらあら。痛そうね？　大丈夫かしら？」

「ぐがあぁぁあぁあ！　ぐッ！　はっ……。そう思うのなら傘で腹を抉るのはっ！　やめて欲しいのだが？」

腹を貫く傘によって抉られた肉が、血が撒き散らされる。コウの足元は紅に染まり、そのほかの色は見えない。

――しくじった……！太陽の畑さえ避ければいい等、甘かった！花の咲く場所を流離（さすら）う妖怪だとは……！

「あはははは！　そうね。これじゃ貴方を壊すのに両手が使えないものね？　よく分かってるじゃない。いいわ、止めてあげる。けれど獲物が勝手に逃げ出さないようにしておかないとね？」

幽香はコウの背に手を伸ばす。掴み、否、握りつぶすのは背骨。背骨を砕けば立つ事など出来はしない。何よりも一番苦痛を生み出す箇所の一つなのだ。

「――――――――――！！！！？？？」

コウの叫びは最早言葉にすらならない。耐え難い苦痛をじっくりと、嬲りながら時間を掛けて与える幽香。その嗜虐性はコウの上げる叫び声を歓喜へと変換する。

「ふ、ふ、ふ。は、はははは！　ふはは、あはははははは！

じっくりと味わいなさい。貴方の散らした１７３の花（いのち）の対価よ？」

狂気の哄笑を上げ、幽香は傘を振るいコウを木へと放る。

「さあ、どうして欲しいかしら？　言ってみれば気が変わるかもしれないわよ――？」

その狂喜の表情が、眼が、その気など無い事を口ほどに表している。

「くっ！　は、あっ！ふぅっ……。」

コウは問いを無視し、”己”を整える。生き残るために。この状況を切り抜けるために。

切り札を使うために。

精神制御開始。

左眼窩の視覚同調可能義眼型攻性魔術器［Ｅｘｔｒｅｍｅ　Ｔｉｍｅ］の魔力蓄電に不備なし。

よって追加魔力消費の必要無し。

感情を苦痛による苦悶と認識。能力［雷］って電気信号を遮断。感覚麻痺へ。

消費電力軽微。

肉体の損傷度、甚大。ただし魔術器起動に影響なし。

詠唱による起動ＰＡＳＳ入力まで待機。

「……言う事はないのかしら？」

表情に笑みを貼り付けたままに脚を振り下ろし、コウの右肘を文字通り粉砕する。

「……あら？　喚かないのね。諦めたのかしら？」

地面に棄てられたそのままの姿勢の中で、コウは首から上だけを動かし幽香を見据える。閉じた左目からは紅い涙が流れている。

「……風見幽香。私はね、誰かの一番大切にしている物を奪う事は基本的にしない。過失以外ではね。」

「くだらないわね。今更命乞い？」

幽香は侮蔑の視線を送る。その程度の存在だったのか、と失望を感じながら。

「いや。過失であろうとも、君にとって大切な花（いのち）を奪ったのだ。多少の傷は甘受しよう。これで手打ちにしてくれ。私は花のために死んでやる気はないのでな。」

詠唱と共に閉じた眼を開く。

・――――時は加速する.

「そ――」

幽香が言葉を発し、行動を起こそうとした状態で”視界内の空間”が停止する。否、停止したかのように見えるほどに低速になる。

――急げッ！

効果は実質5秒。空間転移の陣を封じた紙に魔力を通す。座標を魔法の森の上に設定。風生成器官を起動だけしておく。

――空間転移ッ！

その場から掻き消える。

「――う。なら死になさ……！？」

時間の捻れが消え、幽香は止め刺すために傘を向けて最後の宣告を倒れているはずのコウへと向けた。

――居ない？

気配を探しても辺りには存在を確認出来ない。そして、風見幽香は二度も出し抜かれたと気付く。

「……ふ、ふふふッ！　あはははははは！　あっはっはっはっはっはっはっは！」

二度も、同じ獲物に出し抜かれた。同じ獲物に。しかも今回は確実に殺せるはずだった。なのに一瞬で存在を自分の知覚外へと逃げおおせた。

「ふふ、ふはははははッ！　いいわよ？　コレで見逃してあげるわ。

貴方は私に敵意を向けなかったもの。今回の事は誠意のある謝罪として受け止めてあげる。もし花を愛でに来るのなら歓迎するわ。」

風見幽香はあの”妖怪”を見逃す。あれだけの攻撃を受けて尚、敵意を持たなかった者は存在しなかった。あれが謝罪ならば、一度だけ見逃してもいい。

「……うふふ。」

空に浮かぶ三日月を見上げ、笑いを溢す。その笑みの意味は一体何なのだろうか。或いは、幽香自身にも分からないのかもしれない。

「はぁ……はぁ……。」

コウは落ちる。落ちている。魔法の森へ向かって。コウの描いた軌道は紅い道になる。

その高度は２０００程度。雲から飛び降りるかのようなダイビング。

「……風よ。」

風を纏い、落下速度を制御。何分ほど落ちていたのだろうか。見え

てきた魔法の森の中に身体をゆっくりと下ろす。肉体の損傷は酷い。手荒に扱えばその瞬間に身体が崩れてしまう気がする程に。

右腕は完全粉砕。腹には文字通り風穴が開いている。背骨は砕かれ、起き上がる事すら出来ない。

――さすがに動けるようになるまでは時間が掛かるな……。

人間ではない。なので治らない訳ではない。だが数日は掛かる。妖気を背中に回して背骨だけを治すのでも3日は掛かる。自然治癒速度はそこまで早い訳ではない。

その間、ずっと身体を無防備に晒している訳にはいかない。風の探知範囲を作る。

その範囲は自身の周囲半径１００メートル前後。これで何か生命が近づけば気付く。

――血の臭いに雑魚共が寄ってこなければいいんだが……。

そう考えながら、コウは身体を休めるために眠りに付く。何かあれば風が知らせてくれる。

眠っていたコウは眼を覚ます。大体半日は経ったと当たりをつける。

「む？」

風の探知に生物が引っかかった。風で適当に追い払おうとしたが、異常を感知する。

――幾らなんでもこれは酷いんじゃないか……？

一体や二体ではない。恐らく１００体近くの人狼の形を感じる。

その全ての固体から強い敵意を向けられている。

心当たりは一件。この時代に飛ばされた時に殺した妖怪となんらかの関係があるグループ。恐らく人狼は単独ではなく群で行動する。あれがトップだったかは分からないが、その仇討ち、もしくはコウを倒した者が群の上に立てるのだろう。

妹紅達に助けを求めたいが、風で身体を運ぶのにも集中力が要るのだ。血が足りず、途中で意識が落ちる可能性が高い。

空間転移の魔方陣を込めた紙は先ほどので最後。他は貫かれているか、もう血に濡れてしまっている。自力で組み上げるのには時間が掛かるので使えない。そして、

――やつらに交渉の余地はない。だがここで迎え撃てばジリ貧だ。何か手は……。

風と雷で迎撃しても数を頼みに波の様に来たらアウト。蓄電量はカミナリ一回分しかない。風は一度に放てる量はそれなりだが時間が掛かる。致命的な時間が。これでは迎撃しきれない。

時間をかけるように待ち続けられてもアウト。これは気付かれるまで潜んでいるだけだろうから問題はないだろう。気付いていると教

え、短期決戦に持ち込まなければいずれ意識が落ちる。

――今日はは星の巡りが最悪だ。雨でも降ればカミナリで片付けられるというのに。

そこまで考えてコウは気付く。水が大量にある場所。

そこなら蓄電してある雷を流すだけで恐らくは殺しきれる。否、これ以外に殺しきれる可能性のある策はない。

風の結界の範囲を出来る限り広げ、連中の個体数を把握する。数は１３４。

風で身体に負担をかけないようにして飛翔する。向かう先は魔法の森のすぐ南。その辺りなら問題ないはず。眼下に蠢く人狼を寄せ付けず、現状で出来るだけ速い速度で向かう。しかし挑発を忘れてはいけない。

「さぁどうした蛆虫共！　群れて眺めるしか能はないのかッ！」

一気に引き離す。

目的地に着けば視界には一切見えない。

――連中が追いつくまで大体5分、かな。

コウは空中に浮かびながらその手に台風が如き風の塊を作り上げる。

そしてその風の塊を地に叩きつけ、地面を少々陥没させる。その陥没した地を、少し行った処にある川の水で満たす。地面が乾いてい

るので1年もすれば全て吸収されるだろうが問題はない。

こうして、小さな池が一つ。魔法の森の南に出来上がった。

その池に身体を下ろす。

――後は待つのみ。

風の結界を広げ、連中が全て水に浸かるのを待つ。

風に異物を感知する。

ただ、待つ。ひたすらに待つ。

――129、130、131、132、133、134。

全てを風に感じる。水の範囲に入った事を。

「さぁ、喰らえ。」

風で圧を作り、連中を水に沈め確実性を増す。

同時にコウの身体から雷光が奔る。

人狼の断末魔の悲鳴は鋭い雷鳴がかき消し、誰の耳のも届かない。

池の水の半分は蒸発し、焼け焦げた人狼の死体が残るのみ。

それを確認するだけでコウは限界だった。

水に浸かっていた事で血が流れ、血を些か以上に失った事で意識が朦朧としている。

身体を水から引きずり出した時点で落ちた。

そのときに何かを聞いた気がした。

「――――。」

意識が覚醒する。

「……ここは……。」

知らない家に居る。自分はその家で、布団に入って寝ている。状況を整理する間もなく声がした。

「あら、起きたのね。」

声が聞こえた方へと顔を向ければ、そこにあるのは正座して、微笑を浮かべる八雲紫。まるで看病をしていました、とでも言うような

位置に居るのが信じられない。

「……。」

思わず眉を顰めたとしても仕方がないと思う。

「恩人の顔を見てそれは酷いんじゃない？」

「……恩人？」

「貴方。あのまま倒れたままだったらどうなっていたのかしらね？わざわざ私の家まで運んで、治療までして上げたのよ？」

――治療したのは藍だけど。

紫はそんな考えを欠片ほども表に出さない老獪さを持ち合わせているので表情は変わらずの微笑。これがまた胡散臭いと感じるのはコウが捻くれているからではないだろう。

「……今はいつだ？」

「貴方が倒れた日から丸一日ね。」

「……そうか。」

妹紅と慧音が心配しているだろうと思い、帰るために身体を起こす。確かに身体は治っている。完治はしていないが、後一日もあれば治るだろう。

「これで貸し1ね。」

「……最悪の日だ。紫に貸しを作ってしまうとは……。初めから貴様の企みでこうなったと疑ってしまう程には最悪だ。」

「……随分な言い草ね。そこまで悪逆じゃないわよ？」

流石に気分を害したのか、その流麗な眉を多少は歪ませた。

「君は悪役だからそう思われても仕方あるまい。で、私に何を望む？」

「簡単よ。貴方、八雲を名乗りなさい。」

言われた事が余りに突拍子もない事で、返答に間が空く。

何より八雲紫の八雲を名乗れ、とはどういう事か。

「……それは式になれ、という事か？」

言葉に僅かばかり怒気を孕ませてしまったのも無理はないだろう。式とは奴隷と大差ないのだ。行動を制限どころか、完全に制御する事すら自由なのだ。藍が自由意志も持っているのも、紫がそれを許可しているからに過ぎない。

「いいえ、違うわ。ただ、名乗ってもらうだけよ。式ではないの。」

ただ、名乗る。だがそれだけでも違う。八雲の名は幻想郷において年々影響力を大きくしている、天魔や鬼子母神と並ぶ大妖怪の名だ。これを名乗る意味。

「……有事の際、君の傘下に入れ、と？」

「そうね、出来たらそうして欲しいけれど、嫌でしょ？　だからせめて敵対はしないで頂戴。出来るなら私の指示に従って欲しいけど。」

いつの間にか、紫の口元はその手に持つ扇子で隠れている。

「……答えてくれ、八雲紫。貴女は一体何を望み行動している？」

「幻想郷の安定を。」

「……なら、私は私のやり方で幻想郷の安定に力を貸そう。それが必要であるのなら。だが、私の意思を優先させてもらう。幻想郷よりも特定の誰かの方が私に取っては大事なのでな。それでいいのなら八雲紅と名乗ろう。」

紫の眼を見据える。眼を逸らさず宣言する。これが紅の生き方だ、と。

「……そう。まぁ、いいでしょう。貴方は人里の守護を担ってくれれば今はそれで構わないわ。」

「言い忘れていたが、私はしばらくしたら約束を果たすために幻想郷を離れるからそのつもりで。」

「……いつから？」

「今が正応５年（１２９２年）。大体３０年もしたら出て行く。それから恐らく３００年ほどは帰ってこない。」

「……。３００年したら、戻ってくるのね？」

問う紫の眼には呆れの色が見える。流石に期間が長いと感じたのだろうか。

「ああ。出来る限り早く戻ってこよう。」

「……いいでしょう。緊急時には連れ戻すかもしれないから覚えておきなさい。」

「……ああ。」

契約は完了。これで私の発言力はさらに高まった。人里の守護者が八雲を名乗るのだから。

鬼子母神と天魔は脅威だけど、愚か者ではない。妖怪を滅ぼす愚行には走らない。

紅が幻想郷の地を離れている間に、人間の存在が大きくなりすぎるでしょうね。

切り離す必要が出てくるはず。

そして漸く、人と妖が相互に補完しあう楽園”幻想郷”が生まれる。

そうなれば、

「あら、もう帰るの？　もう少し位居ても構わないわよ？」

私をメリーと呼んでくれた貴女に

「いや、一晩泊めてもらった。それで充分だ。妹紅と慧音も心配しているだろうしな。」

また逢えるのかしら――？

「そう。じゃあ、藍。送ってあげて頂戴。」

「はい。」

「助かる。では、藍。頼む。」

「はい、こちらです。」

――幻想郷縁起――

八雲（やくも）　紅（こう）

人里の守護者たる妖怪の内の一人。
正確には後天的に妖怪になったという事らしいが詳細は不明。
誰であろうと分け隔てなく接するが
悪意を持って近づけばさらなる悪意で踏み潰すという行動から
嗜虐性を持っていると思われる。

妖怪賢者『八雲紫』から八雲の名を貰ったらしいが、関係は不明。

能力は風と雷を使うがそれ以外にある事を匂わせている。詳細は不明。

第十三話：厄日（後書き）

八雲紅

種族：人と妖怪の境界
能力：雷を操る程度の能力。自身で発電できないので蓄電していなければ無用の長物。

妖力器官：風生成器官　単体で扱える能力の中では一番使い勝手がよく、操作出来る風も多い。
時間は掛かるが、最大まで集めれば局地的な台風レベルにまで達する。

水生成器官　一度の扱える水の総量は大剣一本分で限界。
他者の体内の水分も操作出来るが制約は多い。水に妖気を込めれば相当な耐久度と威力を誇る。

妖気生成器官　ただし生産し続けても蓄積する事は出来ない。妖気総量の底上げ専用。

技能１：魔術　魔法使いが扱う、詠唱のみで術式を構築する魔法と対となる技法。魔方陣を構築して、奇跡を成す技法。

保有魔器１：Ｅｘｔｒｅｍｅ　Ｔｉｍｅ。左目の義眼。ただし視覚を共有出来るんで普段は普通の眼と変わらない。
視界内にある存在の時間を極限まで遅くする。時間停止と効果は同じ。

コウの持つ魔力を倒れるまで注いだ上に、無意識に垂れ流している

魔力を１０日ほど吸収させないと魔力が足りず、発動できない。
一度使用するとどれだけ魔力があったも１日は使えない。

どうしよう。モチベが下がってきたｏｒｚ
絶対書き上げるけど。

息抜きに最強系でも書いちゃおうかな……。世界観は間違いなく多重クロスになるがｗ

第十四話：一つ目の約束。（前書き）

この辺りはオリジナル多いです。紅の身辺整理ですかねー。憂いなく幻想郷で生活するめたの。

第十四話：一つ目の約束。

正和５（１３１６）年。

早朝。

人里のすぐ外。

紅は行く。約束を果たすために。

「じゃ、行ってくる。」

見送ってくれるのは４人。

妹紅と慧音、紫に萃香。

「ちゃんと帰って来なさいね。」

ただ一人、紅に声を掛けるのは紫。

「ああ、必ず。」

最後に一度だけ振り向く。

これ以上はいけない。

ただ、歩く。

――慧音の眼、少し赤かったな……。

その事を嬉しく思いつつも歩みは止めない。

事前に言っておいて正解だったと思う。

萃香は桔梗から旅に出ると聞いてやってきた。

慧音と妹紅に言った時の呆けた顔は笑ってしまった。

紫はやはり地獄耳。言ってないのにその日に来やがった。

自分を想ってくれるヒトが居る。それで充分だ。

もう7年ほど前から沙夜の存在を感じていた。だが一昨年その存在を感じる事が出来なくなった。

恐らくこの時代から消えたのだろう。そして間違いなく彼女の娘存在を微弱に、ではあるが感じている。

共鳴している二人は夜風と夜水だろう。

かつて、この時代に自分が二度目の生を受けたときに助けてくれたあの子達が居る。

それは心躍る事。

だが、今の私が彼女達に会う事は出来ない。

かつての私が今の私を見たのは、あの鬼襲来時。哀れな鬼がやってきた時。

全身をすっぽりと隠すフード付きのコートの様なものを着ていたヤツ。あれが私。

それ以来、彼女達の前に姿を現した記憶はない。

――ぁ。

思考に没頭していた。一体どれだけの間走っていたのだろうか。

視界に見えるのは、懐かしき社。

右も左も分からなかった私を育ててくれた場所。

木々に囲まれ、草木が生い茂る世界。

ぽつりと建っている社と、その前の広場。

この世界に来て、初めて愛したヒト。夜風。

見る者全てを圧倒する真紅の髪に蒼い瞳。１３０ＣＭ程の、その小さな体躯から精一杯自己主張するかのように頭に見える、狐耳。可愛らしい着物もあの子を引き立てている小道具にすら思える。

その場に居るのが、彼女たちや、孤児の皆だけなら涙の一つも流し

ていただろう。

だがそこに居るのは、一人の人間と、一人の鬼。そして、その鬼に従えられた妖怪達。ならば。

――さて、”鬼殺し”今ここに成してみせよう……！

若かりしコウは状況が理解できなかった。

夜風と夜水を連れて行くだなんてふざけた事を抜かした連中を追っ払いたかったのに、何も出来なかった自分。

夜風は戦う事なんて出来ない。優しい子だから。

だから、近づいてきた妖怪を夜水が水で攻撃した。なのに、効いていなかった。

効いていなかったはずなのに。

人間と鬼の二人を残して、全ての妖怪がコマギレになったのは何故なのか。

その後に上から降りてきた、まるで十三機関の様な格好をしたコイツがやったのか。

「無事だな。」

その言葉は、コイツがやったという事を示している。なら感謝して然るべき相手だ。なのに。

なのに何故、俺はコイツが気に食わないなんて考えたんだ――？

紅は自分の声を聞かれ、そこで呆けている戯けと気付かれても厄介なので、風で声を変質させる。声から私がコレだと気付かれる事はまずないだろう。

「無事だな。」

あの鬼が従えていた妖怪共は雑魚だ。雷は消費を嫌って。水は絶対量不足。よって風での攻撃を選択した。上空から風の刃を無数に落とし、殲滅する。鬼と人間にも送りはしたが、無駄だろう。あの鬼は弱くない。

「下がってくれ。」

背に庇った夜水。夜風とうり二つの少女。愛した夜風の双子の妹にして、親友に声を掛ける。

邪魔だ、と。

「……お前も下がれ。」

かつての自分を見れば、これ以上腹立たしいものはない。下がれと言ったのだ。二度も言わなければ下がらない貴様という存在が気に食わない。

いや、今見るべきはかつての己の未熟さではない。敵だ。

「さて、名乗ろうか。私は”鬼殺し”　君を殺しに来た。」

「さて、名乗ろうか。私は”鬼殺し”　君を殺しに来た。」

この言葉を聴いた、鬼の薬師、羅剛は歓喜した。

これで、死ねる。鬼として死ぬ事が出来る、と。

「俺は羅剛。薬師だ。」

こいつが、今現在、山の四天王の一人に数えられている伊吹萃香を倒した妖怪。自分はそこまで強いわけではない。

「出来る事ならば、今すぐに妖怪の山に帰れ。私の一番の優先目標はそこの人間だ。」

それでも俺は鬼だ。勝負事は、大好きだぜ？

「ふざけろ。俺は鬼だぞ？　こいつに俺は命を賭けた勝負で負けたんだよ。こいつを殺したければ――」

例え、遊びのようなもので負けたのだとしても勝負は勝負。それに命を賭けてた俺が悪い。俺の命はこいつのもんになったんだ。だからよ、こいつを殺すために、俺を殺してくれよ。

「――押し通れ！」

鬼として死なせてくれるんだろ、鬼殺し！

「――押し通れ！」

その言葉と共に羅剛は紅へと駆ける。

その速度は予想を大きく超えていた。だが、紅はその上を行く。

紅は自分の妖気に対して、均一になるように破魔の気を混ぜ合わせるという方法を使っていた。

妖怪の中でも強大な鬼を殺すために陰陽師が編み出した、至高の霊気。破魔の気。

妖怪そのものと言える妖気。

相反する二つの気の融合は凄まじい出力を生み出す。

妖気は多い。だが、破魔の気はそこまで多くない。これが欠点なのだろう。

妖気だけ纏った状態の約1．5倍の出力で限界。だが、それでも羅剛の妖気の出力は超えている。

何より、切り札だろうと今はもう隠す必要がない。

・――――時は加速する．

左目に映る全てが停止する。

気を右手に集中させ、羅剛の心臓を貫く。

気の融合を解除する。必要だったのは鬼の身体を貫く威力だけだ。もう必要ない。後は。

破魔の気を心臓から血流に乗せるように送り込む。

――終わりだ。羅剛。

捻れた空間は正しく時間を刻み始める。鬼の身体に仕込まれた破魔(く)の気は回り始める。

「ぐッ！？　は……ははは……。終わりかよ。」

「悪いが君は強い。僅かな可能性でも負ける危険は冒したくなかったのだ。」

羅剛の身体が手足の先から崩れてゆく。

「ははッ。なんでもいいさ……。――ありがとうよ。」

「気にするな。私のしたいようにしただけだ。」

まるで、初めから存在していなかったかのように、死体すら残らない。

「……さて、後は……。」

残る人間が何を喚いていようが関係ない。貴様を生かしておく必要がない。

カミナリを何回受けたか忘れてしまった。それほどに溜めた電の半

分を凝縮する。

「死ね。」

殺意を向けた先には人型が一つ。

そこに蒼い煌きが奔る。

後には何も残らない。

――溶けたか。

全ての妖怪と、それを率いた人間も片付けた。これでこの子達は問題ない。もうここに用は無い。

「あ、あの。」

ドクン、と心臓の音がやけに大きく聞こえた。或いは、周りにまで聞こえてしまうのではないかと思うほどに、大きく。

紅に声を掛けているのは、夜風。

他の皆は自分を警戒している。夜水とて、君を私から引き離そうと

している。それなのに、まるで危険はないと知っているかのように、聞いてくる。君には、一体何が見えている――？

「……コウ、なの？」

「……ッ！」

その小さな問いかけは、紅の耳以外には届かなかった。だから、同じ様に囁けばいい。

一言。違う、と。

だが出来なかった。

気付かれてしまう。何より、気付いてくれた。

相反する二つの想いが鬩ぎ合う。

答えてしまいたい。抱きしめたい。縋りたい。

けれど、それは出来ない。してはならない。

謎の男が誰であるかを夜風が知っている、などという記憶はない。

本当に不思議そうにしていたのだから。

しかし、否、と言葉にする事は出来ない。

今口を開けば、嗚咽が零れてしまう。

だから、私は逃げる。ここに居たら、私は全てを明かしてしまいそうだ――。

「あっ。行っちゃった。……コウ、な訳ないよね。コウはここに居るんだし。」

謎の男が飛んでいった方向を眺めながら夜風は自答する。ありえない、と。

「……夜風。」

「え？　あ、コウ。どうしたの？」

そうだ。自分が気になってる人。多分、好きなんだと思う、人。この人はここに居る。

「ごめん。護れなくて、弱くてごめん……！」

どうしてあの人をコウだ、なんて思ったんだろうか――？

「ごめん。護れなくて、弱くてごめん……！」

姉が好きなんだろう少年が悔いている。己の弱さを。

――それは、私の方じゃない……ッ！

自分は妖怪だ。夜水は、水を扱う妖怪だ。それなのにどうして、自分は誰よりも大事な姉を護る力がないのだろうか。

「大丈夫だよ。ほら、わたしはここに居るよ？」

優しい風が、辺りを包み込む。

姉の力。夜風の、風の力。何故、戦う事を嫌う姉の力はこんなにも強いのだろうか。

「それでも……。ごめんなさいッ！」

確かにあの鬼は倒せないかもしれない。それでも、自分が手も足もでなかった相手よりもずっと強い。

――なんで、私はこんなにも弱いのよッ！

いや、自分よりも、姉よりも、あの鬼すらも簡単に倒せるヤツが居る。あいつなら、強くなる術を知っているかもしれない。

自分は弱い。それでも少しでも強くなれれば。そう思わざるを得ない。

――アンタもそうでしょ、コウ？

「それで私を探し出した、という事か。」

木陰で休んでいる紅を訪ねてきたのは夜水とかつてのコウ。

昨日のうちに来られたら大変だった。泣いてる所を見られなくてよかった、と安堵したいがそれどころではない。

「お願いします！　私たちを鍛えてくださいッ！」

「お願いします！」

そう言って、頭を下げる夜水とコウ。

「……。」

かつて、自分が教えを請うた時はなんて言われたのだったか。

記憶の中の男の声と自分の声が重なる。

『力なき意思は無に等しい。お前達はそれを思い知ったはずだ。そして同時に、意思なき力はただの暴虐だ。お前達がその身に受けたような、な。では、君たちは何のために力を求める？　その目的は何だ？』

『――夜風（お姉ちゃん）のためにッ！』

返された意志もまた、一つ。

初めは、ただ悔しくて。護りたくて、出来なくて。失う事が怖くて。
だから、護れる力を持つヤツに嫉妬して。

――そう。そう、だったな……。

気に食わない欠点だらけの過去の自分。だけど、この思いだけは、
変わらない。色褪せない。

唯一の親友は、最初から最後まで、最愛の姉のために。その命を費
やして。

『……その言葉。努々忘れるなよ、人間共。その意志こそが人間を、
人間足らしめる”モノ”なのだから。』

『ッ！　はい！』

こんなにあっさり通るとは思っていなかったのだろう。顔を見合わ
せてから、元気のいい返事が返る。

そんなにも眼を輝かせてる二人が憎い。

自分は夜風に会うのにどれだけ覚悟が居ると思っているのだ。

顔を出さず、声も変えてたとしても、それでも気付かれかねん。

本当なら隠れて来て欲しいが、無理だろう。あの子の力は風。どこに居ようと察知される。

「……ただし、全て話して来い。あの子にな。お前らが怪我して帰ったら心配するだろう。その心に負担を掛けるような真似は極力避けろ。」

「え……。」

「話したら、来い。私はここに居る。」

それ以外に話す事はない。

知られたくなかった夜水は決断する。

「……分かりました。明日、また来ます。」

「……失礼します。」

コウが言葉少なめなのは、どこか気に食わないからだろう。

自分とて気に食わないのだ。アレも、こちらと同じ思いを抱いているはずだ。

2人が去ってゆくのを目端に捉えながら、覚悟をする。

――もう涙は流さない。

次の日。三人でやってきた。

夜風の最初の言葉に二人は随分と不満があったようだが。ま。

「すみません、ご迷惑をお掛けします。二人とも一度決めると頑固で……。」

言ってるのは7歳のお嬢ちゃん。言われてるのは護ると宣言した二人。

これは確かに酷いかな、と思った。

「えっと、貴方は……？」

夜風の質問で心臓が跳ねた。

名前を用意していなかった。アドリブには弱いんだ。だからだろう。

「……八雲だ。」

こんな腹の立つ名前にしてしまったのは。

コウが僅かに眉を顰めたが、問題はない。紫との接点など、分かりはしない。

訓練開始。

夜風が木陰でお昼寝中。

コウ？

「お前は瞑想でもしてろ。」

この一言で終わりだ。

何の力も持たない人間に出来る事などない。まずは霊力を身につけてもらう。

当然反初してきやがったが、夜水と腕相撲させて分からせた。

１２程の男が7歳の少女、いや幼女に一瞬で負けてやがる。

悔しいだろう。なので思いっきり笑ってやった。

「くく……。これで分かっただろう。ただ人間に出来る事など無い。だからお前には人間が持つ力を見出してもらう。霊力と魔力だ。魔力は全ての存在が持つ精神のような物を魔術へと変換する力。だがこれは後回しだ。まずは霊力を知れ。霊力は人間の魂の力だ。陰陽道なんかでよく見るものだな。頑張れ。」

自分で見つける以外に術はない。

魔力は教えられるが、霊力が無ければ近接戦闘など一瞬も出来ない。まずはそこからだ。

夜水の力は水。それも扱える水の総量は少ない。つまり紅と同じ手までしか使えない。

いや、妖気が少ないから、紅よりも更に手が少ない。

「夜水。君は水の力を使う。だが、妖気の総量が少なすぎる。真っ向から敵と戦って勝つには多芸にして絡めとる以外に道はない。だがそれには時間が必要だ。なので後ろから討つようにしよう。」

「後ろから？」

「そうだ。威力とは密度だ。小指程の大きさの刃を作り、それにほぼ全妖気を集中させれば攻撃は通る。後はそれの一撃で殺せる状況へ持っていける身体捌きがあればいい。」

言い終わると同時に氷の糸のような道を作り、その上を滑る事で夜水の後ろへ回り込む。

「見えたか？　今のは進行方向へ氷の道を作りその上を滑る事で高速移動を可能としたのだ。脚一本で滑り、進む道は氷で。速度は逆の脚で制御すれば緩急もつける事が出来る。やってみろ。」

「……どうやって水を凍らせるんですか？」

「……。」

先は長いようだ。

まぁ、これからあんな妖怪に襲われる事はないんだ。気長にやるとしよう。

――妖怪だと恐れる人間に襲われるのは堪えるだろうが……。なんとかなるだろう。私とているのだから。

第十四話：一つ目の約束。（後書き）

オリジナルの部分だけど、あんまりオリキャラオンリーでｇｄｇｄしないようにします。やっぱり東方キャラに絡ませないと！

十三機関　キングダムハーツより。

そういえば、お気に入り登録のヤツありますけど、皆さん被りすぎですからｗ俺も読んでるやつばっかｗｗ

第十五話：人を喰らうもの。（前書き）

携帯で最後まで読めないって人居たら言ってください。
途中に改ページ作ります。

第十五話：人を喰らうもの。

鬼を殺した日から2年。

修行は順調だ。

夜水は水を固体、液体、気体の全ての状態に変えられるようになった。

身体捌きと同じように慣れるまで繰り返させている。しかし、気配を隠すという行為に関しては類を見ない才を持っていると言ってもいい。野生でも残っているんだろうか、悩む所だ。

コウも霊力の扱いを覚えてきた。

破魔の気を覚えるには霊力を知り尽くさなくてはならない。才能がある訳ではないが、１０を聞いて、１１位を知る事は出来る。決して馬鹿ではない。

霊力の量も多くはないが符術を叩き込めば問題はない。

体術も並行して教えてはいるが、やはり才能がある訳ではない。これも時間を掛けねばそれなり以上にはならない。

もう、少なくとも人間相手に遅れを取る事はないだろう。

人間相手ならば。

では、何故、あの男は自分だけで戦う必要があったのだろうか。

あの孤児を集めた社。名を夜の院と呼んでいた社。
そこには7人の孤児、コウ、夜水、夜風。そしてその母としてあるのが、優菜さん。
夕方の日が沈みかけ、闇へと世界が変わる時刻。

「……失礼するよ、優菜さん。」

夕飯を食べ終えて、片付けをしている所に押しかける。

「ッ！？　だ、誰っ！？」

そこに居たのはまるで、夜風と夜水が成長すれば、こうなるのではないか。そう思える様な、真紅の髪と蒼の瞳。

「沙夜の伴侶、かな。彼女と子を成した記憶はないけれど。君の父ではないが、お父様と呼んでくれても構わないよ？　ちなみに名前は八雲紅。よろしく。」

沙夜の娘。いつ生んだのか、この時代に二度来たのか、色々と疑問は残るが、確かに沙夜の子なのだ。

「え？　コウって……？」

コウという少年ならば自分が預かっている。ただの同名に過ぎないのだろうか。優菜の脳裏に疑問が浮かぶ。

「かつての私を頼みます。見せない様にしてるけど、貴女の事を確かに母だと思っていたんだ。貴女には随分助けられた……。」

「……そう。何があったかは、聞かないでおくわね？　けど、何で此処に？　お母さんに逢いたくなった？」

からかうように、明るく振舞う優菜の姿に哀愁の念が溢れてくる。この聡く、優しい人が居たのは”俺”にとってこれ以上ない幸運の一つだろう。

「……それも、無いとは言わないよ。けど、今此処に来たのは頼みがあったからだよ、優菜さん。」

「いいわよ。何をして欲しいの？　この身体が欲しい？　うーん、それならもうちょっと遅い時間に来てね？」

薄れてきた記憶の中と変わらない。いつも、からかう様な言動だった。その在り方がとても、

――懐かしい。

思わず笑みを溢してしまったのも無理はないと思いたい。こんなに優しく包まれるような感覚は、本当に久しぶりなのだから。愛したヒトの娘という、複雑な関係だけど。母だと認識していると自覚出来るのが、この上なく嬉しい。

「フ……。母だというなら息子を誘惑しないで欲しいな。少しは恥らってよ？　魅力的だとは思うけど、ね。頼みっていうのは言った通りかな。これから、俺と夜水がちょっと落ち込むような事が起きるから支えてやって欲しいんだ。」

「んー、具体的に何が在ったか、いえ、何が在るのかを教えてもらえば私なりになんとかしてみるわ。」

「ありがとう。人間に襲われるんだ。夜水か、アレか。どちらが狙われたのかは分からなかったけど。その相手自体は私がどうにかする。だから精神的なものをお願いしたい。」

「……！　そう。分かったわ。こっちは任せなさい。貴方も、怪我しないように、ね？」

そう言って、優菜はとても上手にウィンクをしてきた。
その顔はとても綺麗で、一瞬見惚れてしまった。

「……。ふぅ……。ああ、うん。分かった。」

深呼吸一つで意識を整える。幾らなんでも母親に突撃はないだろう。たとえ外見が沙夜と瓜二つだったとしても。

「いつ来るのかしら？　その人は。」

「――明日だ。」

何故あの男は自分だけで戦う必要があったのだろうか。
翌日。太陽が地平線の彼方へと沈んでゆく時間。人間と妖怪の境の時間。
いつも修行場になっている広場。

木陰で寝ていたはずの夜風は起きている。彼女の本能は何かを読み取ったのだろうか。木陰で静かにこちらを伺っている。いや、眺めている、の方が正しいかもしれない。
彼女の意識に敵、という存在は無いのだから。

そして、八雲紅という妖怪の前に悠然と在るのは16~17才の女性。

「レディを前にして、行き成り構えるだなんて。妖怪は本当に礼儀をしらないわね。殺すわよ?」

「……コウ、夜水。」

その軽口とも取れる言動に付き合っている暇は無い。今の紅は、嘗ての自分では感じ取れなかった、抑えられた妖気を感じ取る事が出来た。

「どうしたんだよ? 人間一人にビビったのか?」

「……どうしたんですか?」

嘗てのコウ。この時はまだ未熟な存在だ。相手の妖気を読む事は出来ない。
夜水と夜風は妖気の大きさを測る程度の事は出来る。だが、隠された妖気を見抜く事はまず出来ない。

――だから、コレほどの存在を人間だと誤認したのか……！

黒い洋服に紅いネクタイ。腰まである長い金髪で、何より人間にはありえない紅い瞳。その瞳孔は黒く、猫の眼の様に縦に走っている。幾ら妖気が無くても、これが人間ではないと気付けない己の未熟が憎い。夜水たちが知らなくても無理はない。だが、紅い瞳などありえないと気付けない己が。

嘗ての自分は、あれが妖怪だと教えられた。事が終わっていて、尚伝えていたというのにその事を軽視していた自分が憎い。

――知っていれば、紫でも呼んでいたものを！

「……夜風を連れてさっさと逃げろ。邪魔だ。」

「……！　くそっ！」

「……分かり、ました。」

足手まといだと言われる。二年も修練を積んで尚、足手纏い。悔しいだろうが、今そんな事に意識を割いている余裕はない。夜風を抱えるようにして走り去って行く二人を意識の端に捉えながら問う。

「見逃していいのか？」

「あの子達の方が美味しそうだけどね、貴方でもいいの。」

「……ここは彼らとの集会場のようなものでね。壊したくない。

場所を変えさせてもらう。」

「ふふっ。構わないわよ。空腹は至高の調味料だもの。我慢して我慢して我慢して……。それから食べる食事は何よりも美味なモノになるのだから。」

言葉と共に背中に漆黒の翼が生え、右手に十字の漆黒の大剣、左手に球状に集めた闇の魔力を構える。噴出する妖気の禍々しさは風見幽香のようにも見える。

その姿を見て、すぐさま夜水たちの向かった方向とは反対へと跳ぶ。

「この辺りでいいか……。」

降り立った場所は浜辺。近くに村が無いのを風で確認した。

ここならば、闇のフィールドになっても問題はないはずだ。海と森しかないこの場所ならば。

「ここでいいのね？　ふふふ……。さぁ、始めましょう。精々踊りなさい、私にために。」

世界を闇が覆う。如何なる光も許さない絶対の闇が。

「ふふ。怯えなさい。逃げ惑いなさい。貴方に何も見えなくても私は貴方を見ているわ。」

「……一つ教えてくれるかな？」

「なぁに？」

表情どころか、姿形が全く見えずとも非常に楽しそうな声が聞こえる。

「……君の名前は何かな？　ああ、私は紅という。」

「最後に聞くのがそれでいいの？　まぁいいわ。私はルーミア。夜の世界を統べる王よ。」

――やはりルーミア、か。

「これで終わりね。私、人間と妖怪のハーフって食べた事ないのよ。――頂きまぁす♪」

ルーミアが高速で飛ぶ。その瞳には確かに紅が映っている。紅は暗闇の中で光を捉えられない。これはただの食事。狩りですらない。だが、紅はその認識を変えさせる。

何も眼に映らぬ世界であろうとも、そこに何があるかを知る術はあるのだと。

ルーミアの接近に合せて、水の大剣を振るう。ルーミアは咄嗟に翼を使い、勢いを殺しつつ地を蹴ることで刃の切っ先を避ける。

見えないはずの攻撃に合せた。その事実がルーミアを下がらせた。

「……なるほど、風。見えていなくとも見えている、という訳ね。」

――これだけで気付くのか。

紅は、何も映らない眼の代わりに妖気を込めた風を薄く球形に広げたのだ。これで感覚として感知出来る。だが、それをただの一瞬で看破するルーミアの闇と同じ方法でしかない。

「そう。確かに見えているのなら駄目ね。」

「相応な方法で――」

「なら見えていても関係ない方法で狩るだけよ。」

否。それ以下でしかないのだ。

「ぐっ！？」

唐突に紅の首が絞まる。何も無いはずの空間が紅の首を絞めている。

「ここは闇の世界。夜の王たるこの私に取って、ここは私だけの、私の為の世界。貴方が私を察知出来ようと――」

「――はッ！」

紅の気合と共に首を捻じ切るはずだった闇が一切通じなくなった。ルーミアはどういう事かと考えようとしてすぐに思考をクリアにする。事実だけを見ればいい。闇の拘束が通じないという現実だけを。

「これで、ここは君の腹の中では無くなった。……驕った王よ。堕ちる時が来たのだ。」

紅がしたのは妖力器官で妖気を生成し、全力の妖気と破魔の気のと融合。妖気だけでは圧倒的にルーミアの方が多い。破魔の気を融合しても総量、出力共にルーミアに及ばない。
しかし破魔の気は”鬼”という最高位の妖怪を葬り去るために気。生半可な力での干渉は容易ではない。純粋な威力でしか超える事は出来ないといっても過言ではない。

「笑わせないで欲しいわね。貴方は、漸く私と同じ土俵に立てたに、過ぎないっ！」

驕った人妖へと、夜の王が駆ける。

紅は己を加速させる。否。速度を阻害するものを退ける。風を、摩擦を、空気を。相手となる女王が空を掛けようとも、自分が飛ばなければそれは地上戦だ。

ルーミアが翼の生んだ風の爆発力を以って尋常ならざる速度で迫る。紅の振るう下からの刃に対し、空中からの上段を一撃。刃がぶつかりあい、金属音が響く。

散る火花と、手に返る硬い手応えが悦楽を生む。
音は瞬時に轟音となり、振った刃の軌跡から白い煙が爆発する。
紅はその正体を知っている。

――物体の高速移動で生まれる水蒸気爆発！

気付けば、自分の振るう刃からも同様の爆発が発生していた。
一体、自分達はどれくらいの速度で動いているのだろうか。
ただ、刃を振るう。お互いの命を喰らい尽くす為に。

地を走り、木々を蹴り、空気すらも駆けながらも追いすがる。
紅は空を駆ける女王と、その機動と氷の大剣を以ってして渡り合う。

――強い。

紅は思う。長い時間をかけて才能のない自分が出した一つの答え。
大剣。リーチで勝っていれば、例え力量で劣っていようとも守勢に回り、攻勢に出なければ耐えられる。だがこの敵は違う。
己と同じ大剣。十字の大剣を以って相対している。
それでも、大剣の扱いには自信が在った。簡単には負けない経験が。
まるで人間のように技巧というものを知っている。
その力量は自分より上だ。

だが、戦える。

守勢に廻る必要も無い。ただ自分の経験を信じて刃を振るう。
ルーミアの剣技は確かなものだ。だが、闇を左手で保持しなくてはならず、片手のみで振るう刃ではその威力は発揮しきれない。対応力も弱くなる。
荒い剣が相手になれば余計に。

振るった刃を流されたのなら、刃の原料たる氷の一部を一瞬にして蒸発させる。
ほぼ同時に分散した水分を凍らせ、大剣を補修する。ただ一瞬の工程。
だがその急激な空気の体積量の変化は刃を返すのに充分な風となる。

刃を止められたのなら、その柔らかい腹を蹴り飛ばそう。
ただ、貪欲に刃を、拳を、蹴りを飛ばそう。

だから、対等に戦える。均衡が生まれる。

踏む足の下、返るのは砂の感触。
周囲の風の中、敵と渡り合うのは自分の身体。
全てが、踊るように響き、舞うように動いている。

いつしか、ルーミアはその身体から白い煙を発生させていた。
その尋常ならざる速度を以って紅を殺す為に刃を振るう。

速度任せの一撃だ。

刃は風を抜き、大気の破裂音を生んで発射される。
ルーミアの振るう黒い剣の先端が水蒸気の尾をすらも引き離す。

直後。紅が跳び、空中での後方一回転をその場でこなす。
回った頭の下を、ルーミアの黒弧が薙ぎ払う。
紅が着地した時、ルーミアは右の腕を振り切り、紅に背を向けている。

紅は着地の衝撃で脚が曲がるのを、蹴りと初動として利用する。
左の回し蹴り。残した右の軸足はつま先を高速で回すだけのもの。
蹴り脚の狙いはルーミアの左脇腹。
当たる。そう紅が思った直後、ルーミアが動いた。

翼だ。

翼の羽ばたきが生んだ勢いはルーミアを刹那の勢いで落とした。
しゃがまれ、紅の放った蹴りがその場に残るルーミアの落ち損ねた髪を数本断つ。
その時、ルーミアが刃で切り上げる。

逆袈裟。

紅は一瞬で判断下す。脚を戻していては断たれる。ならば。
放った蹴りを留めず、さらに振りぬく。
同時に、軸足にしていた脚を後ろ回し蹴りへと変える。
振りぬいた脚を着地と同時に軸足とする。蹴り上げる脚は。

受け流す。

ルーミアの振り上げた刃の根本にかかとを合わせ、振り切らせる。
振りぬいた脚を前に下ろす事で前進の勢いへと身体を流す。
紅は刃を振りぬいたルーミアへと刃を走らせる。

しかしルーミアはその膂力を以って振りぬいた右腕を強引に振り戻す。
二人は手首のスナップで、まるで直上から眼前に落とすように刃を振るう。

金属音が響く。

最早手応えともいえる反射の音が身体と大気に響き渡る。
その上で二人は連打に入った。
音が途切れる事が無くなる。

一振り、また一振りと眼に映らぬ世界で刃が交わる。

黒の弧を多重無双に連発するルーミア。
蒼の弧を多重幾重に連射する紅。

動き、位置を変え、耳に残る金属の響きを鳴らしては、水蒸気の道を作る。
二人が生む、二つの音が世界に響く。

刃と刃の激突音。
高速移動の風の音。

観客の居ない暗闇の世界で二人は音は放つ事に余念がない。
刃が風を巻き込み、等しく激突の音を生む。
高速で移動する二人の周囲には霧が生まれる。
ルーミアが風を切り裂き、紅は風を纏う。

紅は霧を生むルーミアに追従する。

ルーミアが地を駆け、フェイントの為、身を右へ飛ばす。
疾走と跳躍。風を巻き込み、走るその姿は己を縛る重力から解放された動き。
速い。
だが、見えている。紅の動きが闇によって感じられているように、風によって感じている。

紅は大剣を全力で叩き込む為に身を後ろに捻った。
次の瞬間。紅はルーミアが来る位置へと先読みで刃を走らせる。

「おお……！」

力が口から現れる。

そのときルーミアが小さな笑みを溢す。
ルーミアが真っ直ぐにこちらと視線を合わせると、そこに水蒸気の塊が現れた。

翼を使った変則機動。直線の機動から小さく細かく軌道修正する事によってまるで曲線を描くかのように、時に１８０度逆側へと進路へ変更し、紅を幻惑する。
だが。

――見えているぞ！

ルーミアはたった一歩左にズレた位置に居る。

振り下ろす刃を戻す事は出来ない。この剣が落ちる先にルーミアはいない。
こちらの刃が地面にぶち込まれた瞬間、攻撃を仕掛けてくるつもりだろう。だからこれで終わり。
そのはずだった。
判断は経験による反射。

紅は振り下ろす柄から右手を離した。

「ぬあああッ……！」

紅は全身の力は右拳に乗せ、振り下ろされる氷の大剣の右側面に叩き込む。
瞬時に右拳が砕け、鈍い衝撃が脳へと伝わる。
だが、構わない。
大剣の軌道は確かにルーミアを捉えていた。

対するルーミアが動いた。
下段から十字剣を振り上げ、上から降ってくる重量に叩き込む。

無駄だ。
こちらの斬撃は今までとは違う。充分な気を注ぎ込み、それだけでも十分な威力を誇る大剣を確かな足場の上で発射された一発なのだ。
闇を保持する事に妖気を割かねばならないルーミアの片手一本で支えて弾けるものではない。
威力はすぐに証明される。

ルーミアの振るう黒き十字剣に罅（ヒビ）が入る。
その瞬間に、霧散した。

紅の振るう氷の大剣はその速度を落とさない。
この刃を防ぐ手立ては、ルーミアに、そして紅にも無い。

――終わりだッ！

紅が終わりを確信した時、鈍い音が骨を伝い聞こえてくる。

「！」

紅が、他者へ誇れる耐久度を持つ、氷の大剣。
切断の為、そして防衛の為の大剣が、まるでシャープペンシルの芯を手折るかのように容易く破砕した。

氷の大剣は、まるで大気を抱くように散らばり、壊れてゆく。

「なんだ……！？」

問いに続く瞬間、紅は見た。
闇に閉ざされた世界が、無い。眼前に居たはずの敵が居ない。
頭上に満月が爛々と輝き、星の光を食らって尚、無数の星が己を誇る世界。
一体何時間刃を重ねていたのだろうかと疑問を思い空を見上げる。
そこには。

夜の世界に、その空に。

夜の王が黒き世界を従えて君臨していた。

「ふふふ……。楽しいわ。こんなにも楽しいのは初めて。でももう終わりよ。」

夜の空に浮かぶルーミアの呟いた言葉と共に背後に従える黒い球体の中から何かが走った。

「!?」

それは月光。妖気を込められた月光はその光量は僅かであって打撃と化した。
その速度は文字通り光速。眼で捉えられるものではない。
発射されたのであれば、それはもう着弾している。

――何か、予兆はないのか……？

無ければ打つ手なし。最早特攻しか残されていない。
風の密度を少しだけ上げる。これで、形だけならば、どれだけ微小なものでも見逃さない。
逆に言えば、これで感知できないのであれば、終わりなのだ。

「紅って言ったわよね。貴方との狩りの時間は楽しかったわ。でももう限界なの。――そろそろ食われなさい。」

無慈悲なルーミアの宣告と共に月光が降り注ぐ。その数は二十。

「がッ！」

一つ一つの威力からして異常。質量が無いが幸いであると信じがたい程だ。軽いものであろうとも光速で当たるのだ。そのダメージが気によって軽減されていなければ即死もいいところだ。

「く、くくくっ。ふ、は、はっはっはっは……。」

「……壊れたの？　随分脆いのね。まぁ――」

「こんな児戯でこの私を打倒しうるとでも？　くっくっくっく……。流石は夜の王サマだ。人様を笑わせるのもお手の物、という訳か。」

二十全ての月光を受けたその身体のダメージは決して小さくないはずだ。
だというのに紅は肩を震わせて笑っている。

「……そう。ならその身に刻みなさいッ！」

そして放たれるのは無数の月光。確実に先ほどの倍は超えている。
だが、紅は取り合わない。
その表情に笑みを貼り付けたまま、まるで来る場所がわかっているかのように避ける。
否、それは移動しているだけ。
月光が紅を避けているかのように降り注いでいるのだ。

「!?　何故!?　何故避けられるのッ!?」

「何故と問うても意味などないと知れっ!」

「なら――!」

再び、世界が闇に覆われる。視界は既に意味を成さない。
だが、そこに堕ちる月光はただの一射も当たらない。

紅は感知したのだ。黒球の変化を。ゼロコンマ数秒だけの予兆を。
それは隆起。
黒球が中の月光を吐き出す瞬間、その発射位置が隆起する。
そして月光は球体の表面に直角に吐き出される。それが感知出来るのであれば。

「どうした……?　例え闇の中であろうとも変わらず掠りもしないぞ。」

軽口を叩いていようともその移動は高速。
そこに霧を纏うモノが接近する。

「ああ……!」

ルーミアだ。霧を生み出し、同時に吹き飛ばしながら黒の十字剣を闇で作り上げる。
風を巻く紅は蒼き大剣を構える。
ルーミアの振るった刃を受ける。金属音を響かせながらも二人は駆ける。

紅は風の感知をしながら、ルーミアは月光の援護を受けながら立ち回る。
先ほどと僅かに、そして確実に違うこの状況は、少しずつ進んでゆく。

霧を飛ばす二者が激突する。

力でルーミアが勝っている。速度で、ルーミアが勝っている。
右手の使えない状況ではまともに打ち合えない。
だが、立ち回り方次第ではいける。

どれだけ強大な力を誇ろうと、どれだけ速い速度で動こうとも。
一本の腕では一回ずつしか攻撃できない。

左拳に氷を纏い、手甲とする。込める気は大剣に込める量と同じ。
これで一回の威力では劣らない。
左肩を前にいれて半身になり、ルーミアの右腕側に相対すれば、その右腕からの攻撃しか届かない。
何より、ルーミアの左側は闇を保持する為に使われているのだ。
身体を自由に動かせるように立ち回らせれば押し負ける。

――ならば、こちらから押し続けるのみ……！

剣よりも拳の方が回転が速い。紅が拳を連打すれば。

そして紅が前に詰めてゆけば、ルーミアは下がらざるを得ず、その高機動性を発揮する事は出来ない。

紅は左の正拳を放つ。当たれば致命になる刃を拳の先に作って。
基本でしかない。ステップも前へ前へと進むもの。
基本の誰もが扱える正拳のみで夜の王と相対する。

ただ正拳を確実に当てていく。それがダメージにならなくともただ、放つ。
隙があれば、腹部や顔面を狙う。
ただ、放つ。

ルーミアは刃を振り回せない。ひたすら受け続けている。
機動で撹乱しようにも拳を防いでも防いでも何度でも打ち据えられる。
力任せに弾いても、先の剣舞の時よりも威力が上がっている。桁違いなほどに。
この状況を打開するには、一射。ただの一射でいい。
月光を一回でも放ち、紅に当てることが出来ればこの状況から動く。

だが、その一射が遠い。

黒球の位置を動かしたいが、ギリギリ闇の世界に捕らわれず月光が届く位置に設置されている。
だが、闇を解いた状態では確実に避けられる。
この世界の中ですら避けていたのだ。どうやって避けていたのかは理解出来ない。

紅の剣の拳が黒の十字剣と激突し、霧が生み出されては吹き飛ばされる。

幾度となく繰り返される拳打。

「……ッ！」

最早小さい一撃に拘る必要など無い。
ただ極大の一撃を以ってして潰す。
その為の犠牲も厭わない。

ルーミアが動く。
右腕のみで相対していたはずなのに、逆の左腕を盾のように構えて。
紅の剣の拳撃がルーミアの左腕を切り裂く。だが、断ち切りには至らない。
その直後、紅の左側から黒の弧が強襲する。
強引に、突き出した左拳を引く。
肉を裂く感覚が手から伝わる。

それも無視して紅は襲い掛かる黒い弧に対して構えながら、後ろへと全力で跳ぶ。

剣はルーミアの全力の一撃に耐えられなかった。
しかし左腕の刃を壊されながらも紅は黒の一撃を回避し、世界に光が戻っている事に気付く。

片足を海に浸かる位置から、頭上を仰げば。
そこには満月を背に勝利を確信したルーミアが極大の一撃を放つ。

「あああああっ！！」

およそ容姿には似つかわしくない咆哮を上げながら放たれるのは月光。
溜め続けた全ての月光による広範囲爆撃。

「おおおおッ！！」

ルーミアの狙いに気付いた時、紅は氷の大剣を即座に作り出し風で覆う。
威力よりも範囲に主眼を置いた剣を以って対抗する。
叫びと共に刃を振り上げる。

だが刃が叩きつけられたのは月光ではなく、海水。

水だけでなく、感知に回していた全ての風すらも使ってたたき出した一撃は、
浜辺を覆いつくさんが如くの怒涛の逆瀑布を上げる。

紅は振り上げた刃と共に水で覆われた頭上を仰ぐ。
ルーミアも見た。
放った全ての月光が。

紅の噴き上げた怒涛の大瀑布の水と光が激突する。
月光と水流の激突は一瞬。
だが、そこで起きたのは破砕ではない。衝撃も破裂も崩壊もない。
起きたのは融和。

水と光。大量の水しぶきの中に月光が映りこみ、入り込む事で内部で乱反射して拡散する。

そして勝利を確信し、それが崩れた事で移動を忘れたルーミアに顔

を向けながら。
視界の存在しない闇の世界では使えなかった、ずっと閉じていた左目を、言葉と共に開く。

・――――時は加速する。

拡散し威力を失った月光も、飛び散る大瀑布も、そしてルーミアも。
全てが止まる。
その全てを突き抜けて、紅は刃を突き立てる。

その心臓へと。

「がはっ！？」

己に突き刺さる刃を見て、口から零れる血を感じて、ルーミアは理解する。
負けたのだ、と。

眼下を見下ろせば、食い殺すはずだった人妖が居る。
紅が手をかざしたとき、氷の大剣が、気化した。

「がぼッ！！」

固体の状態から一気に気体へと変わった。
気体がただの一瞬で体内を駆け巡り、血管という血管を壊してゆく。
最早身体に血の流れていない部位は存在しない。

だが、一つだけこの状態から助かる可能性がある。

気力のみで闇の世界を展開する。
全ての光を遮断し、闇の外壁を物質化する。
紅すらも取り込んで。

全ての光源を失い、空気や、地面から伝わる全ての熱を遮断した。
闇の世界は急速のその温度を下げてゆく。

ルーミアの出血は、収まらない。
だが、収まるまで冷えるか、悪くとも出血を抑えられればいい。
自然に回復するまでに死ななければいいのだ。

紅という人妖は恐らく死ぬだろう。
熱を生み出す術があっても生半可な方法では簡単に凍りつく。
冷気に耐性のある自分が死なないラインまで回復するまで発動は止まらない。

熱を失う死の世界の中でルーミアの意識が沈んだ。

紅は闇の世界に捕らわれた。その急速に凍りつく世界に。

「かっ！」

ただの一呼吸で肺が熱を失った。

これ以上熱を失う訳にはいかない。雷を体内で循環させ、体温を保つ。
だが、外気の温度が何処までも下がっていく。
それに比例して必要になる熱量が増えてしまう。

紅は己を整理する。

転移符は全て慧音と妹紅にくれてやった。
だから今は、自分で陣を作り上げる。

約一分。
一分で巨大な魔方陣を作り上げる。

――空間転移。

「はぁ……はぁ……はぁ……。」

転移したのは森の中。ただの空気ですら自分よりも暖かい。
意識を保つのが難しい。酷く眠い。
だが、意識を失えば、能力を使っていられない。
雷の能力でずっと熱を生み続ける。

――これでも……いつまで掛かる……？

まるで終わりの見えない作業の中、知った声が聞こえた。

「あら。大変そうね。」

「……ゆ、かり？」

「そうよ。見てた訳ではないんだけど……タイミングがいいわね。ちょっと、貴方の気を借りるわよ。」

「なに……を……。」

もうほとんど眼が見えない。

八雲紫が、何をしているのか。自分に何をしたのかを知る術がない。

「あの子は私に任せなさい。私が後始末しておいて上げる。だから身体を休ませなさい。幾らなんでも今回のは無茶のしすぎよ？　起きたら私が説明してあげるから寝てなさい。」

もう何も分からない。

「……う……。」

意識が闇へと堕ちてゆく。

第十五話：人を喰らうもの。（後書き）

今までは公式設定だけだったはずだけど、完全に二次創作設定いれちゃったｗ
ＥＸルーミア。

てかマジで戦闘難しすぎだと思いますｏｒｚ

ルーミアの能力に関してですが。
闇はもとより、月光なんですけど。これは
スペカの「ムーンライトレイ」を見て、月光行けるだろ、と出しました。

闇で閉じて冷気云々は闇の中に居ると涼しい～って言ってたから本気だしたら終わりだべ。とやっちゃいました☆

第十六話：宣戦布告。（前書き）

次のを今日明日で上げたいのぉ……。

第十六話：宣戦布告。

――かつて、妖（あやかし）の王とも言える存在が居た――

それは記憶の胞子。

――先の大戦で命を落としたそうだ――

幸いな時間（せかい）の記憶。

――打倒した存在も居るそうだが……何時か見（まみ）えてみたいものだ――

世界に光が戻る。

――紅。我はな。何かをしたいという衝動を抑えられぬ。いや、抑える気にならぬ――

意識が、浮上する。

――紅、すまぬ。すぐにでも我は――

「……ッ！」

眼を見開けば、視界に映るのはいつか見た天井。

そのはずだと紅は判断する。その視界からいくつかの色が判別でき

なくとも。

「おはよう。」

眼が覚めるまでに見ていた夢は幸いな夢なのか、悪夢なのか。
紅は自分で判別出来ない。

「……。」

紅に声を掛けるのはこの家の主。マヨイガの主。
八雲紫。

「レディを無視するのは感心しないわね？」

からかう様な、しかし魅力的な笑みを浮かべながら軽く叱る。
いつ如何なる時でも余裕を失わないその姿勢は紅をして敬意を表するに値する。

「……私はどれ位寝ていた？」

「5日。よくまぁそこまで自分を痛めつけられるものだこと。」

「どういう意味だ？」

「……貴方、理解していなかったの？　よくそれで今日まで生きていられたわね……。」

本当に驚いたのだろう。珍しく表情にすら表れている。

「……。」

「貴方の身体。それだけじゃなくて、精神にすらダメージが残っていたわ。」

ルーミアの最後の力。凍る世界。
あれはソレほどまでに強力な一撃だったのかと紅が驚愕すれば、即座に否定された。

「言っておくけど、あの子の攻撃によるものではないわよ。」

「なに？」

あれ以外にそれほど危険な攻撃があっただろうか。紅は記憶を手繰る。
しかし、あの子の攻撃ではないと明言している。そして同時に一つだけ、思い当たる事象が存在しているのだ。

「前回の時は休ませて上げただけだったけど、今回のは危篤状態だったから調べさせてもらったわ。貴方の身体を治療するために、ね。――藍。」

「失礼します。」

そう言って入室するのは九つの尾を持つ狐の妖怪、八雲藍。

「藍、お願い。」

「はい。紅様の――」

「様はやめろ。」

紅は即座に横槍を入れる。
様付けで呼ばれる事が気持ち悪いと考えるのは庶民出だからだろうか。

「……では、紅さん、と。治療の為、紅さん身体を調べさせていただきました。その結果、貴方の身体にある三つの妖力器官が発見されました。力は、風、水、――そして妖気です。」

妖怪に取って力の基準となる妖気を生み出す妖力器官。どれほど規格外だというのか。
そう表情に書いてある。藍も、そして紫すらも。

「破魔の気と妖気を合成したものを身に纏って、風や水の力、そして妖気を生成し続けた事が今回の怪我の原因かと思われます。」

「……。」

――そういう事か。そんな事は、分かっていた事だ。

紅は覚悟していた。ルーミアと戦うと決めた時に。
どんな犠牲を払う事になろうと構わないと。

「紅。妖怪の身体では耐えられない性質のものと本来持ちえざる力。そんなものを長時間纏っての戦闘行動。これだけでも身体が悲鳴を上げるわ。その上風と水の制御をしている状態でさらに脳に負荷を掛けるからこんな事になるのよ。」

紫が、寝たままの紅を叱責する。
無茶をして勝手に死なれては困る、と。

「分かっている。妖怪となったこの身体で破魔の気を長時間纏う事の危険くらいな。しかも同時に私の許容量を超えた妖気すら使ったのだ。コレくらいは覚悟していた。」

「それだけじゃないでしょう。精神的なリミッターを外したからここまでになった。」

「……。」

当然だ。例え紅が既に妖怪であろうとも、水蒸気爆発が生まれるほどの速度で剣を振り回せる程に強大な訳ではない。
あのルーミアは強い。眼に見えて強大な妖怪であると紅は否応無く理解させられた。
自分では勝てない相手だと。
事実、ルーミアは全力でなくともその手に持つ刃から霧を生み出していた。
最後には体からも噴出し、刃が霧すらも置き去りにするほどだったのだ。

初めから全力で、否。死力すら尽くして漸く同じ土俵に立てるだけ。
魔術で自分の脳の発する危険信号を無視するようにまでして漸く。
紅が勝てたのは奇跡に近い。
いくつもの偶然とルーミアの慢心が重なって漸く拾った勝ちにすぎない。

「何ですぐに私を呼ばなかったのよ。貴方は空間転移魔術を使えるんでしょう?」

「……符は全て妹紅達にくれてやった。術式を展開する暇がなかっ

たんだ。」

「それでも――」

「――何よりも。ルーミアは人妖を食したいと言っていた。何があろうとも引く訳にはいかなかった。例え数分だけであろうとも。」

紅が引いていれば、かつてのコウはおろか。

――夜風と夜水までも……！

「……そう。今回はもういいわ。でも気をつけなさい。それは諸刃の剣。強大な武器になろうとも、持ち手の貴方を蝕む猛毒よ。」

「……ああ。」

「あの娘は私が連れて行くわ。貴方の”気”を使って封印して人間の乱獲は出来ないようにしてあるから問題ないわよ。藍、行くわよ。」

「え？　伝えないのですか？」

その言葉は紫にここに来た目的を思い出させるには充分だったようだ。

多少苦笑いで誤魔化しながらも紫が本題に入る。

「あ、あはは……忘れるところだったわ。紅、私が貴方の所に出向いたのは伝える事があったからなのよ。」

「伝える事……？」

態々幻想郷を離れてまで伝える程の事とは一体なんだというのか。
紅の脳裏に疑問が浮かび、即座に答えが示された。

「近年の人間の増え方が尋常ではないのよ。人間の増加で幻想郷の妖怪の勢力が押され気味でもあるの。」

「押され気味だと？　鬼子母神はどうした？　彼女が居ればそれだけで充分だろう？」

「確かに彼女は強いわ。人間の影響を殆ど受けないでしょうね。けれど下位の妖怪はそういう訳にはいかないの。」

「……成程。既に確立している一個の強大な存在では意味が無い訳か。」

たとえ鬼子母神がどれだけ強大な存在であろうとも、人間の認識というものに与える影響は変わらない。
それでは増え続ける人間という存在そのものが妖怪を圧迫するのを止められない。

「このまま行けば妖怪の勢力に大きな影響を及ぼしかねないのよ。だからある妖怪拡張計画を立案したわ。」

「どういう計画かは知らん。だが、手伝う事くらいはしよう。何をして欲しい？」

幻想入りは忘れられた存在を幻想郷で存在を確立するためのもの。
態々紅に伝える必要は無いはずだ。
ならば違う何かを望んでいるのだと紅は判断する。

八雲の名を押し付けられたときの契約通り、紫の意思を手伝う形で行動する。
それが、自分の意志を否定するものでないのならば。
紅に取って断る必要のある事象ではないのだ。

「話が早くて助かるわ。必要なのは人間が強大だと認識する新たな妖怪よ。あの娘みたいに見境なしに人間を襲うような妖怪だと困るけどね。」

「強大な妖怪は忘れ去られる事もない、か。」

「そういう事。それでもいずれ、妖怪が忘れ去られ消滅の危機に瀕する世界になる。そうなる前に妖怪を集めておきたいけれど弱い妖怪しか来ないでしょうね。」

「……吸血鬼辺りでも勧誘して来よう。一応、吸血鬼に用事があるのは確かだからな、ついでだ。だが、お前はどうする？　世界が妖怪を否定するのであれば、どこに居ようと妖怪は消えるぞ。」

いずれどうなるかを知っている紅は動じない。では紫はどうだろうか。
彼女が本当にメリーなのだとしたら、或いは知っているのかもしれない。だが、妖怪の在り方をあの時代に知る術は無かったはずだ。
その在り得ざる頭脳は一体どういう未来を見出しているのだろうか。
紅は紫の得体の知れなさを改めて思い知らされた。

「幻想郷は問題ないわ。準備は進めているから。貴方が吸血鬼を連れてくるというのなら安泰ね。」

準備とやらが何を指しているのかは紅には伝わらない。

紫も伝える気が無いのだ。

「……そうか。吸血鬼に関しては期待しないでくれ。約束のついでしかないんだ。それに、何時になるかも分かったものではない。」

「あら、それも約束？　どこで……いえ、期待して待ってるわ。」

紅は思う。

態々「期待して」と言うあたりがいやらしい。

だがどこで会ったのか、という質問を飲み込んでくれた事には心の中で感謝する。

話して気分のいい話という訳ではないのだ。

「……なあ。」

「あら、なぁに？」

紅の中に記憶が溢れる。同じヒトに魅せられた吸血鬼の事を。

そして、沙夜の夢を。

「……妖の王。先の大戦で命を落としたと聞く。」

紫の目つきが変わる。雰囲気も何時に無く真剣な、油断の無い振る舞いへと変化している。

「……それで？」

「その王を倒したのは……誰だ？」

この紫の態度の変化が、紅に何かを知っていると教えている。

「それを聞いて貴方はどうするのかしら？」

口元を扇子で隠し、真意を問うてくる。

だから、紅は隠し立てしない。隠せば、隠されると理解しているから。

「私は……そう。納得、したいんだ。」

「納得？」

沙夜を追い詰めた、妖の王を打倒した者が。

「ああ。理性では分かっている。だが、感情が納得出来ないんだ……。私は……。」

本当に強いヤツで、彼女ですら負けるのは仕方がない程に強いのだと納得したい。

紅はその想いを言葉にする。

「どうしても、その存在と戦わなければならない。そうしなければ、私は前に進めない……。」

「それで、貴方が殺されるとしても？」

――生を求めるな。死を求めよ。

例え、それで殺されるのだとしても。

紅はこの死ならば、受け入れられる。

「――構わない。」

紫が微笑む。まるで、眩しいモノを見ているかのように。

「……そう。なら、私はその挑戦を受けましょう。」

「……！　そ……う、か。」

紫が、その王を打倒した者だと認めた。

その可能性を紅とて考えなかった訳ではないが、これには驚いた。

多少なりともその事を隠す意思を持った紫が話したという事実と、現実に。

「紅。貴方は私に勝ったら何を求めるのかしら？」

「……私が貴女に勝利したのならば、その時は……。――貴女の全てを貰う。」

紅にとって沙夜は絶対的な存在だ。

その沙夜を追い詰めたヤツが、自分程度に負けるのであれば許さない。

認めない。その存在の全てを喰らいつくす。

例え、どれだけ策を弄したとしても紅程度に負ける沙夜ではない。

ならば、その沙夜を打倒しうるモノが自分に負ける事を紅は許さない。

「大胆ね。まるで告白よ？」

「……。」

紅は茶化す紫を睨みつける。
この状況でふざけられるのは不愉快でしかない。

「ふふふ。そんなに怖い顔をしないの。……そうね、私が勝った時は、――貴方の全てを貰うわ。」

「……分かった。藍。私の服を頼む。」

服を藍に要求する。

「はい。少々お待ちを。」

藍は紫を一瞬見て、頷いたのを確認してから返答する。

「あら？　何故、妖の王を討ったのか聞かないのね？」

紅は紫のその声音にどこか楽しそうな感じを覚えた。
しかしそれこそ妖怪という存在なのだと自分を納得させる。

「……必要ない。貴女の行いなら、必ず意味がある。そして私にはやる事がある。行かせてもらう。」

「紅さん、どうぞ。」

「ありがとう。」

藍から衣服を受け取り、隣の部屋で着替える。
着替えを終え、八雲紫へと宣言する。

「八雲紫。決闘に相応しい場所と状況は私が作り上げる。いつにな

るかは分からないがね。楽しみに待っていてくれ。」

「そう。期待しないで待っているわね。」

「……。」

紅は最後まで嫌味な事をいう女だと思い、眉を顰めるもそれ以上何も言わずに去る。

これで二度目であり、道は覚えている。

マヨイガを出て、空間転移の術式を組み上げ、跳ぶ。

跳んだ先は彼らとの修行場。

突然転移し、姿を現した紅に驚く三人が眼に入る。

夜水と夜風が、そしてコウが渋々ながらもこちらへ駆け寄ってくるのを眺めながらこれからに思いを馳せる。

――色々、用意しないとな……。

第十六話：宣戦布告。（後書き）

少し短めでごめんなさい。
正直区切りが良すぎたんで。

第十七話：未来への布石と人生相談。（前書き）

正直十六話とこの話を区切る場所間違えてるｏｒｚ

第十七話：未来への布石と人生相談。

あの日から考え続けている。

八雲紫という強大な妖怪を打ち倒す術を。

だが、紅は同時に二人の指導もこなした。

コウが破魔の気を扱えるようになり、体術の基礎を体に叩き込み

夜水に水を扱う術の状態変化、そして身体捌きを覚えさせた。

そこまで仕込んだ時点でもう教える事はない。

「後は実戦形式で組み手でもするといい。これ以上教えられる事はない。」

一言告げて、それで終わりにした。

後は、自分のやるべき事をするだけ。

夜風に危害を加える可能性のある存在が近づいたのなら殺す。

その為に近場で見守りながら、思考に没頭する。

私が八雲紫に勝利する為には何が必要なのか。
ヤツには使い魔、式が居る。八雲藍。あれもまた強大な妖怪だ。
一対一で戦うなどと明言していないのは私も紫も同じ事。
八雲藍を抑えられる、或いは打破できる存在。

……利用すればいい。事実彼女達が勝手に始める事だ。その尻馬に乗れば問題はない。

そして能力。『境界を操る程度の能力』は破格の異能だ。
これを使われては負けない戦い方すら出来ない。
つまり前提として、能力を封じる術(すべ)が無くてはならない。
そうでなくても最低限干渉を防ぐ方法があればいい。

無限とも言える魔力さえあれば大抵の事象は起こせる。
魔力を用意する当てが無い訳ではない。保留だ。

紫の能力を無効化する術は？

自身を世界から隔離する？　ＮＯＮ
世界と隔離した世界の境界をイジる事が出来るのであれば無いも同然。

では、隔離する機構を断続的に生み出し続ける？　ＮＯＮ
相手は世界を隔離したとしてもその壁を無視出来る。
どの空間をどうやって区切ったとしても、あの亜空間はどこにでも通じる。

では、能力による干渉をこの身体にのみ禁止する？　ＮＯＮ
精神だろうと世界であろうと覗く事の出来る力だ。
たとえ世界から隔離しても意味がないのではそれ以上の防ぎ方が分からない。

……そもそも能力とはなんだ？
在り方、生き方、本質。それは何に起因する？

肉体？　ＮＯＮ
幽々子は肉体を失い亡霊と化す前から死を司っていた。

精神？
可能性は高い。

では精神とは何だ？
あらゆる生命の行動理念の源。霊魂。魂だ。

魂＝能力？
在り得ないとは言い切れない。

死から逃れうる存在は居ない。
同時に死から立ち戻れぬ存在とて、居ないのだ。

たとえ生まれ変わり、精神のあり方が変わろうとも、その魂は輪廻し続ける。

能力とは即ち魂である。
そう仮定しよう。

魂による干渉を防ぐ。
……意味が分からない。

では魂の干渉を禁止する。
魂に能力が刻まれているのであれば、魂に枷をすればいい。

魂と意識は別だ。
魂が何も出来ないのであれば、意識は能力を魂から引き出せない。
それは、紫の境界能力とて例外ではないはずだ。

魂が定義出来れば、指針は決定するのだが……。
魂……。

魂があるから能力が使える。
その能力はあらゆる物理現象を無視出来る。
……では魂とはなんだというのだ。
魂の秘める力は世界の在り方すら無視する力の源となる。

紅はただひたすら考え続ける。
勝つために。

――負けるために。

気付けば、二人の妖怪が一人の老婆を支えていた。
紅はただ変わらない日常を見守っているだけだった。
いつの間にかコウは人間を止めていて、夜水は見た目が変わらず。
夜風だけが年老いていった。

時の流れが早いのか遅いのか、紅はもはや妖怪なのだろう。
時の流れが人とは違う。

――あぁ……。あれは、夜風を支えているのか……。

年老いた夜風は、自身を支える二人に何かを話し紅の元へゆっくりと歩んできた。
二人を置いて、自分だけでゆっくりと。

紅の眼前に辿りつき、彼女はすぐ隣に腰を下ろすと共に口を開いた。

「ふふ……。やっぱり……あなたは優しいね、コウ。」

ドクンと紅の心臓が跳ねた。

「……な、んの事かな？」

紅の声が震えている。
夜風の存命の間、隠しきれると思ったのは紅の勘違いなのか否か。
それは紅が無視できるような事ではなかった。

「風を扱えるの、忘れちゃった？　わたしがコウの事を間違えるはず、ないよ。だから、ありがとう。コウ、あなたがずっとわたしの

事を見守ってくれたから、わたしは幸せです。」

「……ッ」

紅に取って、こんなにも喜ばしい事があるのだろうか。
夜風は影ながら護ってきた紅に、幸せであると伝えてくれた。

「本当に……毎日が幸せでいっぱい。」

紅はこの世界で、紅をコウという一人の確立された存在にしてくれたヒトが、
どうしようもなく、愛おしく感じた。
その感情の奔流は紅の瞳から涙として溢れる事で自己主張する。

「……夜風。私は、君が居たから私で居られた。君を愛したのは、いや、愛しているという事は私にとっても幸いな事だよ。」

「……うん、知ってる。」

「例え、この身が朽ち果てようとも。死に絶えようとも。私が、紅という存在が夜風。君を愛したという事実は消えな――。」

「コウ？」

自分の言葉で思い出す。魂の輪廻という事実を。

「……なぁ、夜風。」

涙を拭い、問う。

「うん。なあに？」

全てを受け入れてくれ、疑問を投げかける事すらしない夜風を愛おしいと思いながらも問いかける。

「魂とは、なんだと思う？」

「魂？　うーん……。考え方、かな？」

夜風は自然体で、特に気負った感じもなく答える。

「……考え方？」

「うん。魂が在って、死んでも次の生に同じ魂が使われる、とか。そういうのが好きなんだ。来世でも、あなたを愛したいっていうのもあるかな？　あはは。」

「ふ……。君らしいね。もし、私に来世というモノがあるのならば、また会いたいものだ……。」

「ホントに……魂がそういうものならいいんだけどねぇ。」

「……？」

――そういうもの。魂が、”そういうもの”だというのは、どういう意味になる？

「コウ？　どうしたの？」

急に考えこんだ紅に夜風は声を掛ける。

紅は思いしる。
自分を愛してくれるヒト達は、意識しないで助けてくれる。
本当に自分は幸いなのだと。

「……いや。君達と出会えた奇跡は、何者にも勝る最大の幸運だと実感しただけさ。夜風。」

「うん？」

「最後に会えてよかった。……ありがとう、愛しているよ。」

「あ……、うん。こちらこそ、ありがとう。またね。」

「――！　……ああ、また。」

ここで、また、と言わせてくる事に驚愕を得る。
紅は、思っていたより彼女は強かだと教えられた。

跳ぶ。もう、彼女は長くない。
幸いの中で眠るように逝けるだろう。
そう判断出来る。

――答えは得た。

魂とは、〝そういうもの〟なのだ。
魂とは能力。

では能力とはなんだろうか。

世界各地に居る、いや、生まれるだろう学者や識者と呼ばれる者たちに問うたならばなんと言うだろうか。

こんな風に都合よく世界を変える力とは何か、と。

――トリックだ、と言うだろう。

そう。そう言うだろう。だけど事実だ。

では、彼らがこの事実をトリックと断言する根拠はなんだろうか。

――考えるまでもない。物理法則に反しているからだ。

雷を操るのであれば、雷はあらゆる世界を奔る。

”電子”ではなく、”雷だけ”が。

水は熱量の変化も無しに、凝固や気化を繰り返す。

風は空気中に直径１０ゼンチメートルの台風すら生み出せる。

そう。この力の前では、物理法則など大して意味を成さなくなる。

では、この物理法則とは、どこの世界の物理法則だろうか。

この世界の物理法則だ。

では、異世界があったとしたら、それを”異”とする基準はなんだ？

地形？　大気？　生物？　文明？

つまり、こうだ。物理法則が根本から異なる世界があるとして。

そして、私達が見ている能力とはその異世界そのもの。――個人個人という異世界！

この世界の物理法則は、この世界でなければ適用できない。
物理法則の違う世界では、当然、この世界の物理法則とは根本から覆る。

全ての魂はそれぞれの特徴を持っている。
八雲紫の境界を操れる世界。私のような雷を操れる世界。
萃香のように密と疎を操れる世界。天魔のように因果を操る世界。

”そういうものだから”　どうしようもない、と、そんな力はどう呼ばれている？

――概念だ！　物理法則すら支配する力、全ての理由の究極たる一。
それこそが概念！

つまり私が目指すべきは、能力の使えない世界を魔術で再現する事。
世界を再現出来なくとも、その空間を擬似的に顕在させればいい。
指針は出来た。後は術式の構成を考えなくてはならん。

――さあ逝こう、死出の旅へ。

向かう先は、ワラキア公国。或いはオスマン帝国領。
猶予は１００年。

応永１６年（１４０９年）現在。
紅は島国と後にする。

そう簡単にたどり着く訳でもなく、なにより余り早く着いても意味がない。
紅は、ゆっくりと大陸を巡っていく。
魔術の構成を考える時間が必要であり、同時に休息も必要だ。
日本列島を北に抜け、樺太からユーラシア大陸へ。

明（現在の中国）にて。

紅は多くの武門を見て回る。
その全てが現代の形式染みたものとは違い、実戦を想定した業を継承している。
多くの分派に別れ、そのどれもが特色を持ちあわせているのが見て取れる。

その中でも隆盛を極めるのは太極拳だろう。
広場での修練を行っているが故にだろうか。
一番その師事を求める者が多い。広く門戸を開いているのは良い事と言えるだろう。
同時に業を盗まれるという事も懸念されるはずだが。

その中に他と一線を画する女性が居る。
髪は紅く、「龍」と文字の書かれた帽子を被っている民族的な衣装が特長的な女性。
ふと、彼女は顔を紅の居る方へと向ける。

「……あ。」

――しまった。不躾な視線だったか。

彼女は紅の元へと小走りで駆け寄ってくる。

「あのっ！　なにか、御用ですか？」

その表情に一転の曇りなどなく。
不審な者を見る目ではなく、ただ純粋な厚意だ。
疑問があるのならば、答えて差し上げます、という事だろう。

「いや、すまない。余りに流麗な身体捌きだったもので。不躾に見続けてしまった。」

「ふふっ。ありがとうございます。貴方程の武人にそう言って頂けるのなら少しは自分を誇ってもよさそうですね。」

なんと躊躇無く紅が”戦うもの”だと言い当てる。

「……君は？　いや、何故分かった？」

「あ、申し遅れました。私の名前は紅美鈴（ほんめいりん）です。何故と言われても……。ただの重心ですよ。ただ立っているだけでもその重心にブレ

がありませんから。」

重心のブレがないとは如何なる事態にも即座に対応出来る状態という事。

確かに紅は最低限の警戒はしていた。

己が妖怪だと気付いた誰かが何時襲ってきてもいいように、と。

「……君の様な存在が人間に混じって武術の指南を受ける、か。」

「あ!?　ちょっと!　あー、もう!　こっち来てください!」

「む?」

紅の迂闊な発言で周りの人間に気付かれる事を嫌った美鈴は紅を連れて町を離れる。

そして美鈴が漸く止まった場所は竹林の奥深く。

「……もうっ。バラさないで下さいよ~。折角皆さんに溶け込めたんですから……。」

「いや、すまん。迂闊だった。」

妖怪であるとバラされてはもう指南を受けるどころではない。

美鈴の行動も仕方の無い事だろう。

「しかし……、何故私に話しかけたのかな?　何か聞きたい事でも?」

「あ、そうでした。私は生まれつき気が扱えました。”気を扱う程

度の能力”なんでしょうね。」

「ふむ。」

紅は相槌で続きを促す。

「だから、気を効果的に使える武術を学んできました。初めは好奇心だったんですけど、今は違う。強くなりたいんです。武の真髄を極めたいと思うようになったんです。」

「武の真髄……。」

「はい。でも師範に聞いても、明確な答えにはなりませんでした。それは求めるまでしか出来ないものだとも言われました。」

「……そうだろうな。」

「これでも人間より長く生きてるんですよ？　でも漠然としたものすら分からなくて……。」

「……武の真髄か。私には、私の答えがある。それを答えるのは容易い。だが、言葉で伝わる程度のモノは本当の応えではないだろう。」

紅の言葉に美鈴は肩を下ろす。

美鈴は今まで何度もこの問いを発したのだろう。

そこに自分の進むべき道への欠片を見つけるために。

「あ……。そうで――」

「そしてそれは刀槍煌く戦場に己の身を置き血路を開いたときにこそ、初めて見つけられるものだ。」

「――！」

「じゃあな。」

紅に取っての武の真髄。
それは美鈴の武の真髄足りえない。
だが。

「待ってください！」

背に掛けられた言葉は、紅の脚を止めた。

「……。」

「貴方は、強いですか？」

「……弱くはない。」

「なら、私と死合って頂きます。」

それは一つの答え。
触れれば、参考にする事くらいは出来る。

「随分と、強引なんだな。」

「いいじゃないですか。女性の我侭を受け止めるのも男性の役目だそうですよ？　あ、そういえば貴方の名前を知りませんね。」

イタズラっぽく微笑む美鈴。
その愛らしい表情とは裏腹に闘志が湧き上がっている。

「……それは交際中の男女の話だ、馬鹿者め。
――八雲紅（やくもこう）だ。」

紅は水の大太刀を構え、妖気を生み出し、風を纏う。

「――華人小娘、紅美鈴（ほんめいりん）。参ります！」

不敵な笑みを浮かべ、身体に気を充実させた美鈴はその一歩を踏み出した。

第十八話：運命の軋み。（前書き）

あんまり長くないです。すんません。

第十八話：運命の軋み。

「――紅美鈴。参ります！」

私は、その宣言と共に一歩を踏み出した、はずだった。

「――。」

眼前に悠然と構えるあのヒトが大きく見えた。
その認識のズレが、脚を止めさせた。

紅さんの手に持つ透明な太刀から、空気すらも切り裂く剣気を感じる。
そして、

殺気が肌を刺す。
まるで、彼が一本の剣であるかの様な鋭い殺気が。

「……すみません。貴方の事を侮っていました。」

紅さんへの謝罪であり、自戒だ。
紅さんはこんなにも、本気で戦おうとしてくれている。
それなのに、自分に気の緩みがあった。
だから、殺気だけで脚を止めてしまったんだ。

「言葉は不要。ただひたすらに己を写し出せ。」

そう言って刀を構えた紅さんに隙は見当たらない。
在るかと思えば誘いにも思えてしまう。

でも――。

「――はい！」

覚悟を決める。

隙が無いのならば作り出せばいい。

――迷うな、紅美鈴！

「――はい！」

その言葉で美鈴の気配が変わる。

先ほどまでの訓練時の遊びの様な部分が削げ落とされた。

だが美鈴は踏み出す切欠を欲している。

だから、紅は全てを無視する。

一気に踏み込む。

そこに在った間合いは一瞬にして零になる。

踏み込んだ左足と回転を合わせ、右手で構えた刃が風を切る。

袈裟懸け。

紅が踏み込んだのとほぼ同時に、美鈴が小さく踏み込む。

右手は寸頸を放つ構えとして、ゆっくりと紅の腹へ。

左手の甲を振り下ろされる刃に添えて、小さく逸らす事で頭上を空振らせる。
はずだった。

雷撃。
手を添えた刃から感電したのだ。
筋肉が弛緩し、美鈴の身体が僅かに沈む。

沈んだ身体へと紅が拳を放つ。
正拳突き。
拳を受けて、美鈴が派手に吹き飛ぶ。

「む……。」

紅が唸る。直前に後ろへと跳ぶ事によって衝撃を逃がされた。
美鈴は着地と同時にその脚力を以って、一息で接近する。

紅は右に持つ大太刀を心臓を抉るように突き出す。
同時に即座に作り上げた氷の脇差を左から逆袈裟で振り上げる。
これで逃げ場は無く、美鈴は雷で倒せると判断する。

だが、それは間違いだ。

美鈴の行動は先ほどの焼き増し。
ただし先ほどよりも深く踏み込んだ。

美鈴の左手は突き出される大太刀の腹を拳で突く。
右手で紅の左手を押さえ、同時に肘で小さく寸頸を放つ事で脇差を破壊する。
そして踏み出した足で紅の軸足を押せば――、

紅の身体が泳ぐ。

流れる様な動作でバランスを乱す紅の胸に左手を軽く添える。

右手は紅の左手を引く事で、射程圏外へと逃げる事を抑止する。

美鈴の重い震脚は大地を容易く踏み穿ち、関節の回転はその力を拳へと収束させる。

――紅寸頸！

紅い衝撃が紅（コウ）を吹き飛ばし、一陣の烈風が旋風を巻いて吹き荒れる。

しかし美鈴は吹き飛ぶ紅を追わない。

必ず戻ってくると知っているから。

「……流石だな。全く……。その才能に、嫉妬せずにはいられない。」

だが、紅寸頸は美鈴の扱える業の中でも充分な威力を持った一撃。

その一撃をまともに喰らって尚、悠然と立つ姿は美鈴の積み上げてきた努力という自信を揺るがには充分だ。

「何が嫉妬ですか。全然効いてないじゃないですか……。」

効いていない訳ではない。後ろに跳び衝撃を逃がす事も出来ない状況で紅が打てた手は一つ。

風。

風の壁を作り上げた。一枚一枚は突けば簡単に割れるものであろうとも、１００枚２００枚もあれば、充分に威力を減ずる事は出来る。

動きが抑制された状況下で風を、速度上昇に使う意味はないのだ。

「ソレじゃない。君は私の雷撃を気に流れを作る事で地面に流したな？　それがどれだけ精密の操気術を必要とすると思っているんだか……。」

「ふふ……。もっと巨大な剣なら砕けないかもしれませんよ？」

「は。笑わせるな、戯け。」

美鈴がした事は単純だ。

紅の作り出した太刀の耐久度を妖気と形状から把握した上で、それを最小限の力で破壊出来る分の気を拳に集める。そして全身を強化している気に循環する流れを作る。

これによって、紅の太刀を破壊すると同時に僅かに流れる電撃を大地に流し感電するのを防いだのだ。

他者の妖気を孕む電撃に気の流れを同化させる。これをただの一回喰らっただけで可能とした。

「そんな事をしても同じく砕かれるだけだろうが。」

「ええ、そうですね。」

妖気とは密度。太刀と大剣では大きさが違いすぎる。

紅の使った太刀に込めた妖気と脇差に込めた妖気は普段と同等。

その密度から耐久度は大剣以上と言える。

速度を考え、大剣よりも太刀を選び、その上で砕かれたのだ。

「……ふむ。刃は不要か。私の体術などそう大したものではないの

だがね？」

美鈴の妖気自体は妖力器官を起こしていれば紅が上回る。
だが、気を扱う能力は伊達ではない。
大気に漂う気を呼吸するかのように取り込み、一時的に威力を増大させる。
その上でさらに、”気”と紅の”妖気”を適度に反発し、表面を滑るように調整までしてみせた。

「期待させていただきますね？」

そんな規格外の才能を見て、天才と認めぬものは居ないだろう。

「……いい性格をしている。――行くぞ！」

美鈴は己が肉体と気を扱う術を頼りに。
紅は底上げした速度と経験を頼りに。

ただ、相手だけを見る。

ただ、前へ。

攻勢は、美鈴。
美鈴が拳を繰り出せば、紅は腕を以って阻み、逸らしては、身を翻してかわす。
脚を振りぬけば、紅は肘で迎撃し、時に受け止めては攻めに転じる。
紅が拳を繰り出せば、美鈴は脚で間合いで上回り、見切っては懐へ

と滑り込む。
脚を振りぬけば、美鈴は敢えて踏み込み威力の乗りにくい太股を受けると同時に潜り込む。

基本的に紅は守勢。
技巧で劣るが故に攻勢に出れば隙となる。
己で攻めれば負ける。故に隙を突く。
ひたすらに耐え、至近距離を望む美鈴にカウンターを狙う。

美鈴は苛烈に、しかし美しいまでに優雅に立ち回る。
ひたすらに耐えて無骨な、しかし強靭な意思以って打ち据えられる拳打を全て捌く紅。

動きが、そして繰り出される手足が風を切る。
拳が交われば空気が震え、轟音は突風ととなり周囲の竹を靡かせる。
打撃が肉体を捉え、鈍く重い重厚な腹に響く音が身体を伝う。

大地を踏みしめ、その力を打撃に収束させる為の轟音以外に無駄な雑音は存在しない。

二人はお互いに幾度となく激突し、風の暴力を撒き散らす。
その音だけが。風を切る音と打撃音のみが辺りの静寂をかき乱す。

既に互いが互いの攻撃を視認していない。
目視してからでは遅いのだ。

体の流れを阻害しない為に無理な制動を掛けぬ脚捌き。
風を切る打撃。
お互いの息遣い。
その僅かな空気の波が鼓膜に、そして肌に伝わる。

感じ取る。
小さな音を。微かな音が、相手の次の動作を教えてくれる。
この音こそが、戦闘のリズム。

迫り来る敵の挙動を身体が感じる。
身体の、骨の軋み。
切り裂かれる空気の悲鳴。
地を伝う、足音という攻撃の合図。

戦いとは、音楽（ミュージック）。
体中を駆け巡る音の奔流。

”武”を極めたもの程、その攻撃は正確な音を奏でるのだ。

移動の動きも、互いの身体を打つ音すらも。
何もかもをバックミュージックにして二人は喰らい、喰らわれるために舞い踊る。
だが、永遠に続くかのような二人だけの華麗な舞に終わりが告げられる。

不意に美鈴が下がり、体勢を整え大きく気と共に深呼吸した。

――猛虎内剄！

剄により全身の気の流れを爆発的に活性化させ、打撃の際に撃ち込む事で強化する操気術。
美鈴は読み合うような戦法を捨てた。

「……紅さん。これ以上続けても悪戯に時間を浪費するだけです。」

「……そうだな。私が無謀を犯さない限り終わらんようだ。」

「ですが、これで終わりです。」

「カウンターを嫌ったか。まぁいい。生半可な攻撃では私の防御は抜けんよ？」

お互いに不敵な笑みを浮かべ、勝利への方程式を脳裏に描く。

「生半可な攻撃か、貴方自身で確かめるといい！」

美鈴は言葉と共に気を練り上げ、呼気と共に顕現する。

――虹色太極拳！

練り上げられた気は波紋の様に地表を流れる波を発生させる。
波は非常にゆっくりと広がり、円形に、そして紅へと迫る。

「む！？」

一瞬の驚愕。
美鈴はその一瞬を見逃さない。
即座に紅の懐に潜り込む。

――烈虹拳！

烈虹拳とは接近状態での牽制と、そこからの致命打を狙って編み出された牽制技。
高速で突きを連打し、そこから気弾を連続して放ち、紅を地面に縫

いとめる。
そして縫いとめた紅へと最後に強烈な裏拳を見舞う。

気で出来た波の波紋に押さえつけられた紅は美鈴の全力の裏拳を連撃で仰け反りながらも受け止める。
僅かに仰け反った事で美鈴の裏拳は紅の顔面から狙いを浅くし、ガードを固めていた両腕を弾き飛ばすまでに止まった。

「ぬ、あぁああ！！」

紅は仰け反った衝撃を利用し、上半身を捻り強烈な上段蹴りで美鈴の首を狙い撃つ。
当たる。

美鈴はその鉞（まさかり）のように強烈な蹴りをその身で受け止める。
だが練りに練った気によって、一時的に感覚が麻痺している。
故に紅の打撃を無理矢理に無視し、無理を通す。

紅の脚を肩で支えながら、身体に残る、裏拳を放ったその回転を利用し、震脚と共に三連撃を見舞う。
その爆発的に高められた気を込めて。

「がっ！！！？」

――大鵬墜撃拳！！！

音が消え、三度の衝撃が球状に広がる圧力の層を作り上げる。

その苛烈な一撃は、紅を空高くへと弾き飛ばすのに充分な威力を秘めていた。

美鈴の耳を打つ轟音が反響し、世界に音が戻ると同時に空気を震わせる。
次第に音の波は拡散し、見上げる空に三度鳴り響いた音は余韻を残して消えてゆく。

「……これで――」

「――私の、勝ちだ。」

「ぐ！　ぁ……？」

美鈴の意識は、聞こえるはずの無い声を最後に落ちた。

「……ん……ぁ……？」

美鈴は眼を覚ます。
その瞳に映る光景は見覚えのあるものだった。

「……あれ、なん……あ。」

家。

何故、自家に居るのか。服も着替えさせられている。
美鈴が理由を求めて部屋を見渡せば一人の男性の姿が見える。
紅だ。
何故か紅は壁に寄りかかって寝ている。
美鈴には、紅が戦ってるときとはまるで別人に見えた。
幼い子供の様に、生きる事に疲れた老人の様に。
熾烈なまでの気迫を見せた戦闘時とは似ても似つかない。

「よ、っと。紅さん。紅さん、起きてください。」

布団から美鈴が声を掛けると紅は眼をゆっくりと開けた。

「ん……。あぁ、眠ってしまったか。」

「あ、紅さん。起きましたか。その、何がどうしてこんな状況になったんでしょうか……？」

「うん？　君を気絶させてしまったから家まで運んだまでだ。幸い君は好戦的という評価を得ていたようでね。背負っていても不審がられなくて済んだよ。」

「あー、そうでしたか。ありがとうございます。えっと、そのー……。」

紅の答えは確かにこの状況になる経緯を説明してくれていた。
だが一番聞きたい事は言ってない。
美鈴は武道家として、そこはどうしても聞きたいが少々厚かましく感じている為か、語尾が小さくなっている。

「く、ふっふっふ……。では、君の三連撃に吹き飛ばされた所から

説明しようか。」

そんな美鈴の行動を微笑ましく思い、紅は笑いを溢してしまう。

「うぅ……笑わないで下さいよぉ……。」

真っ赤になって恥らいながらその場に蹲る美鈴。

紅はそんな美鈴を無視して、説明を始めた。

「そうだな、あれは――」

「ぬ、あぁああ！！」

紅は、腕を弾かれたと同時にその勢いに沿って上半身を捻りながら美鈴の首を狙って蹴りを放つ。

この崩れた体勢のままで居れば打撃をモロに喰らってしまう。

流れを変えるためにもこの一撃で美鈴を止めなくてはならない。

――当たる。

その確信を持って、そしてその確信の通りに。

狙った美鈴の首を体重を乗せた紅の一撃が打ち据える。

だが、美鈴は止まらない。

「がっ！！！？」

直後に美鈴の気が練り込められた三連撃が紅を襲う。
その一撃一撃は、紅が身体に纏っていた風を急遽防御壁に回した上で尚ダメージを通す程の威力を秘めていた。
そして紅は天空へと吹き飛ばされる。

「……ッ！」

口から血が流れる。内臓を損傷した可能性もある。
だが、それすら強引に無視して符を用いて魔術を行使する。

――空間転移！

目標は、空を見上げる終わりを呟く美鈴の懐。

「……これで――」

脚、腰、肩、腕まで全てが円に沿うように回転させながら、吹き飛ばされた勢いすらも腕の先に収束される。
掌打を以ってして確実に衝撃が脳に伝わる事を狙う。

「――私の勝ちだ。」

「ぐ！　ぁ……？」

紅の顎への強烈な一撃は、大技を連続して使用した事で疲弊している美鈴の意識を刈り取るのには充分すぎた。
だが、想定外の事が起きてしまう。

「……しまった……。」

――首の骨までイった……。

「――というところまでやってしまってな。」

「って貴方は何してくれやがりますかっ!?」

美鈴が爆発した。

「まぁ、待ちたまえ。私が折れた骨は一度離してからズレないように位置を整えたから問題ないだろう?」

「いや、そうみたいですけど、いやいやいや……。」

「なに、君とて妖怪だ。そう簡単には死ぬ事はないさ。ちゃんとここまで連れてきたし、服も清潔なものに取り替えた。うむ。なんの問題もないな?」

紅がそう言うと美鈴は崩れ落ちた。

その際に「もうやだこのヒト」等と聞こえた可能性がないまでもない。

「冗談はコレ位にしようか。」

「……。」

美鈴のジト目が若干赤いのは紅の勘違いではないだろう。
ちょっと泣きが入ってる。気がする。

「……いや、すまんな。だが本題に入りたいのも確かなんだが……。」

「……どーぞ。」

「……すまなかった。」

頭を下げる。
紅の本気での謝罪に美鈴は眼を丸くする。

「……あ、いえ、決闘ですからそういう事もありますよね。こちらこそすみませんでした。」

そしてお互いに頭を下げる事になった。

「……ふふ。ありがとう。」

「でも、乙女の柔肌を見た事は許しませんから、覚悟してくださいね？」

流せなかったようだ。流石に妖怪でも乙女は乙女。
甘んじて恥じらいという名の粛清を受けざるを得ないのは何時の時代でも同じか。

「で、だ。この決闘騒ぎで何か掴めたのか？」

美鈴に問う紅は、頬に紅葉を携えているので些か以上に格好がつかない。

現に美鈴は現在進行形で腹筋を鍛えている事だろう。

「～～ッ！　ふぅ、はぁ……。何か、ですかぁ……。」

深呼吸一つで呼吸を整え紅の問いへの答えを探す。

「いや、それはいいか。……ちょっとした助言だ。何か足しにするといい。」

「？」

「『士は己を知る者のために死す』　日本の格言だ。」

紅は背を預けていた壁を離れると同時に妖気を高めて不名誉な痕跡を治す。

「……己を……。」

美鈴はその格言に何か感じるものがあったようで、己の世界に埋没している。

「美鈴。」

「あ、はい！」

「ではな。縁が合ったらまた会おう。」

別れの言葉も少なく家の扉を開け、外へ。
だがその前に美鈴の静止の声が掛けられる。

「……あ、待ってください！」

紅は立ち止まる。が、振り向かない。

「紅さん。次は、次は負けませんから。」

「……そうか。ならば勝ち逃げするとしよう。」

「え、ちょっ！？」

現状はまだ起き上がれない美鈴に出て行った紅を追う術はない。
だが別れ際のその言葉がどこか楽しそうに、嬉しそうに感じた。
それで充分かとも思う。

「……縁が合ったら、か……。」

呟いた声は虚空に消える。

「君との馬鹿騒ぎは楽しかった……。一時の間だが、ヒトに戻れたよ。」

力は力を呼ぶ。

身に余る力は狂気を。

狂気は破壊と悲劇を。

悲劇はさらなる狂気と破壊を呼び起こす。

それが、どういう行為なのかも理解している。

誰かを泣かせるかもしれない。

だが、今は狂気に身を委ねよう。

悲劇を生み出す修羅となろう。

この体中を舐め尽すかのような、〝黒い虫（ぞうお）〟に。

何かをしていなければ。

何かに集中していなければ。

抑えきれない程の憎悪にわが身を焦がされる。

沙夜を、死の淵へと追いやり。

愛するヒトをこの手で殺すという状況を生み出した貴様に。

何よりも。

それを傍観するしかなかった、無力な自分自身に。

この黒い怒りとざわめきが。

抑えきれない……！！

例え、それが逆恨みだとしても。

災厄となり、滅ぼされる事になろうとも。

もう、止まれない。

永享４年（１４３２年）
明を出立。

第十八話：運命の軋み。（後書き）

ぁ、お気に入りユーザー登録までしてくれる方がいらっしゃるみたいで。
本当にありがとうございます～。
もうちょい頑張ります＾＾

第十九話：止まる歯車、歪む歯車、巡る歯車。

幻想郷の人里。

「ただいま、妹紅。」

「……んー、おかえりぃ……。」

慧音の帰宅にも、気だるそうに横になったままの妹紅。
そんな”家族”の姿に慧音は嘆息する。
何時から妹紅はこんなにも怠惰になってしまったのか、と。

「妹紅……。全く……紅が居たらなんと言うか分かったものではないぞ……？」

「……アイツは……居ないよ。」

幻想郷に来て初めての満月の日。
慧音の能力が分かった。幻想郷中の知識を視る事が出来たのだ。
紅も能力の把握と制御を手伝ってくれた。

そして変身する満月の日に編纂しているうちに、その正しい知識を広めたい。
そのためにも寺子屋を開きたい。
次第にそう思うようになっていった。
慧音はその為に連日駆けずり回っている。

妹紅は紅が旅立ってから数年した頃に変わってしまった。
妖怪退治はそれでも時々している。

だが、何をしても退屈に感じるようになってしまったらしい。

「約束だと言っていただろう？　仕方ないさ。」

「約束だって！？　もう１５０年だぞっ！　ずっと家族を放置してまでしなくちゃいけない約束なんてあるのかっ！？　……ぁ……ごめん、当り散らしたりして……。」

妹紅はすぐに自分の行動を省みて、消沈する。

「……いや、気にしてないよ。」

そう、気にしてなどいない。
苦笑で返す慧音とて同様に思っているのだから。
――本当、何時になったら帰って来るんだ？　紅。

同時刻。
モスクワ大公国領（現在のロシア西部）にて。
紅は吹雪の中を彷徨っていた。

「ちっ。日中だと言うのにこれでは何も見えんな……。」

美鈴との邂逅の後、紅はエベレストを態々登頂した上で北に抜けた。
世界一の山を制覇してみたいというちょっとした欲求に従い、尚且つ、
魔術の構成を考える時間が欲しかったというのが主な理由である。

思った以上に時間は掛かってしまったが、
その甲斐あって能力を封じる魔術はもうすぐ完成という域にまで達した。

「……どこかに休める場所があればいいんだが……。」

世界を展開するという事は不可能だった。
世界の中に異世界を作り上げるという事は能力なら出来るかもしれない。
だが魔術で敢行するのは如何な大魔道士でも無理なのだ。
故に”能力を使えない空間”を”自分の身体を基点”に顕現させるという手法を取った。

簡単に言うなら”能力が使えない世界”を作り出すのではなく、自分の周りの空間そのものに”能力を使えない”という概念を付与したのだ。

「……面倒だな。風で探すか。」

紅は知らない。
本来、魔術で概念の再現など出来はしないという事を。

概念とは世界の根源。
概念を再現するという事は世界を再現するという事。
謂わば、他者の固有能力を魔術で行使する在り得ざる奇跡なのだ。

「……ん、あれは……こっちか。」

能力封印だけは別なのだと、紅は知らない。
能力を再現する方法として、間違ってはいない。
”核”となるモノがあるのならばこれで再現出来るのだから。
その”核”が何なのか、核が在るという事すら、紅は知らない。

「小屋、か。こんな所にある事を不審がるべきか、感謝するべきか……。」

知らずともその”核”を中心の添える形なので魔術自体は構築出来た。
だが現状では紅の保有する魔力を全て使って漸く数瞬発動出来る程度でしかない。
しかも効果範囲は自身を中心とした半径3メートル。
効率化という課題が残っているのだ。
しかし一度組み上げる事が出来たのであれば、効率化自体はそこまで苦ではない。
紅は10年もあれば現実的なものになるだろうと考えている。

「む？　……すまない、誰か居るのなら開けてもらえないだろうか。」

一度木で出来た扉を押してみるが開かない。
紅は施錠されているのだと判断し、中に居ると思われる人物に声を届かせるべく行動した。

つまり、ノックをして催促した。

「はいはい、どなた？」

すぐに返答があり古ぼけた小屋の中から１２～１３ほどの少女が出てきた。
その容姿は金髪で肌の色は薄く瞳は金。
一見すると人形のような姿をしている様にも思える。

「ああ、見ての通りの吹雪でね。休める場所を探していたんだ。」

「……そう。上がって。」

少女は若干の思考の後、紅に上がるよう促した。
その思考がどういったものか、紅には分からない。

「ありがたい。」

小屋の中に入っても目ぼしいものが見える訳ではない。
テーブルクロスが掛けられた小洒落たテーブル。壁には本棚が一棹。
多少人形が多いかとも思うが異常という程でもない。
テーブルに置かれたランプによる光源が薄暗く、趣のある妙な雰囲気を醸し出している。

「どうぞ。」

少女に促されるままに紅は椅子へと腰を下ろし、部屋の俯瞰を中断する。
少女は紅の反対側へ座ろうとしたが思い出したかのようにその動作を中断し、まるでマニュアル通りの感情の欠片もない問いを発する。

「紅茶の一杯くらいなら出すわよ？」

「折角の厚意だ。頂くとしよう。」

「……そう。少し待っていて。」

少女が別の部屋に繋がっているだろう扉の向こうに消えた。
紅が即答した事にか、その返答自体にかは定かではない。
だが確かに驚愕の感情が表情に表れていた。

「ああ。」

その感情の抜け落ちたかのような声音に多少なりとも疑問は持った。
だが、それで毒を盛られたとしても紅は人ではないので問題はないのだ。
即座に無視する事に決めた。

数分で少女は芳醇な香りを引き連れて戻ってきた。

「申し訳ないけれど、余り上等な茶葉はないの。これで我慢して頂戴。」

「いや、気にしなくとも結構。コレといって拘りがある訳ではないのでな。」

「あら、良い物は本当に美味しいのよ。それを知らないなんて損な人ね。」

「……そうかもしれないが最近は紅茶と縁が無くてね。」

そして次には紅茶を一口。
カップは紅茶を淹れる前に暖められたのだろう。紅茶の温度がそこまで落ち込んでいない。
紅は紅茶のゴールデンルールという物を詳しくは知らないが、少女知ってるのだと判断する。

その紅茶を飲み込む動作を見た少女は、紅を見た瞬間から続けていた警戒を多少ではあるが緩めた。

「……貴方は……。」

「何か、聞きたいことでも？」

「……いえ、なんでもないわ。」

少女の表情は暗い。
誰にだって聞かれたくない事くらいある、という事象に当てはまるのだと紅は推測した。

「……助言を一つ。」

「え？」

「男女が一つ屋根の下に居るならば、と考える者も居るだろう。そう簡単に警戒を緩めないほうがいい。」

「……え！？」

少女は紅の言葉を聞いて、身を護るように腕で身体を抱きしめる。

当然、紅にその気は無い。

「冗談だ。少なくとも今の私は誰かに劣情を抱けるような状態ではない。」

「……どういう事？」

少女は感じる危険感からか不安からか、眼が微かに揺れている。

「心に余裕が無い。それだけだ。」

「……そう。」

そして二人は口を閉じる。

吹雪の豪風に混じって木々が軋む不快な音が小屋を満たす。

小屋だ。

年季の入った小屋が、この強風で悲鳴を上げている。

その音を聞き流しながら二人は個人の作業を進める。

紅は脳裏で術式の効率化を。

少女は人形らしきものを編んでいる。

どれくらいの間、そうしていたのだろうか。

紅が意識を現実へと向けた時には小屋の外に光は見えなくなってい

た。
それとほぼ同時。
少女が人形を編み終えて伸びを一つ。

「ん、んん～～ッ、ふぅ……。」

そして数時間振りに喉を潤す水分を求めて席を立つ。
扉の前まで歩き、そこで一度だけ振り向き紅へ問う。

「私は紅茶を淹れてくるけど、貴方はどうする？」

「ん……そうだな。頂こう。」

「分かったわ。」

椅子に座ったまま紅は返答し、少女は扉の向こうへと消える。
未だに吹雪の勢いは止まる事を知らず、小屋は倒壊寸前にも感じられる程に耳障りな悲鳴を上げている。
少女が紅茶を淹れて戻ってくるまでの僅かな時間は魔術を扱っていた訳ではないからだろうか。
紅は、酷く退屈に感じた。

扉が開き、少女が姿を現す。
その手にあるカップは先程とは別種の香りを発している。

「……どうぞ。」

「ありがとう。」

眼前に置かれた紅茶を、少女の許可を受けて紅は胃へと流し込む。

一遍に飲み干すような真似はせず香りを堪能しながら、穏やかに感じるこの空間を感受する。

「……ねぇ。」

「何だ。」

「私が編み物をしている間、貴方はずっと何を考えていたのかしら？」

「……ちょっとした手品（インチキ）の仕掛けだ。」

今更その様な質問が少女の口から発せられた事に紅は若干の驚愕を覚え、眉を顰めつつも答える。

一応、「嘘」ではない程度に暈して。

「……ふぅん。」

「……。」

何故”聞かれたくない事”の可能性があるような質問をしたのか。

不審に感じる紅は静かに少女の内心を窺う。

そうして押し黙っていると少女が問う気が無いと思ったのだろう。

理解出来ないとでも言うかの様な表情で聞いてきた。

「……貴方。なんで何も聞かないの？」

――これは僥倖。こちらから問う必要は無くなったな。

「ハッ。何が言いたい？」

紅は僅かばかり挑発するかのような調子で少女の金の瞳に視線を叩きつける。
その行動に警戒心を、否。
危機感と焦燥感を煽られた少女は感情の赴くままに言葉を口にしてしまう。

「こんな子供が一人で町から離れた人気の無い寂れた小屋に居るなんて可笑しいでしょう!?　貴方だって不審に思ってるはずだわ。それなのになんで何も聞いてこないのよ!?　貴方は何が目的で私に近づいたの!?」

「……ほぅ。人形遣い（ドールマスター）か。錬金術……いや。人形は手編みだったな。魔術師か、それとも魔法使いかね？」

少女のその手と人形を繋ぐ糸を風が感知した。
これが少女の臨戦態勢なのだと紅は理解する。
そして少女の名前も、同時に確信を持った。

――アリス・マーガトロイドか。

紅の言葉を聴いて、最早隠す必要は無いと判断した少女――アリスは毅然と立ちあがり人形を繰る。
棚に鎮座していた全ての人形を。
人形達の軍団はアリスを護る盾の様に、外敵を殲滅せんが為の矛の様に、整然と陣取った。
相対する紅は席に座ったまま。ただし、その顔から感情というものが抜け落ちていた。

「……そうよ。私は魔女。今までの様に押し付けられた魔女の称号

ではなく、本当の魔女になったの。」

「魔女狩りか。運が無かったようだな。」

「白々しいわね。貴方は魔女を狩りにここへ来たのでしょう？　歓迎してあげる。この魔女のちか――ッ！」

「――ふむ。では、こんなモノはどうだ？」

アリスは紅の言葉と同時に頬をはっきりと〝何か〟が撫でた事に気付く。

否。気付かされた。

「風は我が刃。我が鎧にして、愛しき女性（ヒト）。貴様如きが空気のある場で私を害する等と自惚れるな、小娘。――縊り殺すぞ。」

「ぁ……。」

一瞬とはいえ紅の本気の殺気を真正面から受けてしまったアリスは椅子にへたり込んでしまう。

同時に全ての人形が墜ちる。

恐らくだが、アリスは人間を止めてから日が浅い。見た目相応の年齢と考えて相違ないだろう。

それを考えれば気を失わなかっただけでも充分だと言える。

「君が何を勘違いしているかなど知らんが、初めに言ったはずだ。吹雪を凌げる場所を求めただけだと。」

「……わ、私をっ……捕まえに来たんじゃ、ないの？」

アリスは身体を恐怖に震わせ、己で己を抱きしめながら問いを搾り出す。

「くどい。君が私の邪魔をしない限り手は出さん。だが君が私の敵になると言うならば――」

「なッ、ならないッ！　ならないから止めてッ！」

紅が剣呑な気配を発するのを必死になってアリスが遮る。
もう二度とあんな殺気を感じたくないという懇願だ。

「それでいい。」

「はぁ～。……貴方一体何なのよ……。」

深い溜息もそこそこに心底疲れた、といった風にアリスがテーブルに突っ伏して呟く。
その呟きを耳にして紅は、すっかり冷め切ってしまった紅茶を飲み干して一言。

「……知りたいか？」

「ッ！？　知りたくない知りたくないから！」

「ふ……。そう怯えなくてもいい。知りたいのなら極東の島国へ行け。」

「……島国？」

アリスは紅の素性ではなく地方を示された事に疑問をオウム返しに

する。

「そうだ。そこに幻想郷という人外と人間の共存出来る世界がある。魔女狩りに嫌気が差したのなら行ってみるといい。私はそこの住人だ。」

「幻想郷……？　そこには、魔女狩りはないの？」

「ああ。無闇に人間を襲わないのならば問題はない。」

「……まるで理想郷ね。」

「まさしく理想郷だ。いずれは殺しも殆ど無くなるだろう。」

――その平穏がずっと続く訳ではないだろうがな。

「……ねぇ、貴方はなんでその理想郷から出ているの？」

アリスは純粋にただ不思議に思った、そういう顔をしている。
幼いが故の無邪気さという事だろう。
行動にまだ裏表が殆ど無いのだ。

「……子供はもう寝ろ。」

「……そう。なら、もう寝るわ。そのランプは貴方が消してね。」

多少なりとも不満気な色が見える。
だが、この娘は愚かではない。話したくない事だと察して身を引くことが出来る。

紅はこんな子供に泥臭い復讐を見せるべきではないと考える。
或いは、既に知ってるとしても。
それはアリスに、子供に対する配慮か、それともプライドか。
紅自身にも分からない。

「私はこっちで寝るけど、入ってこないでよ。」

アリスが扉の向こうへと消える。
吹雪に覆われた夜が更け、白銀の暗闇にひっそりと建つ小屋で紅はポツリと呟く。

「……毛布の一枚も無しってのは中々堪えるんだが……。」

薄く空気の膜を作って断熱した。
凍えずに済みそうで何故か妙に嬉しかった。

夜明け前。
紅の耳は風から伝わる微かな空気の振るえを感じ取った。

「ん……。これは……犬、か？」

風を最大限生成し、薄く半球状に広げていく。

――居た。4、5、6、7。……7匹の犬に先導されているのは剣のヤツも居れば鍬なんかの武器になりそうな物を持ってるヤツら。

これは当たりだな。しかしどうやって？　……まさか、私の匂いが残っている？　確かに町は通ったが……。

「ちッ。」

すぐにアリスの寝ている部屋へと押し入る。
扉を潜り、床に布を敷いて二枚の毛布に包まるアリスを揺り起こす。

「起きろ。……おい、さっさと起きろ！」

「ん……え？　あ、あにゃた！　やっぱり幼女趣味らったのね……！」

紅はふざけた事を抜かすアリスの胸倉を掴み上げ、無理矢理にでも覚醒させる。
今は時間が惜しい。戯言には付き合っていられない。

「いいから起きろと言ってるんだッ！」

「ひゃっ！？　な、何よ大きな声を出さないで！　大体貴方が――」

一喝され、飛び起きて意識をクリアにさせられたアリスが紅に突っかかるが、紅はそれを遮る。

「――討伐隊と思われる連中が此処に向かってきている。今すぐに出る準備をしておけ。」

「え！？　ど、どういう事？」

流石に行き成りすぎる展開にアリスは付いていけない。

ただ質問する事しか出来ない。
紅は無闇にプレッシャーを掛けない為に少々茶化して説明する。

「……犬のお巡りさんだ。恐らくだが、私の匂いを追っているのだろう。すぐ此処に辿り着く。」

「……そう、分かったわ。貴方はどうするの？」

紅の匂い、という部分に眉を顰めるが、咎めても仕方が無いと言葉にする事はなかった。

「私は当初の予定通り、西のオスマン帝国、或いはワラキア公国へ向かう。君は東か？」

「ええ。貴方の言っていた幻想郷という所にも興味があるし、ね。」

アリスは会話とともに持っていく物を毛布に包む作業を進める。
その殆どが人形というのも凄い光景にも思えるが。

「そうか。ならこれを持っていくといい。」

紅は符を二枚、アリスに手渡す。
アリスにとって、それなりに馴染みのある特徴的な文字が描かれている。
曲がりなりにも魔術師なのだから。

「これは？」

「空間転移符だ。座標指定の代わりに跳躍する先を脳裏に思い浮かべろ。そうすれば使える。使った後も幻想郷で見せれば私の紹介だ

と分かるはずだ。持っていけ。」

「……そう、ありがとう。ありがたく頂くわね。……でも私、貴方の名前なんて知らないわよ？」

アリスは手荷物の準備を終えたのか、顔を上げ紅を仰ぎ見て問う。

「む、そうだった、か。そうだったな。私は紅だ。君はなんというのかね、お嬢さん（フロイライン）？」

「私はアリス。アリス・マーガトロイドよ。」

「ふむ。ではアリス。もう時間が無い。出るぞ。」

「ええ。」

「ではな。アリス・マーガトロイド。」

「ええ、紅。貴方が何を焦っているかは知らないけれど、頑張りなさいよ。」

「……善処しよう。」

「何よそれ？　まぁいいわ。縁があればまた会いましょう。」

「ああ。」

小屋の前で二人は一時の邂逅を終えて再び別れる。

文明１８年（１４８６年）
紅はモスクワ大公国領、ウクライナ周辺を抜けモルドヴァ、ワラキア公国へ。

幻想郷。
冥界、白玉楼にて。

「やっほ～。幽々子、元気にしてる～？」

無数の眼が蠢く世界から出てくるのは、境界を操る大妖怪。
八雲紫。
いつかの六十四卦の「萃」が描かれた服ではなく、肩口の開いた洋風の服を着用している。

「あら、紫じゃない。ずっと何やってたのよ～。もう朝よ？　飲み放題って言ったのに貴女が居ないと飲めないじゃないのっ。」

対するは、冥界の管理者。死を誘う亡霊姫。
西行寺幽々子。
蒼い死装束が特徴的な女性だ。
桃色の髪と、同じく桃色の瞳が儚さを感じさせる。

「ごめんなさいね。ちょっと結界の調整で忙しかったのよ。」

「結界？　あ～、夢と現とかなんとかって言ってた気がするかも～。」

「まぁ、それで間違ってないけどね……。藍、おつまみお願いねー。」

その分かっていた催促を受けて藍は白玉楼の厨房へと足を向ける。
勝手知ったる人の家というものだろう。
他に人が居れば、藍のその背に哀愁が漂っているのを見てしまったかもしれない。

「……分かりまし――」

「幽々子お嬢様ぁっ！！」

その返答と同時、居間の障子を勢いよく開け放って魂魄妖忌が姿を現した。
引き締まった身体に、二振りの太刀を腰に持つ、初老の男性だ。
頭髪は少なく、真っ白な髭が特徴的と言えるだろう。

「やっほ、妖忌。お邪魔してるわよ～。」

「……毎度すみません……。」

強大な妖気を感じて飛んできたというのに相手は主の友人。
紫の来訪を白玉楼の主である幽々子が拒否していない時点で妖忌には何も言えなくなる。
毎回謝罪してくれる藍には自分と同じく苦労人なのだと、妙な仲間意識が生まれてしまうが。

「……また、ですか。八雲殿……。」

「ふふふ……。また、ですわ。」

「……手伝いましょうぞ、藍殿。」

「……ホントすみません……。」

「ツマミは妖忌たちが持ってきてくれるわ。他にはないのかしら～？」

幽々子は早速一本の酒瓶を空け、そう。
一本空けて紫に問う。

「ん～、そうねぇ。結界云々で忘れてたけど、面白い話が一つあったわね。」

紫はスキマから料理を出しながら話す。

「へぇ、どんな話？」

「私に決闘を申し込んで来たのが居てね。」

「ほぅ。我を差し置いてか。」

ここで一人の女性が居間に入室し、予め用意されていた席に着く。
服装は、長袖の、しかし肩口の露出したブラックのセーターにブラウンのスカート。
そしてグレーのニーソックス。
そして腰まである真紅の髪に真紅の瞳。髪の中から特徴的な、狐の耳。
同じく真紅の尻尾が、この女性が人外であると主張している。

「貴様に決闘を申し入れたのは誰だ？」

眼前に用意されていた酒一瓶を一息で飲み干して、女性が問う。
いや、答えを強要されている様にすら感じる者も居るだろう。
その威容は尋常のものではない。

「紅って半人半妖よ。」

「……ほぅ。」

女性も多少は驚いたように見える。
それは紅という名前か、半人半妖という種族にか。

「半人半妖？　妖忌みたいね～。」

こちらは驚いてはいる。
が、紫のスキマから出された料理の方が優先されるようだ。
紫が料理を出したのも、随分な量があるこの料理が無ければ亡霊姫に全て飲まれてしまうから出しただけ。
藍達の苦労は減らない。

「そうね、珍しいわよねー。」

「いつだ？」

「分からないわ。私と戦うのに相応しい状況を用意するって言ってたわねぇ。」

「それじゃあ、いつになるか分からないんじゃない？」

幽々子が口を挟む。
完全に話よりも食に意識が傾いているのだろう。
最早手が霞んで見える程だ。一瞬にして膨大な料理が胃袋に消えてゆく。

「だから、分からないのよ。ま、何時でも問題ないけどね。私があの程度の人妖に遅れを取るなんてありえないもの。」

「あ、なんか負けフラグっぽい～。」

だが、聞いていない訳ではないらしい。
しかも内容が内容だ。
紫が吼えるのは無理も無い事だ。

「そんなんじゃないわよっ！」

「ふむ、面白そうだな。闘り合う時は我にも見せよ。」

「……決闘の後だからって私を討てると思わない方がいいわよ？」

紫と女性の間には確執があるのだろうか。

紫は漁夫の利を狙っているのでは、と邪推するが違うらしい。

「偶然で拾った一度だけの勝利に酔っていろ、そして聞け。我は、『その決闘を見てみたい』と言ったのだ。」

「あらあら～、これまた珍しいわね～。」

「本当ね。何が貴女の興味を引いたのかしら、ねぇ――――沙夜？」

沙夜（さや）と呼ばれた女性は不敵な笑みを浮かべ、ただ一言。

「さぁな。」

と言うだけだった。

第十九話：止まる歯車、歪む歯車、巡る歯車。（後書き）

魔術：魔方陣を魔力で編み上げ、術式と成す技法。魔術によって成される事象の多様性は非常に高い。魔術の中にも多くの技法が分類されている。その数は魔法とは比べ物にならない。故に必要とされる知識も多岐に渡る。
魔術を扱う者を魔術師と呼ぶ。

魔法：魔術と対を成す詠唱のみで術式を構築する技法。魔術と比べて修める必要がある知識が集中している。魔法の効果は、詠唱が長くなれば長くなるほど高まってゆく。例外として神言が上げられる。
魔法を扱う者を魔法使いと呼ぶ。種族ではない。

神言：既に失われた魔術言語。一唱節で大魔術を成す事可能。

魔法術師：魔法と魔術の双方を修めた者を指す。ただし魔法だけ、魔術だけを扱うのにも専門的な知識を多く必要とするため長い年月を生きた種族としての”魔法使い”でなければ不可能。

魔法使い：人間が種族として魔法使いとなるには「捨食の魔法」で後天的に「種族」としての魔法使いとなる必要があり、さらに「捨虫の魔法」によって寿命のない状態になったものが完全な魔法使いとされる。

ついでに。「犬のお巡りさん」＝「Ｄｏｇ　ｐａｔｒｏｌ」＝「捜索犬」間違いじゃないさ★
我という一人称ですが、「われ」です。「オレ」とかじゃありません。

第二十話：二つ目の約束。（前書き）

感想貰えると泣いて喜びます。

第二十話：二つ目の約束。

ワラキア公国に到着した紅。

アリスと別れてから２３年程経っている。
何処が誰の領地か、など王家でも無ければ把握している訳がないのだ。
誰に聞いても自分の住んでいる土地の領主の名前は言えても、誰が何処の土地を修めているのかを正確にはわからない。
商人などから伝え聞いた農民の情報を元にあらゆる方角へ渡り歩いているうちにそれだけの時間が経過してしまったのだ。

商人に聞くには金が要る。
だが、少なくともこの国の紙幣など当然紅は所持していない。
商人相手に暴力沙汰を起こせば、全ての土地で悪評が付くのでそれも不可。

地道に農民の皆様に訊ねて回り、ワラキア公国ではなくオスマン帝国領にあると知った。
そして帝国領でも同じように行動し、スカーレット家の領地を知った時には２０年も経っていた。

「――苦節二十余年。此処に辿り着くのに多大な時間を費やしてしまった……。」

漸く、目的地に辿り着いた喜びを噛み締めるのもいい。
眼球から思わず汗が。心の汗が。
流石に醜態だったようだ。紅は衆目を集めてしまう。

余り長い時間奇異の眼に晒され続けるのは精神衛生上よろしくない。
不意に視界に捉えた領民の男性を一人を捕まえ、訊ねる。

「失礼。スカーレット家の領地はここでいいのか？」

「……ああ、そうだが……お前さん、領主様んトコに何か用か？」

男は紅を上から下まで視線で探ってから短く、そう答えた。

「……雇って貰おうと思ってな。」

「無駄な事は止めておくんだな。あの領主様が――」

「――貴様は黙って質問に答えろ。領主の住む館は何処だ？」

人間であろうとも本能が危険を察知する、してしまうレベルの存在は居る。
些か以上に時間を取られた事で不満が溜まっているのか、少々威圧した。

同時。
周りに居た人間が少なくなった。
多少距離があっても”何か”を本能が感じるのだろう。

「……ぅ、あ……。」

「答えろ。」

短く、ただそれだけを促す。
男は口を開くも、恐怖、緊張などで喉からは呼吸音が漏れるのみ。

たが、震える指が館の方角を示そうとしている。
示された先の、小さな丘の上に館が確かに存在していた。

「……ふぅ、あっちか。ああ、威圧してすまなかったな。」

気を静めれると男性は極度の緊張から解放され、崩れ落ちる。
紅はそれを見もしないで上っ面の言葉だけを掛けて館へと向かっていった。

「はぁ……はぁ、はぁ……。ありゃあ一体……何だってんだよ……。」

崩れ落ちた男の声は虚空へ飲み込まれた。

館へと辿り着いた紅は知っていたが、その色彩に驚愕した。
館のどこを探しても深紅の色。
唯一の例外は屋上に見える巨大な時計くらいだろう。

――これはすごいな……。

飾り気の無い素直な感想しか思い浮かばない。
それほどまでの異様にして威容を誇っていた。

外観を眺める紅に給仕姿の女性が近づいてきたのを風が感知する。
門の外から見上げ、呆けていたのは些か不審だったようだ。

「当館に何か御用でしょうか。」

「ああ。此処の領主殿に雇っていただきたい。」

紅が間髪居れずに答える。

だが女性は取り付くし間もなく返す。

「現在この館は人員の募集をしておりません。お引取り下さい。」

「……ふむ。では――」

「あっ！？」

女性は背中を何かに押されるようによろけた。

そこに門の隙間から紅が女性を捕獲すし、その首に氷のナイフを添える。

「――君の命と引き換えにでもすればいいのか？」

「……後悔、なさいますよ……。」

「それはないさ。事実、雇われに行くのだから。さあ、門を開けてくれると私は非常に助かるよ？」

紅がそう言い、女性を解放すると門を引き抜いて開門する。

そして女性は招かれざる客――紅を歓迎した。

「――ようこそ、悪魔の館へ。」

女性は門の内へと紅を招き入れたが館には入らず、
中から出てきた別の女性に紅を預けると庭の管理とやらに戻った。
どうやら幾つかの仕事に分業されているらしい。

――薄暗い。

紅魔館の中へと入り、光の差し込まない廊下で紅は思った。
窓には余さず厚手のカーテン。蝋燭や、ランプによる弱い光源。
床に敷かれた真っ赤な絨毯。
その全てが光を拒絶しているようにも感じる。

現在紅を案内しているプラチナブロンドが美しい長髪の女性は淀みなく歩を進めている。
恐らくその先には紅魔館の主が居る。
そう、吸血鬼が。
だが多少不思議に思う事がある。

この館に従事する人間が奴隷に堕ちていない。噛まれてすらいない。
ここの従業員には吸血痕がないのだ。
見目麗しい女性ばかりを雇っているのは、その嗜好を満たす為かと思ったのだが違うのだろうか。
少なくとも紅の知る彼は人間を対等と見做(みな)してなど居なかった。
面白いとは思っていたようだが、それだけだったはずなのに。

――人間では無い事を隠している？　いや、門番は知っている様に

も……。

広い館を無言で歩き続ける給仕の女性と紅。

「君達は、この館がどういう館なのか知っているのか？」

「勿論でございます。私共は此処が『悪魔の館』であると理解した上で雇って頂いているのです。」

「……それ程までに此処は居心地がいい、と？」

「はい。例え旦那様、いえ、主の一家が人で無くとも貧困に喘ぐ事無く、家族に仕送りする事まで出来ます。此処以上の勤め先を私は存じません。」

女性の言葉には全くブレがない。歩みも、呼吸にも変化はない。嘘は、全く含まれていない。

人では無いと知って尚、此処に仕える事に不満は無いという事。

「……私とて、此処の主がどういう存在かは知っている。吸血行為は無いのかね？」

「直接的な吸血行為はなさいません。私共給仕がローテーションで血液を用意するのです。」

「……犯罪者か何かを捕らえるのか？」

「いいえ。手首を切りカップに、でございます。傷も旦那様に治して頂けるので問題ありません。――こちらになります。」

女性は左右に押し開く形の重厚な扉の前で振り向いた。
そして宣言する。
この館に仕える者として。

「此処に我らが主がいらっしゃいます。主が何よりも嫌うのは退屈。ですが貴方という矮小な存在に期待など致しません。主が楽しめるよう、精々面白可笑しく振る舞いやがってくださいませ。」

扉が開かれる。

紅は紅魔館の主の間へと足を進める。
王宮を想像させる荘厳な造りの、随分と広い部屋。
この部屋には絨毯が無く、石か何かの硬く滑らかな床が足音を響かせる。
流れる三拍子のクラシック音楽は、円舞曲（ワルツ）だろうか。

紅の居る扉側とは反対側の端に、男が一人。
そこは床より何段か高くなっていて、豪奢な王座が設けられている。
王座に腰をうずめて足を組み、音楽に合わせて肘掛けを人差し指で叩いているその男は、一見すれば人間の様にも見える。
だが、強大な妖気がそれを否定する。

紅は２０メートル程ある距離を一歩づつ踏破してゆく。
暗がりでよく見えなかった男の姿が見えてくる。
赤い宝石らしきもので飾り立てられたカフスも豪華な膝丈のコート。
純白のスカーフを胸元にあしらい、半ズボン、ソックスに艶の見え

る革靴。
まさしく貴族、という装いの全身が深紅に染め上げられた吸血鬼。
吸血鬼がゆっくりと立ち上がって、王座脇の台座から一振りの剣を持ち上げた。
鞘が振り払われ、顕わになった刀身は遠めからでも炎熱を纏っているのが分かる。
後ろで扉が閉じる重い音が響く。その扉を護るのは先程の女性。

「……暑苦しい……。」

「それは私に言っているのか。」

紅の呟きを聞き取ったのだろう。吸血鬼の身体機能は人間とは根本から違うようだ。

「しかし、久しく私を討とうとしている者が現れたと思えば……とんだ退屈しのぎのようだ。」

吸血鬼は剣で空を一薙ぎし、喉の奥で低く笑った。
紅を嘲笑しているようだが挑発に乗ってしまう訳にもいかない。
何より敵対しに来た訳ではないのだから。
更に歩を進め、問いかける。

「……何故、私がお前を討つという事になってる?」

「給仕が伝えに来た。不逞の輩が私を討とうとしていると。」

「あー、この館に入るのに給仕を脅したからかもしれん。勘違いさせたようですまないな。」

紅の言葉で吸血鬼の動きが止まり、数秒間固まった。
漸く言葉を理解したのか、割と乱雑に王座へと腰を落とした。

「……ならば貴様は何の用で来た。」

「雇ってもらおうと思ってな。」

「要らぬ。」

にべも無く断る吸血鬼。
だが、紅は引き下がらない。

「それでは困るんだよ、ヴラディスラウス・ドラクリヤ。」

ヴラディスラウス・ドラクリヤ。ブラド・ツェペシュを示す名前。
彼の吸血鬼が、娯楽を求めて成りすました存在の名前。

「……貴様。」

「クク……冗談だ。冗談だとも、アルカード・スカーレット。」

「……どこでそれを知った。」

返答の代わりに紅は懐からある物をアルカードへと放り投げる。
その手で受け止めたアルカードは、その物体が何であるかを確認すると同時に慌てて己の懐を探る。

「……これはどういう事だ。」

「見て分からないか？」

「分からぬから聞いている。これは何だ。」

アルカードは投げ渡された”古びた牙”を掌に乗せ、紅に見せつけるようにして詰問する。

”未だ生きているかのように見える牙”を隣に並べて。

対する紅の答えは簡潔だった。

「君の妻の牙だ。」

「何故コレを貴様が持っている。いや。何故それが其処にある。私が持っているコレと同じソレはなんだ。」

「いつかのお前さんに託されたから、さ。」

それは時間跳躍という奇跡を起こしたという事。

「ふざけるな。その様な事が出来る者が――……。」

本来そんな事は余程時間を理解しなくては不可能であり、一存在が時間を理解する事など不可能なのだ。

そしてアルカードには、その有り得ない存在の心当たりが合った。

「……貴様。あの女と同じ時間軸を失いし者か。」

「いや、私は時間軸を失った訳ではない。彼女は私の永遠の伴侶でね。」

「伴侶。なるほど。貴様が時を超えた事は認めよう。だが貴様の知

る私は貴様に何を見たのだ。」

「君自身で確かめてくるといい。私に聞くのではなく、ね。」

これで、問うべき事はお互いに問うた。
アルカードが王座に座り込んだまま一度深い溜息をついた。
顔を手で隠し、指の隙間から眼が覗いている。

「……貴様はここで何をするつもりだ。」

「君の二人の娘が無事成長するように。そして魔道の探求だ。図書館があるだろう？」

紅と未来のアルカードとの約束。
そして紅魔館という館を己の陣地にする為に。

「私のメリットはなんだ。」

「沙夜が何時、何処に現れるかを教えよう。追いたいのだろう？君を叩きのめした彼女を。この情報で十分だと思うが？」

紅とアルカード。
二人の視線が交錯し、世界が止まる。
時間にすれば数秒だろう。
だがその数秒間、二人によって部屋の空気が凍りついた。
固まった世界を払拭したのはアルカード。

「……いいだろう。貴様をヴワル魔法図書館の司書として雇ってやろう。」

出て来た返答は紅が最も望む物。
最上の結果に、差し出した対価は沙夜の居場所。
例え、アルカードが沙夜をどうしようと思っていても問題はない。
絶対的強者には勝てない。紅はそれを知っている。
紅は沙夜に戦闘という名の娯楽を提供したにすぎないのだ。

「ほお……。それはいいな。もう一つは？」

「貴様は娘が無事成長するようにと言ったが世話は給仕にさせている。貴様の関与など不要だ。」

「戯け。子は親の無償の愛（アガペ）を欲するのだ。何故お前自身が構わない？」

慈しまれた事のない者が、誰かを慈しむ術を得られるはずがない。
アルカードはその程度の事が分からない愚か者ではない。
災厄となれば、それは身の破滅だと理解している。

「面倒だ。そして私が手を出さずとも勝手に育つ。血液さえ用意すれば問題はない。」

「お前、それは――」

「――それにだ。妻はレミリアを可愛がっていたがフランドールは生まれると同時に妻を壊したのだ。最早私に子は愛せん。」

フランドール・スカーレットは己を生んだ母を壊した。
それが彼女の狂気の苗床なのか。
或いは理解しておらず、孤独が精神を蝕んだのか。

「……レミリアは、フランドールがした事を知っているのか？」

「知らせていない。出産どころか懐妊すら知らせていなかった。なに、アレ等も吸血鬼だ。心配は要らん。」

妖怪は一個の存在として確立している。
純粋な妖怪であれば肉親の情が厚い種は限られる。
吸血鬼の情は、親子間では働かないのだろうか。

「……そうか。まぁいい、私は私で好きにやらせてもらう。お前の娘への干渉もな。」

レミリアの運命を操る程度の能力は、フランドールの破壊の運命を見るだろう。
それが、地下へ幽閉した原因だろうか。
紅は二人には仲良くして貰いたい。百合の花が咲こうと知ったことではない。

「……好きにするといい。あの女が現れる時期には伝えろ。」

「ああ。」

そうなれば、紅魔館の常駐戦力が増えるのだから。

「アンネローゼ、案内ご苦労。ああ、主の間までの案内もか。」

紅はヴワル魔法図書館の扉まで案内してくれたプラチナブロンドの女性、アンネローゼを労う。

メイド長故に雑事も多いようだ。気苦労は如何ほどか。

「……いえ、お気になさらず。」

庭師の女性はカルラというらしいが、彼女と仲がいいのだろう。

紅が司書になった事をアルカードに伝えられた時の表情は言葉では表現しきれない壮絶な物だった。

「そうか。では仕事に戻ってくれ。これからは図書館の掃除も私がやるので手は要らん。」

紅はそれだけを言って図書館入り口、観音開きの扉を開ける。

そこはまるで本の世界。

壁は全て本棚で覆い隠され、その全てに本が納まっている。

本棚の上部から下げられたゴンドラには床と同じ絨毯が掛けられている。

天井からは幾つかの光源が吊るされ、光量は十分。

角の一箇所には螺旋階段が設けられ、本棚の上に扉が見える。

かなりの高所であり、図書館を俯瞰するのには丁度いい位置だ。

そして中心には純白のテーブルクロスの掛けられた円形のテーブル。

椅子は三つ備え付けられている。

今まで使用する者が居なかったかもしれないが、掃除はキチンとさ

れているらしい。
図書館に乱雑に置かれた本は一冊もない。

「……まずは、魔力の確保か。」

フランドールは人と接する事なく５００年を孤独に過ごしたが故に狂った。
いや、情緒不安定で済んでいたのかもしれない。
どちらにしても彼女と長時間接するには能力を無効化しなくてはならない。
レミリアに運命を操作されるのも勘弁願いたい。

この紅魔館は一級品の霊脈の上に建立されている。
霊脈に流れる莫大な星の魔力を利用しない手はない。
だがそれに関連する魔導書（グリモワール）を見つける作業から始めなくてはならない。

「はぁ～……。」

さらにはその魔導書（グリモワール）の解読もある。
解（キーワード）の鍵を見つけられなければ知識を詰め込む事もしなくてはいけない。
年単位を見積もっておく必要があるだろう。

紅が深い溜息を漏らしてしまうのも無理はない。

「……好きにするといい。あの女が現れる時期には伝えろ。」

「ああ。」

ヤツが背を向ける。

「……アンネローゼ。ヤツを図書館まで案内してやれ。」

「……あ、はい。」

珍しくアンが醜態を晒しているが、何か合ったか。
少なくとも私の記憶にはない。あの男が何かしたのだろう。

「……娘、いや。」

娘をどうするつもりなのか。いや、ヤツの思惑等どうでもいい。
あの女だ。
ヤツはあの女の居場所を特定できると言ったが……。
この私を地べたに這い蹲らせたあの女は一体何だというのだ。

ありとあらゆる物を燃やし尽くす程度の能力を以ってして敗北したのはかつて無い経験だ。
能力以前に戦闘技能は超絶たるものだった。

「……ク、ククク。」

だが、その強い女を屈服させた暁には。

一体どれだけの悦楽なのだろうか。

それだけに気になる。

ヤツは己の伴侶が負けない絶対の根拠でも持っているというのか。

私があの女と出会えば殺しあう以外に選択肢など無い事くらいは気付いているだろうに。

「……馬鹿馬鹿しい。」

ヤツは私を知らんのだ。

あの女の首でも見せてやれば面白そうだ。

第二十話：二つ目の約束。（後書き）

いずれ過去編？とかそういうのもやる必要あるかなー。
要望があれば、ですかね。かなりオリジナルすぎるんで。

次回はレミリアとフランとの絡み。
のつもり。

沙夜ちゃん生存？みたいのも入れます。

第二十一話：ターニングポイント。（前書き）

次回は全て明かします。
この件に関しては。

第二十一話：ターニングポイント。

幻想郷。
冥界、白玉楼。

庭園にて対峙する二人。
そしてそれを縁側で眺めるのは白玉楼の主とその友人、その式神。

燃えているかのような深紅（クリムゾン）の髪。
爛々と、力強く輝く真紅の瞳。
そして、頭髪と同じ色の九本の尾っぽ。
九尾の狐だ。

そんな紅（くれない）に身を染める女性――沙夜が見事な庭園で自分と対峙する死に装束を着た初老の男性――魂魄妖忌を視線で射貫いている。
いや、瞳に映っていても見えてはいない。
聞くものに畏怖を刻み付けるような深遠な笑いを溢しているのだから。
しかし、その声はどこか妖艶で魅力的にすら思えるのは何故だろうか。

「ふ、ふ、ふっふっふっふ……。」

その瞳が見つめる先に何が在るのか、それは彼女にしか分からないだろう。
少なくとも妖忌には理解が出来なかった。

普段は手合わせを願っても嘲笑し、受け流すだけだった彼女が何故、今になって応じたのか。

最近は機嫌が良い状態が続いているのが何か関係あるのか。

――考える時ではないのぉ……。

妖忌が一般的な刃渡りの太刀と身長にも及ぶ大太刀を構えているのに対して、彼女は無手。
さらには心此処にあらずという状況なのに隙を見出せない異常。

隙が無いだけならば、崩せばいい。
だがそれが出来るまでの間、打ち合っていられる自身を想像出来ないのだ。

――私とて未だ修行中の身。だが、これは……。

「どうした？　来ぬのか。ならば我から攻めてやろう。感謝するといい。」

「！」

――手も足も出ないとはこの事か……。

自分から攻める事が出来ないのならば、受ける。
それ以外に選択肢がない。
妖忌は二振りの太刀を鞘に収め、大振りの太刀の柄に手を添える。

――居合い。これしか有るまい。

妖忌の選んだ太刀は、居合いには向いていない。
余りに長すぎる刃を鞘から抜ききるのに時間が掛かるのだ。
鞘滑りすると言っても軽いほうが楽なのは確か。

だが妖忌とて一角の武人。大太刀での居合いが出来ない程未熟ではない。
数百年の研鑽はそこまで甘い訳ではないのだ。

妖忌は構える。
己の殺傷範囲に気を研ぎ澄ませる。
対する沙夜はあくまで余裕の自然体で歩んでいる。

後3歩で範囲に入る。

三歩。

二歩。

一歩。

――今ッ！

踏み込みと共にに刃を鞘で滑らせ、加速させる。
腰の捻りに連動させて肩、腕と円運動を太刀に収束させていく。
だが鞘から刀身が見えはしても、その刃を抜ききるには至らなかった。

「ッ！？」

沙夜は妖忌の踏み込んだ右脚に左の足を乗せ、その脚が妖忌の右腕の動きを阻害した。
同時に沙夜は右膝で妖忌のこめかみを狙い打つ。

シャイニングウィザード。

「動きが硬いぞ、小僧。」

魂魄妖忌は、一瞬の交錯を終えたと同時。的確に加えられた衝撃によって気を失う。

意識を手放す瞬間に掛けられた言葉に返せたのはたったの一言。

「……白。」

「あら、妖忌ったら後でお仕置きね～。」

それは己の剣術指南役が容易く敗れたと事実にか、或いは最後の発言にか。

西行寺幽々子は陽気なままで怒気は感じない。

それが救いかどうかは龍神様のみぞ知る。

「ふふっ、そうね。それよりも、藍？」

「っ！　……はい……。」

紫の隣で正座の上にきっちりと背筋を伸ばしている藍の返答は小さい。

「どうして同じ九尾の妖弧なのにこんなにも違うのかしらね？」

「……。」

紫は既に自分でも感じていた現実で意気消沈している藍に容赦なく追い討ちを掛ける。

それは藍が崩れ落ちるのには十分だったようだ。

背から力が抜け落ち、額を激しく床に叩きつけてしまう。

「あらあら、気にしちゃ駄目よ～。」

「……そうね、あんな例外中の例外を気にしても仕方ないわよね……。」

「何の話だ？」

そこに妖忌を容易に降した本人が戻ってくる。

何の躊躇いもなく縁側に腰掛け、藍が用意したお茶を啜る。

紫は、何気なく其処に存在する異端に問う。

「ん～……そうね。何故人間ではない貴方が亡霊として此処に存在しているのか、よ。」

「何か、可笑しいか？」

沙夜の声音は、本当に不思議に思っていると捉えられる。

演技か、否か。いや、これを騙した所で利はないだろう。

「……亡霊っていうのはね、人間が死した時に死んだ事に気付いていない者や、死を認めたくない者が成るモノよ。妖怪が成ろうと思

って成れる存在じゃないの。」

「くはははは！　別段可笑しい事ではないではないか！」

庭園に響き渡る呵呵大笑。

余りにも愚かしいとでも言うかのように高らかに沙夜は紫を嘲る。

「……どういう、事かしら？」

「そうね～。私も私以外の亡霊なんて沙夜以外に見たことないし、教えてくれない？」

紫の怪訝な声に被せるように幽々子のおっとりとした声が聞こえる。

紫が不機嫌になった気がしないまでもないが、気にしない方がいいだろう。

そして意識がない妖忌が羨ましいと藍は突っ伏したままそう思った。

「簡単な事だ。亡霊とは死を拒絶した者が成り果てるモノ。妖（あやかし）は人間のように死を否定せん。死を否定する理由がないのだからな。故に亡霊になどならんのだ。」

湯のみを空にしてから沙夜は語る。

「へぇ～。なら私って何か未練でもあるのかしら？　ハッ！　やっぱり世の中の食を全て食べつくさないと駄目なのねっ！」

「……貴女にはその理由があるのね。」

幽々子の発言を綺麗に無視し、紫は小さく呟いた。

沙夜には聞こえていたのだろう。口の端を吊り上げ、怪しく嗤って

いた。

「ねぇ、私を無視しないでよぉ……。私は寂しいと死んじゃうのよ～？」

「……それは無理よ。」

紅魔館地下。
ヴワル魔法図書館。
地下からの入り口と、一階からの入り口が設けられた大図書館である。
そこで、二人の男女が読書に耽っている。
一人は紅。もう一人は紅魔館に使えるメイド。

「イッヒ、紅茶を頼む。」

「はい、ただいま。」

イッヒと呼ばれた給仕姿の金髪に碧眼の女性は、紅の身の回りの世話を言い渡されたメイドだ。
名前はイングヒルト。イッヒとは愛称である。
普段から会話はないが、イングヒルトは少々長く呼び辛いので紅が名づけた。

今は一日中このヴワル魔法図書館に居座っている紅の世話をしなくてはならない為、イッヒも同じように一日中図書館に篭る事になった。
それでは退屈だろうと、紅が解読して――或いは解読の必要のない物も含むが――安全だと確認された本を一つの棚にそろえる作業を手伝わせている。
勿論、その棚にある本に限り好きに読んでいいと言付けて。

「どうぞ。」

イッヒが紅茶を淹れたポット、そして二つのカップを用意する。

「ありがとう。君も少し眼を休めたほうがいい。」

「はい、そのつもりで用意しました。」

魔導書（グリモワール）とは、魔法や魔術の込められたマジックアイテムである。
中身は、ただ魔法の使い方が書いてあるだけはなく、魔法を使う為の秘密の鍵が記されている。
魔導書さえあればそこに書かれた魔法を使うことが出来るのだが、その鍵、キーワードが見つけられない者には書かれた文字すら判別出来ないと言われている。

実際はただの、古い書体で書かれた日本語なのだが。

日本語には多くの意味が込められている。漢字には特に。
故に学術としての一面を持つ魔道の文字に最適なのだ。
そのためにその文字に込められた意味を理解出来ない者には解読出来ない。

「ああ、美味い……。」

「ええ、本当に。」

「……落ち着く。」

「……ええ、本当に。」

つまり鍵は魔導書を記したものと同等かそれ以上の熟練度がないと見つけることが出来ない、という謂れは知識の差である。
日本の古語をどれだけ識っているか。古い魔道書は古い時代の物であり、よほど過去の文字を知らないといけない。
ただそれだけなのである。書かれた内容を理解出来るか否かを除けば、だが。

神代に記された魔導書はそれ自体が狂気であり、凶器である。
分かりやすい物で言えば、ネクロノミコンか。
その様な規格外の物は読むだけで精神を蝕む。その魔導書を描いた魔導師の精神の残滓に狂わされてしまう。
今では禁術――有り得ざる奇跡――を編み上げる事の出来る者が居ないので然程問題ではない。

だが、神代を生きた魔導師の魔導書は違う。
これは彼らの人生そのものなのだ。それも、禁術を創造出来るほど

に精密に狂った人生の。
その精神を受けて尚、壊れない者だけがその禁術を知る権利を得られるのだ。

そんな危険物は禁書指定用の棚に封印する。
一冊だけ妙な魔導書を発見したが今はいいだろう。

閑話休題。

なんだかんだで漸く霊脈の魔力利用に関しての魔導書を発見し、実践出来るトコロまで漕ぎ着けた。
紅は空間制御に関しては膨大な知識を保有している。
なのでそのまま自身の魔力を使用しないで魔術行使を可能とする為の術式を、その魔力を保存する方向に組み直す事位は出来る。

「紅様。紅様がこの図書館全体に描いている文様は何なのですか？」

イッヒが示すのは紅が描いていた魔方陣。
術式内容は土地の魔力の蓄積。
数百年に渡り魔力を蓄積し続ければ、それはほぼ無尽蔵の魔力の塊となる。
図書館だけでも問題はないが、紅魔館全体に刻みたいというのが本音だ。

「ふむ……。簡単に言えば、レミリアとフランドールに会うのに必要なモノだ。」

それ自体は時間があれば幾らでも出来るので問題はない。
だが、紅はスカーレット姉妹には出来るだけ早く会っておきたいのだ。

故に図書館にだけ刻む。そしてこの2年で、それは完成した。
運がよかったのだろう。魔導書の発見に時間を掛けずに済んだのは大きい。

「……妹様にお会いに？」

「フランドールが怖いか？」

「……はい。」

出てきた言葉は小さな声だが、確かな肯定。
紅魔館に従事する人間は、否。
全ての存在が母を壊したフランドールに対して恐怖を抱いている。
それは仕方のない事だろう。だが。

「それは人間が妖怪に抱く本来の感情だ。大事にするといい。」

「……え？」

「妖怪とて、全てが悪いヤツではない。中には友好的なヤツも居る。
だが、人間と同じくどちらも全てではない。そしてな、その危険なやつというのは極端なまでの悪だというのが常道だ。故に人は妖に恐怖する。全ては個であり、種ではないと知っていても、な。。」

「それは……。」

イッヒ達のように満足のいく給金を貰っている身では納得が行かないかもしれない。
だが吸血鬼の主に仕え、その娘は無自覚に破壊を振りまいたのだ。
理解してしまう。

「……ん、ほぅ……？　噂をすれば影、か。お嬢様方が来たようだぞ。怖いのならば避難しておけ。」

「……だ、大丈夫、大丈夫ですとも。」

イッヒの気丈な意思を見て、強いと紅は思う。
己よりも遥かに強大な存在を前にして気を失う事もない。
アルカードで多少は慣れているのだろうか。

「さて、――術式起動。」

ヴワル魔法図書館の地上に繋がる扉が開く。
扉を支える蝶番が摩擦に悲鳴を上げながら、二人の妖怪を招き入れる。

その二人の身長は低く、まるで十にも満たない幼児の様だが、背中に自分の身長よりも大きい羽を携え、シルエットだけならかなり大きく見える。
より小さいシルエットの妖怪の翼は七色に光る不思議もので、髪は薄い黄色。
背丈や、年齢はもう一人より若干小さい気がする程度。

若干年上と思われる少女は幾冊もの本が積み上げられたテーブルで

ティータイムを楽しむ紅とイッヒを一瞥したかと思えば、設けられている螺旋階段で降りてくる。
七色に光る羽を持つ方の子その少女の手を掴み、楽しそうにしているのが見て取れる。

二人は図書館の中心に備え付けられたテーブルの前に辿り着くと、右足を斜め後ろに引き、左脚の膝を軽く曲げて、両手でスカートの裾を摘み、軽く持ち上げる。
カーテシーという女性のお辞儀。
レミリアは流暢に、フランドールは多少ぎこちなくだが、動きは揃っている。
随分練習したのだと思わせる。

「お初にお目に掛かるわ。私はレミリア・スカーレット。こっちは妹のフランドール・スカーレット。お父様が雇い入れた司書に挨拶を、との事よ。」

「おはつにお目にかかります～。」

紅は席を立ち、二人の小さな吸血鬼と相対する。
年代から考えて、八歳と五歳。些か以上にしっかりとしている。

「こちらこそ、お初にお目に掛かる。私は紅。姓(かばね)は無い、ただの紅だ。よろしく頼む。」

右足を引き、右手を身体に添えたまま左手を横へ水平に出して、腰を４５度ほど曲げて頭(こうべ)を垂れる。
西洋の貴族流のお辞儀。
腰の角度は最敬礼。
重要な相手への挨拶や頼み事をする際に用いられるもの。

イッヒは二人の登場に固まってしまったが、その口上が聞こえる前になんとか紅の後ろに控えていた。
使用人の鑑のような根性と言える。

「……口以外はしっかりしているのね、貴方。」

「ふふふふ、そうか。それは仕方のない事だと諦めてくれ。さて、紅茶でもご馳走しよう。イッヒ、頼む。」

くつくつと小さく紅が笑いを溢すが、嫌味のないのは雰囲気が穏やかだからだろう。
イッヒは紅の対面の二席を引き、どうぞ、と二人を促してから紅茶を淹れるポットに向かう。

「失礼します。」

イッヒの手際のいい紅茶と洋菓子の準備を尻目にレミリアとフラン、そして紅が向かい合う。

「さて、態々次期御党首殿が挨拶の為だけに来たのか？　それとも他に何か聞きたいことでも？」

「……そ――」

「遊びに来たのー！」

レミリアが何かを切り出そうとした所でフランの大声が図書館中に響く。
閉ざされた空間なので結構エコーが利いている。

それに比例してレミリアに青筋が増えてゆく気がしないまでも無いが。

「……。」

紅は沈黙。

「……。」

レミリアも沈黙。

「……。」

イッヒも沈黙。

「……ん？」

フランも……いや、綺麗な笑顔だ。
純粋すぎて自分の穢れが明け透けに感じてしまう位だ。

「……では、ごゆっくりどうぞ。」

イッヒが一番早く復帰したのは職業柄か。
それとも彼女の意思の成せる業か。
どちらにせよありがたい空気の払拭具合である。

「……ふぅ。遊びに、か。別に構わないが、何も無いぞ？」

淹れられた紅茶を一口含み、一呼吸溜めてから飲み込む事で精神を落ち着ける。

そして、折角なのでフランの提案に乗る。
というよりそれ以外に何をするのにも空気が違う。

「本～！　何か面白い本はないのっ？」

「……はぁ……。」

フランの無邪気さに溜息を吐くしかないレミリア。
未だ１０にも満たないのに時期当主という立場を意識してるのだろう。

「溜息はよくないな、レミリア嬢。溜息を吐いた分だけ幸せが逃げるらしいぞ。あぁ、フランドール。本ならあそこの棚の物を好きに読むといい。」

紅の言葉を聴いたフランドールは、はーい、と元気よく返事をしながら棚の向こうへと消えていった。

「……そうね。けれど一つだけ答えなさい。」

「何かな。」

「貴方。……どうして運命が全く見えないの？」

紅はレミリアの問いに答えず席を立ち、本棚へと向かう。
その行動に眉を顰めるが、座ったままレミリアは紅の出方を待つ。

「フランドール。この本なんかどうだろうか。花の図鑑だ。この館の庭にも多く咲いているぞ。」

「ありがとうっ！　あっ、私はフランでいいよ？」

「……ではフラン、と。よろしく。」

「うんっ！　よろしくねっ、紅！」

フランは本棚の前に座り込んで本を開いた。
それと同時、紅はレミリアの待つテーブルへと向かう。

「すまない、待たせた。」

「……いいえ。構わないわ。」

「そうか。では、答えようか。」

イッヒが静かに引いた席に腰を下ろし、そう言えばレミリアが僅かに身を硬くする。
紅はカップに残っている紅茶で唇を湿らせ、口を開く。

「そういうチカラ、とでも思ってくれればいい。」

能力とは言っていない。チカラ、力。魔術の力。
この術式が気付かれるのは旨くない。ミスリードをしてくれればいいのだ。

「能力（ちから）……そう。」

「私も一つ聞きたいことがあるんだが？」

「……どうぞ。」

レミリアがフランと一緒に居た。
未来を知る紅にとってこの事実は『運命を操る程度の能力』に目覚めていない証かと思えた。
だが少なくともレミリアは能力を自覚している。
フランがどうかまではまだ分からない。ならば。

「……フランの運命を見たか？」

「ッ！」

その問いが発せられた瞬間、レミリアの身体がはっきりと震えた。
知っていると断ずる事が出来る。

「その運命を変えようか？」

「でっ、出来るはずが……ッ！」

「戯け。破滅を呼び起こす存在に残るのは破滅のみだというのは事実だ。」

だが、と紅は前置きして続ける。

「運命は変えられる。変えられないのは宿命だけだ。まぁ、この場合は君の、君達の協力が必要不可欠だがね。」

レミリアには、そう言った紅がまるで自分を嘲笑うかのように見えた。

「本当にやるつもり？　逃げても誰も責めないわよ。」

「いいえ、レミリアお嬢様。これは私の覚悟です。」

「……そう、ありがとう。」

「ふふっ。」

レミリアが心配そうに、申し訳なさそうにしている相手はイングヒルト――イッヒだ。

これから起こる、否。

起こす事柄を思えば誰もが心配するだろう。

「……謝罪はしないよ、イッヒ。私が必ず護るのだからね。」

「信用してますよ、紅様。」

イッヒは紅の言葉にとても穏やかに微笑みで応える。

「では、フランお嬢様をお呼びします。」

「ああ。」

「お願いするわね、イッヒ。」

さあ、運命を捻じ曲げに行こう。

レミリアは己を悔やむ。

自分の部屋に戻り、先程までのやり取りを思い出す。

司書の紅という男が言い出した事は茶番。
そしてそれに効果が無いとは思えなかった。
私はその茶番に惹かれた。
イッヒを危険に晒す上に、私には護る事さえ許されないというのに。

確かにフランは大事だ。
愛する家族なのだ。大事に決まっている。
だが私はその運命に恐怖した。
家族に、恐怖したのだ。

それでもきっと、運命は変えられると信じて行動してきた。
フランに礼節を教え込んで、人との関わり方を教え込んで。
能力すら使った。
なのに、破滅の運命は変わらなかった。

疲れてしまったのかもしれない。

いつの間にか諦めてしまっていたんだろう。
救うのではなく。
いつしか私は、フランを破滅させないようにする方法だけを考えるようになっていた。
”その意思を無視して”まで。

でも、諦めなければ必ず救えるとあの男は言った。
”運命（さだめ）”が見えないあの男なら、と思ってしまった。
運命の見えない事が不安ではなく、希望だと思えたのは初めてかもしれない。
だからその茶番に乗った。
もう、悔やむ必要の無い未来のために。

足音が聞こえる。
最愛の妹の足音が。

これは、破滅の福音なのか。
それとも――。
派手な音を立てて扉が開き、絨毯に緩和されながらも荒々しい足音を響かせる妹が入ってきた。
イッヒ達は上手くやったみたいね。

ならここからは私の仕事。

「お姉様！　助けて！　紅が！　あいつがッ！」

――ごめんなさいね、フラン。私にはこれしかないの。駄目なお姉ちゃんでごめんなさい。でも。これで貴女が救われるのなら。これで貴女が自由（みらい）を得られるのなら。私は心を無にしましょう。

第二十一話：ターニングポイント。（後書き）

伏線って作るのが楽しんですよね。
いや、まともに作れていない俺が言えた事じゃないんですけど。

第二十二話：歴史が動く時間。（前書き）

今回で面倒ごと解決。
一応次回で欧州での紅魔館編は終わりです。

そろそろ幻想郷に帰れや紅ちゃん。
誤字脱字修正、したつもり。

第二十二話：歴史が動く時間。

紅魔館地下。
ヴワル魔法図書館。

「フランドールお嬢様。クッキーと紅茶のおかわりをご用意致しました。御入用でしたらお申し付けください。」

「あ、うん。すぐに行くねー。」

イッヒが恭しく頭を垂れる。
しかし、その表情に笑みは無い。

フランが本を棚へと戻し、立ち上がったのを確認すると同時。
イッヒは先導しテーブルへと歩き出す。

少し歩いた先にあるテーブルを囲んでいるのは紅一人。
フランは、姉のレミリアが居ない事が不思議で仕方が無い。

「あ、紅。お姉様は？」

ミミズがのた打ち回ったかのような文字、らしきモノが書かれた魔導書を呼んでいる紅に問いかける。
後ろから声を掛けられた紅はただの一瞬すら魔導書から眼を離さずに答えた。

「ん、彼女なら部屋に忘れ物を取りに入くとの事だ。」

「……ふーん。」

大して考えることなくフランは席に付く。
そこは色鮮やかなクッキーと空のカップ。

イッヒが席に着いたフランの眼前のカップに紅茶を注ぐ為にティーポットを用意する。

「失礼します。」

そして、それは起きた。

「――ハッ!?」

イッヒの手にある紅茶のたっぷりと入ったティーポット。
それはイッヒの手を離れ空を飛ぶ、否。落ちてゆく。
その先に居るのはフランドール・スカーレット。

「え……、あッ!?」

小さな飛沫音。
その薄い赤の水飛沫はフランの洋服を染め上げてゆく。
浸透し切れなかった液体は洋服から滴り、床の絨毯に吸収される。

――フラン。これを上げるわ。私からのプレゼントよ――

「ぁ……あ……ぁあぁああ！　お姉様から貰った服がっ！」

フランの頭の中を駆け巡る記憶。

それは唯一自分に優しく接してくれる最愛の姉の姿。
湧き出る怒りの念は、フランの妖気と殺意を撒き散らす。

「……く……はっ……！」

イッヒはただの人間に過ぎない。
”ただの人間にとっては”幼い吸血鬼の妖気、そして同時に殺気が存在している空間は耐え難い苦痛そのものだった。
既に呼吸すらままならなくなってしまっている。
フランの怒りがイッヒへと向けられると同時に殺気が全て一点に収束し、

「お前が……お前なんかっ……壊れちゃえばいいんだぁッ！！」

殺意は凶刃へと昇華され、二つの影が繋がった。

「茶番？」

レミリアが怪訝な声音で紅に返す。

「そう、茶番だ。フランに力に対する恐怖を知らしめるのさ。」

紅の話は簡単な事だった。

己の振るう力は、それ以上になって返って来ると身体に叩き込むという。
だがレミリアはそれを一笑に下した。

「その程度でフランの運命が変わるなら苦労はないわ。」

「確かにこれで破滅の運命が僅かでも減れば御の字だな。が、安心しろ。これは布石に過ぎん。」

「布石……？」

「まぁ待て。イッヒ。」

控えていたイッヒに呼びかけ椅子に掛けさせる。

「はい、此処に。」

流石に2年も同じ空間で過ごしていると違う。
言葉に出さずとも要求を理解している。

「レミリア。フランに何か思い入れのある品はないか？」

「……フランが着ているのは私のプレゼントした物よ。少しは……大切にしてくれてるかもしれない。」

レミリアには自信が無い。フランの運命に対して恐怖を覚えてしまった自分に自信が無い。
故に、即答出来なかった。
紅はその事に何も言わない。掘り下げても良い事など無いと知っている。

「服か。……イッヒ。君には手を滑らせてティーポットを落とし欲しい。」

「なッ!?　そんな事したら――」

レミリアの驚愕に紅は断言する。

「――問題はない。フランより私の方が強い。十二分に護れるとも。」

「……信じますよ、紅様。」

「な!?　貴女それは――」

イッヒの言葉はレミリアには信じがたい物だった。が、

「信じろ。」

紅の二の句を告げさせない言い切りようにレミリアも押し黙る。
イッヒはそれで十分だと示すかのように紅の後ろへと控えた。

「止せ、フラン。服を汚してしまったのは悪いが、〝たかが〟服一着で殺すのはやり過ぎだぞ。」

イッヒに迫る凶刃――フランの腕は紅に掴まれ、阻まれた。

「――たかが？　たかがじゃないッ！　これはお姉様が私にくれた大事な服なのッ！」

残る腕を振り上げるも、やはり紅に阻まれる。
その事に激昂し、妖気を込めても動かない。

「……そうか。私達にとっては”たかが”服だが君にとっては大事な一品だから殺す、か。君とっては大した意味を持たないイッヒは、私には大きな支えとなる人間でな。そのイッヒを殺そうと言うのだ。黙って私に殺されろ。」

激昂した子供程度だから通じる程度の理由で誤魔化す。
だが、それでいい。どんな道筋であろうともそこに辿り着く事こそが重要なのだ。
故に紅は踊る。この寸劇を。

「腕は掴まれ、身動きが取れない。さぁ、次はどうする？」

「もういい！　お前も壊れちゃえ！　……え？」

フランが掌に何かを掴もうと開閉している。
能力で”破壊の目”を引き寄せようとしたのだろう。だが、紅に影響を及ぼさない。
能力封じの術式の範囲は紅を中心として半径1メートル。
紅も、その背に庇われているイッヒも壊せない。

「……それで終わりか？」

「え……ひっ！？」

言葉は、凶悪な殺気と共にフランへの刃と化し、
刃は拳となり現実のモノに成る。
フランには知覚出来ない。腹部が熱を持った原因が紅によるものだしか、分からない。
地べたに這い蹲りながら苦痛にもがく。

フランが吸血鬼だとしてもたったの3年しか生きてないのだ。
肉体的に7～8歳で、妖怪の肉体だ。人間以上に強いだろう。
だが、紅には遠く及ばない。

「痛いか？　苦しいか？　……私が恐ろしいか？」

紅に足蹴にされ、身動きの取れないフランは恐怖に喘ぐ事しか出来ない。

「あ……あぁ……。」

フランは、その能力故に恐れられた。
その能力故に凶悪無比の吸血鬼と認識されている。
だがその能力が通じない時。フランは一介の妖怪に過ぎない、否。
それ以下でしかない。いずれがどうであろうとも、今はまだ。

「これが恐怖……暴虐だ。貴様の振り撒いた、力の、行動の結果だ。
貴様が無闇に能力を使ったから”こう”なったのだと、理解しろ。
そして死ね。」

「……わ、わたっ……あッ！？」

今度は踏みつけられていた腹部を蹴り抜かれ鈍い打撃音が骨を伝う。
その威力は、フランが図書館上部に見える扉にまで吹き飛ばされる事で証明された。

図書館の扉に叩きつけられたフランがよろけながら顔を上げる。
そこに紅の容赦の無い視線を向けられ再び恐怖が襲う。

「ぁ……い、いや……嫌だッ助けてッ！」

無様に誰かに助けを求めるその姿は、年相応の幼子にしか見えなかった。

「それで？　その布石の後にはどうするつもりかしら？」

「レミリア。君には自分の部屋に戻ってもらう。そこでフランが助けを求めてきたらそれに応えてくれ。」

「……それで？」

何をするのかを直接言わず、ただどう行動するかだけを伝える紅に腹立たしさを感じながらも続きを促す。
ここで癇癪を上げても優雅ではない。
何よりフランに聞こえてしまう。

「君には擬似的にだが、死んでもらう。」

「――！」

それは、如何なる意味なのか。
それは、心を傷つける刃。

「意味は……分かるな？」

「……そんな事をしたら、フランは壊れてしまう。了承できない。する訳には、いかない……！」

気配を変えずに眼光だけで輝き、紅を射抜く。
だが、紅は動かない。

「問題ない。壊れる前に希望を見せれば縋る。あの娘は幼子に過ぎないから、縋るさ。」

「希望？」

希望とは、何を示すのか。
それによっては、認めない事もない。

「……コレばかりは説明が必要か。」

「一体なんだと言うの？」

「……血の契約だ。」

「可愛い妹を随分可愛がってくれたそうね、ヴワル魔法図書館司書殿？」

「……情緒不安定な血縁を持つというのは大変だな、紅魔館次期当主殿。」

飛び出したフランが助けを求めたのは、生まれてから自分を愛してくれた唯一のヒト。
最愛の姉、レミリア・スカーレット。

図書館へとやって来たフランの姉は、確かな威厳と愛情も兼ね備えている。
悠然と歩を進め、後ろに庇うのは最愛の妹のフランドール・スカーレット。

設けられている螺旋階段には眼もくれず、ただ眼下に存在する紅のみを見据え。
大きな翼で羽ばたき、ゆっくりと。
しかし確実に空から”敵”へと接近してゆく。

「フランに何をしたか。フランが何をしたか。それは知らない。私が知っている事実は、貴方がフランを殺そうとした事だけ。……けれど、それで十分よね？」

静かに、図書館に君臨した吸血鬼は、ただ謳う。

「……全くだな。戦うのには、十分すぎる理由だ。だが、負けてやる理由にはならん。ここで果てろ、吸血鬼。」

「そう。自惚れるのは構わないけれど相手は選びなさい、半妖。」

最愛の妹を。年端も行かない幼子を騙す。
そのために、誠実さのカケラもないやり取りをする。

――本当に、浅ましい。

紅は、氷の刃を。
レミリアは、鮮血の槍を創り出す。
フランはレミリアの後ろで姉の姿に頼っている。
イッヒは既に自室に戻らせた。

「――来い。」

「――死を以って活目しなさい。」

レミリアが腕力に任せて槍を投げつける。

――デーモンディナーフォーク

妖気を固めただけの槍は能力封じを物ともせずに飛来する。
だが、錬度が違う。
紅の氷剣が振るわれ、容易く槍は砕け散る。

刃が振りぬかれた隙を突こうとレミリアが翼で作り上げた空力を以

って突進する。
しかし、足りない。純粋に威力が、速度が足りない。

「遅い。」

紅は振りぬいた右腕はそのままに肘を突き出した。
突進を止められないレミリアの顔面に突き刺さり、紅が振りぬいた腕を戻すと同時にその手に握られた刃は、

「あぐ！　がッ！」

レミリアを切り裂いた。

「あ……ああ、お姉様ァッ！」

傍観していたフランが即座にレミリアに駆け寄った。
その小さな身体から大量の血を流し、倒れ伏したレミリアに。

「ぁあ……お姉様……おねえさまぁ…。」

縋りつくフランにレミリアには応えられない。人間ならば半死半生の傷なのだ。
幼い吸血鬼でもキツいだろう。
上手くギリギリで死なないが、死ぬかもしれない傷に出来たのは僥倖。
レミリアが本当に死力を尽くした訳ではないのも大きな理由と言える。

「これが、君の無闇な行動の結果だ。力に溺れ、力で捻じ伏せる者は、力に捻じ伏せられる。君が、下らない事をするから”こう”な

ったのだ。」

自分でそうなるように誘導したというのに。

「あ……ぁ……私…私が……私さえ、わた――」

「――だが、救えない事もない。」

「……え？」

壊れる寸前で”希望”を見せる。

完全に絶望させてしまったのでは意味が無い。

「姉の為ならどんな事でも出来るか？」

「で、出来るッ！　なんでもするからお姉様をっ、お姉様を助けて！」

姉を抱きしめながら涙を流し、紅に懇願する。

その姿が、紅に罪を自覚させる。

「……分かった。俺とて、レミリアが憎い訳ではない。勿論フラン、君もだ。」

「……え？」

「いけない事をいけないと教えた事で死なせる気はない。が、君が何をすべきか分かるかね？」

レミリアの血液を用いて魔方陣を描きながらフランに問いかける。

「わ、分からない……教えて！　なんでもやるから！」

「ごめんなさい、だ。」

「え？」

呆然とするフラン。
情操教育どころか、姉からしか愛を受けた事もないのでは精神が偏ってしまっても可笑しくはない。

「いけない事をしたら、謝ればいい。ただ闇雲に力を振るうのはいけない事だと君は学んだんだ。もう同じ失敗はもうしないだろう？」

これでも破滅の運命は変わらないだろう。
だが、確率は減っているはずだ。
どれだけ減ったかは分からないが、やらないよりマシだ。

「うん……ご……ごめんなさい……ごめんなさい……。」

頷きながら謝罪の言葉を口にする。

「いい子だ。が、謝罪はイッヒにしたまえ。彼女も謝ってくれるだろう。さてフラン、ここに血を一滴垂らしてくれ。」

「あ、うん……。」

フランが指から一滴の血が滴り落ちる。
その瞬間、魔方陣が光り輝いた。

「血の契約、ね。どういった物なのか説明してくれるわよね。」

「あぁ。そうだな……簡単に言えば精神の共有だ。」

レミリアが問えば紅が答える。
だが、その答えは理解しがたいものだった。

「……どういう事？」

「術式は、二人の血液である魔方陣を描き、魔力を流せば完成する物だ。内容は精神のリンク。レミリアとフランの精神がお互いに影響しあうようになる。」

「……それは。」

精神が混ざり合う。
下手をすれば、レミリアでも、フランドールでもない別人が二人生れ落ちる結果になるかもしれない。

「そうだ。フランの破滅の原因たる精神。それを君にも幾らか背負ってもらう。今はまだ狂気と言う程のものには成っていない。これで救えるはずだ。」

「……大丈夫、なのね？」

「ああ。制御に失敗する程複雑な術式ではない。フランの本能を君が、君の理性をフランに分ければバランスは取れるだろうしな。」

些か以上に理性的なリミリアが我侭を言うようになるだろう。
短気では済まない状態のフランも、大人しくなる。
原作でも見られたような精神に近づくだろう。そして、フランが戦力として扱えるはずだ。

「一つ、問題があるとすれば。お互いのお互いへの感情が伝わってしまう事か。」

「……問題、ないわ。私はフランを愛しているもの。フランも、少なからず私には心を開いているわ。……きっと、大丈夫よ。」

穏やかな微笑み。
此処に来て、初めて見せた心からの笑顔はとても美しかった。

光が収まる。
紅が別に魔方陣を組み上げ、治癒効果をもつ術式を同時に起動していた事でレミリアの傷は塞がっている。

「……お姉様？　お姉様……？」

フランがレミリアを揺すると、ゆっくりと瞼が開いてゆく。

「……ん……フラン……？」

「あ……お、お姉様！　お姉様お姉様お姉様ぁ……あぁ、ほんとうに、よかっ……よかった……。」

レミリアの小さな胸に顔を埋めて涙を流すフランを愛おし気に撫でるレミリア。

空気を読んで立ち去るのが礼儀だが今回はそうも行かない。

紅は、レミリアに小さく視線で訊ねる。

運命はどうなっているのか、と。

「……。」

レミリアは確かに頷いた。

口だけを動かして、紅へ言葉を伝えてきた。

――あ、り、が、と、う、か。ふふ、……さて、此処は若い二人に任せて退散するか。

何やら顔と顔が触れているようにも見える仲睦まじい姉妹を放って紅は静かに図書館を出る。

色々と間違っている上に若すぎる気もするが、仕方のない事だろう。

向かう先は――。

幻想郷。
妖怪の山、鬼神の私室。

「お呼びたてして申し訳ない、映姫殿。」

「いえ、こちらも仕事ですのでお気になさらず。」

非常に綺麗な、理想的な正座をしながら四季映姫・ヤマザナドゥが事務的に受け答える。
その眼前で胡坐をかいて座っているのは鬼子母神、九鬼桔梗。

「貴様にも礼は言っておこう、妖怪賢者殿？」

「あらあら、私はついでかしら。」

そしてその二人の仲介役となったのが横に正座する妖怪賢者、八雲紫。

「それと、すまぬな、天魔。」

「いえ、致し方なきこと故ならば。」

言葉少なめに応えるのはその対面に座る妖怪の山に住む天狗を治める大妖怪、天魔。

「早速仕事を済ませるとしましょう。地獄のスリム化政策が進みました。漸くですが、これで地底界が地獄から外されます。地底の怨

霊を鎮めるのであれば、其処を地底都市として利用する事を地獄の総意により認めます。」

「感謝致す。我々鬼が責任を持って怨霊を鎮めよう。」

閻魔と鬼の約定。
地底都市を認める代わりに地底の怨霊を鎮める約束。

「私ね。私達は、地上で忌み嫌われる妖怪達を受け入れて貰えるならば、地底界に手を出さない。それでも手を出す馬鹿ならどうしても構わない。地上の妖怪を代表して誓うわ。」

「感謝する。我々鬼は、地上に住まう事を厭う者達を受け入れよう。」

地上の妖怪と鬼の約定。
鬼達が忌み嫌われる妖怪達を地底界に受け入れる約束。

「わしら天狗は鬼の後を継ぎ、この妖怪の山を治め、無用の混乱を招かぬ事を誓う。」

「すまぬ。厄介ごとを押し付ける。」

鬼神は一種のストッパー。核兵器のような抑止力。
それに代われる存在は天魔くらいしか居ない。当然の結果だろう。

「態々映姫様がいらっしゃる程の事だとは思いませんでしたわ。」

紫は地獄の要職に付いている大物が来るとは思ってなかった旨を明かす。

暗に人手不足、財政難はどうしたのか、と問うたのだ。

「いいえ、地底界の権利に関する事に閻魔が来ない訳にはいかないでしょう。まだ若輩ですが、新人の閻魔の育成も進んでいますから然程問題はありませんよ。」

「あら、これは失礼しました。」

「……八雲。紅はまだ帰らぬのか？」

桔梗は紫に問う。友は居ないのか、と。

「……ええ。まだしばらく帰ってくるまで時間があると思うわ。」

「ああ、例の彼ですか。彼には罪を教え、贖罪の道を説く必要がありますね。」

閻魔の道を説く仕事は趣味のレベルだ。気にしていても始まらない。

「……そうか。この身は鬼子母神。鬼の母なれば、友の為と云えど遅れる事は出来ぬ。紅に伝言を頼む。『お前であれば歓迎する』と。」

「私はこれで失礼します。あなた方もこのままでは地獄に落ちますよ。善行を積むように。では。」

映姫が退出する。

「ええ、お気をつけて。私にはその伝言は無理ね。」

「映姫さま、お気を付けて。わしにもちと厳しいですな……天狗にも人間にも色々と手を回しておかねばなりますまい。」

映姫の退出によって、空気は三人が緊張していた身体を多少は解せるものになった。
やはり妖怪には鬼門すぎる人物なのだろう。

「主らが直接伝える必要は無い。紅にわらわの言葉が伝われば良いのだ。頼むぞ。」

「……それなら、伝えておくわ。」

紫が多少考えた後に桔梗の要請に応える。
それを聞いて桔梗に心残りは無くなったのか、退出していった。

「鬼も大変ねぇ……。」

紫の呟きに応えるのは天魔。

「そうかもしれんなぁ……。人間達のやり方では鬼は納得出来んだろうしの。」

「……これも時代の流れなのかしらね。」

観音開きの扉を開き、赤い絨毯を歩む紅。
対面するは、吸血鬼アルカード。

「どうした。あの女の居場所を吐く気になったか。」

「……知りたくば教えてやる。が、答えろ。何故あの茶番に手を出さなかった？」

紅は手を出してこないと予測していた。
だが、それは。その事実が意味するのは……。

「何故と。簡単な事だ。下らんが、面白い見世物だったからだ。褒めてやろう。」

「……そうか。」

今のアルカードに何を言っても変わらないだろう。
何より変えてしまえば紅は此処に居ない。
余り関与する訳にもいかない。
そして、何かを言える訳もない。
紅が主導した茶番なのだから。

「……今から大体５０年後、極東の島国に現れる。少なくとも１００年後までには確実に、だ。」

「ほぅ。」

「随分遠いぞ。私は其処から来たが１００年掛かった。ゆっくり歩いていたのもあるがね。」

「ふむ、では出立するとしよう。」

今のこの男には、見えていないのだ。
価値を見出せるものが、無いのだろう。
妻を殺したからと復讐に走ることも出来ない。
その相手に、妻の影を見てしまう。

全てを失った。復讐すら出来ない。
だから、命を削る事でしか何かを実感する事など出来ない。
哀れ、とは言わない。

「アルカード。」

「なんだ。」

「……いや、次期当主と当主とでは違う。せめて立場を譲渡してから行け。」

「そうか。そうだったな。済ませておこう。」

――いつかのお前の様に何時の日か。私を友だと言い、同じ女(さや)を愛する男なのだから。

第二十二話：歴史が動く時間。（後書き）

何が酷いって、あれですよ、もう時間ないっすねー。
分かる人にはわかる。分からない人もいずれ分かる。

ぁあ、無常。つーわけで勉強してこようｏｒｚ

第二十三話：壊れる絆。（前書き）

ハッピーエンドが好きです。
現実には、上手く行かない事。悲しい事。悔しい事。苦い出来事が溢れています。

物語の中くらいは、幸せであればいい。
そう願ってこの文を（ｒｙ

理由の３割くらいでしたｗ

第二十三話：壊れる絆。

紅魔館スカーレット家当主アルカード・スカーレットは、その権威を娘レミリア・スカーレットに移譲し、自身は館を出て行った。

その際に、レミリアとフランの。

そう、”愛せない”はずの二人の娘の頭を撫でてから出て行った。

もしかしたら、彼にも肉親の情が残っていたのかもしれない。

当主となったレミリア・スカーレットは妹のフランドール・スカーレットを対等に扱う。

地下に幽閉する事など無く、あくまで対等の者として。

フランドールもまた、姉の負担にならぬように努力している。

非常に姉妹の仲が良く、仲睦まじい様子だという。

少なくとも紅には、詳細まで探る勇気はありませんでした。

イングヒルト、イッヒはあれからも変わらず司書の仕事を手伝っている。

実に優秀で紅は助かっている。

心に傷が出来ているかとも思ったが、やはり女性は強い。

何も気にしていないそうだ。

そして、紅は――。

紅魔館地下ヴワル魔法図書館。

そこにはイッヒの用意した紅茶で喉を潤しながら、魔導書を読み解く紅の姿があった。

イッヒは危険のない、ただの書物を読みふけっているので問題はないと判断した。

紅には、茶番劇の前に発見した禁書の仲の一冊に気になるモノがあった。

”永遠の従者”という名の魔導書。

紅魔館と従者を結びつけて考えるのならば、十六夜咲夜という女性の名が浮かんでくる。

彼女がホムンクルスであるという説は確かにあった。

或いは、この魔導書がその原典なのかもしれない。

そういう考えが脳裏が浮かび、即座に否定された。

――この魔導書は、悪辣すぎる。

書かれている書体は二種類あり、主な書体は隷書体。

隷書体で書かれている部分だけ理解していても、ホムンクルスは作れない。が、もう一つの書体の”古文”が読めれば製造は可能だろう。

無論、不具合など無く完全な状態で。
ただしそのホムンクルスを製造するであろう存在が望んだ性質は持たないだろう。

この魔導書の製作者は妖怪を憎んでいるのだ。

魔導書には魔術、魔法問わずその術式の”全て”を刻まなくてはならない。
だがそこに書体の制限など無い。
”妖怪であれば”多少理解しきれていない部分があろうとも、読めれば作るという者が居ても可笑しくは無い。
否。中途半端に読める者にこそ、この魔導書は牙を剥く。

当時、経書（儒教でとくに重視される文献の総称）に一般的に使用された書体の今文（隷書体）に対し、古文という。
このように古文とは本来「古い時代の文字」という意味でしかなく、この定義は非常に曖昧である。
だがそれは現代、２０００年前後には不明になっていた、というのが正しいだろう。

この文字が使用されていた時代、王家には意味を正しく伝えられ、隠語として活躍していた。
その意味こそが本来の意味であり、文字そのモノの意味では足りないのだ。
中国圏内で使われた文字だが、漢字であり、一語一語が深い意味を持つので魔導書に使われても可笑しくない。

その時代をただ生きただけの人間には使えず、それよりも以前の時代から”生きていただけ”の妖怪には読めるには読める。
文字通りに読めば『製作した者の命令を聞く忠実な従者』だが、隠

された意味は、『命じた者を憎む壊れた従者』となる。
従者として、有能であり時間を操る能力を保有した能力者を作り出し、作り出した妖怪を殺すまで止まらぬ殺戮人形（キリングドール）。

二つの文字の意味までを正しく知る者だけが、この魔導書の危険性に気付ける。
紅はこの文字を初めから知っていた訳ではなく魔術を教わる時点で沙夜にあらゆる文字を叩き込まれただけだが、知ってる。
故に気付いたのだ。
紅が意識せず、深々と溜息を吐いてしまうのも無理は無いだろう。

「……紅様？　何か御気に召さない事でも？」

イッヒが怪訝そうに聞いてくる。
その表情には不安が見える。また面倒ごとに巻き込まれるのを忌避しているのかもしれない。

「……いや。どうして神域の天才ってのはこう、悪辣なのかと思ってな。」

「天才が悪辣……ですか？」

完全な生命を魔術で創り上げ、時間を操る能力まで付与出来る。
これを天才と呼ばずになんと言う。
これだけの偉業が、妖怪を狙い撃ちして殺そうという意思に基づいた呪いに過ぎない事が悪辣でないのならばなんと言うのか。

「ああいや、気にしないでくれ。」

「……はい。」

紅が余り関与しないで欲しいと言えば、それを受け入れるイッヒ。
実に有能で、良い存在だ。
だが、イッヒはそれだけで済ますほどお淑やかではないようだ。

「紅様知っておいでですか？　好人物は何より先に、天上の神に似たものである。」

その言葉に紅は知った。
だが、紅はそんなつもりはない。

「第一に、歓喜を語るに良い。第二に、不平を訴えるに良い。第三に――」

イッヒと紅の声が重なる。

「居ても居なくても良い、です。」
「居ても居なくても良い、か。」

それはそういう扱いなのかという問い。

「イッヒ、すまない。君には随分失礼な事をしたようだ。」

「分かって頂けて幸いです。勿論、紅様のお気遣いが私の安全を担っている事実も理解しております。ですが、少し我侭を言いたくなりました。」

済ました顔で紅茶を啜るイッヒ。
それが妙に可笑しく感じて笑いを溢してしまうが、やはりイッヒは不動だ。

ただし、顔”色”は除くが。

「クク……有り難いことだな……。イッヒ。」

「はい、何でしょう？」

やはりイッヒ以上に信頼出来る人間は居ないと判断する。
故に紅はイッヒに託す。

「私は、やるべき事を終えれば紅魔館を出ていく。司書の後継は君に頼む。」

「……え？」

「すまない。」

「……いつ、ですか？」

イッヒがか細い声で紅に訊ねる。
紅は、確かにこの図書館の司書であり、その仕事もキチンとこなしている。
ここで途切れたから駄目になった、では”すわり”が悪い。

「……早ければ１０年。長くとも４０年もあれば此処に居る理由は終わる。」

「……そうですか。分かりました。」

「ありがとう、イッヒ。」

それから紅は紅魔館の構造を正確に把握した上で図書館だけに留めていた魔方陣を紅魔館全体に刻む作業に入った。
平行して魔導書の解読を進めて攻撃魔術として使える物を学び、レミリアやフランが絡んできたりするのでそこまで作業が捗った訳ではないが。

紅ではこの魔導書を改修する事”は”出来ない。
が、時々”永遠の従者”に注釈を書き加える事もした。

しかし初めに否定した十六夜咲夜の原典という説は恐らくだが正解だろうと紅は考える。
いずれこの館に住み着く知識と魔法の申し子ならば、読み解けたとしても不思議ではない。

彼女ならばこのトラップに引っかからず、その上改変し”十六夜咲夜”という存在を創り出す事も不可能とは言い切れない。
注釈無しでも辿り着けるかもしれないが、あれば早く生まれるかもしれない。
吸血鬼異変時に存在しているのならば大きな戦力となる。
それに期待すると同時に一つだけ小細工をしておく。この策が生きる時は来るのだろうか。

レミリアとフランとは話し相手になったり、遊び相手もあれば領地に関する執務を手伝ったりもした。
継続は力なりとは良く言ったもので、流石に何十年も続けていれば心を許してくれた。

特にフランは無邪気だ。あれだけの事をした紅を家族として見ているようにも感じられる。
だがそこまでは応えられない。紅は応えられない。

今のうちに紅魔館でやっておく事。
霊脈の膨大な魔力を保存し続ける為の魔方陣を紅魔館全体に刻む。
紅魔館の戦力充実。
魔導書の解読と攻撃手段の会得。
ある程度、レミリアとフランの二人と友好的になっておく。

これら全てを終え、気付けば４０年近く紅魔館で過ごしていた。

「レミリア、フラン。私はそろそろ出て行く。」

紅はフランの自室のベッドで戯れる二人に告げる。
一方的な告白を受けた二人の吸血鬼の動きが止まる。

「……。」

扉の前に陣取ったまま紅は何も言わない。

『……え！？』

流石に精神を共有しているだけの事はある。
完全に言葉のタイミングが一致した。

「……そう。なら司書はどうするつもりか言いなさい！」

「え……どういうこと？」

起き上がったレミリアの問いただす声がフランの呆然とした声を掻き消す勢いで部屋に響く。
その驚愕から出た問いに紅は律儀に答える。

「言葉通りだ。私にはやらねばならん事がある。故に行く。司書に関してはイッヒに一任した。彼女なら問題あるまい。」

「や、やらねばならない事……？」

震える声でフランが呟いた。
だが、紅はこれ以上答えない。

「じゃあな。」

このまま応え続ければ紅魔館に留まれと言われるだけだから。
そこにフランがベッドから飛び降り呼び止め、縋るように腕を伸ばす。

「待って！　何処に……！？」

友好的に接した結果に満足しつつ歩みを止めずに、曖昧にだが答える。
それが、理由になると思いながら。

「私は魔術師だ。魔道か、或いは幻想と縁があるのならば、また会

えるだろうさ。」

紅は扉の向こうへと消えゆき。

「あ……。」

フランの伸ばした手は届かない。

１５５２年（天文２１年）
紅は紅魔館を後にする。

幻想郷の人里。

妹紅は人里の巡回という名の食べ歩きを敢行し、しかし結局飽きてしまった。
日は暮れ、茜色の夕日がかつてと変わらない姿で沈んでゆく。
通りに座り込み覇気を感じられないその姿は、酷く悲しそうに見えるモノだった。

紅が幻想郷を離れた頃からだろうか。
あたしが何事にも興味を持てなくなったのは。

紅が居て、慧音が居て、あたしが居る。
そうやって三人で同じ釜を囲んでいた頃は、毎日が楽しかった。

紅の口調を真似る慧音。
妖術や、体術の訓練をするあたし。
そして、私達の元から去っていった紅。

――いつもこうだ……。

楽しかった日々を振り返れば決まって最後はアイツの背中が瞼の裏に浮かんで来る。
２５０年も時間が経って、二人だけでする食事にもいつしか慣れた。

でもふと気が付けば、あの馬鹿が其処に居るんじゃないかと夢想して。
直ぐに帰ってくるんじゃないかって願って。
期待して、結局帰ってこなくて。

「……莫迦。」

「すまん。」

そんな事ばかり考えていたから、急に返された言葉に反応できなかった。

”あんたの事じゃない”
そう言葉を返すつもりでいつの間にか俯いたいた自分の顔を上げ、
あたしは訳が分からなくなった。

「……こ、お？」

「……こ、お？」

「ああ、紅だ。」

妹紅が呟いた”莫迦”はきっと私の事だろうと謝った。
顔を上げたと思えば、ちょっと間抜けに感じる顔を晒す妹紅にＹＥＳと返答する。

「……紅、なのか？」

「ああ。」

思えば、３００年近く放って自分の事に没頭していた事に気付かされた。
私にその事実を気付かせたのは妹紅の拳で。
多分、渾身の力で殴られた。

「ぐっ！？」

耐えた。
倒れなかった。仰け反るだけで済んだ。
けど。

「この……ッ！」

また、殴られた。
それも妖気すら込められた拳で、殴られた。
何度も、何度も。一体どれだけ殴られるのか、分からなかった。
けど抵抗しようと思わなかった。妖気を高めようとも思わなかった。
ただ、耐えないといけないと思った。

「お前はっ！　お前が……ッ！」

けれど、いつしか脚から力が入らなくなっていて。
私が倒れれば、妹紅が馬乗りになってまた殴ってきた。
痛かった。身体よりも、心が痛かった。

「３００年だッ！　３００年ッ！　さんびゃくっ！」

それは、自分がただの復讐鬼に堕ちていないという事で。
私が、痛いと思えるのは彼女達のお陰で。
けれど約束も、復讐も、彼女達の負担で。
それが酷く悲しくて。

「あたしとっ……けいねをっ……！」

どれだけ殴られたか分からない。
いつからか。妹紅の拳に力が入っていなくて。
それでも、嗚咽を漏らしながら弱弱しい拳で殴ってきて。

「かぞくっ、を……ほったらかしにっ……して……。」

妹紅の泣きはらした顔が、胸に落ちてきて。

「なに……やってたんだよ……。」

必死になって、嗚咽が漏れるのを我慢する妹紅を。
私には抱き締める事しか出来無い事が、悔しかった。

妹紅にしこたま殴られた紅は、一人で歩けない程だったので妹紅に肩を貸して貰った。
その際、妹紅が『この事は言うなよ……？』と随分据わった眼で睨んできたのは印象深かった。

肩を貸す人間と貸される人間もどきでは歩くのが遅く、到着まで多少時間が掛かる。
紅の首に触れている妹紅の白く流れる様な長髪が、もどかしく感じる。

「……。」

「……。」

紅は妹紅との間にある沈黙を、居心地悪いと感じていた。
殴れるだけで済んだのが不思議になる程の間、ほったらかしだったのだから仕方のない事だろう。
だが、もう日が沈み掛けているので人通りが少ない事が唯一の救いなのかもしれない。

「……妹紅。」

「んー？」

不意に一陣の風が流れる。
身体に叩きつけられる夜の冷たい風が紅の熱を持った傷を冷やしてゆく。
少しだけ、気が安らいだ。

「許せとは、言わない。」

「許さないよ。」

紅の言葉に即座に妹紅が返したのは無情な言葉だったが、その声音に怒気は篭っていなかった。
それがどんな意味を持つのか、紅には分からない。

「……そうか。」

「そうさ。」

だがこれでいいと紅は思った。
許されたら、立ち止まってしまいそうで。
決意が鈍ってしまいそうで。

何よりも。

「ほら、着いたぞ。おーい慧音、開けてくれ～。」

妹紅の華奢な身体から伝わる温もりに心すら預けてしまいそうな自分が、怖かった。

「ほら、着いたぞ。おーい慧音、開けてくれ～。」

妹紅が帰ってきた。

今日は珍しく巡回に出たと思えば帰りはこんな遅くになって。

仕方ないと思いつつも言う事は言わなければいけないと自分を律する。

「はいはい、おかえ……り……？」

私が戸を引いた時。妹紅に説教の一つでもしてやろうという考えは、視界に入るそのヒトの姿で消し飛んだ。

「悪い、慧音。”こいつのせいで”遅くなった。」

「あ、え……紅……、紅なのか？」

いつも待っていた。

誰かが訪ねてくる度に期待して。

「ああ、紅だ。」

けれど、帰ってこなかったヒトが其処に居る。

「……ぁ……あ……。」

信じられなかった。けれど、信じたかった。
そっと指先で確かめるように、恐れるように、頬に触れた。
指に伝わる微かな温もりが、無性に嬉しくかった。

「……紅……。」

だからだろうか。涙が溢れてしまった。
頬に触れていた手をその首に回して、抱き締めた。
お互いの顔が見えなくなる様に。

「……慧音……？」

「……もう少しだけ、少しだけでいいから……。」

泣き顔で”おかえり”はしたくない。
止め処無く溢れるこの涙が止まってくれるまででいい。
だから。

――もう少しだけ、このままで……。

「……落ち着いたか？」

「……ああ、すまない。」

「いや。」

慧音が紅から離れて妹紅と並んだ。
もうその瞳に涙は見えない。
二人はお互いに目配せすると、声を合わせて”家族”を歓迎した。

「――おかえり。」
「――おかえり。」

それは、まるで触れえざる物のようにも感じられ。
紅にはその純粋さを直視する事ができなかった。

「……ただい、ま……。」

薄汚れた存在には、余りにも眩しいが故に。
紅は、その意志を揺るがされた。

「ほら、夕餉の準備は出来てるから早くっ。」

「ぁ、……ああ。」

呆然とする紅は慧音に急かされるままに、用意された座布団へと腰を下ろす。

左に妹紅が座り、慧音が右に。

「それじゃあ、頂きます。」

「ん、頂きます。」

慧音に合わせて妹紅が手を揃える。

しかし紅は置かれた茶碗を眺めるだけで手に取ろうとしなかった。

いや、取れなかったと言うべきだろう。

見咎めた二人は手に取った食器を置いて紅に声を掛ける。

「……紅？」

「あ？　あー、もしかして殴りすぎたか……？」

慧音は純粋に紅を心配して。

妹紅は殴られた所が痛むのではないか、と。

「妹紅……？」

「あ、…いやぁ……はっはっは。」

慧音の声のトーンが下がり、妹紅の背に冷や汗が流れ落ちる。

挙動の怪しい妹紅を問いただそうと慧音が口を開いた時、紅が心中を吐露した。

「……私は、此処に居てもいいのだろうか……？」

如何なる時も自信を以って事態に相対してきた紅の弱弱しい姿は、二人に決して小さくない驚愕を生んだ。

「は……？　何言ってるんだよ？」

「そうだぞ、紅。此処はそんなに居心地が悪いか？」

驚愕に思考が働かないのか。
意味を図りかねる二人は紅の答えを待つ事しか出来ない。

「そうじゃない。此処は暖かい場所だ。帰る場所だとすら思っている。」

それは自分達を家族だと認めているという事で、
それならば、と慧音が口を開く。

「なら――」

「――だが、それを甘受していいとは思えないんだ。」

だが紅はそれを遮る。
発せられた言葉は否定的なもので、妹紅と慧音を不安に駆りたてた。

「……どういう意味だ？」

不安と共に呼び起こされる恐怖に後押しされながら、
慧音が紅に問いかける。

「妹紅は私を許さないと言った。」

「あー……その、なんだ。あれは――」

「――そして私には、まだやると決めた事が残っているんだ。」

自分の発言が原因かと言い訳を考え始めた妹紅を無視して紅が続ける。

だがそれは、妹紅にとって許しがたいものだった。

「なんだって!?　”約束”は終わったんじゃないのかよ!?　やると決めた事ってなんだよ!?」

激昂した妹紅は一気に捲し立てた。

二人は気が遠くなるような時間ずっと待っていた。

其処で帰ってきたと思えばまた直ぐに出て行くかの様な言葉が出て来たこと事態、信じられなかったのだ。

「……すまない。」

妹紅が激し、慧音は呆然と紅が眺めるだけ。

そんな二人の動揺した姿を見て尚、紅からは謝罪の言葉しか出てこない。

その事が妹紅をさらに刺激した。

「あんたは……!!　なんで何も言ってくれないんだ!　そんなにもあたし達が不甲斐ないか!?　紅!」

「……。」

紅は答えない。

否定したくても、行動が、それを許さない。

此処が暖かい場所だからこそ、縋るような真似は出来ない。

頼れば、手を貸してくれるだろうから。

「……こっ、紅は、これから……どうするんだ？　また、出て行くのか……？」

漸く、紅の言葉を認識した慧音が焦燥に震える声で問う。

「ここ数百年は何もないはずだ。だが、時が来れば……。」

「ぁ……。」

紅の発言。

そして慧音の小さな声が含む、悲しい響きに。

とうとう妹紅の感情が爆発した。

「――ふざけるなぁっ！。」

感情の奔流に身を任せた妹紅は、紅を全力で殴りつけた。

衝撃で壁に激しく打ち据えられたというのに紅は呻き声一つ上げず、そのまま猛々しい怒気を撒き散らす妹紅に襟首を掴み上げられる。

「紅……あたし達がどんな想いでアンタの事を待ってたか分かってるのか……？　漸く帰ってきたと思えば今度はやると決めた事だ？　アンタは一体何がしたいんだ！？」

「も、妹紅……？」

突然の凶行に茫然自失にも近い慧音は戸惑うしかない。

「答えろ！」

声を荒げて妹紅が問う。
掴み上げられ、壁に叩きつけられて尚、為すがままの紅は。
口の端から血を流しながらも、ただ一言小さく呟いた。

「……すまない。」

否定の言葉を。
妹紅の顔から感情が抜け落ちた。

「……もういい。」

やはり感情の感じられない声音で呟いた妹紅は、片手で紅を引きずり始めた。
そして家の戸を引き、徐に投げ捨てる。

「あんたなんか、もう家族じゃない。二度と帰ってくるな……！」

道端に投げ捨てられた紅は、ゆっくりと身体を動かして空を見上げる。
星の海が広がる夜空を。

「……。」

復讐に走る彼を”ヒト”に引き止めていた最後の温もり(かぞく)は。

音も無く静かに流れる落ちる涙と共に。
夜の凍えた世界に溶けていった。

復讐鬼には、聞こえない。
すすり泣く少女の押し殺した嗚咽など、届かない。

第二十三話：壊れる絆。（後書き）

脳内に湧き出るこれからの物語……！
それを文にするのが難しくて生きてるのが辛い。

てゅーか初めはここで紅が過去話をする予定だったのに執筆中に変わっちゃったね！キャラが勝手に動くんですよ……。過去バナなんて無くていいよね。

次！次回で１９００年くらいまで飛ばしたい！けど自信ない。
悪くとも次々回には１９世紀に入れます。多分。

第二十四話：歪みの収束（上）（前書き）

うー、二ヶ月更新されてませんという表示は怖いｏｒｚ
書いてるんですけど、中々文が納得行かないというか…。

お待たせしてすみません、次話も出来る限り早く更新したいと思ってますーｗ

第二十四話：歪みの収束（上）

紅が追い出されて数年。

悲しみに暮れる事を忘れ、慧音は寺子屋で教師として自立。

妹紅は、

「見つけた……！　やっとだ。やっと見つけたぞ、蓬莱山輝夜ぁあ！」

憎悪という欲求に身を焦がす。

人間の里、寺子屋。

頭には特徴的”過ぎる”帽子。

胸元に赤いスカーフをあしらった、蒼を基調とするワンピースを着こなす妙齢に見える女性。

慧音だ。

彼女は１５人ほどの人間の子供の前に立ち、教鞭を執る。

その内容は難しいものではない。

簡単な計算と、危険な妖怪への一般的な対処。
そして、幻想郷の歴史だ。

「――という経緯を経て、妖怪の賢者の八雲紫がこの人里を”移設”し、守護している。つまりだ。妖怪だからと言って悪い奴等ばかりではないという事だな」

以前、慧音が敬愛する母と共に過ごした妖怪を嫌う村。
その村を八雲紫が妖怪から護る事を誓い、村を守護しやすい位置に移転した。
其処を基点にし、他に幾つかの村を移転する事で現在の人里の雛形が生まれた。

故に人里は幻想郷と呼ばれる土地の中心部に在るのだ。
勿論、八雲紫の本当の狙いまでは歴史を知るだけでは読み取れない。
しかし、幻想郷のあらゆる場所から平等な位置である事も重要であったのではないかと推測する。

ただし大妖怪の守護が在ろうとも妖怪という脅威にさらされているのは変わらない。
そこでいくつかの村に居た退魔師の家系の者が主立って人里の防衛を担っている。
力のある妖怪、知性のある妖怪は八雲紫の脅威によって人里を襲わない。
力の無い妖怪、知性のない妖怪は退魔師たちが共同で創り上げた結界によって弾かれる。

稀に中途半端に力のある妖怪の襲撃が在るが、それは妹紅と慧音、そして退魔師が共同で当たる。
そうでなくとも、人里の対妖怪戦力は充実している。

妖怪の坩堝たる幻想郷の人里であるが故に、警備は万全。
何より、妖怪は幻想郷の外に人間を狩りに行くのが通例になっている。

つまり、外の世界よりも安全なのだ。態々人里を出て行く者は居ない。故に秘境。
秘境だからこそ、理想郷は理想郷足りえるのだ。

「けーねせんせーみたいにー？」

生徒から（託児所のような扱いかもしれないが）無邪気な声が上がる。
自分を妖怪だと認識し、その上で此処で教鞭を振るう事を認められている。
その事実を噛み締めながら慧音は先生と呼ばれるに相応しい立ち振る舞いを己に求める。

「まぁ、そうだな。だが、妖怪の中にも確かに悪い輩は居るから無闇に近づかない事。出会っても目上の人に対応するように対応する事。いいな？」

『はーい！』

元気のいい返事が返される。
今では妖怪に対する理解が在る者も多い。
いずれ、人里に妖怪も自由に出入り出来るようになるかもしれない。

「うむ、では今日は此処まで」

「けいね先生さよならー！」

「ああ、さよなら……」

大きく手を振り、帰っていく子供達に手を振り返す。
体温によってほんの少し上昇していた室内の暖気が逃げていく。

慧音はこの時間が嫌いだった。
否応無く、此処には誰も居ないのだと理解させられるから。
あの時の事を思い出すから。

「……帰ろう」

慧音は帰路につく。
誰もいない、家へと。
その姿に覇気は無い。

迷いの竹林

「燃え尽きろぉぉおおお！！」

妹紅はその手の劫火を投げ放ち、相対する怨敵の身を焦がす。
灼熱の炎に飲まれて”一度”死に絶えた絶世の美女――蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）は苦痛に喘ぐ事もなく、炎の中に佇む。
炎獄に居ながらも、その黒髪黒瞳は消えない。幾ら燃えても燃え尽

きない。
炎に焼かれ、皮膚が焼け爛れては治っていく、否。これは最早再生と表すべき回復速度。

妹紅と同じ、不死者だ。

衣服が焼け落ち、見るモノ全てを魅了する肢体を月下の下に晒す。
羞恥に身を隠す事も、世の女性全ての理想とも言えるスタイルを誇る事も無い。
ただ、在るがままに、当然の様に、其処に立っている。

その顔にある表情はまるで、可愛らしい愛玩動物に遊びをせがまれた人間の様に。
己を殺そうと”無駄な事”に必死になる少女を愛でている。
その黒い瞳の奥に見えるのは慈愛、――そして情欲。
淫靡で怪しい光が妹紅を身を舐め上げる。

その様が更に妹紅の神経を逆撫でする。
激情が妖気を刺激し、怒りに比例して劫火は熱量を増す。

「あぁあああああ！」

妹紅の叫びと共に莫大なエネルギーが指向性を得る。

――フェニックスの尾！

圧倒的なまでの熱量で輝夜を焼き殺す。肉片の一片だって残してやらない。
自分は、脅威なのだと意思を込めて妖気を業へと昇華する。

太陽と見紛うばかりの熱源から無数の熱線が迸る。
一つ一つが必殺。全てを蒸発させてしまう程の絨毯爆撃。
避ける事を赦さず、受ける事すら赦さない。絶対の炎熱地獄。

そのはずだった。

気付けたのは運が良かったからか、或いは”気付かせて”もらったのか。
幾千幾万の熱線を掻い潜り、ただの矢が一本妹紅の肩を貫いた。

「ぐっ！」

避けるのではなく、受けるのでもなく。
止められた。
だが、輝夜は炎に飲み込まれた。第一その位置からの狙撃では角度が違いすぎる。
ならば、

――新手かっ！

この一本の矢は警告だ。
いつでも落とせるんだ、逃げるなら見逃してやるぞ、という通告。
だが、

「それがなんだっていうん……だっ……」

言葉と共に妖気を集中した瞬間。
妹紅のこめかみを矢が捉える。

永遠亭。
彷徨える竹林に潜む日本家屋。
その屋根の上に、沈みかける太陽の光に身を晒す女性が一人。
銀髪に深い黒の眼。だが、眼を引くのは身につけているものだろう。

その手には大弓。和弓とも呼ばれる七尺三寸（約２２１ｃｍ）の弓。
そして真っ黒な胸当てが陽の光を反射している。その下には赤と紫の色が隣り合わない奇妙な服を着ている。
女性は名を、八意永琳（やごころえいりん）という。

「……そう、帰らないのね。残念だわ」

呟いた言葉は相手に届く事なく夕日が飲み込む。
矢と共に、こちらの意思は伝えられたはず。しかし、それでも引かないというのであれば……。
視線の先には大火を生み出す妖怪と思しき少女。

その少女を視界の端に捉えながらも永琳は矢を取り、その矢羽の一部を噛み千切る。
矢とは、矢羽によって、安定して飛ぶ。それを千切ってしまえば、もう真っ直ぐ飛ぶ事は不可能。
余人から見れば狂気の沙汰か、気が触れた様にしか見えない行動であろうと、其処には意味がある。

八意永琳は、月の頭脳とまで呼ばれる天才の中の天才。或いは鬼才とでも言うべき頭脳を誇る。

その他の追従を赦さぬ明晰な頭脳を持つ麗人は矢を弓に番え、構える。

構えた弓矢の先には生い茂る竹林以外には何も無い。
しかし、永琳は躊躇せず構え、――そして放つ。
ただそれだけだというのに、それは触れえざる者の様にも感じられる姿だった。

放たれた矢は、無数に乱立する竹の隙間を縫う様に飛ぶ。
そして、曲がった。

落ちたのではない。
緩やかな曲線を描きながら、前方に飛ぶはずの矢の軌道が、

横に弧を描いたのだ。
綺麗な弧を描きつつ、時に風に揺らめき竹を避け、熱の塊を迂回し、
――炎を操る少女の頭部を横から捉えた。

蓬莱山輝夜は、またしても炎熱によって死を迎えた。
そして即座に蘇生する。

ただ、生きるだけの生活は退屈が過ぎる。
其処に丁度良くやって来たのは、昔振った男の娘。
何故か蓬莱の薬を服用し、蓬莱人に為っていたが、これ程面白い事には中々出会えない。

死なないと知っているのか、或いは知らないのか。
どちらにしても、蓬莱人たる自分を本気で殺しに来たのは彼女が初めてだ。

余りにも健気だから、思わず愛でてしまった。愛しさすらも感じる。
こんな”些細な”事に本気に為れるあの娘が愛らしい。灼熱の業火すら気にならない。
それ程までの悦楽だ。

輝夜はこの楽しい時間が続けばいいと願いながら少女を探し視線を上げるが、其処には何も無い。
灼熱の業火も、愛しき愚かな娘も。あるのは炎に焼かれ、小さな広場になったという事実のみ。
どういう事かに思考を回し、そこで背後から近づく従者に気が付いた。

「……永琳？　貴女、何をしたの？」

「すみません姫様。破魔矢で射抜いたのですが、逃げられました」

従者の視線の先を見れば、二本の矢と僅かばかりの血痕が落ちている。永琳自作の破魔矢だ。
妖怪であれば意味があったが、あの娘は蓬莱人、人間だ。

「破魔矢の意味は無いわ。あの娘、人間だもの。ただの矢と同じね」

「蓬莱人。……お知り合いでしたか？」

月人の可能性を考え、否定。他に有り得るとすれば、かつて地上に残した蓬莱の薬を服用した地上人。

一瞬で導き出し、輝夜の対応を考慮した上で問う。

「いいえ、知り合いという程でもないわ。私が知っているのは、あの子の父親」

「覚えてるんですか？　珍しいですね」

「ええ。一番まともな男だったもの。多少は、ね」

かつて、かぐや姫と呼ばれた時に思いを馳せる。
面倒事がやってくるまでは、退屈を忘れられた時。優しい時間。
しかし永琳は、物思いに耽る事を遮った。

「姫様、御召し物はてゐが用意しているはずです。もう直ぐ陽が沈みますから戻りましょう」

「……永琳、少しは空気を読みなさい」

「では、弟子達が私の捜索をしているというのに勝手に出歩いて見つかった事の説教から始めましょう」

見つけたのが月人じゃなかったのは幸運ですが、と続く言葉は耳に入らない。
一瞬の硬直。
が、即座に輝夜の思考が急速に回転し、口を動かした。

「あ、あーそれはね、永琳……？」

「はい、なんですか？」

にこやかな笑顔が圧力を伴っている。
輝夜は姫であるが、ヒエラルキーの頂点は永琳。

「たっ……退屈だったのよ！　永遠を生きるに当たって一番困るのは退屈よ退屈！　だから――」

「――では勉強しましょう。ああ、私の事はお気になさらず。私は姫様の家庭教師でもありますから」

永琳の微笑みがトラウマになりかねないと輝夜は本気で思った。

妹紅は迷いの竹林を抜け出し人里の方角へ歩いていた。
身体は自分の血で少しだが濡れている。

「くそっ……。なんなんだよ、あの弓矢……ッ！」

妹紅の肩を貫き、そして次には殺した矢。
そのどちらもが、信じがたい軌道だった。

一射目は、数多の熱線が走る『フェニックスの尾』を掻い潜って矢を届かせた。
高熱という言葉ですら生ぬるい炎の中を通すには、火を掠める事さえ赦されない。針の穴に糸を通すよりも遥かに難しい。

二射目に至っては、理解不能だ。

全く別の方向から飛んできた。近くに居ないのは確認している。
つまり、それなりの距離を数秒で踏破しなければこめかみに矢が刺さる位置から矢を放つ事は出来ない。
距離を無視出来る能力持ちか、或いは理解出来ない程の絶技か。
自分では理解出来ないが、矢羽の一部が切り取られていた事が何か関係しているんだろう。

そして、そのどちらもが、濫立する竹林の隙間を通している。

――神業。

この一語に尽きる。
こんな化物染みた弓兵と輝夜を同時に相手にするのは不可能だ。

「くそっ……」

悪態を吐いても現状は変わらない。
理解しているからこそ、余計に腹立たしい。

なんとかしたいが、今日は輝夜を見つけることが出来ただけでも良しとしよう。
夜の、妖怪の時間になる前に人里に入りたい。
そう考えて、若干歩みが速くなる。

妹紅は、自分が哂っている事に気付かない。

人里。

人里を護る結界。
退魔師が共同が創り上げた守護結界は強固だ。
低級な妖怪に破られる心配はほぼ無いと言ってもいい。

しかし、人間が創り上げた物のは違いない。時と共に劣化していく。
何代も前の退魔師達の大傑作と言えども例外ではない。
その劣化を修復出来るもの退魔師。ならば、とついでの様に人里近辺の見回りも行われている。

知能の低い妖怪だろうと、交戦経験は馬鹿に出来ない。
それを幻想郷という妖怪の坩堝に済む退魔師達は知っている。
先達に強制的に叩き込まれた、その経験からだろう。
風に混じる、僅かな香りに気付けたのは。

「……血の、匂い」

身体が、精神が、研ぎ澄まされていく。
神経が鋭敏に。
肉体が熱を持ち。
精神が冷めていく。

夕日が落ちる直前。妖怪が目覚める夜の世界の入り口。
妖怪も血を流す。人間も血を流す。
その事実が表すのは不変の現実、――闘争の残滓。

そして戦闘が、終わっているとは限らない。
退魔師、それも陰陽師の女性、――博麗玲(はくれいれい)、上衣と袴を帯で締め、

羽織もあり大麻（おおぬさ）を持つ、巫女は臨戦態勢に移行し、符を構える。
血の匂いが強くなっているのを感じる。
つまり、出血した誰かか、或いは返り血を浴びた誰かが接近しているという事。

血の匂いは強くない事から出血なら大した怪我ではない。
返り血ならば、綺麗に殺していると分かる。

足音が、草木を掻き分ける音がはっきりと聞こえるところまで来た。
次の瞬間。
木々の影から夕日を反射する、真っ白な髪を携えた女性が姿を現した。

その容姿を確認した玲は警戒レベルを下げる。

「！　妹紅さん、でしたか」

「……ああ」

紅の警備隊。人里に住み守護を担う不死の人間。
妖気を纏い、妖術を用いて妖怪と戦う人間。
危険視する声が無いとは言わないが、それもこの態度が気に食わないだけだと気付いているだろうに態度を変える事をしない。
頑固な人だ、と口には出さずに玲は妹紅のぶっきらぼうな返事に苦笑を溢す。

「大丈夫ですか？　今、お師様に伝えますから」

「……ああ、頼む」

簡易的な式に文(ふみ)を運ばせる。
一時的に結界に穴を開けるのは人里と外とを行き来する事に必須。
規定の位置で高い実力を持つ方が行う。
直ぐにでも遣いの人が来るだろう。それまでの時間は暇だ。

「……妹紅さん？」

「……なんだよ？」

木に寄りかかって休む妹紅に玲が問いかける。
だが、その問いを聞いた妹紅は、動揺する。

「何か、いい事でもあったんですか？」

「なん、で……そんな事を聞くんだ？」

「だって、顔。笑っていますよ」

手で自分の頬に触れる妹紅は、納得した。
長年、否。生涯のほぼ全てに置いて憎み続けた宿敵を見つけたのだ。
嬉しくないはずがない。
そして、それを誰かに知られたくないと強く願った。

「……別に、大した事じゃない」

「そうですか。妹紅さんがそうおっしゃるならそうなんでしょうね」

「……」

「……」

妹紅に取って、この間は非常に居心地の悪いものだった。
玲が何かをしている訳ではない。ただ、自分が浅ましく感じられた。

「あ、来たみたいですよ」

玲が見る方角に視線を向ければ飛んでやってくる退魔師が二人。
妹紅はこの息苦しい時間が終わってくれた事に安堵した。

人里へと帰る妹紅を見送った玲は違和感を感じていた。
妹紅さんが笑った。
それはいい。それ自体はいい事だと断じる事が出来る。

しかし、何処か。
何処か、違和感を感じる。
この違和感。感じている感情を言葉に表すならば……。

「……きょう、ふ？」

言ってから、自分を罵倒した。
何を莫迦な、と。
強大な妖怪と戦い、この人里を守護しているお方に対して自分が恐怖を感じるなど在り得ない。

そう言い聞かせて、結界の綻びを探す巡回に戻った。

結界を越えて人里に入った妹紅は広場に向かった。
別に目的があった訳ではない。
後から考えれば虫の知らせ、とでも言うかもしれない。
もしも、この時此処で違う行動を取っていれば――。

「……え？」

紅が居た。
勘違いではない。
この人間の寝静まった夜の静寂の中に確かに存在している。

妹紅の呆然とした声が届いたのだろうか。
不意に紅が視線を向けた。

「――――」

人間味を感じられない瞳を向ける紅。
その視線を真正面から受け止める妹紅。
道を違えた二人に共通する唯一は驚愕の感情。

「……」

しかし、そこから意思の疎通が為される事は無い。
互いに言葉が無いのだ。
紅は己が愚者であるが故に。

妹紅は憤怒の感情の為に。

一体どれだけの間、そうやって視線をぶつけていたのだろうか。
ぶつかる視線を先に外したのは、紅。
視線を下ろし、去っていく。
その後ろ姿を睨み続ける妹紅の心中は荒れに荒れる。

自分でも何故こんなにも腹が立つのかが分からない。
紅がふざけた事を言って、何もない事も腹立たしい。
だが、それだけではない。
ただひたすらに、

「……ムカツク」

悪態を吐き、妹紅は帰路に着いた。

視線を交わしながら、しかし決して道が交わる事のない二人が対峙した、
最後にして、唯一の邂逅（チャンス）は、こうして終わった。

妹紅が家の戸を開いた時。

「妹紅ッ！」

「えっ、あ……」

慧音が抱きついた。
抱きとめる妹紅は、慧音の身体が微かに震えている事に気が付く。

「……妹紅。今日は、どうしたんだ？　やけに遅かっ……怪我してるじゃないかッ！　何があった!?　大丈夫なのか!?」

あの日。妹紅が紅を追い出した日。
一晩中泣き続けた日。
慧音は少し、成長した。

「ああ、大丈夫だ。ちょっと、疲れただけだよ」

「そ、そうか……。妹紅まで、あ、いや……直ぐに夕餉にするから、汚れを落としてきてくれ」

辛くても、弱音を漏らさなくなった。

「分かった」

そして孤独を恐れるようになり。
其処に存在するのだと確認するかの様に、成長の代償の様に。
接触行為が増えた。
温もりを感じる事で安心したいのかもしれない。

「あ、妹紅」

「ん？」

「その……。目付きが少し、怖いんだが……本当に大丈夫か？」

「……気のせいでしょ？」

変化に過敏になった慧音によって。
不安という感情が、揺れ動く。

汚れを落とす。
貴族だった頃に、湯に浸かる習慣を当然だと思っていた。
同時に、もうそんな事をする事が無いとも思っていた。

紅は不思議なヤツだった。
俗っぽいのに、貴族だけの習慣を当たり前のように……。
湯に浸かりながら無為な時間を過ごしていると、アイツの事ばかり浮かんでくる。
この『どらむカン風呂』というものもアイツの発案だった。

アイツと居る時間は、当たり前のモノになっていたんだ。
ただ日々を暮らしているだけで、それを思い知らされる。

だからこそ、余計に考えさせられる。
あの日、自分はどうすればよかったのかと。
無理矢理にでも聞き出せばよかったのだろうか。
だが紅が何を抱えていたのかを話すとは思えない。

ならば、赦せばよかったのだろうか。

３００年放っておかれた上に、また、去っていくのを。

――無理だ。

そんな事、赦せるはずがない。
理由があるなら言えばいい。
今日、会った時にすら、何も言わなかった。
怒りに我を忘れてしまうそうになる。

赦せない。そうだ。
だが、それよりも、何故か無性にアイツが腹立たしい。
そう思った。
何故だろうかと、妹紅は水面に映る自分の顔を見詰ながら考える。

「……？」

違和感を、否。
既視感を感じた。
自分の顔に既視感を感じるとは、どういう事なのか。
直ぐに湯から出て、鏡に映る自分の姿を確認する。

若干乳房が足りないかもしれないが、十分に女性らしい艶のある身体。
色が抜け落ちて白くなってしまった髪。
人間には在り得ざる紅に染まる瞳。

――眼？

慧音の言葉が、蘇る。

『目付きが少し、怖いんだが』

「……う、そ……」

鏡に映る藤原妹紅という少女の眼は、
頑なに話す事を拒否した少年の眼と、同じ感情(いろ)をしていた。

妹紅は風呂を上がり、匂いのする方へと向かう。
それを見た慧音は慌てて妹紅の手を取り、風呂場へと引っ張って行く。

「あ、妹紅上がった……ええっ!?　何やって……!　ふっ、服着て服!　ほら、こっちに――」

なぜなら、妹紅は衣服を身に付けていなかったからだ。

「慧音」

小さな呼び声。
その声音を聞き、ただ事ではないと悟った慧音は振り返り妹紅と向き合う。
つい先程までとは全く違う様子に驚きながらも平静を装って耳を傾ける。

「……どうしたんだ?」

「あたしは……間違ってたのかな……？」

力なく呟く妹紅。
眼から、光が零れた。
涙を流すその姿は、幼子の様にも見えて。

「……間違う？」

「無理矢理にでも引き止めればよかったのかな……？　それとも、一緒に居ればよかったのかな……？」

「妹紅……？」

余りの儚さに、何を言っても壊れてしまいそうで。
名前を呼ぶことしか出来なくて。

「分からないよ……。分からないのよ……！　紅が赦せなくて！　でも、今のあたしは紅と同じで……あたしには慧音が居て！　でも、紅には誰も居なくて！　……それはあたしのせいで、だからッ……だから……どうにかしなくちゃいけなくて！　……でも、どうすれば……」

癇癪を起こした幼児のように泣きじゃくる妹紅を、ただ抱き締めた。

村では母だけが私を愛してくれた。
そんな私を連れ出し、護ってくれた妹紅。
母の依頼を受けて、私を攫った紅……。

――あぁ、私は……。

ずっと、凄いヒト達だと思っていた。
妖怪の蔓延る世界で生きる術を教えてくれて。
右も左も分からない自分を導いてくれて。
一人でも生きていける程、強いのだと思っていた。

――依存、していたのか。

私が不安を感じないように、振舞っていた。それは、つまり、
ずっと、護ってもらっていたのだ。
情けない。一体何年一緒に過ごしていたのか。
だが、それを知って尚、何も出来ない程子供じゃない。

ならば――

「妹紅。私は、此処に居る。此処に居るんだ」

――今度は、私が二人の力になる番だ。

「一緒に悩もう。一緒に考えよう。一緒に、答えを出そう。だから、
――全部教えてくれ」

妹紅は、妹の様な、娘の様な存在である慧音の前で無様に泣き喚いた事に恥じらいを覚えつつも全てを話した。自分の知る全てを。決

して多くは無い、事実を。

「……それで、全部か？」

慧音は妹紅が小さく頷くのを確認し、事実を反芻する。

妹紅がずっと憎んでいたヤツと出会った。
自分の眼が、紅の眼と同じだと気付いた。
３００年の時を経て帰ってきた時、既に紅はその眼をしていた。
今日、会った時の紅は、もう復讐しか見えてないかもしれない。

今日、慧音が用意した食事は焼き鳥をメインにした妹紅の好物。
だが、二人とも手をつけない内に既に完全に熱を失い、冷め切っている。
妹紅を着替えさせてから、随分と話し込んでいたようだ。

「そうか……そうか……」

妹紅が語った事柄は事のさわりに過ぎない。
だが慧音はその表層の現実にすら気が付けなかった。
だから、

「――すまなかった……！」

土下座。
謝罪する以外に出来る事があるのだろうか。

「え？　ちょっと、行き成り何……！？」

「すまなかった……。私は、何も見えていなかった……！母に愛さ

れ、妹紅に護られ、紅に救われ……いつしか、二人に護られている事を！当然の様に甘受していた……！　私は、まだ何も返せていないッ！
だから！　今度は私が、私が……」

妹紅が、慧音をその胸に抱き締めた。

「……強くなったね、慧音」

――ぁ

大好きな人の、敬愛する人の。
家族の胸の中で、慧音は息を呑んだ。

「本当に、強くなったよ。もう、一人前だね？」

認めてもらえた。
護られているだけの自分が。
それは、慧音にとって何よりも望んだ言葉。

「寧ろ、あたしの方が情けないかな？　泣いちゃったもんねぇ……」

そんな事はない。
そう言おうとしても、妹紅は慧音を、抱き締めたまま。

――ずるいよ、妹紅さん。こんな風に抱き締められたら、何も出来ないじゃないですか。

慧音が妹紅の背に腕を回し、抱き締める。
それが嬉しかったのだろうか。

呼応するように、妹紅が更に強く抱き締められた。

「ふふっ……。まずは、紅を探しに行こうか。追い出したあたしが言うのもなんだけどね？」

慧音が同意しようとした瞬間、其処に割り込む声があった。

「その必要は無いわよ？」

その声に妹紅の抱き締める力が緩み、慧音は振り返る。
其処に居たのは、人里の守護者。
最強と名高い妖怪の賢者。
空中に浮かぶスキマに腰掛ける大妖怪は、

「八雲、紫……！？」

妹紅が驚愕と共に声を漏らす。
慧音とて愕然としている。
だが、それは八雲紫が其処に居るから”だけ”ではない。

「どういう意味だ……？」

慧音のその疑問を受ける紫は口元を扇子で隠し、上品に笑いを溢した。
余りに可笑し過ぎて、笑いを堪えられないとでも言うかのように。
だが、それは二人の神経を逆撫でする不協和音。

「……何故必要が無いと言えるんだ？」

慧音の二度目の問いと聞いて、紫は口元を隠していた扇子を閉じた。
そして優雅な動きで扇子で慧音と妹紅の二人を指す。

「貴方達、彼の家族だから伝えに来て上げたのよ？」

彼、というのが紅を指しているのは二人にも理解出来た。理解してしまった。
『家族だから』というのはどういう意味なのか。

「……」

二人は口を開かない。
その意味を考えているから、沈黙。
或いは、理解したくないからの沈黙だったのか。

「……どういう意味、だ？」

その矛盾の苦痛に耐えかねた慧音は問いと口にする。
そして、紫の回答もまた簡潔だった。

「死んだからよ」

第二十四話：歪みの収束（上）（後書き）

次話のストーリーは出来てます。

ただ、文章にするって難しい……。

大体その更に次が先に完成してるってどういうことなの……。

第二十五話：歪みの収束（中）

「死んだからよ」

慧音にとって、そして妹紅に取って八雲紫の言葉は受け入れがたいものだった。
だが紫は空中に浮かぶスキマに座ったまま、それ以上何も言わない。
何もしない。微笑を浮かべ、現実を突きつけるのみ。

「死んだ……？」

慧音は呆然と現実味の無い言葉を反芻し、
妹紅が儚くも反論する。

「嘘だッ！　アイツはさっきまで人里に居たんだ！　どうやったら死ねるって言うんだよッ！」

妹紅に感情のままに否定する言葉を叩きつけられる紫は動じない。
子供の癇癪に感じる事など、無い。
黙して語らず。
ただ、道を。
現実を示す。

「彼の死骸までは案内してあげましょう」

そう言って、紫は否定する（にげる）事しか出来ない二人の前にス

キマを開く。
そして扇子でもって無数の眼が見詰めてくる不気味な空間を示す。
その道に続く先は希望という名の絶望。

「此処を潜りなさいな。この先に、彼の終わりがある」

「……」

妹紅と慧音の二人は答えない。答えたくない。
この空間の先に在るのが、本当に紅の死であるかもしれないから。
逃避。己の防衛行為とも言えるだろう。
しかし紫はそれを赦さない。
扇子で口元を隠す、お得意の構え。

「紅の死が嘘だと言いたいのでしょう？　私に示せるのはコレだけ。
ならば、私の示すコレを否定出来れば、彼の死が嘘だと言えるわ。
私の言葉を嘘と言いたいのでしょう？　ほら。彼の死を否定（こうてい）する為
に、此処を行きなさい。私の戯言（げんじつ）だと証明する為に、往きなさい」

否定できれば。
出来るかもしれないと僅かでも思ってしまえば、それで終わり。
スキマの先に待つのは、是非もない真実なのだから。

慧音も妹紅も、行くしかない。
生きていたとしても、死んでいるのだとしても、行かなければ確かめる事すら出来ないのだから。

「行かないの？」

二人は感覚で理解する。

紫の甘言を。
甘い誘惑に誘われて往けば、その先に待つのは辛い現実だけだと。
嘘も真実もない。ただの事実なのだと。

「紅が、何故死んだのか。知っているのか……？」

「……貴女は賢しいのね」

死んだと断定し、その死因を問う慧音を紫は評価する。
欲求に耐え、最も知るべき事を問う。そのあり方を好ましいと紫は思う。

「答えてくれ」

余計な問答をしている時間が苦しい。
死んでいるのはほぼ確定した現実。
しかし、それでも生存を期待する感情を抑える事など出来るはずがない。

「……。彼は焦ったのよ。力を求める余り、ね。……これ以上は自分で辿り着きなさい。サービスは終わり」

「……そうか」

言葉を発して直ぐに妹紅はスキマへと飛び込んでいき、
後に続くようにして慧音がスキマに身を向け、一言を呟いた。
全てを知って置きながら、何もしなかった貴女が。

「私は貴女が嫌いだ。八雲紫殿」

眼の蠢くスキマの中は最悪の場所だった。
まるで、あの性悪（ゆかり）の性根のような場所だと吐き捨ててしまいたくなる陰鬱な場所。

道は固定されていた。
だが、壁、床、天井。
その全てが泥沼のように、ぬかるんでいた。

そして一歩足を踏み入れただけで、大量の害虫の群を踏み抜いたかのような圧倒的なまでの不快感、そして生理的嫌悪感が襲ってくる、吐き気を催す醜悪な空間。
初めから空を飛んでおけば此処まで不愉快ではなかったかもしれないと妹紅は後悔した。

直ぐに徒歩ではなく、飛翔に切り替えたのにも関わらず気持ち悪い。
喉の奥から若干の酸味を感じる。
吐き気を耐える自分を覗き込む大量という言葉すら生ぬるい眼の大群。
吐いてしまいたい。だが、そんな事をしている暇があるならこの空間を抜けたい。

紅の元に。
生きていると信じたい。
しかし、その可能性が殆ど無い事も理解している。
だからこそ、分からなくなる。

生きているのならば、自分が謝罪した時。
紅は赦して、くれるだろうか。
傍らに居て、寂しさを埋めてやるべきだったのに、追い出した自分を。

「……光？」

まだ小さく、遠くにだが光が確かに見えている。
慧音から声が飛んで来る。
確認出来たのだろう。

「……妹紅」

「……ああ」

間違いない。出口だ。

漸くこの空間から抜けられる。
時間にすれば数分だろう。
だが、数時間も閉じ込められていた様にも感じる。

だからこそ外の空気が恋しい。
光が視界に広がる。

――抜けた。

抜けた先は宵闇。照らす光は星の輝き。
生き物も、草木も、あらゆるモノが眠り落ちている静かな山。
その山の小さな広場。

辺りを見回す妹紅の瞳に倒れ伏す人影が一つ、映りこんだ。
清涼な空気を堪能する暇もなく妹紅は、その人影に駆け寄った。
その塊が生きていると願って。

妹紅と同様、スキマ空間が抜けた慧音が新鮮な空気で肺を満たす。
そして横たわる人影を見つけ、その人影に駆け寄る妹紅に続くように歩を進める。
万が一、億が一にでも紅が生きているならば、この上ない。
だが、所詮願望は願望に過ぎないのだろう。

近づけば近付くほど、強烈なまでの血の匂いが充満しているのが分かる。
分かってしまう。致命的な出血量。

先に確認した妹紅が膝を付き、項垂れる。
妹紅が慧音の視界を遮っていて、月の無い夜では視認できない。

ならば、と数歩進む。
はっきりと肉眼で横たわる人影を視認出来る距離まで。
その肉体に残された傷痕は唯一つのみ。
正確で、確実な致命の一撃がその胸に風穴を穿ったのだ。

「――」

慧音は息を呑み、地に膝を付いた。

それは、驚愕から。
そして、失意から。
飲み込んだ空気を搾り出すように吐き出した息は音となって空気を伝わった。

「……紅」

周りを見渡せば、無数の斬撃が地を、木々を抉っている。
紅の風を使った攻撃による痕跡だろう。
それは、紅と何者かが争っていたという事。
つまり、下手人は全力で奮闘する紅を圧倒できる怪物。

何故頼ってくれなかったのか、そう考え、否定する。
頼れるはずが無いのだと。

「……ごめんなさい」

紅は、死んでいる。
上白沢慧音は、恩を貰うだけ貰って、何も返せていない。
せめて、生きていてくれたのならば。
そんな悔恨が謝罪、そして涙として吐き出される。

「私は……」

何をすればいいのか。
言葉にならぬ疑問。
答えのない問いかけ。
嘆くに悔やむ、その時だった。

「ほう。中々のものだな」

途方に暮れる二人の元に答え（みち）を示す者が現れたのは。

胸部の拳大の穴を穿たれた紅の死体を前に膝を付く妹紅は、後悔の念、罪悪感に苛まれていた。
あの時、追い出さなければ。
あの時、追いかけていれば。
あの時、あの時、あの時。

自分のせいで紅が死んだ。
ただ悔いる事しか出来ない。
己の全てを後悔が蹂躙する。

そんな時だ。
不敵な声が聞こえたのは。

「ほう。中々のものだな」

「……アンタは……？」

妹紅が涙を袖で拭い、体裁を取り繕いながら女性に問う。
問いながら視線も向ければ其処には鋭い印象を受ける眼をした女性が居た。
凛とした顔立ちに、深紅が鮮やかな瞳と長髪を拵え。
何よりも特徴的な九本の尾っぽ。これも髪と同じく深紅。
――九尾の狐……。

女性は思考の中で結論を出しつつも視線を向ける妹紅と一瞬眼を合わせ、――しかし答えず紅の死体を検分し始めた。

「なっ、お前何を……」

慧音が引き剥がす為に歩み寄ろうと脚に力を入れた瞬間に声が来た。
無視出来ない言葉が。

「助けたいか？」

「！？」

絶句。
妹紅、慧音の両名ともその言葉が信じられない。
いや、理解出来ないのだ。

「……な、なに……を……？」

「三度は問わぬ。助けたいか？」

慧音の掠れた泣き言を有無を言わさず切り捨てる女性。
その態度に、そして言葉に妹紅が怒りを吐き出した。

「お前が誰かなんて知らない。けどさ、――ふざけた事を言うなァッ！」

しかしそれは本当に女性への怒りなのだろうか。
或いは、悲哀なのかもしれない。
まるで。

「紅は死んだんだよッ！　死んだヤツを生き返らせる事なんて――」

嘆く様に。
啼く様に。

「出来は、しないんだッ！！」

己に言い聞かせるかの様に。
だが、返された言葉は前提を覆した。

「死者を蘇らせる術など知らぬ」

「な……！？」

前言を無視するかの様な言葉。
一瞬の絶句の後、妹紅から、そして慧音から怒気が溢れ出す。
愚弄しに来たのか、と。

最早相手が誰だろうと関係無い。
この女はやってはなら無い事をしたのだ。
その意志の元に攻撃を加えようとして、

「何、簡単な事だ。死者は蘇らぬ。ならば、――死者にしなければ良い」

再度、無視できぬ言葉に止められた。

その後の事は良く覚えていない。

しかし、妹紅と慧音の中には確かに意志（しゅだん）があった。

紅を死なせないという意志が。

「……妹紅」

「……ああ、分かってる」

記憶に無いのは危険だと思う。

何をどうやって吹き込まれたのか分からない。

だが。だがそれでも、この手段を試したいのだ。

二人は目的の為に動き出す。

「拠点になる場所を探すぞ」

二人のその様子を眺める女性は不敵に笑う。
沙夜だ。
彼女は意識に干渉した二人を離れた木々の隙間から覗いていた。

夜風に髪を揺らしながら沙夜は思う。
紅ならば、容姿の情報だけで己に辿り着くだろうと。
それ以上の情報を与えない事で今は会う気が無いと紅が悟る事を確信していた。

「ふふ……。全く、手間を掛けさせおって。まぁ、そういう所が可愛くもあるのだがな」

ただひたすらに自分を求め続ける少年、――紅を想うと、身体が熱を持つ。
紅はその願望を達成できずに死んだ。
だが、その死を拒絶しなかった。
その在り方は、沙夜が紅に教えた終わり方。

死神が付け狙うというのならば、死神を殺す。
力及ばず死ぬというのならば、その死を受け入れる。
それが沙夜の在り方。
故に常ならば、紅の死を沙夜は否定しない。

だが、沙夜の本質は暴君。
ただ己の思うがままに生きる存在（バケモノ）。
他者を傅かせるのは好きだが付き纏われるのは嫌う。
そんな感情の赴くままに存在する暴君は思う。

――紅は、我のものだ。

その生涯、生死すらも他人にくれてやる気はない。
そして、自分のものに手を出した愚者には、制裁を加えなくてはならない。

「……いずれ往かねばならぬとは思っていたが、ふむ。事のついで（，，，）だ、済ませておくとしよう」

沙夜が、語られぬ伝説を創り始める。

太陽の畑。
星々の照らす光は淡く儚さを感じさせる。
そんな星空の下で対峙する二人の女性が居る。

向日葵畑に聳（そび）え立つ大木を背に立つのはチェック柄のワンピースの淑女然とした女性。
肩程の長さの葉色の髪を揺らし、日傘を指している。
幽香だ。
太陽の花の如く鮮烈に生きる華の妖怪。

対するは、カジュアルな服装に身を包む沙夜。
深紅に燃える長髪と瞳、そして九尾の尻尾。
妖怪にして、妖怪に非ざる究極の異端。

「……一応聞いておくわ。貴女の様な妖怪が此処に何の用？」

幽香の言葉は口調こそ穏やかにも聞こえるが顔は強張り、既に臨戦態勢に入っている。
腰を僅か数センチだが、確かに落とす事で即座に動けるように警戒しているのだ。
風見幽香が、相対するだけで其処まで警戒しなくてはならない存在が一体どれだけ居ると言うのだろうか。

「なに、ただの雑事だ。我のモノに手を出した害虫の駆除という、な」

沙夜の言葉と同時に太陽の丘を濃密な殺気が覆う。
緩やかに、しかし確実に妖気を高める幽香。

「……それがあの半妖の事だというなら、本当に残念ね」

「ほう？」

幽香は妖気を限界まで高めて己の一個の武器とし、
同時に少しでも九尾の妖狐の精神を揺さぶろうと挑発する。
普段ならば、ただいたぶる為に言葉を投げ掛けていただろう。
しかし、此処では少しでも沙夜の精神を揺らす為の行為。

「あの半妖は本当に無様に死んだわ。何も出来ずにね。あんな俗物を手元に置いてる時点で貴女の程度が知れるわ。本当に、――下らない」

「く、くくくく……」

その挑発行為にいつものキレが無く、此処では沙夜に娯楽を提供する事しか出来ない。

まさしくその感情は愉悦。

「……何が可笑しいのかしら？」

「余り笑わせるな、戯け。紅の散り様は美しかったぞ？　あれ以上に輝けるものなどそうはあるまい」

だが、と前置きして沙夜は続ける。

「惜しむらくは、その輝きを創ったのがお前だという事よな。そして我はそれを赦さぬ。紅は我のモノなのだよ。血も肉も。そして、――死すらも。横から奪う事など赦さぬ。赦さぬよ、――決して、な」

表情から愉悦が消え、底冷えする冷酷さが現れる。
途端に空気が急激なまでに重くなった。
少なくとも、幽香にはそう感じられた。
それは、

――畏怖？

脳裏を掠めた疑問をプライドで一蹴する。
表面にはカケラほどの出さずに続ける。

「……赦さないのなら、どうするのかしら？」

「無論、消す」

その瞬間。
観客の居ない太陽の丘で、たった二人の戦乙女が激突した。

先手は幽香。
一瞬にして距離をゼロにし、右足で踏み込み、右手に持つ傘による刺突。
緩やかな動きでかわした沙夜の足元に捕縛の為のツタを伸ばす。
此処で捕らえ、全力で殴りつける。
だが沙夜は足捌きだけで容易く回避。
構わないと拳を振り上げるが、沙夜の脚が幽香のガラ空きの脇腹に刺さる。
鈍く深い打撃音。
それ程強く打った様には見えない蹴撃だった。
だがそれは幽香を吹き飛ばして余りある威力を持つ。
「くッ！」
数メートルの強制飛行を着地で止め、腰を落とした低い姿勢で追撃への警戒を持って視線を上げる幽香。
しかし、沙夜は蹴りを放った位置から動いていない。
どういうつもりなのかと問おうと幽香が口を開くと同時。
沙夜が憮然と言った。
「何をやっている？　力を抑えていては相手にならぬぞ」

「……そうね」

口の端から流す血を拭い、答える。
余人が見れば驚愕に慄くだろう。
あの（，，）風見幽香が、敵を強いと認めたのだから。

「確かに、手加減してたら無理ね」

そして何よりも。
花の犠牲を無視させた。
フラワーマスターが、花（誇り）を見捨てるのだ。
だから、

「――必ず殺す」

極度の興奮は、幽香から表情という無駄を省かせた。
憤怒が本能を刺激し、更に溢れ出す妖気。
剥き身の刀の様な冷たい殺意。
其処に在るのは闘争本能の塊。

「ふふ……そうだ、本能を明かせ。我に届かせてみせよ」

次の瞬間、激突の衝撃に世界が軋み、太陽の畑が爆散した。

幽香と沙夜。
二人の速度はまさしく高速。
移動するたびに空気との摩擦によって水蒸気が発生する。

水蒸気爆発だ。

だが、それだけではない。
亜音速で移動する二人の機動は直線ではなく、お互いが牽制し合い、
時にすれ違い、時に激突する。

複雑な戦闘機動。
水蒸気爆発を起こすほど高速に移動する物体が一箇所に留まり続け
ればどうなるだろうか。
莫大な熱量を持った水蒸気が逃げ道を求めて拡散し、
台風を越す風と熱の塊が直径数メートル規模で発生する。

風速で言えば８０メートルを超過する暴風だろう。
だが、二人はそんな凶悪という言葉ですら生ぬるい災害の中を戦っ
ている。
幽香と沙夜はお互いだけを認識する。

膨大な風を無視して打撃を繰り出す。
拳を放ち、捌いては放つ。
脚を避け、時に受けては折りに掛かる。
傘を振り、叩きつけては潜り込まれる。
敵を掴み、崩しに掛かっては投げ飛ばされる。
己に可能なあらゆる攻撃を敵に放ち、放たれる。

幾度目の衝突だろうか。
突如沙夜が苛烈に攻め立てる。

さらに速度のギアを上げたのだ。
打撃の回転が上がり、幽香は防戦に回る。

繰り出す攻撃が減ってゆき、やがて受けるのみになり、
しかし、この程度で手折れる程幽香は安い女ではない。
沙夜の放つ蹴撃に狙いを定め、

――此処！

左腕を沙夜の右脚に添えて受け流す。
蹴りに荷重を持っていかれ、沙夜の身体が流れる。
其処に幽香は今度こそ神速の一撃を狙う。
受け流す事によって捻れた腰を戻しながら更に一歩を踏み込み、風に押させながら傘を突く。

刺突。

傘による一撃は神速の一撃。
風の影響を受けていないかのように、ブレていない。
バランスを崩しかけている状態では、この非凡な刺突を捌く事も避ける事も難しいと判断した沙夜は後ろに跳ぶ事で回避するが、

かわしきれずに腹部を僅かながら切り裂かれた。
空中に在りながら、この流れを沙夜は内心で賞賛した。

――面白い女だ。

音を置き去りにする速度の中であるが故に、
遅れた音の満ちる状況で正確に蹴撃を受け流す能力は言うまでも無く優秀である。

そして、単調な風ならばまだしも此の荒れた暴風のを読み、壮絶とも言える刺突の後押しさせた。
それだけでなく、

「――終わりなさいッ！！」

幽香の妖気が収束し、突き出した格好の傘の先端から純白の極光（マスタースパーク）が放たれる。
その流れをも布石に出来る頭脳を賞賛し、沙夜の視界が白く染め上げられた。

妹紅と慧音は人間の里の自宅へと辿り着いた。

「なあ」

「なんだ」

妹紅が若干の気だるさを感じさせる声で問うた。

「拠点って、ウチ？」

人里の自宅を拠点にしたいところだが、人が訪ねてくると邪魔になる。
もっと人が居ない場所が好ましい。

「……いや、違うが。それに他にもまだ必要なモノがあるだろう？」

謎の九尾との邂逅で得た知識の様な、曖昧なモノ。
その中で明確に必要なモノも示されている。

「あたし達と、転移符と、拠点か」

「そうだ」

妹紅の答えを肯定する。
足りないのは、

「拠点と転移符か。なんか心当たりでも？」

妹紅と慧音も紅から転移符を貰っている。
だが、既に使いきってしまっている。
故に、外部に頼らざるを得ない。

「まあ、一応。……随分と昔に、金髪の少女が訪ねて来ただろう。彼女だ」

慧音が言ったのは、紅が約束の為に居なかった時期。

「……あ。そういえば、紅の転移符持ってた気がする。えっと、名前なんて言ったっけ？　確か…」

「――アリス・マーガトロイド。魔法の森に住居を置く、魔法使いだ」

「なッ……！？」

風見幽香は討てたと確信できるわけではないが、それでもほぼ確実に喰らわせた。
そう判断して前方のみを警戒している時、横から衝撃を受けた。
それは、

――マスタースパーク！？

ほんの僅かに思考し、幽香は己の放った業に飲み込まれた。

その様子を視界に捉えながら、沙夜は盾をかざす様に構えていた。
前に突き出した手にあるのは白く輝く薄い円盤。
それも、直ぐに溶ける様に掻き消える。

沙夜の身体は刺突による裂傷を除けば無傷。
マスタースパークで焼け爛れたような痕跡は見られない。
その視線は前方、マスタースパークに飲まれる直前に幽香が立っていた場所に向けられている。
そこには、

「あ……ぐ……」

沙夜とは対照的に皮膚は焼け爛れて無傷な部分を探すほうが難しい、まさしく満身創痍の幽香が膝をつき、呻きながらも生を主張していた。

「ふむ。生きていたか」

「一体……なに、を……」

幽香が疑問を溢すのも無理は無い。
魔術、或いは魔法に精通している者でも沙夜のやった事を即興で行うのは不可能に近い大魔術なのだから。

「何を？　ああ、ちょっとした手品に過ぎぬよ」

「手品……ですって？」

沙夜が行った奇跡の名は「転移門」
術者単体が移動する空間転移の上位魔術。
その転移門を自分の前方に入り口を設置。
そして、幽香の横に出口を設置する。
言葉にすれば容易いが、本来は複数の魔術師が共同で行う儀式魔術の域にあるものだ。

「最も、お前が光線など使わなければこちらも使わなかったがな」

それを手品と言えてしまうのは、それこそ規格外の面目躍如という事だろう。

「だが、安心せよ。お前は確かに強い。我に傷を付けたのだからな。体術ならば我に及ぶと認めてやろう。誇るといいぞ？」

「……莫迦に、しないで頂戴。私は誰にも屈しない。誰にも、よ」

幽香の意地を感じて、沙夜が必要以上の妖気を集めた。
それは、沙夜なりの誠意。

「良い在り方だ。中々に好ましい。しばらくは、記憶に留めておくとしよう」

あやかしすらも寝付く闇夜。
太陽の畑”だった”場所で、最期に一輪の華が咲く。

「さて、次は……。ああ、そうか。紅に誇れる我で在らねばならぬな」

紅色を偽る妖狐は、紅い華を咲かせに夜を往く。

第二十五話：歪みの収束（中）（後書き）

また伸びてごめんなさいｏｒｚ
あるぇ～もう少し早く吸血鬼異変に行くはずだったんですがｗ
遠いですねぇ……終わって、平穏⇒大結界騒動…遠いｏｒｚ

今回幽香さんが死んじゃいましたが、コレ以降出ないっていう事じゃりません。
第一主人公死んでる時点でアレですからね。
東方キャラを蹂躙するタイプの小説じゃありませんからー！
いや、後一回だけ蹂躙しますが。
ごめんなさいｏｒｚ

次話は正直かなり遅くなるかも。話の流れは出来てても一文字も書き上げてないので……。その次なら書いてあるのに（´；ω；`）
ブワッ

第二十六話：歪みの収束（下）～語られぬ神話～

新月の夜を越え日が昇り始めた時刻。
魔法の森を深い森を往く人影が二つ。

「慧音、まだ着かないのか？」

白いワイシャツに、符が張られた赤を基調としたもんぺ姿の女性。
藤原妹紅。

「いや、もうすぐのはず――ああ、此処だ。」

答えるのは、中国王朝の帽子を被り、紅いスカーフをあしらった蒼のワンピース姿の、これまた女性。
上白沢慧音。
彼女達は、その見目麗しい姿にまるで似つかわしくない瘴気を孕む森の中を散歩するかの様に進み、
そして目的の建物に辿り着いた。

其処は広場。

その中心に建立された建物こそが、目的の場所。
白く清潔感溢れる壁。
横開きの襖の無い、開閉型の扉。
硝子で出来た窓。

青い煉瓦を均一に並べた屋根。
そこから覗く煙突。
日本では見られない外観の建造物。

洋館。

見た事の無い建築物に妹紅が若干気おされながら呟いた。

「……此処に住んでるのか」

「ああ、そのはずだ。――済まない！誰か居ないか！？」

慧音が声を張り上げるも、返答は無い。
留守なのだろうか、と不安を覚える頃。
木材の軋む、耳障りな音が妙に響いた。

あ、と妹紅が声を漏らし、
――しかしそれ以上の動きが無い事に痺れを切らして内側から僅かに開かれた扉に手を掛けた。

開く。

「おい、開けたんなら何か――！？」

扉を開け、外からも覗ける様になったエントランスに居るだろう扉を開けた人物に呼びかけ、

――居ない？

訳が分からないという焦燥感に苛まれ、――次の瞬間。
視界の端を何かが動き、咄嗟に手を向けて焼き払おうと妖気を集め、

「――待て妹紅！」

慧音がその暴挙を制止する。

「なっ、何を――！？」

「よく見ろ！　――ただの人形だ」

「！？」

どうことか、と妹紅が疑問を漏らした時。
エントランスに新たな人影が現れた。
人影は、

「上海。有難う、ご苦労様。もういいわよ」

「シャンハーイ」

現れた少女が労うと、上海、と呼ばれた人形は返事の様な声を上げて奥へと飛んでゆく。
その様子を呆然と眺める妹紅とどこか感心したように見送る慧音。
動きが止まり、再起動した妹紅は若干錯乱して慧音に詰め寄った。

「けっ、けいね？　人形！　にっ、人形が一人でにー！？」

「落ち着け！　人形遣いなんだから当然だっ！」

等と妹紅を宥めている内に人形が見えなくなる。
と同時。
少女――アリス・マーガトロイドが口を開いた。

「さて、いらっしゃい。わたしに何かご用でも？」

「いらっしゃい。来ると思っていたわ」

時同じくしてマヨイガ。
三人の女性が対峙する。
一人は異端の極地、――沙夜。

「すまぬ、待たせたようだ」

「いいえ、構わないわ。それより聞いておくけれど昨夜幽香を降したのは、――貴女ね？」

口元を扇子で隠しながら淡々とした口調で言った神隠しの主犯、――八雲紫。
傍に控えるのはその式神にして策士の九尾、――八雲藍。

「――！？」

その藍が絶句するのも無理はない。
風見幽香は自称とはいえ最強を謳い、それに見合うだけの実力を持っていた。
紫であろうと、彼女と戦えば少なくない手傷を負うだろう。
しかし、それを成したと思われる眼前の妖怪は手傷を負っているよ

うには見えない。

それは、一晩で癒える程度にしか負傷しなかったということ。
それは、幽香を大きく上回る実力の持ち主だということ。
いつかの戦闘時にも感じた隔絶した圧倒的なまでの実力を示したのだ。
問われた本人は、不敵に微笑み、

「……聞きたいのはそんなことではあるまい？」

逆に問い返した。
紫はその返答を予測していたのか。
そうね、と頷き、

「理由は問わない。貴女が何を考えて幽香と戦ったのかなんてどうでもいい。けれど」

決意の表れか、一旦言葉を切り、扇子で沙夜を指し示す。
そして唄う様に宣言する。

「――この幻想郷に仇成すならば此処で果てなさい……！！」

主の様を見る藍もまた覚悟を決めた。
斜め後ろに控える位置から斜め前方、主を庇う位置へと立ち位置を移動したのだ。

「くく……、やはり察していたか」

そのままの位置で二人は語らう。

「……貴女は彼が死ぬと同時に動いた。貴女が復讐で動くとは思わないけれど、動くなら今しかないわ」

「良い、な。やはりお前は面白い在り方をしている。ふふ……興が乗ったぞ、褒美だ。お前達を討つ理由（ワケ）を教えてやろう」

討つ、という言葉に藍が反応するが沙夜が手で制止し、

「まぁ聞け。紅がな？　我を最強だと思うておるのよ。無論、無敵の存在など有り得ぬと理解していよう。だがそれでも、我が強いと信じているのだ。――ならば、お前程度に遅れを取る訳にはいかぬだろう？」

嬉しそうに、誇らしげに語る沙夜に、八雲の二人は一瞬意味を図りかね、漸く脳が理解した時には表情がうんざりだと表現していた。

「……まさか此処で惚気られるとは考えてなかったわ」

「そうですね……じゃなくて！　貴様はそんなことで――」

「――藍」

藍は言葉を止め、制止した紫を見て動きすら止めた。
その真剣な表情には、それだけの力があった。

「……ゆかり、さま？」

「藍。侮っては駄目。どんな理由であれ、他者の為に戦えるものは既にアヤカシの域に無いの。それは、時に限界以上の力を発揮するわ。だから、――決して侮らないで」

「……は、はい……」

その様子を楽しそうに眺める沙夜は、突如妖気を高め始めた。

「……そろそろ、良いか？」

その威容を受け止める二人は思う。

そして、本能が感じ取る。

やはり強い、と。

「――以前の様に其処の妖狐を侮らりはせん。限界以上の力を引き出せる意志（たましい）は、厄介だと知った。それでも我を降せるか？」

爆発的に高まった妖気がほとんど物理的な圧力を持って二人を襲う。

だが、二人は揺れない。

毅然として強大な敵を迎え撃つ。

紫の妖気が高まり、ラインを伝わり藍もまたその身を昂ぶらせる。

――気分がいい。

実力以上の妖気をたぎらせる藍は興奮状態で待つ。

「藍」

呼びかけに、しかし答えない。

紫はその事を気にかけずに続けた。

「――奮いなさい！！」

「――はいっ！」

「……人形遣い？」

妹紅が問うた。

それに対して答えたのは慧音ではなかった。

「ドールマスター。数多の人形を自在に操る魔法使い故の人形遣い（ドールマスター）よ。」

「じゃあ、さっきの人形も……？」

「ええ」

先程の人形も目の前の少女が操っていたと知り、驚愕もあるが寧ろ、

「――生きているみたいだ」

「ありがとう。最高の褒め言葉よ。それで？　その人形遣いに何の用かしら」

そう言うとアリスは感情の篭らない瞳を二人に向ける。

その容貌を正面から見た妹紅は人形みたいだと思った。

慧音が告げる。

「私は慧音。こっちは妹紅。人里で守護者をしている者だ。――単刀直入に言おう。ある人を救う手助けをして欲しい」

「……それで？」

「その人の名は紅という」

紅の名前にアリスが眉を僅かにひそめることで反応したが、すぐに無表情に戻る。

慧音は構わず続ける。

「具体的には、紅が貴女に渡した転移符と、その器用さを借りたい」

言い切ると同時。

アリス邸のエントランスを静寂が支配した。

十分か、或いは一分か。

長い一瞬の静寂をアリスの淡々とした声が打ち払う。

「……蓬莱」

言葉が響き、次に上海とは違う愛らしい人形が危なっかしい飛翔で飛んで来た。

アリスはその人形に、

「蓬莱、そこの二人を談話室に案内して。私は紅茶を煎れて来るから。貴女達はその子に着いていってちょうだい」

一方的に告げ、アリスは去っていった。

沙夜は思う。
愉しい時間だと。
以前敗れた主従との再戦。
コレほどまでに昂ぶる事など、そうは無い。

「かあああぁッ！！」

耳を打つ気迫は藍の咆哮。
如何に恐るべき信念を宿そうと。
その身一つでは、到底沙夜には及ばない。

速度が足りない。
妖気が足りない。
技巧が足りない。

だが、藍と沙夜は同じ戦場を築き上げる。
何故ならば、

「――ふッ！」

呼気を吐き、気力と共に妖力弾をばら撒く紫の存在だ。
彼らの戦い方はシンプルなものだ。

八雲紫が圧倒的なまでの物量をもって沙夜を弾雨に晒す。
八雲藍が沙夜と紫の距離を一定以上に保つ。
完全後衛の紫と壁となり、しかし倒れては為らない前衛を努める藍。
ただコレだけだが、強大な戦力となる。

照準を沙夜に合わせ、角度をランダムに弾丸を高速で飛来させる。

『――魅惑のエサ』

沙夜は大きく一歩を踏み出す事で飛来物を回避。
其処に二つのスキマが引き合い、融合。
巨大な歪みとなり沙夜を襲う。

『――物質と反物質の宇宙』

が、沙夜は右へ大きく身体を捻り、更に前に二歩。
その瞬間。
背にした歪みが眼に変化した。

『――変容を見る眼』

眼は瞬時に沙夜を認識し、追撃。
同時に紫の背後にも同種の眼が展開。
２０を超える弾幕が襲来する。

「ふぅ……はッ！」

気合一閃。
妖気を集めた腕を振るう事で全てを打ち落とす。
眼前にぽっかりと開いた花道を数瞬も掛からずに駆け抜ける。

紫を数歩で届く位置に捉え、

「――おお！！」

横から沙夜と紫の間に入り込んだ者が居た。
藍だ。
全霊を込めた横薙ぎの蹴撃。
左腕一本で受け止め、身体の流れる藍を仕留めようと逆の腕に妖気を込める。
が、

『――中毒性のあるエサッ！』

「チィッ！」

藍をカバーする形で多数のサイトが展開され、物体が高速飛来する。
後ろへと跳躍。
しかし、着地点には地面がなかった。
スキマだ。

沙夜は即座に魔方陣を組み上げる。
そして効果は顕れた。
スキマの上に魔力で編まれた壁が創られたのだ。

沙夜は魔力壁を踏み台にして前方へと大きく跳躍。
だが、その隙に紫は藍と連れてスキマの通用門を通って距離の離れた位置へと移動。

『――キマイラの翼』

直後。硝子を踏むような透き通った音が響く。
沙夜の編み上げた魔力壁にスキマ側から飛来したと思われる剣山がめり込んでいた。
スキマの上を飛翔で通過していれば串刺しになっていただろう。

その事実をまるで気にせず沙夜は思う。
愉しい時間だと。
同時に、――煩わしい時間だと。

沙夜は再び距離を詰める為に疾走する。
紫は距離を保ち、弾幕を築く。
究極的に噛みあわない、しかし何処までも噛みあった戦術を以って二人は夢幻を彷徨う。

案内されたのは確かに談話室だった。
白く、飾り気テーブルクロスがかけられ、その上に置かれた人形。
四脚の背もたれのある丸い木の椅子……に座る人形。
まどうしょらしき書物の敷き詰められた棚……の至る所に有る人形。

何処を向いても人形の有る談話室。
視界に人形が映らない場所など無い。
呆然と無数の人形に圧倒されていると、アリスがやってきた。

「あら、好きに座っていいのよ？」

その言葉を皮切りに三人はソファーに腰掛け、
妹紅と慧音は紅茶を入れて気分を入れ換えた。

「……ふぅ。すまない、落ち着いた」

「そう。それじゃ、続きよ。貴女達が求めるものを提供したとして、
――私にメリットがないわ」

時が止まった。
慧音と妹紅はそう感じた。

「……」

口を開き、何かを言いかけ、やがて閉じる。
慧音は咄嗟に問い詰めたいという衝動を押さえ込み、考える。

「……」

妹紅もまた、思考する。
何故、態々談話室に案内したのだろうか、と。
断るだけならば、エントランスで言えば済む。
それをしない理由とは何か。

「……な、なあ」

「なあに？」

妹紅の戸惑いを感じさせる問い。
考えられるのは、メリットになる何かが欲しい。

もしくは、紅を助けたいと思っているか。

「……メリットがあれば、いいのか？」

「ええ。私に益があるなら、手を貸すことも吝かではないわね」

紅茶を優雅が手付きでカップを傾けるアリスは答えた。

慧音は自分がアリス・マーガトロイドという魔法使いに提供出来るメリットを考える。

まず自分達が欲するのは、

・転移符の譲渡
・アリスのメイク技術
・アリス邸を拠点として使用する権利

人形の表情すらもあそこまで整えられるのならば、十二分に条件は満たしている。

そして、出来るならばこのアリス邸を拠点にしたい。

迷いの森に妹紅が小屋を一件所有しているが、あそこでメイクするには慣れが要るだろう。

必須なのは転移符とメイク技術の二点。

それに見合うだけのモノであり、かつ自分達に提供出来るなにか。

慧音の持つ知識。

だが、これは歴史に比重の置かれたある意味では偏った知識だ。

魔法使いが欲するモノかと言えば難しい。少なくとも絶対に欲しいものではない。

――人里の守護者という立場を利用せざるを得ない、か。

現在。
人里では人間以外の立ち入りを許可してない。
妖怪などもってのほか。
魔法使いも、人外とカテゴライズされるだろう。

慧音はアリスを覗き見る。
魔法の森という危険区域に住居を置いているが、魔法使いならば寧ろ当然とも言えるだろう。
別段、人格的な問題は感じられない。
紅が転移符を提供する人物なのだから。

ならば提供出来るのは、

・人里への立ち入り許可
・店舗などでの売買許可
・正当防衛時の戦闘行動許可
・住民との交流の許可

コレくらいまでならば、なんとかなる。
人格面において問題が無いのならば、退魔連の説得は不可能ではない。

――交渉などしたことはないが……どうにかしてみようか。

仕切り直しだと言っても何が変わるわけでもない。
変わらず、沙夜が攻め込み紫がそれを拒否する。
ただし、紫の弾幕は更に苛烈さを極めた。

上下左右正面背後。
あらゆる方向から飛来、吸収、反射される弾幕をかわし続ける沙夜とて無限の体力を持つ訳ではない。
今のところ被弾はゼロ。しかし、それが永遠に続く事はない。
普通ならば、そう思う。しかし紫はそうは考えない。
策を練り、確実性を求める。

「ククッ」

沙夜が可笑しさを堪えきれないという様に嗤いを零す。
紫と藍は、その様子に警戒を高める。

「いやいや全く……。このままでは埒が明かぬな？　ククク……」

「……そうね。でもそれなら、このまま貴女が潰れるまで続けるだけよ」

実に愉しそうにしている沙夜に不安を覚えながらも紫は答える。
このまま行けば、倒せるかもしれない。
そう考えても本能はソレを否定するかのように警鐘を鳴らしている。

「ほう、そうか。お前がそんなつまらぬ事をするのならば――」

言葉と同時。
沙夜の身体を覆い隠せる程の大きさの魔方陣が現われた。

いくつかの脚が掛けた星型を中心の据えた五芒星。
それは、
「旧き印（エルダーサイン）！　それは――」
「――此処で、枯れ果てるといい」
沙夜の言葉が終わるか終わらないかというタイミングで、
視界に映る沙夜の肉体が霞む。
それは魔方陣、――魔術。
名は、
「――継承時間軸統制術式！」
継承時間軸。
世界は、新たに生まれた存在に等しく同じ時間の流れを付与する。
世界に継承された、全てに平等に与えられた時間の流れ。
それこそが、継承時間軸。
その軸を統制した時。
如何なる現象が起こり得るか。
「――急がねば、手が追いつかぬぞ？」
加速。
ただ速く動くのではない。
他者が1秒を過ごす間に2秒、3秒と時を過ごす事が出来る。
つまり、
存在そのものの時間が加速する――！

隙間から沙夜を捉えようとする鎖。
奔る凝縮された光線。
ラプラスの魔から放たれる妖力弾。
碧く妖気に侵された刃の弾雨。

沙夜の視界の中。その悉くが緩やかになり、
時に置き去りにされた世界を駆け抜ける。
視界に映る紫は、頭の後ろまで腕を持っていく形に構えていた。
構えるその手に紫色の光が収束し、

『――知能と脚の境界！』

５本の割断の力が空を切り裂く。
紫色の割断力は奔るのではなく。
突如として空間に顕れ、あらゆる物質を切り分ける境界線。
故にこそ、遅れた世界でも変わらず威を発する。
しかし、

――居ないッ！？

視線の先にその姿は無い。
それは、勘というものだろう。
それは、第六感なのだろう。
それは、本能なんだろう。
紫は、背後から猛烈な怖気を感知する。

「――良い業だ」

「しまった！」

――空間転移！！

藍が失策を悟り、
紫が思考の中で沙夜の行動に答えを導く。
しかし時に取り残された身体は追いつかない。

藍は紫の前方。やはり届かない。
沙夜の手に集められた絶望的な妖気の塊が振るわれ、
紫の身体が弾け飛んだ。

慧音が切り出す。

「……手先の器用さと言ったが、具体的にはメイクアップだ。その技術を教えて貰いたい」

「対価は？」

「人里への立ち入り許可を出そう」

アリスは提示された条件を吟味するまでも無く足りないと考える。
が、即座に言葉を返さない。
僅かにでも考える時間を作る事で軽く見られる事を防ぐのだ。

「……駄目、ね」

「……何がだろうか」

「人里への立ち入りというのは貴方達にとっては大事かもしれないけれど、私にとっては前提条件に過ぎないわ」

「……何故、そう言えるんだ？」

問いながらも、慧音は気付かれた事を知る。
提示した事以外は一切提供しないという前提条件を知られた事を。

「立ち入れるけど、何をする事も赦さない。それに何の意味があって？」

「……では、店舗での売買行為を許可しよう」

「……まぁ、その位ね」

アリスは憮然とした表情のまま
次ね、と前置き、

「これもある意味では前提条件だけど、分けてあげる。正当防衛時のみで構わないから戦闘行動を許可なさい」

魔女狩りの中を逃げ延びたアリスからすれば絶対の条件だろう。
寧ろ初めに言わなかった事が不思議な位だ。

「……対価に何を払う？」

「この家を拠点として使っていいわよ」

「――」

「な……」

アリスの言葉に慧音は絶句し、妹紅も声を漏らした。
その様子を見てアリスは確信する。
紅を救うという行為を二人は隠したがっていると。

「貴女達は彼を救いたいみたいだけど……それを誰かに知られたくない、といった処かしら？」

「……」

慧音と妹紅は沈黙を貫く。

「まぁ、言いたくないなら構わないわ。彼には救われたけれど、あくまで間接的にだしね。其処までの興味はないもの」

「……いや、此処を拠点として使うならば、知っておいた方がいいだろう」

慧音は此処で妹紅に視線で、構わないかと問い、
そして妹紅も頷く。
確認した慧音は、言葉を紡ぐ。

「紅を救う事が問題なのではなく、私達がどうやって紅を救うかという方法が問題なんだ」

「……方法？」

アリスが鸚鵡返しに問い、慧音は簡潔に答えた。
その方法を。

「――歴史の改竄だ」

紫の身体が弾け飛び、
黒い液体の様な、気体の様な何かが加速度的に増殖する。
瞬く間もなく空間を覆い尽くす。
沙夜も、藍も例外なく黒い靄（もや）に飲み込まれる。

暗黒に飲まれ、一瞬の後、世界が拓けた。
そこは、無数の眼の蠢く、隙間世界。
八雲紫の世界。

『――ようこそ。一人一種族の大妖怪。隙間妖怪の織り成す世界の狭間へ』

前から。
後から。
右から。
左から。

何処からとも無く声が沙夜に届く。
沙夜もまた、苦笑して声に応えた。

「……やはり、我らの戦場は此処になるか」

『そうね。私達が貴女と対等に戦うには、此処で戦うしかないのだから』

視界に居ない紫の声は、木霊する様に震えるが、聞き取りにくさを全く感じさせない。
現実世界とは異なる法則の支配する世界だからだろう。

「我と対等……か」

『……可笑しいかしら？』

紫は僅かに考える様子の沙夜に疑問を抱く。
が、沙夜は簡潔に答えた。

「いや。そういう訳ではない。そういう訳ではないが、我が対等だと考える者は一人だけだったのでな」

『……紅の事？　彼が貴女とまともに戦えるとは考え難いのだけど……』

「そうではない。戦闘力ではなく在り様の問題だ」

『……男女の仲を探るのは無粋だったわね。――続きを始めましょうか』

視界に無数のクナイの様な碧い刃が漂い始める。
しかし沙夜は焦らず、言葉を続けた。

「……構わぬがな。無粋に無粋で返すは無粋の極み。我も紅も、其れを知っている」

返された言葉に姿を隠す紫は笑みを浮かべながら、爆撃を開始した。

弾幕ではなく爆撃。
最早攻撃のレベルが違った。

威力が違う。
速度が違う。
数量が違う。

此処は八雲紫の世界。
八雲紫の法則が支配する世界。
あらゆる存在が八雲紫を支援する。
無数の弾雨を転移を繰り返し、回避しながら沙夜は思考する。

――此処で統制術式は不要か。

無限に加速出来る訳ではない。消費する魔力は莫大だ。
沙夜にも限界はある。だがそれでも5倍程にでもすれば打倒出来ない存在は居ないだろう。

しかし紫の世界では基準が異なる。

沙夜の意識が加速したのならば、此の世界も加速してしまう。

そう決められている。

故に、統制術式は無意味。

沙夜は対処を決める。

術式を破棄し、妖力を集める。

しかし、集められたのは妖力だけではない。

それは、

『――神力!?』

「以前はそのまま戦ったが、今回は違うぞ?」

そう言うと左右の手に集められた性質の異なる力を融合した。

『な!?　それは――』

「そう。紅の技だ。――素晴らしいものだろう?　我とて素直に称賛した程のだが……どうする?　またも圧倒的な戦力差が生まれたぞ?」

沙夜の皮肉な物言いに、紫は答えない。

合一された気を纏う沙夜は動く。

大幅に強化された沙夜の身体能力は他の追従を赦さない。

しかし、沙夜は警戒していた。

紫の境界の能力と結界妖術という侮れない凶悪なチカラ。

そして、

――彼の妖狐は何処で我を狙う？

沙夜は紫の多様かつ強力な攻撃を力任せの速度で振り切り、時に強靭という言葉に留まらない膂力と妖気を以って排除しながら思考していた。

どんな強者であろうとも、攻撃の瞬間は停止する。

絶望的なまでに隔絶された沙夜と藍の力量の差を考えれば、そのタイミング以外では攻撃を当てる事すら叶わない。

――ならば、ひたすらに隙間妖怪を攻め立てれば出てくる。

『――二重黒死蝶！』

「おっと、コレは失策だな」

思考に没頭し過ぎたのか、

其処を狙い打った紫の弾幕が沙夜を襲う。

球状に広がっては閉じて往く。華麗な弾幕が幾重にも同時展開されたのだ。

しかし沙夜は、弾幕の展開手順から紫の居場所を看破する。

「――其処だな？」

言葉と同時に振るわれた沙夜の腕に込められた気は、爆裂となって紫の弾幕を掻き消し、空間を破砕。

その音はまるで硝子が砕ける音。

まさしく硝子が砕け落ちる様に、空間が崩れ落ち、

――其処に潜む紫を曝け出した。

「クッ――禅寺に棲む妖蝶！！」

紫の背面に展開された雪の結晶の様な形の術式から卍型の妖光が生まれ、狂ったように回転する。
紅い刃と碧い刃が高速で交わり、紫色となった刃が空間を破砕した直後の沙夜を強襲。
しかし、

「刃で、側面は断てぬよ」

超然たる身体能力を捉える事は出来ずに紫は無防備な姿を沙夜に晒す。
沙夜はその隙を見逃さず狙い、

『――狐狗狸さんの契約！！』

警戒する妖狐、――藍の声が響いた。
同時。
沙夜の周囲を結界が覆う。
展開されたのは正方形×正方形の封鎖結界。

「――回転式八芒星（スクエア・スクエア）！」

「よくやったわ、藍！　――人間と妖怪の境界！！」

危機を脱した紫が更に結界を重ね掛けし、沙夜は結界という檻に捕われた。

慧音と妹紅のやろうとする紅を救う方法とは、何か。

「……私の聞き間違いかしら？　歴史の改竄と聞こえたのだけど」

「その通りだ」

今度こそアリスは絶句する。

その、愚かさに。

「……どうやら、とんだ無駄骨だったみたいね。――帰りなさい。そんな夢物語に付き合うほど酔狂ではないわ」

「可能なんだ。今ならば、――いや。今だけが」

無様にも悪足掻きを続ける慧音に苛立ちを覚える。

だが全てが無駄でしかないと判断し、二人を追い払う。

「いいから帰りなさ――」

「――時の、世界の特異点と会った」

「！？」

アリスは驚愕に眼を見開いた。

特異点。

それは、在り得ざる異端を指し示す符丁の様な用語だ。
在り得ないという意味であり。
その在り得ない何かを為す存在を特異点と呼ぶ。

「……何を、知っているの？」

「……解らない。昨夜、出逢ったはずだが……記憶が曖昧なんだ。
ただ解るのは、ソレが私に因子を残したという事だ」

「因子？」

「川の流れに逆らい続ける岩の様に、ただ其処に在るだけで時間を
壊し得る存在の因子。恐らくだが、後5日ほどで微かに遷った因子
は消え去るだろう。だが、ソレまでに事を成せば、或いは……」

アリスの目付きは険しい。
信じるに値しないと無碍にするのは簡単だ。
だが、特異点は在り得ないから在り得る矛盾した存在でもある。
何かが根本的に違う存在を、特異点というのだから。

「貴女は？」

アリスは妹紅にも問う。

「あたしも覚えてないよ。覚えているのは紅を救うのに必要なモノ
は何かって事だけさ」

「……」

寧ろ知らない方が説得力がある。

特異点は多くの存在に認知されればなんらかの力が働き、消えてしまう可能性もある。
なんらかの力が何なのかは判らない。
だが、知らない事は当然とも言える。

眼前に座る二人は、魔術、魔法のどちらを修めている訳でもない。
態々茶番の為にそんな事を調べるとも考え辛い。

「……いいわ。話を続けましょう」

「――感謝する」

「貸し一つでいいかしら？」

「なら感謝は無しだ」

空気を流すように軽く続けるアリスに、
慧音は内心で感謝の意を示しつつ、乗ることにした。

「この邸宅を拠点として使用する代わりに正当防衛時の戦闘を許可、までだったな」

「ええ。そうだったわね。なら、そうね。私は、転移符の譲渡」

「ふむ、ならば――」

慧音が、人里の住人との交流を許可する、
と言おうとする動きを遮る形でアリスが言葉を付け足した。

「――と言いたいけれど、それは無理よ」

「な――!?」

「え……」

言葉を失う二人に説明するように語る。

「空間転移魔術は大魔術よ。それこそ長い年月を掛けて漸く身に付くもの。それを符に込めるというのも大変な作業ね。――これだけの魔術の結晶をそう簡単に手放すわけないじゃない」

それに、

「二枚の転移符の内、一枚は使ってあるけどね。これのお陰で命を失わずに済んだの。ある意味では恩人の思い出の品って訳ね。まあ、条件次第では考えない事もないけれど、ね」

「……クッ」

慧音が思わず呻く。

アリスの言葉は例え本心で無くとも事実ではある。

住人との交流の権利だけでは手放さないだろう。

残る手札と言えるものは、

人里内での能力使用の許可と、

監視を外すという二点。

しかしどちらも明かすわけにはいかないカードだ。

思考を巡らし、どう答えるべきかに悩む慧音にアリスは追い討ちを掛ける。

「更に条件を追加するわね」

「なんだとッ！？」

「有事の際に、人里の戦力になるわ。ああ、後メイクも私自身がしてもいいわ」

だから、とアリスは一呼吸置いて、

「人里の住民との交流。そして能力の使用を認めなさい」

――やられたッ！

慧音は敗北を悟る。

対話を以って人里に立ち入る権利を得た者が現れたならば、悪意ある妖怪が同じ手を使うかもしれない。

だが、退魔連が認めないという反論も、戦力になるという契約ならば抑えられてしまうだろう。

人外が人里内で能力の使用する事を認めるについても問題を犯さない限り保留、という辺りに落ち着く可能性が高い。

如何に八雲紫の保護下にあっても。

強力な結界に護られていても。

事が起これば確実に被害は生じる。

――後の禍根にならなければいいが……。

其処に親友であり、姉であり、家族であるヒトの声が聞こえた。

「ま、いいんじゃないか？」

「妹紅！？」

「だってさ。いつかは人間と妖怪が気兼ねなく一緒に飯でも食える様になればいいって言ってたろ？　丁度いいじゃない」

それに、と妹紅は言葉を続けた。

「紅が認めたんだ。問題ないだろ」

その言葉は妙に説得力があって。
少なくとも自分は納得してしまう。
そんな言葉だった。

「じゃあ、交渉成立ね」

「……ああ、そうみたいだ」

複雑な感情をどう表現していいかに苦難している慧音にアリスは少しだけ手助けしてやろうと思い、口を開いた。

「貴女、慧音って言ったわね」

「ああ……そうだが？」

「交渉の基本は、相手よりも上の立場にあると思わせる事よ。初めから請う事を考えていては駄目。覚えておきなさい」

「――」

慧音の中にある種の清々しさすら感じる感情が生まれた。
其れほどまでに痛感したのだ。

「……参ったな……完敗だ」

隙間世界の中で結界に捕らわれた沙夜を紫と藍の二人は、現実世界から眺めていた。
無数の弾幕を恐るべき身体能力を発揮して回避する沙夜とて、永劫に戦う事などは不可能。
そして、隙間世界からの脱出も、戦闘の中断も不可能。
それは無限地獄。

「詰み、ね」

「……ええ。恐らくは」

紫の結論に、藍も同意する。
断定ではないのは、沙夜の尋常ならざる戦闘力を恐れるからだろう。

「……はぁ～。疲れた……二度とこんな事は御免だわ」

「お疲れ様です。私は、少し休ませて頂きますね」

「そうね、お疲れ様、藍」

極度の疲労を伴う戦闘を終えた二人はお互いを労い、休息を求めて歩を進め、
何かが罅割れる様な音に振り返った。
振り返らざるを得なかった。

空間が、――否。
世界が罅割れ、穿たれた穴から彼女は現われた。

「あ……なん、で……」

藍の震える疑問に、果たして答えるものが居た。

「何故、か。世界など、既に一度超越したのでな」

「貴女は、まさか――」

「ああ、毛色か。幾ら我と言えども世界の跳躍に余裕がある訳ではない。それに使っていた魔力も用いたに過ぎぬ」

紫の視界に映るのは先程までとは違う姿をしていた。
金色が眩しい髪と九本の尻尾。
美白という言葉以外に何を言えるのかという程の白く美しい肌。
そして、同じ九尾とは思えない程に藍と隔絶された実力。彼女は。
沙夜は――。

「――そろそろ、終幕としよう」

沙夜に展開される継承時間軸統制術式。

其れを組み込んだ上で隙間世界に飲み込むには、準備が居る紫の勝機は潰えた。

「金毛白面の――！！」

「消え失せよ」

マヨイガに激震が走り、二つの命が彼岸を渡る事になった。

「……さて、些事は済ませたし、もう往かねばな。――我が居城にして牢獄たる千年城へ」

歩み始めた沙夜の毛色は、既に紅く見えている。

第二十六話：歪みの収束（下）～語られぬ神話～（後書き）

遅くなってすみませんｏｒｚ

リアルの忙しさ異常っすｗホントすませんｗ
次は直ぐかどうか分からないけどある程度で上げられますから！

その次は……そろそろ書きたいと妄想し続けてきた吸血鬼異変が視野に入る年代になってくるので……頑張ります！

第二十七話：彼女達が望んだ未来

いつかの幻想郷。
薄暗い小屋の中で三人の女性が”何か”をしていた。

「よし、準備は整った。妹紅、アリス。――行くぞ？」

「ああ、大丈夫。こっちも問題ないよ、慧音」

「ええ」

「よし。――宿命は変えられないと”アナタ”は言った。
けれど、宿命よ！
どうか今だけは、この改竄を赦してくれ――！！」

光が溢れ、三人を、そして全てを包み込んだ。

慧音たちと紅の仲違いから数年後。

幻想郷、妖怪の山。

朔月の夜。

一人の男が妖怪の山へと足を踏み入れた。
それを見咎めたのは巡回に従事する白狼天狗。
右手に持つ剣を突きつけ、退去を勧告する。
しかし、相手が悪かった。

「止まりなさい！　ここは……って貴方は！？」

「鬼神に会いに来た。通せ」

鬼を殺す者であり、かつて鬼との決闘で真正面から叩きのめした程の実力者と言われている男。
かなりの昔に入山を認められていた半人半妖（あやかしもの）。
そして鬼子母神が認めた者であり、友であるといったという噂も実（まこと）しやかに囁かれている紛れもないＶＩＰ。

「あ、その。鬼神様は旧地獄の地底界へと降りて行かれたそうなんですが……」

立場がはっきりとしておらず、非常に扱いに困る重要人物の一人でもある。
そんな迂闊な対応が命取りになりかねない相手に『止まれ』などと命令する行為はまさしく自殺行為なのではないかとこの白狼天狗は内心戦々恐々とする。

「……そうか、なら天魔か」

白狼天狗は小さく呟かれた言葉を聞き、
それに対応すべく上司へ連絡を入れようと行動を起こす。

最大速度で飛んでも多少は時間が掛かると判断し、
その間は待っていてもらおうと振り向いて声を投げ掛けた。

「分かりました。少し待っていてくださ――」

「――待たん」

が、『鬼殺し』の称号を持つ男は無情にも白狼天狗の言葉を無視して飛んでいった。
行ってしまった。

「あっ！　ちょっ！？　……私は何も見てない……。……見てないったら見てない」

保身に走るは社会の性。
白狼天狗は、あくまで下っ端だ。

人里。慧音たちの自宅。

「これはっ！？」

慧音は唐突に理解する。
これから自分がしなければならない事を。
為さねば成らない。為さねば、後悔だけでは済まない。

情報だけでなく、感覚までもが、教えてくる。

――時間は余りない……急げっ！

紅が妖怪の山の頂上にある天魔の自室に辿り着く。

「天魔、入るぞ」

鬼神の自室とは違い、質素極まる和室。

唯一それなりと言えるものは棚を埋め尽くす茶葉だろう。

だが今、部屋に充満する匂いは茶のものではなく酒。

なんらかの宴会でもしていたと直ぐに分からせる空瓶の数が物語っている。

その場に居たのは天魔と萃香と一本角を額に生やした鬼の女性。

記憶に残る姿と照らし合わせ、『怪力乱神』星熊勇儀であると判断する。

全員がその手に杯を持っている。

そして、

――――八雲、紫……。

彼女を視認した時、紅の妖気がざわめく

だが、意志によって力尽くで押さえ込んだ。
此処で戦りあっても勝ち目は無いと知っているからだろうか。
それとも何処かに理性とでも言うべきものを残しているのだろうか。

「……ふぅー……。居たのか……いや、いい。――天魔」

「なにかね？」

「しばらく妖怪の山に宿が欲しい。泊まれる場所を用意してくれ」

「……あい分かった。河童に声を掛けておくとしよう」

数瞬ほど空けた返答の間に、天魔は紅を認識する。
歪んでいる、と。

「感謝する」

己の用事を済ませて吉備津を返し、立ち去ろうとする紅の肩を掴む者が居た。
――萃香だ。

妖怪の山の鬼達は人間を見限った。
その頂点たる四天王の内二人が地底に潜り、残る萃香と勇儀の二人も考えあぐねていたが、
これ以上地上に居続ける気にはなれずに地底界へ向かうと心を決めた。
それを伝え、ついでに天魔と最後の酒を飲み交わしていた所だった。

「まぁ待ちなよ、紅。漸く帰ってきたのにさ～ヒック！　友達に挨拶も無しってのはどうかと思うなぁ～？」

そんな時に、ここ数世紀に渡って旅に出ていた”友人”が姿を見せたのだ。
これで酒の席に誘わないヤツは鬼ではない。

「……」

だが、紅からは視線すらも返されなかった。
”友人”であるが故に萃香は違和感を感じていても、気付こうとはしなかった。
或いは、気づきたくなかったのかもしれない。

「……あれ、紅？」

尚も酒に誘おうとする萃香を勇儀は引き止めた。
一目見た時から容易く判断出来る程だったからだ。
――濁っていると。

「待て萃香。”アレ”には関わらない方がいい」

勇儀の行為で萃香も漸く紅を正しく認識する。
脳が正しく理解し、そしてその上で己の行動を決定した。

「……やだ。友は友だよ、勇儀」

「……ではな」

紅は萃香が勇儀の方を向いた一瞬に退室する。

「あっ、待っ……」

紅は声だけでは止まらない。
振り返ることなく歩いていった。

「……あのバカ……世話が焼けるなぁ……」

愚痴を零しながら、萃香は出て行った紅の後を追った。
勇儀も静止はしなかった。
長い付き合いなのだ。
萃香は良くも悪くも真っ直ぐだから、止めても無駄だと知っている。

「……はぁ、全く」

ただ優しい視線を萃香に送り、一言。

「若いねぇ……」

紅と鬼達を静かに眺めていたのは一言も発しなかった紫。
その手に持つ徳利を満たす酒は一滴たりとも減ってはおらず、心を満たす想いは唯一つ。

「……言ったはずよ、紅。愚者は要らないと。本当に……残念ね」

――勿体無い。

ただ、それだけだった。
そんな妖怪の賢者の呟きを聞き取ったのは天魔のみ。
しかし、内心でどう思っているのかを他者に理解出来る事ではないと知っている。
故に踏み込まない。気づかない振りをする事にした。

天魔は深い溜息を一つ吐き出して、河童への連絡も含む仕事に戻っていった。
深く考えても自分に出来る事は無い。
例え出来たとしてもやるべきではないと識っている。

迷いの竹林。

「――!?」

「あら、どうしたの？　今更怖気づいたのかしら？　なら去りなさいな。態々逃げる愚者を追うほど――」

「――黙ってろ」

蓬莱山輝夜と対峙する今、藤原妹紅は認識する。
向かいたい場所に一番近いのは自分で、直ぐに向かえば間に合うと。
だが出来ない。意味が無い。もどかしい上に頗(すこぶ)る不愉快だ。

「チッ」

怨敵、そう思って”いた”相手を放って、駆ける。
向かいたい場所の反対方向にある、可能性が残る処へ。
今はそんな些事に構っている暇は無いのだ。

「……なんなのかしら、あのコ……」

輝夜の呟きは風に消えた。

玄武の沢。

「貴方が紅さん？」

下山する紅を呼び止めたのは、小柄な女性。或いは少女とも言える程の河童。
その背に背負われた亀の甲羅が嫌でも目に付く。

「……そうだが？」

「あ、えっと私は河童のにとり。にとりって呼んでね！　貴方の宿を建てて欲しいって依頼を受けて来たのよ」

「……そうか、では頼む」

「はいよ～、どんな家がいい？　一応――」

「君達河童のやる仕事に不満など言わんよ。私には行くところがある。任せるぞ」

紅が望んだのはあくまで、雨風を凌げる場所であり宿としての機能があるのならば、問題ない。
誰が作ろうと関係ないが故に紅は頓着しない。

「……そんな事言われたら張り切っちゃうよー！　このにとり様に任せなさい！！」

「ああ」

「や、紅」

そのまま歩を進めようとする紅を呼ぶのは鬼の友人。
散歩にでも来たかのような気軽さで呼びかける。

「げっ、鬼！？」

妖怪の山に住むものにとって鬼は天上人。
行き成り現れた鬼ににとりとて驚愕以外の感情を表せない。

「あー、私の事は気にしなくていいから。用があるのはソイツだけだからね。ほら、行った行った」

「……はぁ、失礼しますぅ～」

早足で去ってゆくにとりの後姿を見送った紅は萃香に問いかける。

「……何の用だ？」

「ん、そろそろ私も地下に行こうと思ってさ」

萃香は紅から5メートル程の距離、見下ろせる位置で足を止めた。

「そうか」

紅の言葉に萃香は眉尻を僅かに下げる。

「……それだけ？」

「何が言いたい？」

「久しぶりに会った友人が、此処から離れるって言ってるんだよ？」

感情を感じられぬ返事に、萃香は若干の怒りを言葉に含めて問いただす。

これが最後だという意思を込めて。

「それがどうした？」

だが紅の返答は素っ気無いものだった。

「……そう、残念だよ、紅」

萃香から妖気が溢れる。

それだけではない。沸き起こっているのだ。
友への怒りが、本能が力を呼び起こす。

「！」

紅は萃香との距離を一息で大きく離す。
この場所が戦場になったと認識したのだ。

「……貴様」

紅もまた、妖気を生成して見に纏う。
さらに破魔の気まで用意する。

いつかとは違い、今の萃香は強い。
既に手加減出来る相手ではないと知っている。
萃香は静かに、しかしどこか通る声で言葉を紡ぐ。

「義を忘れた鬼は鬼に非ず。情を忘れた人は人に非ず。――堕ち往く果ては六道すら外れし外道」

対する紅は答えない。
そんな事は当然だと理解している。
動揺するような事態はとうの昔に過ぎている。

「……」

「道を誤ったアンタは要らない。教えてあげるよ、紅。私がどれだけ強くなったか。アンタがどれだけ弱くなったかをね……！」

謳う萃香が構える。

手をダラリと下ろし、片足を軸にして体を揺らす独特の構え。
しかし、

「私が弱くなった、か。そう思いたくば勝手に思っていろ。――私には関係の無い事だ」

「――」

「……もう私に構うな、萃香」

萃香が絶句し、その隙を突いて紅は転移魔術で消えてしまった。
萃香に取って、予想外の事態だった。
この挑発ならば、紅から向かってくると思っていたのだ。

「……どうして？　どうして！　どうしてッ！！」

――あんなにも悲しい瞳をしているのか。

魔法の森、アリスの家。

「あ……そう、そうだったのね……」

アリスは脳裏に描かれた情景を得て、己の役目を認識する。

恩を返す為に準備をしなくてはならない。
――時間が無いわね。どこに仕舞ったかしら……。

萃香は悲しかった。
『鬼殺し』とまで呼ばれた英傑が、アレほどまでに堕ちてしまった事に。

萃香は嬉しかった。
堕ちて尚、自分を気遣う意思に気づいたから。

萃香は怒っていた。
堕ちた友人に気遣われる程度で終わった己の矮小さに。

「あたしは……こんなにも、無力だったんだね……紅」

悲しみに暮れる友と共に在る事が出来ない。
憤怒を振りまく友を止める事も出来ない。
失意に飲まれた友を救う事も出来ない。

出来る事など戦う事しか無いというのに。
戦う事すら、させて貰えなかった。
それは、――弱いから。

「あたしも……真面目にさ……頑張るからさ……」

頬を伝う涙に、誓う。
必ず強くなる、と。

「紅も、頑張ってよね……」

紅は焦っていた。
力が足りない。
八雲紫を打倒するのに、現状の戦力ではまるで足りない。
もう時間が無いというのに。

何が足りないのか。
または、何が足りているのか。
魔力の準備はした。

絶対的能力を封じる術も確保している。
だが、全く足りないと感じている。
八雲紫は能力の強大な妖怪。

この認識は間違ってはいないだろう。
事実、あの能力だけであらゆる存在を凌駕し得る。
それだけ凶悪な能力なのだから。

だが、その他の戦闘技能が虚弱だと言えるだろうか。
まずありえない。
第一、その頭脳だけで厄介極まり無いのだ。
生半可な行為は意味を成さないだろう。

分からない。
自分には一体何が足りないのか。
足りないという事だけが漠然と理解出来てしまう。
ただ勝てない現実だけが見えてしまう。
まずは、

「何が足りないのかを知らなければならない」

例えこの身が滅ぶ事になろうとも。
遅いか早いかの違いしかない。
ならば、――この命すらも賭けよう。

人里。

夜の世界。妖怪の時間。
この時間に出歩いている者など居ない。
何故、此処に来たのか。紅は答えを出せない。

ただなんとなく、というのが一番近い答えなのかもしれない。

理性で言うならば、寂寥感に迫られたのか。
だが、これが見納めだと”感じている”。
一際大きい風が吹きぬけ、風が収まった時。
其処には影一つ無かった。

魔法の森、アリス邸エントランス。
自分の家に行き成り人が訪問してきた事にアリスは驚愕しない。
製作中の人形を編む指に、微塵の影響も無い。

「いらっしゃい。待ってたわよ」

姿を現したのは、二人。

「ああ……すまない、遅くなった」

髪を乱して肩で息をする慧音と、

「悪い、時間掛けた」

さして、体力を消耗した様に見えない妹紅。
ただし衣服は汗で湿っているのが見て取れる。

流石は蓬莱人、という事なのだろう。

「遅いのはいいわ、出来る限り急いできたんでしょう？」

「当たり前だ」

妹紅の簡潔な答えに満足し、アリスは二人を促す。

「じゃ、符は用意してあるからさっさと着替えてきなさい」

「ああ」

「あー、分かった」

慧音は淡白に、妹紅は若干眉を顰めながらも着替えに行った。

二人に感謝の念を抱きつつ、その顔は微笑。

「……頼んだわよ」

アリスは、受けた恩は返す性質なのだ。

太陽の畑。

姿を現した愚者を視界に留め、怒気を撒き散らすのは咲き誇る花の

王。
風見幽香。

「……何か用かしら？」

優雅に日傘を差し、その小さな日陰の中で不敵な笑みを浮かべ、不穏な気配を撒き散らす紅を見下す。
その偉容はまさしく王が如き緩やかな自然体。

「一つ問う。……貴女は最強だと言う。ならば、八雲紫と戦って勝てるか？」

「ええ。勝てるわ」

「……私と死合って欲しい」

その言葉に幽香はまず己の耳を疑い、そして紅の正気を疑う。

「聞き間違いかしら？　逃げる事しか出来ない俗物が、私に死合えですって？」

「もう、それしか無いのだ。だから……私と死合え！　風見幽香！！」

紅の余裕の無さを怪訝に思うも、幽香は己を曲げない。
幻想郷で最も恐れられる存在。妖怪ですら恐れる自分を変える訳にはいかない。
恐怖の味を叩き込まなければならない。

”最凶”

それこそが風見幽香の在り方なのだから。

「……いいわ、ついて来なさい」

幻想郷で”山”と言えば妖怪の山を指す。
だが、それ以外に山が無い訳ではない。
寧ろ多くの山が点在している。

幽香が紅を連れてきた此処も、そんな名も無き山の中腹。
草木が生い茂る山中だが、花は一本たりとも見当たらない。
広場とでも言うべき小さな空白が、其処に在る。

「さぁ、ここでなら好きに暴れられるでしょう？」

雰囲気さえ無視するならば、優しいと評するだろう微笑を浮かべながら幽香は振り返る。
と、同時に傘を横薙ぎに振りぬいた。

「……ッ！」

それは幽香が戦闘態勢に入る前に襲撃を掛けていた紅を弾き飛ばすには十分な威力を持っていた。
紅とて予想していなかった訳ではない。
防御は間に合い、インパクトの瞬間に反対方向に飛んで衝撃を逃が

しもした。
大きく弾き飛ばされたが、無傷。

「うふふ……先走っちゃ駄目よ。そんなんじゃ、お互い満足出来ないでしょう？」

顔を上げ、幽香の姿を視認した瞬間、
紅は禍々しく笑う向日葵が咲いている中で佇んでいる姿を幻視した。

「！？」

まさしくレッドゾーンを振り切る脅威を感じた紅は一気に飛び退る。
だが、視界に向日葵など存在しない。ましてや笑う向日葵など尚更だ。

――今のは……？

「あらあら、どうしたのかしら？　そんなに怯えて。ふふっ……」

殺気。
圧倒的なまでの殺意が、他者の精神を圧迫し死を幻視させる。
だが、それには隔絶された存在としての差が無くてはならない。
その事実は、紅が弱い事を示すのではない。
風見幽香が超常たる者だという事。

心底可笑しいという声音で、しかし凶悪な笑みを溢しながら幽香が嗤った。
その”格下”を見下す強者の余裕が妙に癇に障った。

もとより手加減など出来る相手ではない。

全力以上でも対等にすらならない。
そんな事は分かりきった現実（リアル）。
しかし、無性に腹が立つ。

だが、これだ。この殺気。
純粋なまでの殺意。
殺す事に対する躊躇の存在しない一貫された戦場。
ギリギリの極限のみ存在する、最高の場所。

雷を。
風を。
水を。
妖気を。
そして破魔の気を全力で生成する。

「……往くぞ！」

右手に氷の大剣を携え、風神、そして雷神と化した紅が駆ける。

魔法の森、アリスの家。

「なぁ、別に”コレ”はいいんだけどさ」

「どうした、妹紅？」

着替えた妹紅が疑問を口にする。
これだけでは意味が無いのではないか、と。

「髪でバレない？　フツーさ」

「ああ、それか。それなら多分大丈夫だ。私なりに確証、とまではいかないけどかなり確信に近い答えはあるんだ」

まるで具体的な事を言わない慧音に若干の苛立ちを覚えつつも一応の断定で大丈夫だと言ったので、妹紅はそれを信じる。
悔しいが、頭の出来が自分より遥かに上なのだ。

「……あ、そ」

「そんな気の抜けた返事は不安になるんだが。妹紅が鍵なんだぞ？」

慧音が妹紅を覗き見ると妹紅は微笑んだ。

「大丈夫だよ。あたしはなんとかする。あと必要なのは、……タイミング」

月の無い夜の下。

風が嘶き、
音が啼き、
地が応え、
森が謡う。

刃を振り、水蒸気の爆発を切り裂く高すぎる風を切る音。
地を踏み、初速度を得る為の音。
風を受け、葉が触れ合う音。

それは全て、”一人”の動きによって生み出されている。
２０００年を生きる日本人に見られる洋装の男、紅だ。

――もっと。もっと速く……速度を上げろ！

紅は求める。
疾風よりも速く。
音を置き去りに。
ただ只管に速く。

眼前に君臨する絶対者に対し紅は反射神経よりも速く応じていく。

――まだだ。まだ、”今までの”限界程度でしかない。

故に、速度を。
さらに速度を上げるんだ。
身体の悲鳴は無視しろ。
肉体を動かす機能が残っているならば問題ないと知れ。

初速度を力によって強引に生み出し、地を流れるか細い氷のレールを滑る事でさらに加速する。
高速で立ち回り、背後に取ろうとして出来ず、側面に刃を打ち付ける。
全身が、風が、躍動する。

対する風見幽香はどこまでも優雅に舞う。
微笑を顔に貼り付けて、愚かな半妖を視線で貫く。

見せ付けてやらねばならなかった。
自分が妖怪すら恐れる最強にして最凶の妖怪だと。
矮小な弱者が楯突いた所で小揺るぎもしない絶対の強者なのだと。

文句の付けようのない完璧さで叩き潰す。
希望すら見せてやらない。
どこまでも優雅で上品に。
それでいて隙が無く。

それこそが、強者の義務。
強く在らねばならない。
ただ、強く。

自然に、意識していても気が付かないような自然さで一歩を踏み出す。
途端に殺到する無数の風刃と一匹の半妖。
対して幽香は小刻みにステップを踏みつつ傘を振るう。

眼前で踊る半妖のように風を切り裂くのではなく、風に流れるように。

歩幅は小さく、すり足で。
周囲の状況を完全に把握した上で体を捌けば足を急がせる必要は無い。
まるで、約束組手の演武のようによどみなく、幽香は迫り来る風と氷の刃を捌き、的(てき)を狙う。

紅は見た。
幽香がこちらの攻撃を掻い潜って来たのを。
無数の風刃が入り混じり、氷剣の斬撃が飛び交う空間を越えて。

歩くのではない。
走るのでもない。
滑るのでもない。

ただ緩やかに、多くの攻撃を避け、受ける時は振り子の様に、幽香の身が詰められる。
その動きに紅は悟る。

風見幽香は、あやゆる動きから掛かる荷重を、全て受け止めて全て受け流しているのだと。
歩む足裏が受ける力も、身が前に進む事で受ける圧さえも、

――全て制御しているというのかッ！？

力とは、一方から受ければ逆方向に抜ける。
故に、受ける力の制御は、引く事で成される。
しかし、全身に受ける力を制御するという事はソレとは全く違う。

一方から力を受け、引いたとしても。
その引いた方向からも力を受けるからだ。
引く事が出来なければ、受けた力は体内で炸裂する。
故に、

――不可能だッ！

そう。人間の身体構造では物理的に不可能なのだから。
人型の妖怪だが、力以外に人間と違うカタチはしていないはずなのに。
だが、この現実が証明する。

戦闘を支配するという戦い方の究極。
幽香はこの戦闘において、あらゆる力の荷重を支配出来ている。つまり、――予定調和なのだ。
この予定調和を崩さない限り、紅に勝利は有り得ない。

――怪物め……！　それとも、それともこれが絶対的物量を誇る八雲紫に勝てると豪語する理由なのか！？

実際は、幽香は己が身のみでこの不可能を可能にしている訳ではない。
人間では到底及びもしない演算能力と、
絶対の自信と経験を以って幾多の方向から受ける力を微細なタイムラグや、
体中に巻きついた植物の動き――折れ曲がった茎の伸縮や種の射出――を以って同時処理する。
それを悟られないように植物は服の下でのみ蠢いており、紅は気が付かない。余りに自然だから、気が付けない。

紅が能力封印を使わず、雷による反射神経の強化を必須だと感じたが故に幽香は阻害される事なく力の流れを制御しているのは皮肉と言えるかもしれない。
無論、現状では能力封じの術式を起動をした所で魔力不足。
どちらにしろ自分への干渉を防ぐ事で精一杯の紅に、この絶技を封じる術は無い。

そして、翠の髪を揺らしながら幽香が来た。
緩やかに、こちらの懐に収まってくる。

傘の一撃が来た。

――まだだッ！

紅は、右手に持つ氷の大剣で受け止め、受け流す。
受け止め、その隙に左拳を置き、カミナリにすら匹敵する雷撃を喰らわせようと行動する。

だが、

「！？」

右の剣が弾かれた。

受け止めた力に対して引き、力を受け流し攻撃を受け止めるはずの剣が。

理解する。

力によるものであり、技によるものだと。

理屈だけならば、簡単だ。

紅が力を相殺する為に、向かってくる力に対して１８０度反対方向に引く。

その瞬間に幽香は僅かに攻撃の方向を変えてくるのだ。

容易な事ではない。

何しろ紅は攻撃を受けた瞬間に引く方向を決めている。

一瞬の中の一瞬に過ぎない。

だから、この技を返すには、更なる一瞬に介入し、攻撃の方向を変更しなくてはならない。

――馬鹿、な……？

だが、結果として。

紅と幽香の間には、相殺という現象のみが現れる。

代わりに生まれるのは超高度の技すら超越した剣戟。

余分な力を持たない、純粋な剣の交し合い。

純粋なまでの体術では紅は幽香に手も足も出ない。
風も、雷も、水も使っても尚、届かない。

戦う事に対する才能を持ち、研鑽する幾星霜の歳月を経た風見幽香相手に、
非凡な才能を持たず、意味ある時を経ても凡人を超えられない紅では、

結果は火を見るよりも明らかだった。

僅か七合。
たったの七合で紅の右手から大剣が弾かれ、身体が泳ぐ。
その隙を幽香は見逃さない。

「終わり、ね」

悪あがきの風の刃は受け流され、雷は力尽くで弾かれる。
氷のラインに乗っても距離は離れない。
風すら受け流す、それが一体どれだけの絶技なのかを脳裏に浮かべ、
紅は死を見る。

鮮血が闇夜に舞う。

突き出される傘は絶大なる妖気と共に肉を貫く。
紅の耳を打つ、逆流した血を吐き出そうと咳き込む声。
”突き飛ばされた”紅は見る。

何故、此処に居るのか。

何故、こんな自分を助けるのか。

何故、何故、何故――。

脳裏に浮かぶのは疑問。
それは、眼球が脳へと運ぶ映像を理解しない為の僅かな逃避行か。
短い時間は去り往き。
その疑問は名前を呼ぶ声となり、耳を打つ。

「……けい、ね？」

口の端から血を流しながら。
視界の中で僅かに振り向いた彼女の表情は、
穏やかな、微笑みだった。

第二十七話：彼女達が望んだ未来（後書き）

けーね達が歴史改変するために何やったかとかの具体的なお話は次回で。

つーか微妙に書いてて楽しくなかったんだけど、どうしてよｏｒｚさっさと次を書いて忘れるか……。普通にペースが遅いので（内容の）ちょっと急ぎ足で行くかも。

平和な日常を入れない……落ち着いたときに番外編的な形で入れますか。

つーわけで平和な日常はキンクリします。

第二十八話：彼女の導く未来

「……けい、ね？」

胸に拳大の風穴を開けられた慧音は微笑み、
自らの胸から流れた大量の血溜まりに崩れ落ちた。
紅は倒れた慧音に駆け寄り、膝を付いた。
傷を確かめ、まだ生存の可能性があるならばと望みを掛け、
――解ってしまった。

傷は正確に心臓を貫いている。
完膚なきまでに。
完全に、死んでいる。

「あ……ぁあああ、あぁ〝ああ！ぁ〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝――――――！！」

言葉にすらならない慟哭。
その様を見る幽香は傘を振って血を払い、嘲笑った。

「あはははは！　そのまま失意で抜け殻になってしまいなさい！」

紅には、言葉を返す余裕など、――否。
反応する余地など残されていない。
あるのは苦く、苦すぎる責め苦。

痛み、恐怖、悔恨。

顔から血の気が失せ、胃が痛くなるような感覚が紅を襲う。
そこに追い討ちを掛けるように高らかに悪意に満ちた笑いが響き渡った。

「ふふっ、最高よ……ふふ、うふふ、あはははははは！」

制裁を終えた幽香は、愉悦と哄笑を引き連れて去ってゆく。

時を遥かに遡り、千年城。

世界が沙夜という異端中の異端を消滅させる為に用意した牢獄。
時を置き去りにする位相のズレた異空間。
沙夜は、かつて己が立っていた場所を眺められる場所に居た。

「……ふむ、この辺りなら良いだろう」

言葉と同時に展開される魔方陣は沙夜以外には原理を理解出来ないもの。
時を司る術式。
魔方陣が輝き、沙夜は時を掌握／改変／跳躍する。

そして未来（いま）。
その異空間に全てが集う。

沙夜は姿を隠せる位置で、千年城で二人の姿を視認する。
灰色の大理石と紅の絨毯が目に付く。
玉座と、謁見の間とでも言うべき開けた空間で沙夜（，，）と紅（，）の二人を。

居たのは、かつての紅。
そして、生前（，，）の沙夜。

紅は姿形の変わらない、まさしくかつての紅だ。
しかし、千年城に居た沙夜には九本の尻尾が無い。
ただの一本も尻尾が無く、狐耳が妖狐だと主張する。
それは、

――空狐。

空狐とは３０００歳を超え神通力を自在に操れる大神狐。天狐からさらに２０００年生きた善狐が成るとされ、天狐は４本、空狐は０本というように尾の数が減っていく。これは神に近づくにつれて狐の姿を保つ意味がなくなったからと”言われている”。

空狐だった”過去”の沙夜。
妖狐である”未来”の沙夜。
半妖にして”現在”の楔たる紅。
――全てが終わり、そして始まった場所で、紅が謳う。

「……沙夜。貴女は私の全てだ。貴女と共に在る事こそが、私の誇り。私の愛。

貴女が壊れる程に愛しいが故に。貴女を狂おしい程に愛するが故に。
貴女に、過酷なまでに愛されたが故に……。私は貴女に関しては傲慢になった。だから、
――貴女の”死”を、時間になんて渡さない」
その言葉を眼前で受け止める空狐（サヤ）は答えない。
しかし、
――我は、此処に居る。あぁ、我は此処に居るとも！　お前が愛する化生は今此処に！　お前の想いは受け取った！
悠久なる時を超え貫く果てしない想いの螺旋の果て。
その誓約は、確かに届いた。
誓約は相互となり、契約へと昇華される。
「――沙夜は！　私の物だ！　誰にも渡さないッ！！」
――いずれでも構わぬ！　お前は、我の物だッ！！
沙夜は鮮烈に、酷烈に紅を求める。
過去の己如きにその死をくれてやる気は毛頭無い。
「――――――！！」
重なる沙夜と紅の思想に嫉妬したかの様なタイミングで空狐が言葉

にならない叫びを上げ、猛然と駆けた。
紅は腰を落とし、迎え撃つ構えだ。
その手には氷の刃。
周りには風が漂っている。

本来であれば、如何様にならない絶対的な差を考えて避けるだろう。
しかし、この時だけは逃げられない。逃げたくないのだ。

「――――来い！　沙夜ッ！！」

激突。
空狐を刃で完全に受け止めた紅は力任せに引き剥がし、

「かァッ！」

左の拳が小さな台風となって空狐を襲う。
吹き飛ばされた空狐が体を器用に回転させ着地。

「ァ〝ァ〝ァ〝ァ〝ァ〝――！！」

咆哮と共に虚空に巨大な金点が現れ、その範囲を拡大する。
金色の太陽は、いかなる物体も破損しない（、、、）。
圧壊でも倒壊でも消滅でもない。

起きる現象は、侵蝕。
あらゆる存在を侵す、外道の極み。
しかし、紅は恐れない。

「――無駄だ」

全てを優しく染め上げる黄金に触れ、――しかし紅は変わらない。
それを見た空狐は『侵されろ』と言うかのように範囲の拡大から密度を上げ始めた。

「ア〝ァ〝ア〝ァ〝ア〝ア〝――！！」

「無駄だと言っている」

されど、紅に変化は無い。
輝かしく侵された世界に儚く輝く一本の線が現れる。
何故か侵されない淡い色のレールに乗って紅が距離を渡った。
氷剣を持つ手が力む。

「――沙夜ッ！！」

振り上げた刃を振り下ろす紅。
呼びかけは怒気か、或いは歓喜か。
それとも全く別の何かなのかもしれない。

「ガァ〝ア〝ア〝ッ！！」

急接近する”敵”に空狐は肥大化した爪で斬撃一閃。
二人の全力で振るわれた刃が音を置き去りにして衝突する。
そして同時に音が響いた。
鈍く、硝子を踏み抜いたかの様な音だ。

「ぐ、ぬ……！」

呻きながらも紅は辛うじて受けることに成功した。
しかし、直接受け止めた刃はその衝撃に耐えられず罅割れてしまっ

たのだ。

「くッ！」

即座に氷剣の構成を破棄。
新規に氷剣を創り上げる。
が、如何に意識が呑まれていていようとも沙夜はその隙を見逃さない。
爪を振りぬいた勢いをそのままに回転し、遠心力の助力を得た踵を後方となった”敵”へと打ち据える。

後ろ回し蹴り。

「ッ――――！！」

呻く暇すら与えられぬままに弾き飛ばされ、黒く染まった壁に叩き付けられた。
身体に奔る衝撃と激痛に顔を顰める。
損傷を確認しようとして、

「しまッ――――！？」

視界にさした影で己の失態に気が付くが、遅い。
空狐は既に高く掲げた右足を振り下ろしている。

踵落とし。

紅は咄嗟に頭部への損傷を避けるために右へと身を捻り、

「がぁぁッ！」

踵落としは左肩に直撃。
同時。
紅は痛覚を遮断し、即座に距離をとった。

攻勢を捨て、防御の一辺倒で沙夜の爪を受け流す事を選択する。
紅が動きを動から静に変えた時、亜音速で沙夜の爪が斬線を紡ぐ。
地面に。
壁面に。
天井に。

描かれた斬線は巨大な爪痕を残す。
一振り毎に衝撃波が奔り、無数の瓦礫を積み上げた。
その様を見て紅は思う。
無様だ、と。

苛烈にして緻密に計算され尽くした美しくも恐ろしい攻撃は見る影も無い。
無駄な破壊を撒き散らし、守勢に回ればこんなちっぽけな自分ですら耐えられるのだから。
しかし、守りを固めなければ自分では耐えられないという事でもある。

――いや。

そこで紅は気が付いた。
己が死を回避して空狐に勝利しようと考えている事に。
前提を間違えている事に。
紅は、空狐に殺される事を忌避していないという事に。

――相打ち、か。……なかなか良い最期だ。私はいつだって……。

紅は思考する。
空狐の実力は堕ちて尚、紅を凌駕する。
それでも戦えているのには理由がある。

一つは空狐の『侵蝕』の妖術が効かないという点。
『侵蝕』は有象無象の区別無く一切合切を遍く侵し、犯し、冒し、終焉を齎す極光。
沙夜の保有する唯一無二の妖術にして覆す事の出来ない究極の終焉（ジ・エンド）。
優しく、美しい黄金色の光に触れれば侵蝕され、強制的に腐り果てる。

世界の端末であるが故に不変の千年城とは違い、紅はどうして侵されないのだろうか。
それは単純にして、実践するのは不可能に近い思想故だ。
即ち、

――沙夜と共に在りたい。

純粋な、何処までの一途でささやかな願い。
魂すら捧げた儚く、しかしそれ故に強固な誓約（やくそく）。
空狐（沙夜）と紅は一蓮托生にして、一心同体なのだから。
『侵蝕』は『侵蝕』を使役する空狐を侵さず、既に沙夜に全てを捧げる／侵されている紅もまた、侵せない。

一つは、空狐が忘我してる為に失われた知性が齎す策略と技巧。
いつでも沙夜は雅やかに戦っていた。
不敵な微笑みを浮かべながら策謀を巡らせて、蜘蛛の巣に獲物が掛かるのを待つ狩人の様に。

故に紅は、無様にも思える空狐を殺したいと願うと同時に、殺されたいと渇望する。

そして、紅は知らないもう一つの要因がある。
沙夜が空狐の莫大な妖気、神気を相殺しているから、紅は戦える。
自力が余りに違いすぎる空狐が力押しをするだけで、紅は手も足も出なくなる。
そうならないのは沙夜がそれを防いでいるからだ。

それら全てが揃って漸く。
紅は沙夜と同じ土俵に立てるのだ。

「――ァ〝ア〝ア〝！」

空狐の怒涛の連撃に紅は改めて実感する。
空狐というアヤカシの強大な力を。

――理性を失って尚、君は強い。だが……。

空狐の横薙ぎを身を屈めてかわし、その懐に潜り込む。
そして空狐の細く女性らしい柔らかさを持った腰に手を添え、

「これ以上、――無様を晒す君を見たく無い」

腰と掌の間の数ミリの空間の空気に妖気と破魔の気の混合体を込め、電撃によって蒸発させた。
引き起こされた現象は水蒸気爆発。
ただの物理現象としての水蒸気爆発であれば、紅も空狐も気にしない。
しかし、莫大な〝気〟が込められていたのならばどうだろうか。

「――――!?」

驚愕と共に空狐が吹き飛ばされる。
これが答えになるだろう。
開いた距離は約１５メートル。

「……だから……そろそろ、さ。――終わりにしようか」

言葉と共に紅は構えた。
手を米神辺りにし、大剣の切っ先を空狐へと向けて。

「……」

紅の言葉を理解したのだろうか。
それとも、類稀なる本能の成せる業なのか。
空狐は全身に力を収束する。

時が止まった。
一分だろうか。
五分だろうか。
或いは、十分だったのかもしれない。

合図が聞こえた。
それは、小さな小さな音。
細かく砕かれた瓦礫の一石が転がり落ちた音。

「――――!!」

「――――!!」

二つの影が交差した。

終わりは唐突に訪れる。
最期の交差の瞬間。
空狐の刃が紅を捉えるはずだった。

しかし、沙夜はそれを認めない。
紅の義眼による擬似時間停止は沙夜という時間軸の無い存在には通用しない。
しかし、沙夜が自らが行うならば話は違う。
時間を失っているのは自分も同じだから。
紅が空狐自らが刃を止めた勘違いするのも無理は無いだろう。

――全く、世話が止める奴だ。

「あぁ、餞別だ。くれてやろう」

死によって本能を必要としなくなった空狐と紅の対話も終わり、複雑強大な術式が展開される。
沙夜はそれをただ眺めていたわけではない。
時に逆らう術式を空狐――サヤと沙夜が”共同で”行い、同時に沙夜は紅に空間転移を設定したのだ。
それに気付いたサヤは微笑み、――魔方陣が起動した。

無残に崩落した千年城が泡沫の夢であったかの様に、荘厳な広間が、姿を取り戻している。
壁面に背を預け、腰を上げる力すら残っていないサヤが呟くように声を絞り出した。

「……もう此処には誰も居らぬ。姿を現せ」

時を冒したサヤの言葉を受けてか、沙夜が影から出て来た。
そのまま歩を進めてサヤの眼前に立ち、見下ろす沙夜。
死に瀕しながらも、眼は爛々と輝くサヤ。
二人の相対は必然。

「そう急くな。かつての我よ」

「……やはり我、か。無様だな、死を恐れたか」

侮蔑を受けた沙夜は不快気にすることもなく腰を下ろした。
至近で絡み合う視線に含まれる感情は如何様なものなのだろうか。

「くっくっく……、いや何。それだけのモノを望んだが故に、だ」

歓喜。

「忘れたか。我は力及ばずして死するならば、その死こそが受け入れるべき死だという事を」

そして、静かな蔑視。
しかし、その感情は否定される。
他ならぬ己から。

「戯け。我は欲したモノを手にするまでは消えぬよ」

「無様を晒して尚欲したモノ、だと？」

「紅の全てが欲しくなった。ただそれだけ、――それだけなのだよ」

沙夜はサヤから視線を外し、押し寄せる感情に身を火照らせる。
それだけであるが故に、それが全て。

「……紅、か。最早……紅は我の手を離れた。我が関わる理由も――」

「――紅が、貴様の死すらも欲しいと言ったのでな」

「――――！」

押し寄せる驚愕。そして歓喜の波にサヤは言葉を失った。
それは、一体どれ程の感情なのだろうか。
圧倒的なまでの幸福感がサヤを満たし、自然と感情が言葉として零れてしまう。

「……ああ、そうか。それは……死ねんな。なるほど、……死ねぬ訳だ」

そう、紅に死を望まれたのならば、万全の自分で在らねばならない。
意志を失った状態の命でどれだけの意味があるというのか。
それが、――沙夜／サヤの全て。

「クク、全く因果なものだ」

サヤの意思を見て、沙夜もまた笑う。

「……そうだな」

「時の流れより放逐され、世界からも飛び出した我に異時間同位体は存在せん。しかし」

「――我らは死者と生者に別たれたが故に今を同じ時に在れる」

「そして死者が生者を死という幻想へと誘う」

「因果、と言う他にないな」

言葉が止まり、どちらからだったのだろうか。

「ふ」

「く」

「ははははは、はーはっはっはっはっはっは！！」

笑い声が、木霊した。

不意に沙夜は立ち上がり、サヤも合わせる様にその背に背を向ける。

「……ではな。いつかの我よ。我には我の時求める刻がある」

「ではな、いつかの我よ。我は我の終焉に驀進するとも」

それ以上の言葉は無い。
しかし、それで十分だった。
決して交わらぬはずの一人の二人は、逆方向へと駆け出した。

時は戻り、朔月の夜。

「――――」

紅は慧音の身体を抱き締め、啼いていた。
血の気が失せ、青白くなった体を。
体温を失い、生者の温もりを失ったヒトガタを。

その肌に零れ落ちる涙という名の水滴も、夜の風が冷やしてゆく。
何の反応も出来ない屍骸をただ、抱きしめる事に終始する。

己という存在そのものを悔いるかのような、深く、鋭い懺悔。
その内面を占める感情は、後悔。

しかし、其処に明確な思考は最早存在しない。
漠然とした痛みが、脳を麻痺させている。
一体どれだけの間、体を震わせていたのだろうか。
月が、傾いている。

「――――すまない」

それは、ようやく搾り出した万感の想いの結露。

「――――何を謝っているんだ、紅は」

虚空に飲まれるそれを、呆れを多分に含んだ声音で返した者が居た。

「……え……？」

「謝るのは、私の方だろう？」

そんな哀しい響きの残る、聞き覚えのある声を引き連れた誰かを確認する為に紅は振り返ろうとして、
後ろから抱きつかれてその動きを止められた。

「――ごめんなさい」

「……慧音、か？　なら、こっちは――」

背中に感じる体温の持ち主が慧音であるならば、地に伏した慧音は一体誰なのか。

そして、思考と同時。
言葉が響いた。

『――リザレクション』

生まれた疑問に答えるかのように生命の息吹が再びその肉体に宿る。
それは、蘇生。
その秘法を為すのは、不老不死の妙薬。
蓬莱の薬。

「……ふぅ。ただいま？　それとも……おかえり、かな？」

「な……妹紅、なのか？」

「ああ」

短い、しかし力強い返答。
それは、失いたくなかった日常という名の家族。
失ってしまったはずの家族は、失われていなかった。

「……ッ」

「あっ、ちょっ！？」

紅は妹紅を抱き締めた。
ひたすらに、強く。
今のまるで母に縋る赤子の様に幼く、脆い。

その姿にさせてしまった、と妹紅は悔いる。
これは自分が撒いた種だ、と。

謝罪の代わりに酷く儚い紅を妹紅は抱き返すことにした。

「ごめんな、紅」

家族に囲まれた安堵に気を失う一瞬。
そんな呟きが聞こえた気がした。

「……」

紅が身体を温める暖気に眼を覚ました時、最初に眼に入ってきたのは見慣れた天井。
ゆっくりと身体を起こし、辺りを見渡せば確かに紫に用意して貰った自宅だ。
ふと、嗅覚から満腹中枢を刺激する味噌汁の匂いを感じた。
その方向に首を回せば、トントントンッ、と小気味の良い単調な快音が聞こえてくる。

調理の音だろうと当たりを付け、紅は床から身体を引きずり出す。
そして音の出所に居るであろう家族の姿を求めて歩を進めた時。
丁度戸に阻まれた視界が、戸の向こうから出て来た者によって開かれた。

「あ、紅。おはよう」

「……ああ、おはよう妹紅」

「もう直ぐ飯だから布団片付けておいてねー」

「ん」

先日までの出来事が嘘の様な穏やかな朝。
その優しいを時間を愛おしく想いながら言われた通り布団を畳んで押入れに運ぶ。
作業を終えて振り返れば、鮭の塩漬けとご飯に味噌汁という和の代表的な朝食を慧音が運んでいる。

「紅。ほら食事だから早く」

紅に気が付いた慧音が催促し、紅は簡潔に答える。

「……そうだな」

それを懐かしく、眩しいモノに感じながら
三人でちゃぶ台を囲み、

『いただきます』

箸を手に取り、一口。
その瞬間、紅の頬に一滴の涙が流れ落ちた。

「……紅？」

「おい、どうした？」

慧音と妹紅の困惑の声が聞こえる。
心配を掛けてしまっている。これはいけないと自覚する。

「……いや、大した事じゃない。ただ、無性に懐かしかっただけだ」

紅の言葉を聴いた二人は悲しげな表情になり、
頭を下げた。

「……すまなった」

「ごめん」

慧音と妹紅による突然の謝罪。
紅はその意味を図りかねた。
涙を拭い、簡潔に問う。

「……何を謝っているんだ？」

「あたしが、紅を追い出さなければこんな事には――」

「戯け阿呆」

妹紅の見当違いの罪悪感を一刀両断する。
それは、紅の想いであり、他の誰のモノでもないのだから。

「あれは私の決意で、妹紅に責はない。……慧音もか？」

「……ああ。私達が紅の傍に居るべきだったのに……」

「慧音。私の決めたことだ。その結果に責任があるとすれば、それは私自身にでしかない。
……確かに、無様な結果に終わったがね」

自嘲するかの様に吐き捨てた紅。
その様を見て尚、慧音も妹紅も引かない。

「でも……」

「……あたしが……」

「でもも何もない。謝るならば、私の方だ。……ずっと二人を、家族をほったらかしにして、すまなかった」

ただ頭を下げる。
それ以外に出来る事など無い。
誠心誠意謝罪するのみ。

「あー……謝れてもなぁ。……なぁ、紅」

妹紅の戸惑いながらの問いかけ。
紅は聞き返す。

「なんだ？」

「……もう、終わったんだよな……？」

もう、約束は。
そして復讐は。

「……一応は、な」

一応。

つまり、全てが終わって訳ではないという事。

慧音はその事を真正面から聞きだす。

此処で聞かなければ、きっと後悔すると考えたのだ。

「つまり、終わってないんだな？」

「気持ちに整理は付けた。後は意地と……」

「意地と？」

若干の恥じらいと共に言った紅に鸚鵡返しで続きを促す。

そして、紅は表情を一片させた。ひたすらに真剣に。

「矜持だ」

「……矜持、か」

慧音が口の中で言葉を反芻し、

「……どうしても、譲れない？」

妹紅は懇願の様な、しかし何処か傍観の念の含まれた問いを投げかけた。

いや、寧ろ確認だろう。

紅がどう答えるかなど解りきっている。

「どうしても譲れない。が、命を掛けるような真似はしないと約束

しよう」

「え……？」

「な……」

しかし、紅の返答は予想外の部分も含んでいた。
まさか紅が譲歩するとは思ってもみなかった。

「駄目か？」

「い、イヤッ！　約束！　約束だッ！」

「ああ、約束だとも！」

紅が譲歩してくれたのだ。
断る理由など存在しない。
一も二も無く二人は頷いた。

「妹紅、慧音……ありがとう」

紅は久しぶりに心から微笑んだ。

「そう言えば」

紅が呟いた。

「ん？　ン゛ア！？」

妹紅が口に鮭を頬張りながら反応した。

が、慧音が笑みを向けただけで過剰に反応させられた。

代わり、というように慧音が紅に聞いた。

「どうしたんだ？」

「……あー……いや、まぁ、素朴な疑問なんだが」

「うん？」

「どうして、私と幽香が決闘した場にタイミング良く現れる事が出来たんだ？」

そして、味噌汁を啜る紅。

啜りながら二人を見てみれば、なにやら難しい顔をしている。

何かまずいことだったのだろうか。

そんな疑問が脳内に生まれては消えてゆく。

「ふ、む……。どう説明すればいいものか……」

口の中を空にした妹紅も眉間に皺を寄せて悩み始めた。

悩んだ末にまずは言ってみる、という行動を選択する。

「んー……言っても信じられないかもしれないけど、ああなるって

知ってたんだ」

「知っていた？　未来予知か何かか？」

味噌汁を飲み干した紅には疑問だらけが浮かぶ。
そしてその疑問を氷解させるのは教職に努める慧音だ。

「いや、そうじゃないんだ。そうだな……紅。もし私達があの場に現れなかったらどうなっていたと思う？」

「死んでいただろうな」

「そうだ。簡単に言えば、私達はそうなった場合の記憶を持っている」

記憶のみ、という事象に紅は眉を顰めた。
時間跳躍ではなく、記憶だけを持っているというのは予知ではないのかという疑問を持って。

「その記憶では、私のワーハクタクの歴史を創造する力を利用している」

「――不可能だ。その力では、あくまで一時的な状況を作り出す事までしか出来ん。別の歴史を完全に創造するのは最早一介の存在の範疇にはない」

慧音の示した回答は紅にとってはありえない事象。
つまり、

「他に、何があった？」

「……はっきりとは覚えていないんだが、時の特異点に会ったらしい」

「――」

紅は絶句し、一人の女性を思い浮かべた。
慧音はそれに気付かずに言葉を続けた。

「時間というモノを破壊する因子を貰ってしまったから、私の能力で別の歴史を創造する事が出来た……そのはずなんだ」

「……なるほど、そういう事か」

――沙夜。全く、君にはかなわないな。

「……紅、信じられないかもしれないけど――」

妹紅が信じられない事実を紅に信じて貰おうと言葉を重ね、

「――それならば納得だ。実に判りやすい理由だ」

紅はその必要は無いと断じた。
慧音は信じてもらえた事を心底驚いていた。
逆に問うてしまうほどに。

「なんで、信じてくれるんだ?」

「ん? ああ、簡単な話だよ。その時の特異点とは懇意にしているからな」

何の気なしの言った紅の言葉は二人を驚愕させるには十分すぎる内容だった。
事実二人が呆けてしまうほどに。

「な……？」

「は……？」

「ん、ご馳走様」

紅はこれ以上は秘密だというかの様に立ち上がった。
言葉に思わず慧音は反応してしまうが、はぐらかしていると気付き声を張り上げる。

「え、あ、お粗末様でした……あ、待てッ紅！」

「はっはっはー！」

腹立たしい笑い声と共に外へと紅は逃げ去った。
慧音はその様に呆れを多分に含んだ溜息を付いて、見逃す。
意識を現実へと戻した妹紅が事実を呟いた。

「……行っちゃったねぇ」

「はぁ……全く。……ん？」

全く以ってその通りで、何も言えない慧音は食器を片そうと振り返り、
視界に漂う一枚の紙を見つけた。

何かと思い拾い上げれば、

～今まで迷惑を掛けた。それと、ただいま～

短い文章。
確かにそれは紅の文字。

「何？　どうしたの？」

妹紅に手渡し、結局二人は溜息を付いた。
しかし、その表情にあるのは微笑。

「本当に……」

「はは……、紅らしいね」

二人はほぼ同時。
紅が去っていった方向に向かって、

『おかえり、紅』

おまけ

「紅。しばらくは何もないんだろ？」

「ああ。平和な日々を謳歌するさ」

「そうか……紅は、誰に復讐したかったんだ？」

妹紅は自然と質問が零れてしまった事に、言ってから気が付いた。
しかし、紅はその問いに頓着せず、簡潔に答えてくれた。

「八雲紫だ」

「え」

第二十八話：彼女の導く未来（後書き）

大変お待たせいたしましたッ！
待ってないとか言わないでー（´；ω；`）ブワッ

とりあえず此処から一気に大結界騒動辺りまで飛びます！
平和？ほのぼの？

それもいいですけど、番外編で。
気が向いたら書きます。

長かった……この件はかなり長かったですね、ホント。
一番書きたい吸血鬼異変まではもうちょっと！

色々布石がありますから。
なんで紅が妹紅と慧音を見分けられなかったとかそういうのは結構後になってから出すかも……。

まぁ、簡単に言えば色盲っていうだけなんですが。青なんてみえな～い。

リアルが落ち着くのはいつなんでしょうかね……。

第二十九話：大結界騒動　龍神光臨編

１９８３年
稗田阿弥　逝去。

人里の住民は約束された死を悼み、次なる生の幸福を事を願った。
阿弥は死の淵で何を思ったのだろうか。
紅に手紙を残した。

八雲紅様へ。

私にも友人が出来ました。ご存知でしたか？
貴方の家族の妹紅さんと慧音さんの事ですよ。
三代目の私が初めて出会い、貴方の話題から、いつしかお互いと友であると認識するようになりました。
本当に、嬉しかったのを覚えています。

ずっと、私は一人でしたから。
転生の度に周りの人間は寿命を向かえ、私は誰も知らない世界に放り出されてしまう事がなくなったのですから。
死を前にする私に次に会う時も名前で呼べとおっしゃってくれた、大切な友達なのです。

ですが、次に転生した時に出会った初めての友達は、悲しみに暮れていました。
その次も、その次も。転生の度にほとんどの記憶を失ってしまう私

が絶対に忘れないと誓える最初の友達が、泣いていたんです。
貴方が居ない間ずっと。

三代目の私以来、出会うことのなかった貴方に何があったのかは存じません。
ですが、再び回り逢えた今の貴方はかつての様に穏やかでお優しい方でした。

だから、多くは語りません。ただ、お願いします。
私の数少ない二人の友人を二度と。
悲しませるような事をしないでください。

次の転生した私を、笑顔で迎えてくれる友達でいてほしいから。
次の転生した私が、共に笑っていられる友達でいてほしいから。

もう、泣き顔は見たくないのです。
心より、お願い申し上げます。

稗田阿弥より

この手紙を読んだ時、紅は自らの身勝手さが招いた罪を突きつけられた気がした。
だが、目を背けてはならない。
これ以上逃げるわけにはいかないから。
必ず、紅は紫と戦う。すべてを無駄にしない為に、確信を得る為に。

時は流れ、１８８５年。
明治１８年度。
――幻想郷は歴史の転換期を迎える。

人里、自宅。

「……人里の防御を固めろ？　何故？」

「外の人間が力を、知恵を持ち始めたの。徐々にだけど、妖怪を否定してきているわ」

紅が疑問を口にすれば、ちゃぶ台の対岸に座って茶を啜る紫は余裕を持って応えた。

「それで？」

あくまで『それはお前の仕事だ』というスタンスを崩さない紅に紫は若干の苛立ちを覚える。
しかし、表にそれを出さずに続けた。

「……私は直ぐにでも結界を張るわ。その為の準備も終わったけど、妖怪たちへ通達している暇は無いのよ」

「あくまで私は人里の守護を担うのみ。構わんな？」

「……ええ、感謝しておくわ」

欠片も感謝の念を感じられない憮然とした言葉を最後に、紫はスキマに消えていった。

不要となったスキマが虚空へと吸い込まれるように消滅するのを眺めながら紅は懐古の念を感じていた。

あの日。

妹紅と慧音の二人と家族に戻った日から、紅が八雲紫を無闇に憎む事は無くなった。

今に至るまでに、何度も顔を合わせる機会があったが何の問題も起きていない。

だが、紅は変わらない。

吸血鬼異変の為の準備を着々と進めている。

自力で及ばないのならば、他から補える何かを用意すればいいのだ。

そんな考えの下で日夜作業、もしくは思考に明け暮れている。

求めるものが”紫の死”ではなくなっただけなのだから。

――その全てが、沙夜に起因している事を紫は知らないだろう。

あと１００年でやってくる吸血鬼の引き起こす騒動が待ち遠しく感じる。

或いは、吸血鬼異変が終われば沙夜と会えるのかもしれない。

そう考えるだけで紅は心が逸りそうになる。

だが、それ以前にひとつだけ大騒動が起こる。

恐らく今日。
幻想郷という秘境は、幻想郷という隔絶された世界となる。

博麗大結界。
そして、それに伴う妖怪達の騒動。
――龍神の存在。

如何に八雲紫が大妖怪、それも最強と謳われる能力を保有していても。
真なる神に太刀打ち出来るとは考え難い。
格上の存在との戦闘、或いは交渉だけかもしれない。
だが、八雲紫の持つ切り札か類似する何かを暴く事が出来るかもしれない。

思考に没頭していると、不意に視界に影がさした。
慧音だ。

「……紅、紫はなにを？」

その隣に居る妹紅も気になる様子が見て取れる。
ふむ、と紅は頷き、

「人里の護りを強化しろ、だと」

「……なにそれ？　今のままでも問題なかったでしょ？」

呆れ気味に言う妹紅だが、慧音と紅は険しい表情を崩さない。
紅は起こりうる事実を知るが故に。
慧音は”妖怪の賢者”とまで謳われる大妖怪が態々伝えに来たという事象そのものに。

予想外の反応に妹紅は戸惑うが、紅が理由を口にした。

「直ぐにでも大きな騒動が起きる。そうなれば、今の警備では心許ない。最悪妖怪側との戦争も覚悟した方がいいだろう」

「嘘……！？」

妹紅が驚愕に反射の否定を零し、

「……其処までか」

慧音は危険度の高さを認識させられた。

「ああ。だが、警戒には二人で当たってくれ。私は妖怪側の騒ぎを抑える側に回る」

「抑える？　何か知っているのか？」

慧音の何処か探るような問い。

紅はその疑惑に真っ向から向き合う事を選択する。

「知っている。これから紫が何を成し、その結果何が起こり、幻想郷がどうなっていくのかも、全てを」

「……止める事は不可能なのか？」

「事は既に可能不可能の域には無い。止める事に益は無く、やらねば大損害を被る事になる」

紅の確かな断定に慧音も矛を収め、妹紅が紅に確認する。

「結局、あたし達は人里を護ってればいいんだよな？」

「ああ、頼む。先程も言った通り、私は此処を離れる。私が此処に居ては”八雲”の行動を快く思わん輩まで呼び寄せてしまうのでな」

確信を持って放たれた言葉は二人にとって看過できないものではあった。

しかし、其れを無くす事は不可能に近く、紅が人里を離れれば済むのもまた事実。

慧音も忘れ掛けていた可能性を示されては止める事も出来ない

「そうか、そういう事も起こりうるのか……」

「……すまんな」

「謝んなって！　気にしないでくれよ、紅。此処はあたし達で必ず護るからさ」

「妹紅……」

慧音は妹紅の明るさを微笑ましく、そしてありがたく思う。

後から強引に紅と肩を組んだ妹紅は一旦言葉を切り、更に顔を寄せて囁き、

「紅も必ず無事に帰って来いよ。だから、」

ただそれだけを一方的に言い放つと突き放して自然な表情を生んだ。

満面の笑顔を。

「――いってらっしゃい」

「ふふ……紅。いってらっしゃい」

妹紅と、追従するように慧音に見送られて紅は人里を離れる。

「ああ、いってきます」

妖怪の山
大蝦蟇の池

「おや、紅さん？　どうしたんですか、こんな所で？」

「む？　文か。大した事じゃない、天魔に会いに行く途中だ」

頂上を目指す紅に声を掛けたのは鴉天狗、射命丸文。
何の気なしに答えた紅に返って来た声は予想外のもの。

「え、天魔様ですか？」

「……天魔がどうかしたのか？」

「え？　ご存じないんですか？」

「いいから言え……！」

一々反応だけで答えない文。
つい声が機嫌の悪さを醸し出してしまったのも無理は無いだろう。

「ふぁい！？　て、天魔様はスキマ妖怪に連れられてどっか行きましたァー！！」

「紫が……？」

「はい！！」

恐らく既に紅より強くなっているだろうに逐一過剰反応する文を適当に宥める。
やはり鬼を倒したという事実と噂は妖怪の山に住む者にとっては畏怖の対象なのだろう。

「……そうか」

そう言って来た道を戻ろうと紅が振り向いた瞬間。
空を暗い雲が覆い尽くした。
雷鳴が轟き、一種にして豪雨が降り注ぐ。

「これは……！！」

「え……？」

その時。
幻想郷に住むあらゆる者が、その圧倒的な偉容に眼を奪われた。

――龍神。

まさしく神。
余りに神々しい龍。故に龍神。
なるほど恐ろしい。
幻想郷に住む全ての住民が信ずるのも頷ける巨大すぎる存在を感じる。

突如として姿を現した龍神は、己の周りの黒い雲で覆った。
雲に隔離された中から、唐突に大きすぎる力の激突の余波が幻想郷を浚う。
人、妖怪も、あらゆる種族が大きすぎる力の発露にに意識を向けざるを得なかった。

しかし、紅は別のことに気を向けていた。
それは、

――沙夜とのラインが繋がった？

魔法の森上空

八雲紫がスキマを潜りぬけ、その地に姿を現した時。
まるで知っていたかのようなタイミングでソレは顕れた。
いや、ような、ではなく、知っていたのだろう。

相手は真性の神、龍神なのだから。

その顕在と同時に巨大な雲に覆われ、しかし囲う様に展開された雲は視界を阻害しない。

中に在る龍神の巨大な瞳がゆっくりと動いた。

視線が見下ろす先、紫が視界に晒される。

何を言うでも無く、力を顕現する事もなく、ただ俯瞰する龍神。

ただそれだけで圧を感じてしまう程の存在感を纏っている。

しかし紫は屈せず、臆せず、確固たる意思を持って相対する。

「――龍神様。私はこれより、幻想郷を隔離致します」

その言葉と同時。

背後に開かれたままのスキマを潜り抜ける者達がいた。

「ふむ……此度は見事な難事だのぉ」

妖怪の山の頂点、天魔。

「諦めよ。傍観するには事が大き過ぎよう？」

地底に伏臥する鬼、鬼子母神。

そして、

「ほぅ、これが龍か。――面白い」

時間を識る異端、沙夜。

集ったのはたったの四人。

しかしそのいずれも幻想郷最強の名に恥じぬ四人。
そして俯瞰するのみだった龍神の重厚な意思そのものを確かに聴いた。

――安寧を謳うのならば力を示せ――

言葉と同時。
遥か上空、天から蒼い強大な力を持つ光が雨の様に降り注いだ。

紅は妖怪の山の中腹
文との直ぐに別れ、大蝦蟇の池の祠に腰を据えていた。

「沙夜が……生きている。……或いは亡霊なのかもしれん。それでも、確かに貴女は此処に居る……！」

ラインが繋がった事は沙夜も気付いている。
なのに何も思念を送らないという事は”今はまだ会うべきではない”という事なのだろう。
恐らく沙夜は全て知っていると紅は考える。
その上で紅と八雲紫と戦う事を望んでいるのだと。

「ふふ……本当に、敵わん」

そしてこの事実を知ったという事自体が一枚の手札になるとも。

その意思が快い。
久しく感じた沙夜という存在に笑みを浮かべる紅。
しかし、無粋な者は何処にでも居る。

「お前が八雲紅か」

祠の先に姿を現したのは体長3メートルはあろうかという三本脚の
鴉。
神が如き大妖怪。

「……八咫烏(やたがらす)が何の用だ」

紅の友好的とは言えない視線を受けて、
八咫烏は確かに嗤った。

「鳳仙だ」

「何？」

「鳳仙と呼べ」

行き成り言われても判るか、と憤りを感じたが口のは出さない。
気分のいい気持ちに浸っている時に不躾な来訪。
その上意図すら読めない。
よって先程以上に不機嫌が滲み出た声音で紅が問う。

「……その鳳仙が何をしに来た」

「隙間妖怪。あれは何を考えて龍神様に刃を向ける？」

何故自分に問うのかと疑問に思うも、即座に思い至る。
八雲の名を冠しているからだと。
思わず舌打ちしてしまった紅を責められまい。

「人間に圧迫される妖怪という存在が消え失せぬ為。それ以上はどうかは知らんが、それ以下ではない」

「……そうか。感謝する」

短く感謝の念を口にするだけで八咫烏は去っていった。
妖気も残さずまるで初めから存在していなかった様にすら思える。
天から舞うように落ちる羽根。
黒い翼から零れ落ちた一枚の羽根は弾け、光を地へ刻む。
気をつける事だ、と。

天高くより降り注ぐ蒼き光。
絶大な力を秘める破滅の蒼光は四人を爆撃、消滅せんと迫り――
それが彼らに届く直前に小さな、しかし妙にはっきりと通る声が響いた。

「――侵せ」

同時。
世界が金色に侵されてゆく。

蒼光の雨も例外なく冒され、

「な……！？」

「これは……」

「……ほう」

沙夜が意図的に侵さなかった紫、天魔、桔梗という大妖怪からも感嘆の声があがる程に異様な光景だった。
蒼が金色に染められ、〝腐ってゆく〟。
枯れ葉の様にしわがれて、砂の様に散り散りに霧散しているのだ。

光が腐る。
在り得ざる事象を引き起こした沙夜に対する脅威を全員が認知した瞬間である。
その事実に気付きながらも無視し、気付いていない様に振舞う沙夜。

「……何を呆けている？」

挑発的な口調は単なる気まぐれか、策謀の一環なのか。
それは沙夜にしか判らない。
しかし、やらねばならないのは事実。

「言われずとも」

次に動いたのは桔梗。
鬼子母神という最大級の鬼の力が解放される。
虚空から一本の剣が排出され、桔梗が天高く掲げる様に構える。
其処に収束してゆく尋常ならざる妖気。

「――我が力に断てぬ物無し」

静かな宣言と共に放たれる斬撃。
斬撃の向かう先は龍神の果てなく巨大な胴体。
世界すら引き裂く一撃が届く。
それは龍神の鱗に触れ、――しかし傷つけるに至らない。

「ふむ……やはり龍神様には届かぬようだの？」

「……その様だ。次元を扱うわらわでも肉を抉るには足りぬらしい」

次に動いたのは天魔。
しかし、天魔は自覚している。
鬼子母神の破壊能力は自分よりも上であると。
故に己ではダメージを与える事は事実上不可能。
ならば、

「――因果を定義する。”龍神の行動に対して我らは不利益を被る事は無かった”」

創り上げるのはロジック。
これで龍神が何をしようともこちらに被害は出ない。
この因果が確定した時点でこちらの敗北は無くなったはずではある。
しかし、龍神は幻想郷の神。その内にある者に縛られるとは言い切れない。

――そして隙間妖怪、八雲紫が動いた。

「私の世界に引きずり込むわよ！！」

腕を横に振るう動きと同時。
空間が悲鳴を上げて引き裂かれる。
急速に巨大化してゆく罅割れから覗くのは無数の眼。
１０秒もしない内に見上げても見果てぬ巨体を誇っていた龍神すら飲み込んだ。

此処まで圧倒的なまでの能力を行使する事で龍神と相対する四人は確信を持っていた。
――この程度で終わる程度の存在であるはずがないと。

「……気をつける事だ、か。――実に”的外れ”だ」

大蝦蟇の祠の中で一人呟く紅は理解していた。
必ず”八雲”に対して不満を持つ妖怪が現れる事を。
そして、

「八雲紅だな？」

その妖怪は、大妖怪であるという事を。

「……戒良（かいら）」

戒良と呼ばれた妖怪は全長４メートル程で、
白く揃った毛並みが美しい犬の大妖怪。

鋭い犬歯、最早牙とすら言えるソレを剥き出しにする戒良を、

「――遠くない未来。私は八雲紫に牙を向く」

「!?」

紅は利用する。

ソレをして場を整えよう。

”最後”の晴れ舞台の下準備だ。

「……続けろ」

「今より１００年後に一度。そして、その後に”もう一度”だ」

戒良は表面上は落ち着いている。

しかし、その眼は実に鋭い。

紅の発言を、その真意を測っているのだ。

その様に内心で口を吊り上げながら言葉を紡ぐ。

「１００年後は八雲紫の戦力を測る。どちらにしろ私個人では敵わないのは分かっているがな。故にその次こそが本命だ」

「言ってみろ。今ならば……いや、今だけは隙間妖怪でも気付かぬ」

――喰いついた……！

「簡単な事だ。私個人で敵わぬならば、少しでも戦力を削ることで戦える者に倒して貰おうというだけの話だ」

理にはかなっている。

ただ一つの問題を除いて。
戒良はそれを見逃すほど愚かではない。

「話にならん」

「……何故だ？」

「戦力として劣る貴様に隙間妖怪の戦力をどれだけ削れる？　多少では意味が無い。何よりもヤツは境界を操る規格外だぞ」

戒良の言葉は何処までも正論だ。
力の足りぬ者では戦力を削る事すら難しい。
そして、多少戦力が落ちた程度では八雲紫は揺るがない。
『境界を操る程度の能力』は絶対に近い能力だからだ。
しかし、

「私が戦力を削る。……では、それが能力の封印だとしたら、どうだろうか」

「――」

――世界が揺らぐだろう？　さぁ、戒良。お前は私の意図した通りに踊れ。

「……能力の封印だと？　そんな事が……」

紅の言った事が実現可能だとするのならば、多くの妖怪が名乗りを上げるだろう。
八雲紫の戦闘力の多くは境界能力に依存する。
ならばその力を失った時。

その絶対性は崩れ去る。

「理論上は可能だ。ただしソレに準備が要る。５００年はな。――故に後１００年程必要なんだ」

戒良は揺れていた。
本当に可能なのだろうか。
ゴクリと唾液を飲み込む音がヤケに響く。
心臓の鳴り響く音が警鐘の様に耳に残る。

「有り得ない話ではないだろう？　能力とは、あらゆる可能性を秘めているのだから」

追い討ちの様に告げられた言葉を聴いた／聴いてしまった時。
戒良は”欲”を出してしまった。

その頃。
人里では、ほぼすべての住民が頭を垂れ、祈りを捧げていた。

「……ああもう！　こんな時に！」

妹紅は苛立ちを言葉として発露させた。
ただし、住民のいない場所――この場合は自宅――でだ。
答えるのは同じく”ほぼ全て”に含まれない例外、慧音だ。

「こんな時だからだろう。龍神様が姿を現したとなれば無理も無い」

「そうだけどさぁ……退魔連の連中まで行動不能ってのはどうなのかなぁ……」

妹紅と慧音は紅の言葉を信じ、人里の住民を家に押し込むつもりだった。

しかしいざ行動に移そうとした時、天に雷鳴が轟き神々しい存在が現れた。

龍神様であると誰かが発した瞬間に全ての存在が頭を垂れた。

退魔連も例外無く、だ。

「人間の寿命は短いからな、仕方ないさ」

「……今妖怪に攻められたらヤバイけど、来ないよね？」

「恐らくは。妖怪も龍神様を崇めているからな。だが万一の時はなんとしてでも護るぞ」

「ああ、勿論。アリスには？」

妹紅が問うのはアリス・マーガトロイドへの通知をするか否か。

アリス・アーガトロイドは例外的に人里の救援を頼める魔法使い。

以前、慧音が稚拙な話術で交渉を行った相手だ。

「……いや、それは妖怪が攻めてきたらだな。まだいい」

「あいよ」

現在、人里に出入りするアリスが妖怪であると知っているのは退魔

連と一部の人間だけである。いきなり妖怪だけど大丈夫、等と謳った所で交流など望めないからだ。
初めこそ、店主等との会話も簡単なモノで排他的な所があった。

見慣れない服装。見慣れない容姿。それだけで日本人は尻込みしてしまう。
しかしアリスは人形劇を行う事で”近づきがたい異人”というイメージを払拭した。
それからと言うものの小さな女の子からの人気は絶大だ。
本人も人形染みた綺麗な女の子である事も一因だろう。

二人は自宅を出る。
相変わらず拝み続ける人里の住民達が視界に入る。

次に空を見上げる。
其処には未だ巨大な黒雲は立ち込めている。

「……あれ？」

「……む」

しかし、妖気が感じられない。
家で方針の確認をしている間に何があったというのか。

「――どういう事だ？」

ラプラスの魔が蠢く異常な世界の中。
”三人”は手の届かぬ絶対者をその身で実感していた。

次元。
因果。
境界。

あらゆる能力を集めようとも届かぬ至高の能力。
それらが集まって尚、龍神を認めさせる事すら出来ないのだ。
紫がぼやくのは無理は無いだろう。

「……此処までとはね……」

そして、時折降り注ぐ龍神の光を腐らせる事に終始していた沙夜。
沙夜にしては珍しく戦闘に意識を集中させていなかった。
思考の向かう先は紅。

ラインが繋がってたのはお互いが気付いていた。
そして其処から意識の疎通のしなかった意図を紅が理解すると直感していた。
紅ならば理解すると確信していた。

男に期待するのは、女の特権だろう。
例えそれがどんな理不尽であろうとも、
自分が惹かれた男ならば出来るのではないかという期待。
だが、沙夜と紅は違う。

自分がしたい様にする。
その行動が相手に幸いを齎す。

ただ、それだけなのだ。

「――沙夜！　少しは真面目にやりなさい！！」

紅を夢想していた沙夜は紫の”無粋な”声で現実へと還ってきた。
多少、声が低くなったのは当然だろう。

「む……阿呆め。この芳醇な夢想を邪魔するとは」

「戯け。貴様は能力も使わずただ防御のみで手一杯になるほど可愛げのある女ではあるまい？」

間髪いれずに桔梗のダメ押し。
しかし、その言葉には間違いがった。

「能力など知らぬ」

「――なに？」

「我は能力などというモノは知らぬよ」

全員が、龍神と対峙している事実を一瞬忘れて絶句した。
しかし即座に我に返り、体制を整えるのは流石だろう。
それでも動揺が抜け切らないのは八雲紫。
ラプラスの魔から断続的に弾を発射し続けながら紫は沙夜に問うた。

「――沙夜。貴女……能力を知らないっていうのは、本当に？」

「何度も言わせるな。我はあらゆる術を持つが、能力などは知らぬ」

「……！」

紫の心境は複雑だ。
自分は能力を使えぬ妖狐一匹に追い詰められたのか、と。
それでも勝利したのは自分だ、と。

「――だが。確かに龍との戦闘は心躍る。そろそろ、攻めるか」

沙夜の手に魔方陣が組み上げられる。
術式は凶悪な攻撃魔術。

「味わえ」

効果は一瞬にして顕現した。
顕われたのは何処までも深い黒。
暗黒に染め上げられた雷撃が龍神を貫く。

概念すらも焼き尽くす雷撃は確かに届いた。
しかし、焦げ目すら付いていない。
沙夜は、余りに強靭過ぎる防御力に疑問を覚えた。

「……ふん？」

故に、最小限に留めていた『腐蝕』の範囲を広げる。
『腐蝕』の光に龍神が晒され、――何の変化も起きない。

「何か、分かったのかね？」

その様子を疑問として沙夜に問うたのは天魔。
後ろから掛けられた声に沙夜は反応しない。

己の納得を優先した。

「……成程。これは真実、ただの試練に過ぎぬという訳か」

「……どういう意味だ？」

意味は図りかねた桔梗が聞いた。

矢張り、沙夜は答えない。

「ふん。気に入らぬな、後方の安全地帯で戦況を俯瞰するが如き傲慢。だが己を世界から隔離しようとも我の前には無意味。――同じ戦場に立たせてやろう」

言葉が終わると同時。

沙夜の体を中心にして直径５０メートルはあろうかという巨大な魔方陣が展開される。

緻密にして綿密なラインを描く魔方陣は最早芸術の域にすらある。

沙夜が魔力を送り込み、魔方陣が輝きを増す。

瞬間。

龍神から何かが割れる音が響く。

「何が――」

「大したことではない。ただヤツを覆っていた”世界”を壊したに過ぎぬ」

「世界ですって！？」

紫は沙夜の言葉を理解する。

世界を壊せるという事実がどういう事を意味するのかを。
だが、

「貴女――」

「――良い、な。わらわも龍神様と戦える様になったという事だぞ？」

「全くですな。歯痒い思いはせんで済みそうですのぉ」

それを問いただす事を桔梗と天魔は封殺した。
知った処で何が出来る訳でも、何をする訳でもないのだから。
紫は、嘆息して諦めたと意思表示し、再び龍神へと相対する。
そして、

――よかろう。お前たちは十分な力を示した――

龍神もまた、四人の力を認めた。
だが、沙夜はそれだけでは止まらない。

「――待て。我は貴様を態々戦場に引き摺り下ろしたんだぞ？　少しは遊んでゆけ」

「な……沙夜！？」

紫が沙夜の狂気とも言える行動を止めようとして、しかし間に合わなかった。
龍神は静かに沙夜を見据え、

――ならば、我が分体を打倒してみせよ――

隙間世界を爆発的な光が満たし、収まった時。
巨大な龍は姿を消し、代わりに蒼白い男が居た。

『倒してみせよ』

何処か儚く、幻のように存在感の無い何か。
当然の様に神々しく力強い圧倒的な威圧感。
そんな矛盾した男が、女性の様な、男性の様な、子供の様な、老人の様な声で諞った。

第二十九話：大結界騒動　龍神光臨編（後書き）

最後の青白い男ってイメージ的にはまぁ、ＫＯＦ的な彼なんですが。

オロチ！オロチ！！

サーセン

とりあえず次回かその次で結界騒動は終わらせるつもりです。伸びたらごめんなさいｗ

今気付いたんですけど、感想の受付がユーザーだけになってた……いつから？初めからですか？　ばかなのしぬの？レベルで勿体ないというか阿呆な事を……ｏｒｚ

すんませんでした（；´Д｀）

共に在りたいとは言わない。
共に在ると、そう決めた。

『倒してみせよ』

不可思議な声で龍神の分体が言葉を発したと同時。
世界に光が満ちた。
それは、

「――外！？」

紫の驚愕が示す通り、隙間世界の外――現実世界の光。
如何なる存在だろうと捕えてしまえば決して逃れることの出来ない紫の幻想世界が、一瞬にして掻き消されたのだ。
その事実が指し示すのは、

「――能力が……無効化された？　いや、跡形もなく消滅させられて……？」

龍神を含む五人が姿を現したのは、霧の湖の湖面。
状況把握に努める余人を俯瞰しつつ、龍神が湖面に脚を下ろす。
瞬間。
湖が凍りつく。

過激なまでの冷気で湖を一瞬で氷結、足場を作ったのだ。
その事実を全員が理解した。そして同時に疑問が浮かぶ。
一体何の能力だ、と。

しかし、ただ一人事実に硬直しない者が居た。
沙夜だ。
何の予備動作も見せず、一瞬にしてトップスピードまで加速。
そのまま正面から龍神へ突撃する。
が、龍神は無造作に腕を振るった。

「――むッ」

振るわれた腕から飛び出したのは円形の衝撃波が多数。
蒼く輝き、視化されているのは妖気で強化されているからだろう。
ただし、見えていても見えなくても関係無いほどに巨大で速い。
……このまま激突するのは巧くない。

高速の中での判断は一瞬。
前方への加速のベクトルを比較的衝撃波の到達が遅くなっている右前方へと修正。
そして更に加速。
抜ける。

無数の衝撃波を抜けた先。
開けた視界に現れたのは、

……第二波！！
脅威を確認したと同時。

沙夜は加速という方法で逃れ続ける事は難しいと悟る。
しかし、沙夜は知っている。
勝つ為には前に出なければならない。
そう、迷うくらいならば前に出たほうがいい。

前に出る敵に対しての攻撃は難しい。
対処した攻撃しか放てないからだ。
それは、三種類しかない。
点と、線と、面。

点は速いが、当たる部位をズラして前に出ればいい。
線は長いが、当たる軌道を潜って前に出ればいい。
面は広いが、当たる範囲を避けて前に出ればいい。

沙夜は思う。
……数は多い。多いが、――それだけならば行け。
行った。

前に出なければ分からなかったかもしれない。
打ち放たれる衝撃波は広い範囲を覆う。
しかし、それは一枚の円形でだろうか。
――否。

数多く打ち放つ事で範囲をカヴァーしている。
故に広いが、隙間がある。
横に避けるのもいい。
だが、中を滑る様に踊るのはもっと良い。

一枚、また一枚、更に一枚。
飛来し続ける円形の衝撃波群を器用に掻い潜る。
時に後退し、停滞すら利用して、進む。
不意に後方から高速という言葉すら霞む速度で飛来する何かを感知する。
それは、

「――天魔か」

膨大な妖気の器となった天魔の錫丈が沙夜に群がる衝撃波をその速度で強引に纏めて掃う。
同時に龍神へ衝撃を送り込み、持ち主の下へ帰ってゆく。
沙夜の周囲から邪魔な障害物が消えた。
……見えた。
先程まで無数の蒼い衝撃波で塞がれていた視界に龍神の姿が映り込む。

「――往けい！」

「――言われずとも」

苦笑を一つ。
先に言わせた台詞を言わされた事も厭わず、開いた花道を最短距離で突き進む。
沙夜は驀進し、いつの間にかその隣を桔梗が疾走していた。

「構わぬな？」

「好きにせい」

これ程の”敵”を独り占めさせぬという分かり易い意思に沙夜は内心で苦笑する。
同時に、術式を使用していないとはいえ自分と対等以上の速度を容易く引き出す桔梗を賞賛する。
龍神まで後１０メートル。
ここで二歩進む。

後８メートル。
ここで龍神が体勢を整える。
後７メートル。
またしても円形の衝撃波を放ってきた。
沙夜が瞬時に術式を組み上げ、

「――焼き払え！」

魔方陣が威を発し、現れた黒い炎が蒼を飲み込んだ。
更に進み、後５メートル。
ここに来て、龍神が初めて違う動きを見せた。

力むことも無く、脱力している訳でもなく。
あくまで自然に垂れていた左腕で握り拳を作った。
同時。
快走する沙夜達の前方に巨大な蒼雷の壁が立ち上る。

余りに高く、一体どれだけ壁に密度があるのかも把握出来ない。
これでは突破するのには、若干時間が掛かる。
沙夜は一度足を止めようとして、

「――止まらず駆け抜けよ！！」

一歩前に飛び出した桔梗が一振りの刀に妖気を滾らせ、振り下ろす。
振り下ろされた刃の先。
全ての障害が切り裂かれた。

開けた道に一切の躊躇無く飛び込む沙夜。
沙夜が駆け抜けた後ろは蒼雷が再び立ち上っていたが、既に意識から外れている。
駆け抜けた先。
沙夜は眼前を見据え、

「チィッ！」

……やはり距離を作っていたか！
駆けていたにも関わらず距離は約5メートルのまま。
更には、

『さあ、無に帰ろう』

龍神は菩薩の如き自然な握りの手を合わせる。
瞬間。
その手の僅かな隙間から沙夜に向けて蒼白い極太の線が奔る。

紅は山を下り、霧の湖が一望できる位置に着いていた。
そこで見た光景は、

「……凄いな」

唯一無二とも言える様な強大無比の妖怪が四人集まって尚、龍神を打ち倒すには至らない。
それ以前に対等ですらない。
まさしく無類無敵。
神の名を冠するに相応しい威容に紅は圧倒されていた。

龍神の生み出す衝撃波の嵐を体裁きだけで避けつつも距離を詰める沙夜。
いつしかそれをフォローする様に動き始めた三人の大妖怪。
龍神の攻撃を相殺し、沙夜の快走を補助している。
全ての行動に意味が合った。
全ての呼吸に意味が合った。

恐らく、所々に潜む者達も同じ事を感じているだろうと紅は思う。
次元が違う、と。
ただこの一言に尽きる。

龍神が真なる神なのは明白。
では、ただの四人で肉薄しうる彼らは一体なんだというのか。
眼下で開催された過激なダンスは終結へと向かい、
雷の壁を越えた沙夜へと光線が放たれた。

「――沙夜ッ」

放たれた光線が沙夜と接触。
同時。
光線に飲み込まれた。

「沙夜！　――信じなさい！！」

耳に届いた声は八雲紫のもの。
この場では敵ではなく、背を任せる味方。
故に眼前に迫り来る光線を前に。
沙夜は信じて速度を上げた。

同時。
沙夜の視界は”闇”に飲まれた。
それは、

「――隙間か！」

一瞬の通過を持って沙夜が再び視界に光を得た時。
其処は龍神の背後。
……要らぬ真似を。
思い、しかし手助けを拒否する事無く直進。

遮る物は無く、２メートル程度の距離とも言えぬ空間を踏破。
最後の一歩を踏み出すと同時。
腰を捻り、
肩を押し出し、
拳は握りこむ。

僅か数瞬を微動だにしない龍神を見据え、正拳を沙夜は容易く振り抜いた。
余りに抵抗が無い。
肉体どころかまるで霞を貫いたが如き儚い手応えに、沙夜は眼を見開く。
……何だ!?

振り抜き、何かが尾を引いている右腕を確認する。
……粒子?
疑問を確信に変える間もなく悪寒が沙夜を襲う。
即座に横っ飛びに回避行動を入れる。

一瞬前に居た場所に雷雨が着弾しているのを横目に意識を入れ替える。
空間転移術式を起動し、紫の横まで跳ぶ。
何の前触れなく顕れた沙夜に紫は当然の様に声を掛けた。

「――どうだった?」

主語は無く、そして間違えようの無い話題も一つ。
沙夜も唐突な問いに即答する。

「打撃は通じんな。斬撃もだろう」

言葉と同時。
沙夜は『侵蝕』を開始。
あらゆる敵性を腐敗させる超攻撃的防御世界。

「……では対処はどうすべきだ?」

敵性ではないと判断されている者の一人。
悠然と歩み寄って来た桔梗が問う。

「あれは粒子だった。個ではなく極細の群だと考えればいいだろう」

沙夜の言葉は理由。
其処に一歩遅れてきた天魔が腐った氷でぐもった足音を鳴り響かせて現れ、

「ならば、衝撃か……」

「もしくは押しつぶすか、ね」

天魔と紫の回答。
どちらも一点に対する攻撃ではなく、全体を捕捉出来る攻撃を示している。

「そのどちらかでも実行不可能な者は居るか？」

沙夜の問いかける声に対し、反応は無い。
では、と沙夜は前置きし、

「――押しつぶそうか」

沙夜が行動を開始しようとした時。
世界に異音が響く。
それは何かが焼け付くような音。
音源に視線を向ければ、

「――な」

沙夜の『侵蝕』が罅割れている。
その原因は明白だ。
外界に居る龍神が放つ極太の光線。
認識が現実に追いついた時。

「――散れッ！！」

沙夜の怒号とほぼ同時に世界が砕け散り、
――衝撃に沙夜は一瞬にして彼方へと弾き飛ばされた。

四方に散った一人。
危険を叫ぶ声に逆らわず、中に身を躍らせた桔梗は戦術を組み立てる。
……１０キロは飛んだか。……復帰まで待てん。
虚空に設置した次元という壁を蹴りつけ、飛翔を同時に行使する。
生まれるのは爆発的な加速。

音の壁すら突破する事で一瞬の内に龍神の後斜めに到着。
腰を捻る動きを利用して脚を踏み込みとして”前”に一歩。
震脚から得た前への推進力と回転力を右手に握った刀身へと集める。
しかし、龍神は既に対応を終えていた。

一度上空に放たれ、そして前後左右正面背後あらゆる方向から囲う様にして円盤が迫る。
……追尾機能を、衝撃波に付与したのか。
が、桔梗は笑みを浮かべるだけで攻撃の動きを止めない。

「些か温うございますぞ」

接近した無数の円盤は桔梗に接触、――しかし通り抜けた。
己の次元を変えたのだ。
二次元の存在、例えば小説や漫画の登場人物が読者、三次元の読み手を認識出来ない様に。
三次元の存在から十一次元の存在へと昇華する事で透過したのだ。

されど、龍神はやはり古神。
龍神は振り返り、桔梗の姿を視認するだけで事象を理解／掌握する。
対応した次元の円盤を発生させ、桔梗へと発射しようとし、

「――ぬおおお……！！」

聞こえる気合は上空からの急降下する天魔のもの。
因果の設定、地面への到達を約束された錫杖。
その切先を下に向け、膨大な風を纏う事で加速を生みながらの突撃。
まさに神速。

如何に龍神であろうとも放たれている時点で既に遅い。
回避は間に合わない。
当たる。

鳴り響いた音は一瞬。
余りに短く、しかし余波は膨大。
故に一瞬の停滞が無音となり、――暴力的なまでの豪風が吹き荒む。
極小の台風の超速飛来圧から龍神を構成する微小の龍神が逃げ場を求めて霧散する。

「逃がしませぬ！！」

「逃がさないわ！！」

桔梗の次元の層が四方を覆い壁として。
紫の四重結界が上下を抑え、さらに四重結界を重ねる。
次元と転式八芒星（スクエア・スクエア）が天魔ごと龍神を押し込めた。

「おお……！！」

天魔の風が爆発的に質量を増し、龍神を圧迫。
天狗の長なればこそ、風は友であり、親であり、子であり、己そのもの。
故に天魔に影響は無く、龍神のみを攻撃する。
身動き一つ取れないでいる龍神を視界に入れた天魔は更に妖気をつぎ込んでいく。

「――吹き荒れぃッッ！！」

しかし、

『――下の下だな』

龍神は嘲笑う。

この程度では足りぬ、と。

そうして顕れた現象は、

「――魔術ですって!?」

龍神の身体を中心にして組まれてゆく術式は”空間転移”。

龍神はあらゆる幻想郷の神ではあるが、魔術などという知識の研鑽には関わりが無い。

その事実は示すのは、

「行使を一度見ただけで記憶しおったのか!?」

天魔が驚愕して暴風による圧迫を緩めそうになり、

「――続けろ戯けがッッ!!」

叱咤の声。

その声の持ち主は、

「沙夜!?」

弾き飛ばされた沙夜は、しかし心底諦めなかった。

もし相手が龍神でなければ転移でもよかった。

しかし転移術式の場合最低でも十一次元まで座標を指定しなければならない。

何よりも一度見せてしまっている。

その座標すら歪めてしまえる可能性を持つ敵への接近にそんな術式を使用出来るはずもない。

あの場では最善だが裏目に出てしまった。

故に残った魔力の半分を使用して継承時間軸統制術式の４倍速を起動。

１０キロもの距離を１０秒掛からずに踏破した。

そして、

「――させぬ！！」

呼気と共に行使されるのは魔術。

転移魔術を識る沙夜が阻害術式を発動させたのだ。

これで龍神が転移魔術を行使するのは現状では不可能になった。

それで十分。

「これなら――！？」

「ぐ！？　ぬ、ぐがぁああ！！」

しかし、地力が違った。

抑えていた妖気を顕在化させた上で発露し、天魔を圧迫。

同時に己を囲う次元と結界を内側から削ってゆく。

このままでは、と三人が脳裏に最悪を思い浮かべたと同時。

「――させぬと言った！」

行使した魔術は強化。

対象は結界と次元、そして天魔とその風だ。

あらゆる意味で強化された囲いは龍神ですら破壊するのが困難な代

物へと変化。
更に、

「妖気を込め続けろ！！」

沙夜の怒号に押される様に紫と桔梗は己の技を高めていく。
紫は己の身体に宿る妖気を大部分を結界に込めながら〝ソレ〟を見た。
苦痛に顔を歪め、緊張に身体を硬くしている龍神の姿を。
……これなら……！！

『――我より優れる者は無し』

瞬間。
天魔の錫杖から力が抜ける。
桔梗の次元が存在を失う。
紫の境界から妖気が届かない。

ただ、一言。
龍神がただ一言を呟いた。
それだけで、

……能力が、使えない――！？

『――我より優れる者は無し』

その言葉を龍神が口にしたと同時。
湖面から、そして霧の湖の周辺に潜む妖怪共からも驚愕と疑惑の念が発せられているのを紅は感じ取った。
無論全てではなく、比較的近くに居るものだけではあるが。

その内容は等しく”能力が使えない”という物だ。
能力を封印する能力。
それは紅が血液を基盤とする事で再現する事に成功したチカラ。
つまり、その能力は９９％沙夜の物であると推測する。

……沙夜の能力が覚醒した？　或いは既に持っていて今使った？
いや、タイミングが可笑しい。しかしだとすれば何故、龍神に使える？

能力とは固有の力である。
それは世界の不文律だ。
似通った能力は数あれど、完全に一致する物は存在しない。
魂が全く同じ者など存在しないのだから。

では、何故龍神は沙夜の能力を使えるのだろうか。
……いや違う、考え方を変えろ。この世界に居る限り理を違えてはいない。ならば前提が間違っている。
紅は思考する。
では、前提とはなんだろうか。

他者の能力と全く同じ能力は存在しない。
龍神にもそれは当てはまる。
龍神とて、沙夜の能力を行使する事は出来ない。

……？

龍神は沙夜の能力を行使している。
前提が間違っている？
他者の能力が使えないという前提は紛れもない事実。
では、前提を間違えずに前提を間違えるとはどういう事か。

「――はッ！」

「――――！」

そこで紅は沙夜の凛々くも雄雄しい気合によって現実へと帰還させられた。

「――はッ！」

沙夜の逆袈裟気味の蹴り上げ。
不意打ち気味のそれは龍神の頭部へと向かい、
――そして確かに当たった。
そう、当たったのだ。

『――！？』

「ふん、不思議か？　それとも驚愕か？　まぁいい、やはり思った

とおりだったな」

己に打撃と届かせたという事実を認識しきれない龍神を前に沙夜は断定する。

推測は事実だと確信した、と。

「この場に居る全ての者共の能力が使えなくなっている。それはつまり、無差別だ。可能性でしかなかったが、貴様もまた、使えぬ様だな？」

能力の無力化が無差別であるという事実。

そこはいい、と沙夜は続けた。

「何故貴様が紅の力、蒼き雷を扱えるのかが疑問だったが……漸く合点がいった。

貴様の能力。〝他者の能力を扱う〟事だろう？」

「――――」

その言葉を聴いた全ての存在が、呼吸を忘れた。

「我は我の能力などは知らぬが、能力というモノがどういうモノかは聞き及んでいる。

能力とは、固有のチカラで在り、同様のモノは存在せぬ。

しかし、貴様は紅と等しきチカラを使った。

ならば、そういう能力なのだろうよ」

まさか、と気の弱い者であればそれだけで殺せる程に凍える視線を龍神へと向け、

「紅の生き血を啜った訳でもあるまい？　……さて、続けようか。
タネが割れた貴様に何が出来るとも思わぬが、な」

縮地法。
一瞬にして龍神の懐に入り込む。
まるで反応出来ない龍神を感覚で捉え、

「ふっ！！」

顎へと掌打一閃。
カチ上げた。
そして沙夜は後方で呆けている阿呆共に視線を一度。
嘲笑してやった。

「――！！」

劇的な反応が起こる。
それは、

「――お主だけの手柄にはさせぬわッ！」

最初に反応したのは桔梗。
中空へと放り上げられた龍神の身体に向かって、飛翔。
甚大な妖気を篭めただけの刀を振るう。
ただそれだけで肉体は引き千切れていく。

「――わしも一枚噛ませて頂く！！」

天魔は虚空でばらばらに散らばる肉体を風で殴りつける。
風の一つ一つが嵐そのものだ。

そうして大打撃によって集められた肉片。

「――全く……最後は貴女が決めなさいよ、沙夜？」

紫がお膳立てを整える。

肉塊を結界で囲い、上部を開いて待つ。

その一撃を。

「――くく、構わぬがな」

そう言って用意しておいた術式を顕す。

術式は三本の降雷（ケラヴノス）。

口元には皮肉気な笑みを浮かべ、何処かを見据えて何かを呟いた様に見えた。

そして、

「――――落ちよ！！」

その日。

幻想郷に住むありとあらゆる存在が目にした二つの奇跡。

一つは龍神の降臨。

存在を語られるのみだった、誰もが信仰する絶対の神をこの眼で見ることが出来た、と後世へ自慢するだろう。

そして、二つ目。

余りにも荘厳で、壮大で、深遠の様な三本の雷が神々しく龍神様の存在を確かなモノだと証明するかのように君臨して１５秒もの間、その雷はそこに存在し続けた事。

「……恐ろしいわね」

ケラブノスを間近で見る事となった紫が呆然と呟いた。
紫をして、そう言わしめる程に強力無比な一撃だったのだ。

「そうか、……そう、思うか」

「？」

「我には、愛しく思えるよ」

「え……」

「いや、気にするな。戻るぞ」

沙夜が促せば、桔梗も天魔も同意を示す。
結果だけを見れば楽勝にも思える結果ではある。
しかし、妖気は既に尽き掛けでしかも、

「短期決戦でなければ負けておったのぉ」

「……だろうな」

天魔の素直な感想に、沙夜も同意する。
妖気を、そして魔力をペース配分など考えずに使いきった結果がこれだ。

長期戦となれば確実にガス欠だ。

「龍神様に戦闘の心得が無くてコレ、か。全く、我ながら分の悪い賭けに乗ったものよ」

「そうね……ほら、スキマは開けておいたから好きに帰りなさいな」

桔梗の想いに紫も賛意を示し、並行して帰路を作った。

「うむ、――よきに計らえ」

イラッときた。

しかし、不屈の精神でなんとか耐え切った。

そんな健気な自分を誉めてほしい。

後で藍に奉仕させよう、と内心で理不尽な決定を下す事で溜飲を下げた。

「はいはい、私はこれから結界を張らないといけない――」

『――見事』

「――――!?」

四人が四人。

全員が動きを止め、腰を落として警戒の態勢をとった。

上空に姿を現した、傷一つ無い龍神を視界に入れて。

しかし、

……一秒。二秒。三秒。

……十秒。

動きは無く、溶けるように消えてしまった。

「……あれでもまだ、テストだったのね……」

「その、ようだな」

紫の呆然とした呟きに桔梗も何処か放心して応え、
沙夜は内心で驚愕と悦楽を覚えていた。

……あれは、何だ。龍とは、何だ。呆れるほどに強大だ。全く以って、――面白い。
”世界は神秘に満ち溢れている”。

「まぁ、何はともあれ……解散、しようかね」

天魔の気の無い言葉に異を唱える者は居なかった。

紅はご機嫌だった。
沙夜を見る事が出来て。
沙夜の勇姿を眺めて。
沙夜のメッセージを受けて。

三本の降雷の直前。
沙夜が視線を合わせてきた。

そして、

「……此処まで来い、か」

それは不可能の近い軌跡の要求。
八雲紫、九鬼桔梗、天魔、沙夜。
幻想郷最強という称号に相応の者達の域。
神々の頂（ヴァルハラ）へと至るという事。

……まさしく無理難題。だが……沙夜が言うのなら至ろうか。

散歩でもするかの様に決意を抱き、空を見上げれば、
一瞬の偏光。
結界だ。
そしてこのタイミングで張られる、幻想郷を覆う程巨大なものは一つしかない。
博霊大結界。

「まぁ……まずは後片付け、か」

見据える先は人里。
そして、

――西の果て、マヨイガ

第三十話：大結界騒動　龍神降臨編　終（後書き）

ホントすみませんでしたｗ

いや、本当に自分が書きたいから書いちゃいましたｗ
ストーリーには無くてもいいというのに……。

次からは本当に話を進めます。
大結界騒動　博麗大結界、はじめます。

第三十一話：大結界騒動　百鬼夜行

その日。
幻想郷は無気味な静けさを保っていた。
無論何も無い訳ではない。
突如として顕れた巨大すぎる結界に誰もが疑問を持った。

あれはなんだ、と。
しかし答えはなく、妖怪賢者たる八雲紫も動かない。
故に、人里は不気味に思いながらも事態の傍観を選んだ。

その結果。
その日一日は幻想郷という土地に人間の里が出来て以来、初の”妖怪による襲撃”の無い一日となった。

一方で、妖怪たちは状況の把握の為に奔走していた。
唐突過ぎる結界の発現は一体何を意味するのか、
そして、何の意図を持って為されたのかを知らねば話にならないと知っていたからだ。

人間に平穏な一日。
それは妖怪達のとって困惑の一日だった。
気がつけば幻想郷を覆うように巨大な結界が出現。

その結界の効果を確かめに行けば、

幻想郷が外界と霊的、物的問わず完全に隔離されている事が判明。
この事実は瞬く間に幻想郷中の妖怪達に伝わった。
外界との隔絶。
それは同時に人間を自由に襲うのが不可能になってしまったという事でもある。
唯一人間の住居である人里は八雲紫の保護下にあり、そうでなくとも絶対数が足りない。

つまり、このままでは妖怪は消滅してしまう。
ではこの状況を打破するにはどうすればいいのだろうか。
そこで妖怪たちが見出した可能性は八雲紫だった。

巨大な結界を作り出したのは、八雲紫でまず間違いはない。
しかし、どの様な意図によるものかは定かではない。
どんな返答になるかによって対応は変わるが、まずは問いただすべきだという結論に至ったのだ。

何処に居るのかもあやふやな隙間妖怪。
確実にわかるのは、人里に”八雲紅”という妖怪もどきがいるという事実のみ。
ならば――……。

翌日早朝。

妹紅と慧音はそんな”異常”な雰囲気を嵐の前触れだと理解していた。
それも特大の嵐の、だと。
つまり、事態が動くのならば今日だと推測したのだ。
二人は退魔連に赴き、事態の危険性を説いた。
彼らもまた、現状の異常性を理解していた。

そして敷かれた警戒網はまさしく厳戒態勢。
人里の周りを3メートル置きに二人ずつ退魔連の人間が立っている。
その全貌を俯瞰出来る人里上空に慧音と妹紅の二人は居た。
不意に、妹紅が幻想郷を包む空気に対して愚痴を洩らす。

「……まだだとは思うけど、不気味すぎ」

「そうだな。だが紅が抑制させる言ったからには、なんとかするだろうさ」

あくまで紅を信じる慧音の発言。
心からの信頼から来るのだろう。
慧音に独り立ちして欲しいとも思う妹紅には若干不安になる程の信頼。

「……だと、いいんだけどね」

「――何だ、私ではどうにもならんと思っているのか？」

「そういう訳じゃ……え　〝！？」

独り言のつもりの言葉に返答があった事。

そしてその声が慧音のものではない事に些か以上の驚愕を込めて振り返れば、

「あ……紅！」

慧音は一瞬目を見開き、すぐ傍へと駆け寄った。
妹紅はその様は子犬が飼い主の帰宅に尻尾を振って喜んでいるかのようだと感じた。
後ろで復帰して口を押さえて肩を震わせている妹紅に蹴りを一発入れてから、

「どうやって此処に？」

わき腹にいい感じに入った一撃に悶える妹紅。
しかしその様を華麗にスルーして紅に話しかけた。
紅は微笑ましい家族のやり取りに苦笑して答えた。

「転移だ。二人には伝えておこうと思ってな」

「？」

「今日、動き始めるだろう」

「！」

紅はゆっくりと、二人が理解出来る様に言葉を続けた。
それが人里を守る事になると信じて。

「もう妖怪たちが事態の一端を知った頃だ。彼らは紫を捜し求めて幻想今日中を駆けずり回るはずだ。そして”八雲”に属するもので

一番手っ取り早く見つけられるのは……」

「――紅、か」

搾り出すように慧音が答えを示した。

合って欲しくない答えを。

「……そう、私だ。そこで私は余り目立たないように、しかしギリギリ気づかれるように妖怪の山に逃げ込む」

「その情報を私達が売るわけか……」

苦々しさを隠そうともしない慧音の声音に紅も若干の罪悪感を覚える。

しかし、やめる訳にはいかない。

「……嫌な役をさせる。が、頼む。それが一番楽だ」

「わ――」

慧音は友人であり、妹であり、娘だ。

そんな無情な真似はさせられないと考えた妹紅は口を開きかけた慧音の声を明るい口調で遮った。

「家族を売るなんて真似させるんだ。それなりの侘びはあるよな、紅？」

……やはり、空気の払拭はお手の物だな、妹紅。

心の中で有りっ丈の感謝を送り、同じく明るく応じた。

「そうだな、侘びならしよう。何か考えておいてくれ」

それだけ伝え、足早に妖怪の山に向かおうと吉備津を返す。
そこで妹紅の声が紅を止めた。

「んなもん決まってるよ」

「ふむ、何だ？」

首から上で振り返り、視線で問うた。
返されたのは力強い視線。そして、

「――無事に帰って来い」

「――――」

息を呑み、次第に気恥ずかしさが込み上げて来た紅は妖怪の山へと向かった。
小さくこう呟いて。

「……おう」

遠ざかる二人の居る方角から忍び笑いが聞こえたりなどはしていない。
していないのだ。

紅はさしたる時間を掛けずに妖怪の山の麓に到着していた。

「此処までで良いか……ここからは――」

――走る！

ただひたすらに駆け登る。

周りに居る全ての妖怪を無視して疾風となる。

一秒止まればその瞬間で終わりだ。

全ての妖怪が敵になっていると考えるのが一番判りやすい。

風が吹き抜けた。

およそ３０分。

地上を駆け抜けた紅は妖怪の山の頂――天魔の居住へとたどり着いた。

「――入るぞ」

足を踏み入れた質素な其処で、天魔は紅を迎え入れた。

「漸く来おったか」

「仕方あるまい。私の様な弱者には、危険が過ぎるというものだ」

軽口を叩きながら紅が天魔の眼前に腰を下ろす。
その動作には警戒の色はほとんど含まれてない。
信頼か、信用か。ただの予測か。

「弱者とはまた随分な擬態も在ったものだ、の？」

「いやいや、申し訳なく思っているとも。私が弱者であるが故に妖怪の山の皆様方に面倒を掛ける事ににね」

逆に天魔は警戒は無くとも何時でも戦える、といった雰囲気を纏っている。
それは、

「――戦争か」

妖怪の山だけでなく、幻想郷に住む全ての妖怪を巻き込みかねない戦争の発端になりうる紅。
その火種が居るという事は、それ即ち開戦の狼煙と変わりない。

「いや」

しかし紅は否定する。
表情には余裕すら窺える。

「そうはさせん。そうならない様にいくつか手は打ってあるし、八雲紫ならば確実に乗ってくるさ。――そうだろう？」

虚空を見つめ、放たれた言葉。
答えるものはただ一人。

「――ええ、乗ってあげる」

異なる世界を潜り抜けてこの場に降り立つ、隙間妖怪。
八雲紫。

刻を同じくして、人里。
いつもに増して妖怪の襲撃の無い一日。
そんな中、一人の妖怪がその姿を見せた。

「初めまして、人里の守護者の皆様方」

人型、高い知性を持つ妖怪。
シルクハットに黒いテールコートをきっちりと着こなした英国紳士風のナニかだ。
結界を守護する退魔連へと雅やかに一礼する姿は服装に似合い、実に様になっていた。

「この様に堅苦しい燕尾服などではなく私本来の装束で来訪したかったのですが、私は人里に危害を加えにきた訳ではないとご理解頂きたく」

軽く紳士帽子を指で持ち上げながら再度会釈した。
しかし、誰が見ても思うだろう。
ならばその眼はなんだ、と。

「あぁ、失礼しました。自己紹介が先でしたね。私の名前はアルルカン、ただの道化師です」

表情は爽やかな微笑み。

体にも警戒の雰囲気は感じられない。

だが、決定的に信用してはならないと警戒を抱かせるのは、瞳。

確かに眼も笑ってはいる。だが絶対にあの瞳は笑みなど浮かべてはいないと断言出来る。

「……その道化師が何の用だ？」

答えたのは退魔連筆頭陰陽師。

博麗の当主。

少しずつこの場へと人員を集めつつある守護人員を確認しながら、

アルルカンと名乗る妖怪へと問う。

「単身ここに向かってきたのは、ただの囮か？」

「いえいえ、トンでもございません。私はただ聞きたいことがあるだけでございますとも」

「……聞きたいこと？」

複数居るのかを明かしたかったが、容易くかわされてしまった。

その落胆を一切見せずに会話を続ける。

「――八雲紅。彼はどこにいらっしゃいますか？」

一瞬。

ただの一瞬だけ、道化師から表情が消えた。
すぐに貼り付けたかのような微笑みに戻したが、十分だ。

「……それを聞いてどうする？」

「質問ばかりですね？　少しは……私の質問にも答えていただきたいのですが？」

「……」

空気が重い。
一瞬にしてこの場は戦場と化した。
押さえ込まれていた妖気が僅かに漏れただけで、まだ経験の浅い者は萎縮された。
……なんという存在感……！
しかし、

「……我等退魔連。人里の守護者」

「……それが？」

「人里に住む全ては家族。故に、家族に仇名す者は――」

「待て、博麗」

「！！」

上空より舞い降りたのは二人の守護者。
人里最大にして永劫の盾。

「……ワーハクタク、上白沢慧音に紅の自警隊、藤原妹紅ですか」

「紅の居場所が知りたいらしいな」

「ええ、教えて頂けるので？」

慧音は人里と過激派の抗争を決定的とする言葉を止め、アルルカンへと相対する。

応える道化師、アルルカンは表面上は穏やかに問いかけた。

「……アンタ、そっちの代表かい？　それともただの代弁？」

妹紅の言葉を交渉として受け止めたアルルカンは笑みを濃くした。

ふむ、と前置きして、

「私は、一応の権利を保有しておりますが……それが何か？」

自分が集団の意思決定に関わっている事を明かす。

後は、カードの出し合いだ。

「なら契約だ」

「……内容は？」

「紅の居場所を教えてやるから、人里には一切手を出すな」

その提案はアルルカンに取って、そして退魔連に取っても驚愕の内容だった。

呆けたアルルカンが反応するのに数秒を要し、

「……ほぅ、それは……なんとも豪気な」

「な……あ、貴女はご自分が何を言っておいでか、理解されているのですかッ！！」

さらに一拍遅れて博麗が怒気に声を張り上げた。
その言葉は退魔連の総意だった。
妖怪と人間は”どんな行為においても”決して相容れない存在だと信仰しているのだから。
しかし、妹紅は動かない。動く気が無い。

「くッ……慧音さん！　貴女はそれでいいのですかッ！！　家族を売るのですよ！？」

「――少々、黙って頂きたい」

簡単に済みそうな話を遮られては面倒だと考えたアルルカンは博麗の顎を打ち抜いた。

「そ、がっ……ぁ……」

不意打ち気味に脳を揺さぶられた博麗は何が起こったのかも理解できずに崩れ落ちる。
そんな邪魔者を排除し、それとなくフォローに為に口を開く。
その際、他の退魔師共を視線で牽制するのも忘れない。

「いやいや全く。大を救うために小を切り捨てる、それは実に正しい。私は貴女方の英断を称えますよ？」

その言葉に慧音は応えず、アルルカンを睨み付けた。

その様子にアルルカンは態々触れるべきではないと判断する。

「……失礼。それで、彼はどちらに？」

妹紅へと視線を向けて問う。

「……妖怪の山……だ」

「結構。よい取引でした。では私はこれにて、失礼」

返された返答は問題の無いものだった。

故に、アルルカンは帰還する。

しばらく人里は平和になるだろうと人事の様に考えながら。

妖怪の山の頂付近。

天魔の屋敷。

「……もうそろそろ、連中がここまで押し寄せてくるだろう。その中には妖怪の山に住む者とて多く居るだろう」

「迎撃は大天狗達に任せてきた」

「頼む。八雲紫は――」

「ええ、待っているわ。上手くやりなさい？」

紫は隙間を潜り抜けて消え、部屋に残ったのは紅と天魔。
普段と変わらぬ部屋に一瞬の静寂。
だが、天魔は気づく。紅の様子が常とは異なっている事に。

「……何がそんなにも可笑しいのかね？」

「……？」

天魔の自然と零れてしまったかのような疑問。
紅はその言葉の意味を図りかねた。

「顔だ。笑っておるぞ」

「――――」

呆然と手を頬に当ててみれば、確かに笑みの形を作っていた。
紅はその笑みの意味を、己ですら理解出来なかった。
……一体何故私が笑みを浮かべるのか。
脳裏を過ぎる疑問を、しかし紅は無視した。
考えたところで答えを出すのは困難であると察したが為に。

「……もう時間だ、私は出る」

「そうか」

苦し紛れに放った逃げの言葉は己でも苦しいものだと自覚出来る程度だった。
当然、理解している天魔は苦笑をかみ殺しながら短く答えた。

「……チッ」

アルルカンが人里から手に入れた情報では、八雲紅が妖怪の山に居るという。
そしてそれ以前にも、現状を把握したいと考える同志が見ていた。
”隠れるように”妖怪の山へと向かう八雲紅を。

過激派内部、そして人里の情報が一致。ならば其処に居るのは事実だと考えられる。
無論、それが偽装、欺瞞、つまり罠である可能性は捨てられない。
しかし、”八雲”という情報を確実に手に入れるには罠であろうとも行かねばならない。
それ以外に手がないのだから。

「往かねばならんか」

闇に潜み思考するのは犬の大妖怪、戒良。
そして一人ではない。

「仕方あるまい。我らに選択の余地は残されてはおらぬのだ」

暗がりに居て尚、人型の身体を炎で燃やす火炎魔人（イフリート）、バイバルス。
手軽な明かり扱いには気づいていない。

「そうだろうよ、俺たちは何時だろうと背水の陣ってヤツさ」

軽薄な口調で話すのは岩に腰掛けた豹の獣人、トーテンカス。
四肢には毛が生え揃い、野性味を感じさせる。
口調とは裏腹にその眼はまさしく獣の様に鋭く力強い。

「然り！　我々妖怪は何時如何なる時も人間の怨敵！！　故にこそ引いてはならない！」

奇妙に捻じ曲がった杖を手に〇×△をあしらった色彩鮮やかな道化師（ピエロ）、アルルカン。
本来の衣装を身に纏い機嫌が良いのだろう。

「……いつもにまして喧しいですね、一度死んでみては？」

スーツを完璧に着こなす人形遣い（マリオネッテンシュピーラー）、リヒター。
痛烈な言葉とは裏腹に表情は笑みを浮かべている。

「いっそアンタが道連れにしちまいな、そうすりゃアタシはスッキリさ」

ヤスリで爪の形を整えながら殺意を向けるのはこの場で唯一の女性たる木精（ドライアド）、フリージア。
ネグリジェのように透き通った薄いワンピースを纏い、淡い碧さで魅せている。

「止めろ。知るべき事実は知った。成すべき事柄も把握した。ならば言葉など不要、ただ行動に移せ」

そして、八咫烏（ヤタガラス）、鳳仙。
漆黒の烏。三本足という特徴を残す大妖怪。
7名の大妖怪は、手勢を引き連れて妖怪の山へと侵攻を開始した。

過激派の侵攻は当初考えられていた進行速度を大きく上回る速度で踏破していた。
その最も大きな要因は妖怪の山に住む妖怪達の対応だろう。

河童達はそもそも大きな戦力を持たず、人間を盟友と自称する気色からか、表立って戦闘行為をしようとはせず、奥地へと隠れていった。
白狼天狗はあくまで哨戒であり、大戦力の侵攻を防ぐだけの防御力を保有していない。
鴉天狗は速いが、決定力に欠けていた。

雑多な妖怪を幾分減らしたところで、首魁の7人には届かない。
その他にも、多くの種族が住んでいる。
しかし、その半数は全くの素通りを許したのだ。
妖怪の山に住んでいる妖怪達もまた、事実を知りたがっているという心情の表れだろう。

そしてさしたる時間を掛けずに過激派の大妖怪は大天狗達の防衛線まで辿り着いた。

「――壮観なり」

八咫烏の言葉は至極当然のものだった。
それもそのはずだろう。
普段から仕事がある者、好き勝手動く者など数の揃わない戦力として大天狗は認識されている。

「四十八天狗揃い踏みとは……」

感嘆の言葉を笑みのまま溢す人形遣い、リヒター（マリオネッテンシュピーラー）。
しかし、その頬には汗が垂れた。

「四十八天狗とされておらぬ者も含めて四十八名なだけだ」

苦笑して答えるのは深山の大天狗。
総勢四十八名の大天狗が居て、しかし大天狗であるだけだ。
四十八天狗に数えられる者の中には既に存在しない者とて居るのだから。

「さて、深山の大天狗が代表しよう。去（い）ね」

「それが出来るでも思ってんのかい？」

簡潔な退去命令に簡潔に否定を唱えたのは豹の獣人、トーテンカス。
元々彼は気の長い方ではない。

しかし、動けない。

大天狗は弱くない。それが数を揃えているとなれば苦戦は必至。
或いは敗北すら見える程に強大。
八雲紫と対峙する前に疲弊するのは出来る限り避けたいのは確かなのだ。

同時に、天狗達もまた、動けない。
過激派の戦力は大きい。
まともに戦えば、こちらもタダでは済まない。
この騒動後も妖怪の山が絶大なコミュニティとして存在するために此処で戦力を削られるのは旨くないのだから。

どちらも聡明で、目的の為に戦力保持しておきたいが為の膠着。
だが、その膠着状態も長くは続かなかった。
第三者の介入。
両者の中間点に、一人の男が突如として姿を現した。

「少し……いいか？」

「――八雲……紅！！」

その名を叫ぶ声から過激派集団に存在が伝わる。
気の早い者は既に飛び出す姿勢だ。
だが、

「……まぁ、少し大人しくしていろ」

言葉が放たれたと同時。
桁違いの風が重圧となって過激派を上空から圧迫した。

「……がッ！？」
「何が……！？」
「……うおっ！！」

あちこちで呻き声が上がる。
それも当然だろう。
紅は上向きの風を更に煽り、低高度の空気を成層圏近くまで運んだ。
上昇気流によって巻き上げられた空気は冷却され、水分を凝結させる。
そうして出来た小さな氷片は互いに結合し、雹へと成長。
それは周りの空気を冷やし、重くし、高速で落下させる。

こうして発せうする強力な下降気流がダウンバーストと呼ばれる現象だ。
更に意図的に加速させれば最早それは兵器と化す程だろう。
当然、今回は殺害が目的ではないので加速までは行わないってはいない。

「い～い所に来てくれたじゃん？」

そんな暴風の圧力を物ともせず、紅へと急速接近するのはトーテンカス。
雑多な妖怪と違い、野生と共に生きてきた大妖怪は嵐を忌避しない。
暴風雨に晒されながら生活していた者に対する障害足りえないのだ。

「ちょっくら一緒に来てほしいの、よっ！！」

足の強靭なバネによって生まれた加速によって威力を倍加された拳が紅の腹部

へと向けられ、

「――雷雨は、如何かな」

「――――!!?」

紅から迸る雷が、猛威を振るい、ただの一撃で大妖怪を鎮めた。
それはただ異常な光景だった。
半人半妖が大妖怪を容易く屠るという異質な空間。
だがそれ以上に、

「その雷の威力……何があった?」

自問する様に問いを投げかけたのは火炎魔人（イフリート）のバイバルス。
当然の疑問だろう。
以前紅が最大出力で放ったのは伊吹の鬼に対する雷撃。
しかし、その一撃は電流こそ凄まじいが威力は大したことの無い物だったはず。

「私が電という物の扱いを覚えた、ただそれだけの話だ」

そう、以前の紅は電気を電圧として理解出来ていなかった。
電気を電流として扱っていた為に膨大な電流を用意し、しかも無駄な放電が目立った。
故になかなか威力向上には繋がらなかった。

しかし現在の紅は電流こそ量を用意していないが、電圧を極限まで高める事に成功した。
よって以前よりも遥かに攻撃に適応した雷撃を放てるのだ。
妖怪ならば、妖気を込めて大量に放てば簡単に威力が向上すると考

えていたが、本質は人間なのだ。だからこそ考え方も人間の様にすれば良かったというだけの事。

「……信じられんな、今更能力の進化だとでも言うのか」

その理論も、知らぬ者にとっては現実の埒外の事象に過ぎない。
故に恐れる。
強大な存在だ、と。

「さて、進化かどうかは知らん。私に分かるのは私の事だけでな」

「……厄介な」

呟く声に紅は内心で歓喜する。
……そうだ、もっと私の虚像を強大にしてゆけ。
恐れられる存在でなければ、妖怪を束ねる事など不可能だから。
御しやすい存在などではないと示した紅は続けた。

「そんな事よりも、だ。貴様らに八雲紫と相対する状況をプレゼントしよう」

「面白ぉい！　面白いねッ！！　形こそ違えど八雲の眷属も同じ事態を目的としていた！！　すばらしい！　さぁ舞台に上がろう！私も貴方も道化なのだから！！」

「……ありがとう、と言って置こうか、アルルカン。それで、どうする？」

紅は懐から一枚の符を取り出した。
それは、

「八雲紫の境界能力の封じ込められたものだ。これに私の妖気を込めれば道が開かれるが……来るか？」

「……是非も無し」

八咫烏の言葉に追従する形で話は纏まった。
元より選択の余地などないのだから。

「よろしい。では案内しよう、ついて来るといい」

気絶したトーテンカスは放って置いた。

大きく開かれた隙間世界を潜り抜けた先。
其処には一面の銀世界が広がっていた。
誰もが絶景に眼を奪われ、言葉を失った。

「……此処は……」

「――ようこそ」

誰かが呟いた疑問。
それに答える形で紫は口を開いた。

「ここは霧の湖。湖面を凍らせて一種のステージにしたのよ」

なかなかのものでしょう、と微笑む紫は容姿も相まって妖艶だ。
しかし、その美貌に心奪われる者はただの一人も存在しない。
妖怪は自己の願望という名の存在理由に縛られているが故に。

「……それよりも答えてもらおう、何故あのような結界を張った？」

上を顎で示し、問うのは火炎魔人（イフリート）のバイバルス。

「あら、殿方はせっかちね」

過激派を牽引してきた紅、そして八雲藍を従えて八雲紫は優雅に立つ。
でも、と紫は続けて口を開く。

「少々焦らすのも女の嗜み」

二人の眷属、藍と紅が紫の前に立つ。
従者という前衛を携えて紫は宣言する。

「知りたくば、己を示しなさい！」

放たれた言葉と同時。

氷に覆われた霧の湖で二つの勢力が激突した。
藍が飛び出し、過激派の６名の大妖怪もまた、加速する。
紫達は湖面の端に立ち、中央付近から接近する妖怪達をどうにかしなくてはなない。

「何秒だ？」

「１０秒でいいわよ」

紅の質問に対して気軽に答える紫。
意味はお互いに理解しているが故に主語は省かれている。

「……無駄に長いな」

「あら、少しは活躍出来るようにという私の厚意よ？」

「――女狐め」

短く吐き出して紅も藍に遅れて飛び出した。
思考には八雲紫への罵倒と警戒が流れている。
……私の力量を少しでも測っておきたいんだろうが……！
だが、やらない訳にもいかない。
今回は、幻想郷に住む全ての妖怪に脅威を示せる絶好の機会なのだから。

「藍！　第一陣を抑えろ！！」

１０秒。

「馬鹿めが！　そんな時間はやらんッ！！」

藍と戒良が接敵。
どちらもお互いが第一陣にして先制の要だ。
意地でも引くわけにはいかない。

「ガアァッ！」

四メートル超過の巨体を前面に押しての特攻、そして噛み付き。
単純だが、実に強力な突破力を有する技だ。
対する藍は体重差により肉体的には完全に負けている。

妖気こそ勝っているが然程差があるわけでもない。
しかし『すきま妖怪の式』は『策士の九尾』なのだ。
何の策も携えずに戦場に出たりはしない。

『――四重結界！！』

やや前方への遠距離展開。
開かれた結界は四枚を連ねる事で圧倒的な強度を保有するに至った攻撃的防御術式。
空間座標を固定して射出する事で質量の問題をクリア。
妖気を込めることで更に攻撃力を向上させる。

「この程度――！！」

戒良の牙と結界が接触し、巨躯と速度によって一瞬の歪みを生み出す。
透き通った刃の様な金切音が鳴り響く。

9秒。

戒良の身体を四重結界の妖気による多段打撃が蝕んでいる時。
藍は既に戒良の横に並ぶ。
戒良も藍の存在に気づくが既に遅い。
速度を持った大質量が持つ驚異的な突破力は既に抑えられているのだ。

「しまっ――!!」

己を襲うであろう衝撃に備え身体を弛緩させ、妖気を漲らせ、

「……なに？」

しかし藍は戒良を攻撃せず、脇を通り抜けた。
藍は己の仕事は果たした。
紫までの距離こそ１６０メートルだが、まだ一人控えているのだから。
そう、驚異的な突破力は既に抑えられている時点で戒良は”脅威”ではなくなったのだ。

「――クソがっ！」

忘我したの一瞬で、激情に駆られながらも戒良は前へと足を踏み出した。

その時既に藍は二人目と接敵。
火炎魔人（イフリート）のバイバルス。
足元の氷を溶かしながら、しかし危うげなく一歩一歩は力強い。

「喰らえぃ！！」

８秒。

大きく左脚を踏み出して振るわれる炎熱の塊は右拳だ。
全てを溶かしつくす業炎を以って尚、欠片の油断も存在しない。
藍とて、まともに戦えば無事では済まない相手だ。
無事では済まないからこそ、手は打ってある。

「――落ちろ」

符に妖気を込める。
境界能力を封じた符だ。
即座にその効力は現れる。

「な――！？」

バイバルスの踏み込んだ左脚が踏みしめるはずだった氷を隙間世界へと飲み込んだのだ。
結果。
火炎魔人（イフリート）は忌避すべき水中へと勢い良くダイヴした。
そこら中に水が一瞬にして蒸発する音と煙が広がった。

７秒。

紫から１４０メートル地点。
戒良と紅が接敵。

「どけぇ！　貴様なら解るだろうが！！」

「時期を選べ阿呆！！」

満足な初速を得られず、速度が足りない戒良。
懐から一枚の符を取り出した紅。

「ならば噛み砕くまで！」

「はっ！　顔洗って出直して来い！！」

転移符、起動。
戒良、紫から５００メートル地点からリトライ。

紫から１８０メートル地点。

バイバルスを降した藍は更に駆け抜け、道化師と接敵。
……きもい……！
それがアルルカンに対する藍の抱いた最初の印象だ。
若干の距離になった時、藍は狐火を呼び寄せて散弾として広範囲をカヴァー。

「ハハハハ！　それではあたりませんッ！　何故なら道化師ですから――！！」

身体を捻り、実に無様だが結果として一発の被弾も無い。
口調こそふざけているが厄介な相手だと藍は認識。

６秒。

「フフフフフ！　そんなだから貴女は○×△□ёЮЧ！！」

「理解出来る言語で話せ――！！」

イラっとしたから少し視野が狭まったのか、

「上出来ですアルルカン！！」

「あ――」

リヒターが軽やかに藍を突破。

その失態を嘲ろうとアルルカンを口を開き、気づく。

口元が笑みの形をしている事に。

5秒。

何を笑っているか、と再度口を開こうとした瞬間。

物理的な圧すら伴い、その中に刃すら隠し持つ暴虐な風が吹き荒れた。

「む――！？」

「ぐ、ガッ！！」

アルルカンはどうにか妖気を杖に集中して防いだ。

だが、先行したはずのリヒターはもろに喰らってしまった。

吹き飛ばされ、切り刻まれ、氷に叩きつけられ、呻く。

「合わせろ藍ッ！」

「――ちィッ」

リヒターの影を追う様に追従し、一瞬にしてアルルカンの側面に移動。
アルルカンは一拍遅れて漸く動き出す。
その動きは右足の力を抜く事から右へと身を投げ出す為の動作だ。
紅の予想より速く、紅だけでは確実に捉えきれない。
だが、

４秒。

「シッ！！」

先ほどまで相対していた藍の左脚による横薙ぎの蹴撃。
アルルカンは自ら蹴りに身を投げ出す様に頭部に強打を受け、

「フンッ！！」

紅の正拳突きと、付随する雷撃による挟撃。

「――――！！」

歯を食いしばり、悲鳴を上げそうになる自分を押さえつけた。
更に紅は追い討ちとして勢いそのままに後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。

「……ふぅ、藍ッ」

屈んで吹き飛ばされるアルルカンを避けた藍は、呼び掛けに応える。
手を伸ばし、紅の右腕を掴んだ。
”きもい”のを自分の方向に吹き飛ばしてきた原因に対する怒りか、
握りつぶしかねない握力で。

転移符起動。

３秒。

紫から６０メートル地点まで後退する形で転移。
大体の仕事を終えた二人は最後の仕上げに取り掛かる。
声だけは気軽に、表情はどこまでも真剣に紅が口を開き、

「雑魚どもを止めんとな」

風で壁を作り、押し戻す。
紫の攻撃を補佐する為に更なる風を全力で生成し、妖気を込めてゆく。
紅の作業を止めさせない為に藍が前に立ち、遠距離から飛んでくる弾幕を防ぐ。

敵対する大妖怪7名の内、１名は不参加。
４名は対処済みで紫まで届かない。
残る2名の内、木精（ドライアド）は木々の生い茂る場所では脅威だが今は氷の上。
機動力も無く始めから数の内に入らない。

だが八咫烏は違う。
神が如き大妖怪。鴉の形の為、空を翔る事も苦にならないはず。
しかし、動いていないのだ。
その不気味な静けさは二人に対する大きなプレッシャーだ。

２秒。

ほんの数瞬。
たったそれだけでも考える時間を得てしまったが為に、ソレへの対

処が遅れてしまった。
多くの妖怪が迫る視界も、意識を割けなかった原因のひとつだろう。
藍の足元から超高温の火炎と共に蒸気が噴出した。

「九尾ィッ！！」

「――くぅ！！」

憤怒の感情に妖気を滾らせたバイバルスの拳が藍を捉える。
咄嗟に身体を捻り、左腕で防いで致命傷こそ避けたものの拳そのものが凶悪な凶器。
一瞬にして抉られた。

苦痛に歯を噛み締めながら境界の符を取り出し、妖気を込める。
火炎魔人を後方へと送り返した。
だが、想定外はそれだけでは終わらなかった。

「――な」

バイバルスが溶かして開いた霧の湖の穴から水草が這い出て藍と紅を拘束したのだ。
視線を前に向ければ、僅かに視界に見える女が哂った。

1秒。

「ぁぐ！」

更にはその拘束の力は半端な物ではない。
絞め殺す事も時間さえ掛ければ不可能ではないだろうし、現状では抜け出す事さえままならない。

時間が無いのだ。

「ゴォオアァアア！！」

追い討ちの様に現れたのは、戒良。
愚直に突進し続けた巨大な犬の大妖怪がこのタイミングで藍を襲う。

「――くそ」

藍は死を覚悟し、

「後ろに倒れ込め、藍」

後ろから風と共に聞こえた声に従って身を投げ出した。
紅に倒れこむ形になり、僅かに触れた時。
その手に握られた符が光る。
転移符起動。

０秒。

紫の後ろに転移。
紅は転移によって千切れ、効力を失った水草を払うこともせず、
藍を横抱きのまま風をもう一度操作。
ダウンバーストを引き起こした。
ほぼ同時。

「さ、１５両編成よ。ただし横並びの、ね」

スキマから飛び出た１５両の電車が氷の上に隙間なく並び、走行を開始。
猛スピードで迫る電車に対して突撃する形になった過激派は成す術もなく衝突。

「こんなもの上に――！？」

上空へ逃れようとした者も居た。
しかし、出鼻を挫く形で打ちつけられた上空からの風によって初速を失った。
全てが間に合わず、大質量による衝撃を受ける事になった。
圧倒的妖気を込められた圧倒的大質量による面制圧。

こうして、大結界騒動最大の暴走集団はたったの１０秒で鎮圧された。

翌朝。

「さて、起きてるわね？　聞いてるわね？　聞いてないなんて言ったらもう一回スキマ送りよ？」

「……」

「返事がないわね、聞いてないのかしら？」

「ひっ」

「聞いている！　聞いているから……勘弁してくれ」

場所を変えて妖怪の山の麓、玄武の沢。
崖の上に立つ紫とその後ろに控える藍と紅。
更に横には天魔が居る。

過激派として大結界騒動に参加した者、その過激派を明確に支援行為として素通りさせた者が崖の下へと集められていた。
その周りを大天狗、鴉天狗、白狼天狗が一応の警戒をしている。
視線が同情的なのは勘違いではないと思われる。
ちなみに声を増幅しているのは紅による風。

あの後、過激派として八雲を襲った集団は八咫烏を除いて全てスキマ送りにされた。
今朝になって、捨てるように玄武の沢に吐き出されたが例外なく憔悴している。
八咫烏はしなくて良かったのかと問えば、必要が無いとの事。
理由こそ分からないが、そういうものなのだろう。

「なら説明して上げましょう。何故こんな大規模な結界を張ったかを」

この様な場を設けたのは説明の為だ。
相対した時点で説明したとしても、頭に血が上ったような暴走状態では何を言っても受け入れられなかっただろうから叩き潰したとは紫の談。

「今年は確かにまだ桜も散ってないわ。けれど頭の中まで春のまま

じゃ駄目よ、思考を続けなさい」

八雲紫との共闘は、最初で最後だろう。
少なくとも自分からそう仕向ける事はない。
紅は紫の演説に耳を傾けながら、そう思った。

「――で、――だから――」

そういえば、今年は６０年周期の年だったな、
と言われて気がついた。
……しばらく花見しながら酒でも飲もう。

精神的な疲労は耐え難く、紅はそう決めた。
きっと、最後は慧音に怒られて終わりだろう。

第三十一話：大結界騒動　百鬼夜行（後書き）

ものっそう遅くなってしまってすみません……。
モチベの問題と怪我やらなにやらでキーボードを叩くのが大変だったもので（言い訳乙

今回オリキャラが結構出てますがー、最後のオリジナル異変で活躍する予定です。今回はかませ犬ぅ～。

次回は半ば位まで平和に、途中から吸血鬼異変に入っていこうと考えてます。
いやー、ようやく書きたい所に突入です。
まぁ、作者としても色々至らないマネーですが、これからも生暖かい眼で見守っていただければとありがたいです。

今最初から読み直すと文が痛いｏｒｚ

あ、藍の腕は寝てれば治っちゃいました。
え？妖怪ですよ？

第三十二話：緩やかな1世紀

●新年

古き良き日本家屋。
釜を囲うのは三人の男女。
藤原妹紅、上白沢慧音、八雲紅の三人だ。
向かい合い、正座し、表情は真剣に。

「――明けまして」

言い出しから声を揃え、

「おめでと……」

「おめでたいやつらだ」

「おめでたいやつらだ」

「……」

紅の下げる頭は中途半端な高さで止まった。
……おめでたいやつらだ？　いやいやなにを馬鹿な此処が如何に幻想の集まる世界だと言えども新年を祝う言葉を態々改変どころか一回転をこえて回りすぎて更に捏ね繰り回した様な罵詈雑言系に変えるなんて事はないだろうそうに決まっている。

流れる思考で結論を導きだし、紅は顔を上げた。

「ん？　どうしたんだ？」

妹紅が問い、慧音も顔を覗かせる。

純粋に疑問の表情だ。

紅は確信する。

先ほどのは聞き間違いだったのだ、と。

「い、いや、私も疲れが溜まっているのかもしれんな、ははは、おめでたいやつらだなんて聞こえてしまってね」

努めて朗らかに、冗談の様に、軽く口に出して笑い話にしようと目論んだ。

しかし敵は遥かに強大。

天然だった。

「いや、間違えてないが？」

「そう言ったぞ？」

「……」

脱帽。

「……一体何故そんな言葉が……？」

「紫が教えてくれたんだ」

「紫が言ってたぞ」

紅に衝撃走る！
それは、確実に怒りという感情だった。

「……ふ、ふ……ふはははははは！　いーい度胸だ阿婆擦れェッ！！　今すぐぶち殺して――」

「わあああ！？」

「ま、待て早まるな――！！」

殴り倒された。
流石に気が動転していた様だ。

「……痛いぞ」

「馬鹿言え。というかいきなりどうした？」

慧音の疑問。
妹紅は既に口の中が餅でいっぱいのご様子。
顔が若干あきれ気味に見えるのは勘違いだと思いたい。

「……私の家族に間違った知識を教え、それを裏からニヤケ面で見られていると思うとな」

喉に詰まらせる莫迦をしかねないので水を用意しながら答える。
その答えに満足いったのかどうかは知らない。
しかし、妹紅と慧音がニヤニヤし始めたのには辟易とさせられた。

「……なんだ、その顔は」

「いーや、別にぃ？」

慧音の返答が気に食わなかったので用意した水は自分で飲み干してやった。

丁度微妙に詰まったらしく焦って水を取りに行った妹紅など知らない。

その行為を見た慧音は更にニヤけやがった。

「ふふ……なかなか珍しいな、紅が照れる場面は……」

「ふん」

クスクスと上品に笑う慧音。

邪気すら無いから手の施しようがない。

そこに妹紅が俯き加減でゆっくりと戻ってきた。

「……こーおー？　何しくさりやがるかなー？　流石のあたしもちょ～っと焦ったぞぉ？」

「フッ。不老不死が何を」

嘲りながら言ってみた。

……プチッ☆

っという音が聞こえた気がしないまでもない。

「……燃やすぞゴルァッ！　不老不死だって痛いモンは痛いし苦しいモンは苦しいんだよ！！　表出やがれェッ！」

胸倉を掴んで紅を前後に揺すりまくる妹紅。
流石にやり過ぎたらしい、若干涙目だ。
が、その怒気を収める者が居た。
慧音だ。

「まあまあ落ち着け妹紅。可愛いものだろう？　紅の照れ隠し」

「……ハ」

物凄い嘲り顔だ。
イラッとしたが今回は自分が悪いので何も言わない。

「くくっ、可愛いトコロもあるんだな、ププ……。は、ふぅ～……。で、実際はなんて言うのが正しいんだ？」

笑いを押し殺すのに随分時間を掛けてから妹紅が聞いてきた。
まだニヤついているのはご愛嬌だろう。

「……あけましておめでとうございます、だ」

「なんだ、やっぱりそれでいいのか」

慧音の純粋な感嘆の様な言葉。

「素直なのは美徳だとは思うが、相手は選んだほうがいい」

「いやー、だって相手は幻想郷の古株だろ？　ここの風習なんかなーとか、さ」

そう言って頬を掻く妹紅。

慧音も受け入れてしまったので何も言えない。

「……今まで何も言われなかっただろうに」

幻想郷は、今日も平和だ。

●博麗の巫女

慧音が寺子屋で教育中。

自宅に居る紅も妹紅もやることが基本的にはないので暇だ。

更に暇なのだ。

「そういえば」

「ん？」

「博麗が名を変えたんだってさ」

「……そうだな」

博麗の名を冠する陰陽師。

人間の里最大の武力集団『退魔連合』のトップ”だった”。

「どうしてか知ってるか？」

そう、過去の話なのだ。

博麗大結界が張られると同時に、過去の遺産となっていた博麗神社に『博麗の巫女』が移転。
さらに退魔連筆頭陰陽師の博麗が『白艶（しらつや）』と改名。

「出来すぎている、か？」

「当たり前だ」

「……」

「……」

観察する様にじっと見据える紅。
その視線を受け止める妹紅。
やがて、嘆息して折れたのは紅の方だった。

「はぁ……やれやれ」

「知ってるんだな？」

「……」

「紅！」

尚も渋る紅に痺れを切らして声を荒げた。
退魔連とは既に数百年の付き合いなのだ。
知りたいという気持ちも仕方ないだろう。

「……誰にも言いふらすな。私も、八雲紫すら半信半疑なんだ」

「紫も？　アイツが関わってやがるのかよ……」

心底嫌そうに吐き捨てる妹紅。

怒りを向けようにも相手が強大すぎる。

「間接的にはな」

「間接的？　どういう意味だよ？」

「私も詳しくは知らんが、博麗大結界には必要不可欠な要素がいくつか存在するとの事だ。

結界維持に必要な博麗神社。結界の効力の微細な調整や綻びを直す巫女。

後は霊地などだが、特にこの二つが必須なんだと。

当初は八雲紫が自分を巫女にするつもりだったんだが……」

「だが？」

言いよどむ紅を促す。

「……巫女として選らばれたんだ、博麗の子が」

「選ばれたって……神が祭られてる訳じゃないんだろ？　その神社はさ……」

「おそらく。おそらくだが龍神様じゃないかと考えている。と、するならその子は幻想郷の安寧に必要不可欠な存在である可能性が高い。八雲紫も、博麗……白艶の当主もそう考えた」

「……生贄って事か？」

その問いは、重かった。
言葉自体も。
込められた意志も。
全てが。

「……違う、とは言い切れない。あの子のこれからの人生は、酷く孤独なモノとなる。それを受け入れるだけの器も持っていたしな」

「……」

「始めから備わっていたのか、選ばれたから”そう”なったかは定かでは……いや、止めようか、この話は」

「……胸糞わりィ……」

悪態を吐いて妹紅は家を出て行った。
止める事も、声を掛ける事もせず見送った紅は、虚空へ向けて不意に声を上げた。

「一つ、いいだろうか。始めからあの子が選ばれると知っていて大結界を構築したのか？　それとも……？」

応える声は、ない。
ただ静謐な空間が広がっているだけだ。

「……ま、いいさ。どっちでもな。私には関係の無い話、知る必要すらない事だ」

●昼人間夜妖怪そして半人半妖の逢魔が刻

「……ぷはっ、流石だ親父。いい酒を出すね？」

「当然よ！　まぁゆっくりしていってくんな」

気のいい酒場の店主に徳利を持ち上げる事で肯定の意を示す。
ちなみに銘は『鬼殺し』。
多少なりとも気が引かれたので頼んでみた。

「……美味いな、『魔王』に勝るとも劣らん」

残念ながらアレは今のところ幻想入りする要素の見られない銘酒だが。
しかしその銘酒も一緒に飲む相手によって色褪せる。

「くすくす……確かにいいお酒よね」

「ほぅ？」

「この私が飲めるんだもの」

そう言って飲み干したお猪口を突き出すのは風見幽香。
かつて紅を幾度となく絶望の彼方に追いやった花の妖怪だ。

「……たいした自負心だよ、全く」

呆れを多分に含んだ愚痴を溢しつつも酒を注いでゆく紅。
何度も迷惑をかけた上に一度として”勝って”いない相手だ。
立場は容易く決した。

「しかし、貴女も人間の里に来るようになったか」

「……あら、私が来てはいけないと言いたいのかしら？」

「いや。貴女は人型ではあるが、一線を画す大妖怪。そんな怪物すら受けいれられる土壌が出来上がったのだと考えるとな」

「そうね、昔では考えられなかった事だわ」

幻想郷だろうとどこであろうと妖怪と人間は相容れない。
その考えこそが主流であり、全てだった。
だが慧音の努力、そして”半人半妖”という紅の様な存在の事もあり少しずつではあるが人間の里は妖怪を受け入れていった。
その結果。

「悪くないだろう？」

「……ええ、悪くないわ」

大結界騒動以来、無闇に人間の里を襲う不埒者は激減した。
それによる妖怪への恐怖心、不信感を減じていった事も要因の一つだろう。

「けれど、問うわ。何故私を誘ったの？」

「……謝罪がしたかった。今まで多大な迷惑を掛けた事の……」

「……もういいわよ。あの子を壊した時に確かに一度、貴方は壊れたもの」

「……それでも、すまない」

頭を下げ、眼を伏せ、謝罪する。
言い訳などしてはならない。
唯一の誠意なのだから。

「はいはい、許してあげるから次」

顔を幽香へと向ければ差し出されたのは空の徳利。
苦笑を一つ溢し、

「……親父、次を頼む」

「あいよー」

小さく”ありがとう”と呟いた言葉は届いたのだろう。
僅かに照れが見える。
感謝を受けたのは初めてだったのかもしれない。
酒を手に席へと戻り、二人で飲み明かした。

翌日

両手両足を粉砕された状態の若者二名が警邏に発見された。

花が、花が、とうわ言の様に繰り返していた。
普段から冗談で人妻まで口説く問題児ではあったが、
人柄もよく、将来有望とみられていたので多くの者が善意で治療。
それ以来二度と”女性は”口説かなくなったらしい。
現在は霧雨店の経営に携わっている。

●油揚げ

「……む」

「……あ」

その日、紅が発見したのは八雲の式。
八雲藍。
随分と探し回ったのか、少し困っている様にも見えた。

「……」

「……」

霧雨店の前で立ち尽くす二人。
或いは見詰め合っている様にも見える。
が、周りは二人など気にせず買い物。
やはり図太い。

「……こ、こんにちわ？」

先手は藍。

声には困惑が色濃く現れている。

「……ああ、こんにちわ」

当然といえば当然だ。

主と敵対宣言をした相手との予期せぬ遭遇。

しかも今現在主とはそれなりに話す仲だ。

意味が分からない。

「……」

と、困っている様なので助け舟を出すことにした。

いじめたいとは思わないし、紫に何をされるか分からない。

何より。

「今日は、どうした？」

霧雨店の店番の笑顔がきつい。

「え？　あ、ええと、買出し？　……です」

「何を探しているんだ？」

「いえ、探しているというか……献立をどうしようか考えていたら思いのほか時間が掛かりまして……」

「……ふむ」

少し考え、相槌。
とりあえず暇でもあるので手伝う事に決めた。

「紫は、どういう物が食べたいと？」

「さっぱりした物がいい、と。何でも揃うのでとりあえず霧雨店に来たのはいいんですが」

「出遅れた為に大概の商品は微妙、と」

「……はい」

がっくりと項垂れ、尻尾も九本すべて垂れ下がる。
非常に愛らしい。
紫は猫派なんだろうか。
紅は断然猫派だ。

「……最近開店した店だが、行ってみるか？」

「いいんですか？」

「構わん。どうせ警備以外に仕事もなく、最近の実働はほぼ皆無」

「つまり暇、と」

「……そうとも言うな」

藍が紅に連れてこられたのはどこにでもありそうな一軒家。
看板も無く店の様には見えない。

「本当にここなんですか？」

「今は営業時間外だ」

その言葉に思わず空を見やれば、
夕焼けの美しい宵闇の入り口。
逢魔が刻。

「間に合わなかったんですか？」

「これからさ。個人経営で僅かな時間しか開けてないがね」

だが、
と続け、

「そろそろ開店時間だ」

紅の言葉に促され、顔を向ける。
感覚を集中すれば確かに感じ取れる匂いがある。

「……これは……」

藍の呟きとほど同時。
戸がゆっくりと開かれる。

「おや、客かい？」

其処に居たのはどこにでも居そうな老婆。
如何にも今が暇だと謂わんばかりの気だるげな眼。

「……紅さん、本当に？」

ここで間違いないのか。
そう疑うのも無理はないだろう。
一つ頷き、間違いないという意志を伝え、

「ああ、こっちの妖狐だ」

口頭で老婆の問いに答える。
老婆は億劫そうに顔を藍に向ける。

「……そうかい、好きにしな」

「あ、はい」

「藍、私はこれで帰るが、君も気をつけてな」

「はい。今日はありがとうございました」

綺麗な微笑みでそう言われてしまった。

３０分後。
至福の表情を浮かべた九尾の妖狐が居たとか居なかったとか。

●大結界による歪み

井戸から水を汲む紅。
その肩に手を置き、声を掛けたのは慧音。

「紅、ちょっと来てくれないか？」

「ん、分かった。　少し待っていてくれ」

「ああ」

水をきっちり定量汲み終え、家へと向かう。
中に入るのではなく、先に汲んだ水の保管の為に小屋へ。
それを終えた時。
既に半時も経過していた。

「……随分待たせてくれるわね……？」

「故意ではない」

心外だとでも言わんばかりの厚顔無恥さで即答する紅。
当然紫とて気づいているが今回は用事を優先する。

「……その時は本気で怒っていたわね」

口調も柔らかに、表情も笑顔で、しかし妙な威圧感を醸し出しながら紅を出迎えた。
客人を待たせてしまったのは明らかに失態ではあるだろう。
特にコレ相手は。既に対応していたであろう二人は精神的ノックアウト。

「……すまん」

「ま、いいわ。本題と行きましょうか」

……貴様への謝罪など存在せんわッ！
と内心思っているが顔には出さない。
釜を形で紫の反対側に腰を下ろす。
それを確認した紫は口を開いた。

「どんな対策にするか、案はある？」

「……自分を基準に物事を考えるのはお前の悪い癖だな、八雲紫」

「何の話？」

本気で分からないといった表情で問い返してきた八雲紫。
紫の思考はおよそ常人どころか超人ですら届かない範疇にあるという事実。

その事実を忘れられた結果が慧音と妹紅。
二人の理解不能の現在だ。

「博麗大結界の設置から１００年。争いを禁じられた妖怪の弱体化が問題でな」

事実、既に人里を守護する結界は意味を成していない。
襲ってくる妖怪がほぼ皆無だからだ。
ただし、人里を出れば十分危険が残っているが。

「分かっているなら――」

「人里の守護者の要は我々三名。二人を置き去りに話を進めること等出来ん」

二人が理解を示す。
そして紫は逐一言葉にしなくては進まないという状況に不満を得る。
曰く、面倒だと。
しかし、態度に表しても口には出さない。
進行の妨げになるからだ。

「で、その対策に何かないかと聞いてきたんだ。一つくらい策はあるだろうが」

紅の説明に慧音と妹紅は思案し始める。
妖怪の弱体化を防ぐという現実と方法を。

「貴方は何かないの？」

一応の説明を終えた紅を紫が促す。

対する紅の返答も色よいという程度ではなかった。

「ない訳ではない、という程度だな」

「……一応聞かせてちょうだい」

「概要だけだぞ。争う事が出来ずに弱まるのなら争わせればいい」

「な――」

「え――」

紅の衝撃的な発言を驚愕の声を持って理解を示そうとする二人。
それをタイミングよく遮る形で続きを口にした。

「――無論危険のない戯れでな」

「……まぁ、それが妥当ね」

草案を考えておこうかしら、などと呟く紫。

「それだけか？」

「いいえ、もう一つ。以前話した吸血鬼はどうなったの？」

スキマを開き、帰る準備万端にして紫が問う。
あくまでついでなのだろう。
別段隠すべき事でもない。

「そう遠くない時期にやってくるだろうよ。今、ヨーロッパでは狂

犬病の大流行らしいからな」

一般的に狂犬病はバンパイアという民間伝承（フォークロア）の祖といわれる。
吸血鬼現象をウイルスによる感染症とする説は特に有力だ。
噛み付きによる吸血鬼化がそれに当たる。

別名『狂水病』と呼ばれる症状が、吸血鬼の弱点。水のきらめきや光るものを避け、太陽の下に出られなくなり夜に徘徊する様にもなる。嗅覚が鋭敏化し、ニンニクの様な強い匂いを発するモノを受け付けなくなる現象を起こす。

墓場から生き返るというのは、狂犬病で死んだ死体は腐りにくく、いつまでも生きているようにみずみずしく見える事から発想出来るだろう。
それが、吸血鬼伝説の発祥と”科学的”に考えられる結果と発表されれば、吸血鬼は幻想へと堕ちる。

「……そう」

それ以上の会話は、無かった。

●紅魔館来る？

紅は久しぶりに紅茶を飲みたくなり、道具店である霧雨店を訪ねた。
紅茶を求めてではなく、茶器一式を探してだが。

「失礼するよ」

「いらっしゃい」

「……見ない顔だな、新入りかね？」

店番をしていたのは見慣れない青年。
しかし、どこかで見たことがある気がしないまでもない。
あやふやだ。記憶に残そうと思えなかったのだろうか。
眼鏡が冴えない。もとい記憶が冴えない。

「はい、初めまして。昨日付けで店番になりました」

「そうか。早速だが構わないか」

「はい」

「ティーカップを含め紅茶の茶器一式が欲しい」

紅の要求に青年はばつが悪そうに顔を歪め、
一呼吸置いて言葉を整理してから発言した。

「お求めの品は残念ですが品切れです」

「……品切れ？　それなりの数はあったと記憶しているのだが」

「はい、全てお買い求めのお客様がいらっしゃいましたので」

紅茶は数が少ない上に幻想郷ではまだまだ馴染みのない嗜好品だ。
買ってゆくのも一部の物好きが一つ二つだけだろう。

「……ちなみに、どのような人物が購入していったのか。聞いても？」

予測が正しければ

「ええ、構いませんよ。その方は珍しい民族衣装を身に纏った紅い髪の美しい女性でしたね」

「……他には？」

「他……そうですね、『龍』という文字の書かれた帽子を持っていたかと」

時が来た。

「そうか、感謝するよ。また来よう」

「あ、はい。お待ちしております」

予期せぬ時期、という訳ではないが予想通りのタイミングでもない来訪。

……幻想郷の歴史が、また一つ動くのだろう。

紅は内心で恐怖と渇望を訴える感情を無視して歩を進めた

●半人半妖として

最近建築した我が家に一人の青年がやってきた。
別段邪魔という訳ではないのでどうぞ、とだけ声を出す。

「失礼します」

青年は、視界に飛び込んできたソレ、テーブル前の椅子に座る紅よりも見たことのない建築様式に惹かれていた。洋式の自然に逆らうが便利な家に。
紅は、それを不満に思うことはないが、話は済ませたいと思い、

「……誰に用かは知らんが、先に挨拶位はしておけ」

「あ、すみません。僕は霧雨道具店に勤めていました店番です」

視線を向ける事で先を促す紅。

「えーと、二年間働いている中で僕の『能力』を生かす場所足り得ないと考え、新たなに店を開こうと思っています」

「……何故、それを私に？」

「紅さんだからです」

真摯な瞳。青年は嘘偽りなく、真剣だ。
……ならば向き合うが礼儀か。
紅は義を軽んじる気はない。
りんのすけへと体を向けた。

「聞こう」

「ありがとうございます。まず前提なんですが、貴方方に伝えようと考えたのは、僕が半人半妖だからです。そのため、一番初めに伝えたいと思ったんです」

同じく半人半妖の紅に対する同属意識だろうか。
ただそれだけならば、余り面白い話ではない。
しかし、遮る理由には足りず、ひとつ頷く事で続きを催促する。

「新しい店というのは古道具を扱う店です」

「……霧雨店との差異はなんだ？」

「僕の『能力』、道具の名前と用途が分かる程度の能力を生かしたいんです。「霧雨店」で扱う商品と人間相手の商売では自分の能力を活かせない。だから独立しようと」

「道具の名前と用途、それで古道具屋……か」

漸く繋がった。
記憶は脳の意識化に保存してある。
この青年はもりちかりんのすけ。こうりんどうの店主だ。

「はい。それで、紅さんたちなら初回限定で一品は無料で提供してもいいと思ってます」

「それは有難い。が、対価は何だ？」

「……バレてました？」

「当然だ、阿呆。半人半妖が一人で生きていくのに必要なのは善意ではない」

りんのすけは一人で生きてきたのだ。
姿の変わらぬ己を人の中に紛れ込ませて。
数年と同じ箇所には留まれまい。
これは紅よりも、もこうの方が理解しているだろう。

「……僕は人間と妖怪、いえ、誰であろうと商売をしたいんですよ。その方が道具を活かせると考えていますから。半分趣味ですけど」

「収集癖でも？」

「ええ、まぁ。それで紅さんには妖怪に僕の店を紹介してほしいんですよ。あ、勿論気が向いたらで構いませんから」

口調こそ冷静だが、表情は熱血を思わせる。
趣味とは、まさしく趣味なのだろう。
己にとっては計り知れない価値のある遊び、という事。

「ふむ、それくらいなら請け負っておこう。で、その店の名前は何だ？　それとお前自身の名は？」

紅のその問いかけに、りんのすけは即答せず、戸惑った。
何故なら、

「あー、僕の名前……は、ですねぇ。実は覚えてなくて。後で適当に考えておきます。店の方はこうりんどう、にしようかと」

「覚えておこう。それからこれは純粋な厚意からの忠告だ」

微妙に居心地の悪い答えを返したにも関わらず、紅は平静そのものだ。
若干の理不尽を感じるが、忠告の方が気になった。

「？」

「開店は後2年待て。少々、時期が悪い」

その言葉はりんのすけを低く見たが故の発言ではない。
そう理解出来たが、原因が分からないのは気持ちのいいものではない。
知っておきたいと考えたりんのすけは敢えて問う。

「……一体、何が？」

「いやなに。たいした事ではない。身内で祭りがあるんだ」

「……祭り？」

「――少々……危険な祭りがな」

●冬の仕上げ

退魔連合のＴＯＰたる白艶の生家は、裕福ではある。
ただし、贅沢は許されていない。
にも拘らず余分な金銭を所持していない。
それは、

「なかなかの『場』だな、白艶。此処ほど霊気を扱うのに相応しい場所など、そうはあるまいよ」

紅が訪れたのは、庭。
調和の取れた造詣は、流麗にして静謐。

「――いらしてたんですか。すみません、瞑想中で気がつきませんでした」

白艶はゆっくりと眼を開き、客人の応対をしようと腰を上げ、しかし紅はそれを遮った。

「いや、いい。伝えておくことがあるだけだ、直ぐに済む」

「なんでしょう？」

正座から胡坐に座り方を変え、気軽に応え、続く言葉はそれを許さない。

「――『八雲』として、正式なものだ」

「――ッ！？　は、失礼を」

佇まいを直し、先程まで存在していた澄み切った気が充満する。
白艶の当主が『退魔連合筆頭陰陽師』と意識を入れ替えたのだ。

「ある勢力が妖怪を支配下に置くという行為に走ると思われる。その場合、事の対処には『八雲』が当たる。『退魔連合』には万一に備え、人里の警戒に当たってもらう。――よろしいか？」

「――承りました。『退魔連合』は人里の守護を優先致します」

「――結構。では私は妖怪の山へ向かう。失礼する」

言うだけ言って、答えを待たずに転移魔術を起動。

跳ぶ。

出現先は、天魔の私室に直接だ。

現れた紅を見て一瞬の硬直すらない様を目の当たりにする。

それは隔絶された実力差、それ以前に存在としてすら違いすぎるのかもしれない。

だが、

「……せめて声か視線くらい寄越してもいいと思うんだがね……」

「見て解らんかね？」

解る。

何をしているのかぐらい解る。

うつ伏せになり、その背に馬乗りになってマッサージする鴉天狗、

と思われる少女。
……なんだその犯罪的な場面は。
あるいは、孫の行為に微笑ましいと思いながらも下手なソレを受け入れる祖父か。

「……邪魔するぞ」

「……チッ」

……すけべ爺め。
だが、この状況は悪くない。寧ろ好ましいものだ。
労せず手に入った機会を逃がす気もない。

「まぁいい、聞け。先日幻想入りした館の住人どもが狼藉を働いた場合は『八雲』が事に当たる。正式な決定だ。邪魔はしてくれるな、手加減は出来んからな」

「……阿呆めが。妖怪の山に手を出すようなら出ぬ訳にもいくまい」

「幻想郷の為だ、今回は引け。第一そうなる前にどうにかする」

この言葉を天魔や大天狗以外の重鎮に聞かせる事が出来たのならそれで十分。
正式と伝えた上でそこに紫がやってこない時点でそれは成立する。
紫が冬眠中であるという事実が意外と知られていないからだ。

「ふむ、下っ端だけなら見逃せ。末端までは眼が届かん」

「ううむ……もうちょい上、いや行き過ぎた……そう、そこ。そこだ。末端だろうと妖怪の山という社会の一員なんだがの……」

「感情的で悪いが、アレは私と交流があるんだ。頼む」

そう言って頭を下げる。

人間は利でしか動かないが、妖怪は利では動かない。

天魔はそれなりに利を知ると言えど感情という妖怪の源泉を軽視などしてない。

「……数件まで。それ以上は無理だぞ」

「感謝する」

餌は撒いた。

後は時間が芽を育み、開花するのを待つのみ。

そして吸血鬼異変が起こるまでは1年ほど。

……十分だ。

「その時は頼む。ではな」

「うむ。……お？　あ、う、あいたたた……！　強すぎ、強すぎるからもっと優しく……！」

死ね。

そして時は流れ、１９８９年。

歴史に刻まれる異変が起こる。

第三十二話：緩やかな1世紀（後書き）

遅くなりすぎました……。
こーりんが悪いんや！彼が出てから執筆が出来なく……すみません、
ｏｂｌｉｖｉｏｎにはまってましたｏｒｚ

あと、英語。
サーセン

しかも今回は短編集の様なノリで……。いや、ホントもう返す言葉もございません。

こっから本格的にＺＵＮさんの描いた世界に突入していく訳ですが、時間ねぇんで、あんまりさっさと書ける自信ないですｏｒｚ
頑張りはしますけど……。
ただ戦闘シーンは書きたい。すごく書いててテンションあがる……。

第三十三話：吸血鬼異変　異変薫る月下

原生林とでも言うべき木々の生い茂る森があった。
知る人は言うだろう。マヨイガ、と。
その最奥、或いは中心。
一件の家屋が建っている。
表札はない。
あるのは静寂な森を更に静める程の怒気だ。
其処は庭の見える和室。
室内で憤怒の感情を撒き散らすのは一人の女性。肩まで露出した豪奢な洋服を身に纏っている。
紫だ。
八雲紫は己の式、八雲藍の報告に若干の驚愕と、同時に沸き起こる深く根強い怒りに身体を震わせていた。
その怒りを向けられているのが自分ではないと知っていても尚、藍は恐怖に震える身体を押えつける。
笑いという形で発せられてる主の声が、激情に震えているのだから。
ある程度は落ち着いたのか、不気味なまでに淑やかな笑い声は止まり、
「――何の用かしら」
突然の呼びかけ。
一体何を、と考えた瞬間。
「伝えておく事があってな」

「――な」

耳を打つ声は主のものでも、ましてや己のものでもない。
境界という狭間に存在するマヨイガに侵入出来る何者か。
咄嗟の行動で主と侵入者との間に身体を滑り込ませ、漸く相手を認識する。

「沙夜！？」

「そう構えずともよい。今は昂ぶってこそあれど、欲情に過ぎぬ」

「え、な、よ、よく――」

「――下がってなさい」

沙夜の言葉に戸惑う藍。
或いは笑いを誘う場面だが、紫は揺れなかった。
動揺などしていられなかった。

「え、しかし紫様――」

「三度は言わないわ、下がりなさい」

「――し、失礼しました……！」

恐慌に陥りかけている藍に目もくれず沙夜と向かい合う。

「で。伝えておくことって？」

口にして、しかしある程度の予測は付いている。

紅だ。

数日前。

人里の退魔連がある情報をキャッチした。
ある勢力が妖怪を取り込んでいる、と。
すぐに紅の元へ届けられ、人里は警戒レベルを引き上げた。

報を受けた紅はただ一言、そうか、とだけ口して知らせの退魔師を帰らせた。
内心で時期と勢力の動きを予測し、問題ないと判断する。
妖怪は享楽で生きる。それに間違いはない。たがそれ以上に契約を重んじる。秩序無き自由は混沌であると識っているからだ。
……後は、レミリア達の感情だが……。
以前紅魔館を去った時のやり方は巧くなかった。寧ろ悪手だと言える。
あの様な突き放し方では悪感情を生みかねない。もしそうであるなら対応を間違えた時点で破綻してしまう。口八丁を頼みにするしかないと紅は考える。

「仕方あるまい」

「何がだ阿呆」

思考を巡らせていた紅を横合いから殴りつけたのは妹紅。
見れば、慧音も心なしか不機嫌そうだ。

「……痛いではないか」

「足りないなら幾らでも殴りつけるぞ」

妹紅と慧音の怒りが解らない訳ではない。
たが、今回は手を出すという事は幻想郷に喧嘩を売るに等しい。
故に何も言わずに出て行きたかったが、報せのタイミングは最悪だった。

「態々寛いでる所に駆け込みおって……」

「紅。今回は何をする気だ？」

慧音による問いかけ、というよりは詰問。
紅の度重なる度を越した無謀。それを知る者であれば、誰もが不安を覚えるだろう。
今回も死にに行くのではないか、と。

「……慧音」

「ああ、何だ」

「５００年、５００年を掛けて丹念に積み上げた、ただ一度の機会（チャンス）――」

「――それが今日だと？」

今日という状況を５００年掛けて作り上げたという紅。
それと今日、新興勢力が数多の妖怪を支配下としている事との関係。
そうまでして尚届くかどうかの相手。
……なるほど恐ろしい。
だが、

「何を言ってもお前が止まらないのは分かった。だからこれだけは言わせてくれ」

「……ああ」

「次からは家族くらい頼れ」

それだけ言って慧音は自室へと消えた。

「……ま、そーいう事だね。あんまり舐めんなよ、紅」

挑発的に言い放つのは妹紅。
柱に寄りかかり、毅然としたその姿は凛々しく、

「――そんなだから女にモテるんだ、君達は」

「なぁッ！？」

それだけ言って笑い話に変えてやった。
次は頼ると心に決めて。

霧の湖の中心。
小島がある。
圧倒的な存在感を携えて聳え立つのは紅い館だ。
一見無防備にも見える館は巨大な門を備えている。
紅い髪を風に靡かせ、しかし自身は揺れることなく大地に立つ女性、――紅美鈴は本日何度目かの溜息を溢した。

美鈴は幻想郷に来てから久しぶりの穏やかな時間を感受していた。
紅魔館の主であるレミリア・スカーレットとフランドール・スカーレットという二人の吸血鬼に仕える事に後悔など無い。素晴らしい主だと自負している。
しかし、幼い主の気まぐれで『主』としての命令が下された。

「この地を治める。領民を増やして来なさい」

そんな無茶な、と思ったけど口には出せなかった。
主だし、自分より強いし、趣味変だし。
紆余曲折を経て自分は倒せる妖怪を出来るだけ叩きのめし、お嬢様への忠誠を誓わせた。
制約として強制力を持つ『魔女の契約』をパチュリー様が用意して下さったので問題はなかった。
そんな退屈な時間を欠片ほども持てない多忙すぎる日々を送らされていたが、一定の範囲は終了。
漸く一休みが出来るとあってはこれほどありがたい時間は無い。

「……はぁ、やっぱり平和が一番……」

無論、完全に気を抜いてる訳ではない。

残念だが仕事の経過を報告後、しばらくの門番を仰せつかったのだ。休みの様な時間といえども最低限の警戒はしている。
そして何より残念なのは、その警戒網に一人引っかかっている現実だ。

「……レミリア先生、休みが……欲しいです……」

口では情けない限りの言葉を発していても体勢に不備はない。
唐突な突撃にも対応出来るだろう。
それにしても不気味な存在だ。行動は身を隠しているのにこちらには隠す気がないかの様でもある。
……恭順者、でしょうか。
ありえないとまでは思わない。
一定以下の力しかない者が力ある者に庇護を求める事は何ら不思議ではないからだ。
ゆっくりと、不審者が木々の陰から姿を現した。

「――」

言葉が出なかった。
敵であったなら、拳で語るか、降参を促した。
恭順者であれば、真偽を確かめた。
迷い人であれば、道を示した。
だが、ソレはそのどれでもなかった。

「久しぶりだな、美鈴」

「……紅、さん？」

紅魔館館内。

紅は美鈴に案内され、紅魔館の主の下へと向かう。
道中、美鈴とは様々な事を話した。
美鈴とスカーレット姉妹の出会い、侍従としての生活、人間の異端狩り、領主としての対応、パチュリーとの相対……。

「ふふ……」

「な、なんですかっ？」

己が戸惑っていると理解しながら抜けた返答をしてしまった美鈴。
しかし、どう考えても笑う要素満点の話ではなかったはず、とそこまで考え、聞いてみることにした。

「えっと、何が可笑しかったんですか？」

「いや、主の事を随分と慕っているようなのでな」

「……それは、そうですよ。敬愛するお嬢様方ですからね～」

世間話――と言ってもほとんど美鈴が一方的に話していただけだが――に花を咲かせて歩いていれば眼前に巨大な両開きの扉。重厚かつ華美な装飾で彩られた扉だ。

「さ、着きました。紅さんには申し訳ないんですけど、武具の類は渡してほしいんですけど……」

「持ち合わせがない。基本的に能力で剣を作ったんでな」

「あ、そうなんですか？　じゃあ、私の後に付いて来て下さい。あと、何を見ても引かないで下さいね……？」

金属が軋み、擦れる不快な音を響かせながら扉が開かれる。
美鈴の一言が些か気になるが、それ以上に荘厳な紅い館の最奥に眼を奪われる。
懐かしいとでも言うべき光景に。
そして、
……何だこれは。
視線を向ける先は玉座。かつてはアルカード・スカーレットが座していた場所。
いや、逃げるのは止めだ。というより逃げても無駄だ。

「レミリア、フラン。……何をしている？」

玉座にレミリアが座り、跨る様にフランが乗っている。
お互いは向き合い、水音が聞こえるのは如何なものか。

「――んちゅ……あら、紅じゃない。久しぶりね？」

「……ん、あ、紅。久しぶりだね」

そうか、と理解する。
最早これは二人どころか紅魔館では当たり前の光景なのだろう。
二人を評した美鈴が一瞬口にするのを躊躇うのも仕様のない話だ。
……これでも自重しているんだろうな。
服が肌蹴てないのだから。

「……ああ、久方ぶりだ」

「え、紅さんお知り合いだったんですか？」

紅がここに勤めていた事を知らない美鈴は疑問を口にする。

教えようとレミリアが口を開き、

「あら、美鈴には話してなかったかしら。彼はこの紅魔館の所有する大図書館の初代司書長よ」

「……へー」

「お姉様、美鈴のリアクション薄いわ。何かしないと」

「リアクションを期待した訳じゃないから落ち着きなさいフラン」

会話も何もかも全てを抱き締め合いながら行った姉妹を見て紅は思う。

これは自分の成した事柄の結果だ、と。

……いや、仲良きことは良きかな。なんの問題も無い。無い。

自分に言い聞かせるように思考を巡らせ、覚悟を持って言葉を発する。

「悪いが、聞きたい事がある」

「何かしら？」

答えたのはレミリア。

フランも視線を紅に向け、しかしその視線に警戒の色は含まれない。

「この幻想郷で妖怪を制圧していっているのは、君等で間違いないか」

「――ええ、そうよ。何か問題でも？」

開き直るでもなく、虚勢を張るのでもなく。

ただひたすらに問題ないと、自分達の行為に間違いは無いと示した。

紅はそれを自信、そして余裕の表れと判断する。

「……そうか」

「いえ、聞き方を変えるわ。問題が在ったとして、貴方はどうするつもりかしら？」

レミリアが聞くべき事は問題の是非ではない。

紅魔館の当主として、これからの行動を決定する為の情報の収集こそを優先したのだ。

レミリア・スカーレットという個人ではなく、紅魔館を導く者としての行動を選ぶ。

……優秀だ。

紅は思う。以前にもまして、一勢力の主として相応しい振る舞いだ、と。

「いや。私自身、今回の件を利用する為に此処に来た」

「……それで？」

「――再び私を雇っていただきたい、紅魔館当主、レミリア・スカ

ーレット殿」

紅は西洋貴族の最上級の礼で申し上げた。

外来の協力者でも構わない。しかし、所属すれば動きやすくなるのは確かだ。

出来ることなら足場はしっかりしておきたい。

レミリアが口を開き、

「駄目ね」

否定の言葉が返された。

「コウと我の関係には気がついていよう？」

静かに、沙夜が話し始めた。

それは、確認からだった。

「……ええ。貴方と紅が恋仲で、恐らく紅はずっと貴女を……」

「――そうだ」

そして、

「そこに理性の介在する余地は無く、感情が、本能が、――魂魄がお互いを求め、惹かれ合うのだよ」

「……」

「故に言おう。コウは我のモノだ。血肉や頭髪の一本までもな。重ねて言おう。我は、我のモノを奪う者を赦さぬ。貴様がコウを殺したのならば――」

それは、空間を圧迫した。

妖気だ。沙夜から溢れ出る妖気が物理的圧力を錯覚する程に強大なのだ。

藍は妖気に当てられ膝を突いた。

息を荒げ、それでも呻き声を上げぬ従者を誇ると同時に畏怖を覚える。

「覚悟せい、我と再び事を構えると……！」

「……！」

以前戦った時とは違う。

紫の直感は告げた。

何処か愉悦混じりに暴威を振るった沙夜とは違う、と。

……冗談じゃない……！

紅は数百年に渡り準備して来た。その結果が藍からの報告――紅魔館に紅が付いたという現実だ。

つまり、数多の手段を用意して待ち受ける紅を撃破するにしても殺害という手段を取ってしまえばその直後には沙夜が仕掛けてくる。

沙夜は僅かでも手傷を負い、消耗した状態で勝てる相手ではないのだ。

事実上、紅を殺害するという行為は封じられた。

「――覚えておくわ」

抑えきれぬ程の激情を理性で無理矢理に押し込め、しかし身体を震わせながら、そう返す事しか出来なかった。

「……理由を聞いても？」

レミリアの返答に対し、紅はさして動揺せず冷静に問い返した。問題なくこの場まで案内され、疎んじた様子もなかった為、問題なく進むと思い込んでいた。

そんなモノはただの都合のいい妄想に過ぎなかった。

そして何処か、それを予感していた。

「確かに紅には感謝しているわ。フランを、そして私を運命の呪縛から開放してくれた恩人よ。それに――」

と、突如恥ずかしがる様な雰囲気でフランがレミリアの口を口で塞いだ。

レミリアとて満更でもないが、対話の途中で情事に耽るつもりはない様子。

肩に手を置き、優しく引き離した。

「ん……フラン、少し待っていて……ね？」

「～～っ」

紛れも無く恥じらいだと取れる表情と声音でフランがレミリアの

平坦な胸に顔を埋めた。
照れた顔を恥らっている、というところだろうか。

「それに、私とフランの邪魔をしないようにって、気を利かせて出て行ったじゃない？」

「――」

そう、現実は、都合のいい妄想などとは違う。
その更に斜め上を行く難事なのだ。

「だから私としても雇ってあげたいという気持ちはあるんだけど……ほら、紅って『八雲紅』でしょ？　曖昧な立場のヒトはちょっと無理なのよね」

この時、紅は紛れも無く動揺した。
つまり、問題なのは立場の表明如何であるという事に。

「……ならば、伝えておこう」

レミリアの眼を見据え、真摯に相対する。
利用する事への罪悪感と、誠意だ。
そして、決別の意志。

「私は現在、――八雲紫に対して明確に敵対行動を取っている」

「――」

驚愕の発露。
レミリアだけでなく、フランもまた同様に驚愕している。

確かに、驚天動地とでも言うべき事態だろう。
八雲紫という大妖怪は現在の幻想郷の守護者であり、神にも等しい存在だ。
事実として幻想郷と世界を隔てる結界は紫の存在に寄るところが大きい。

「……本気？」

「事実であり、現在だ」

「……ねぇ、紅。別に何をしたかなんて訊かないわ。けれど、これだけは答えて」

返された問いはフランから発せられた。
紅は質問を待った。

「――貴方の行いは、紅魔館を、……お姉様を害するもの？」

「――いいや。紅魔館を、そして君達姉妹を幇助（ほうじょ）するモノだ」

「そう」

ならいいわ、とフランはレミリアから降りた。
そのまま紅を振り返ることなく玉座に背面に位置する扉から出て行ってしまった。

「……何か、機嫌を損ねる様な発言が？」

「いいえ、気にしないでいいわよ。それで、司書でいいかしら？」

「は？」

心すら繋がる姉妹は理解し合っている。
妹がどの様な想いを抱いたかも大体は把握した。
……照れ屋ね、フラン。……可愛い。
思考が反れた。
誤魔化す意味も兼ねて、言葉を重ねる。

「だから、雇用よ。もう一度司書をするって事でいいわね」

と、何の気なしにレミリアは続けた。
それと、

「ヴワル魔法図書館の管理だけど、パチェ――少し前にここに来た友人なんだけど、彼女と共同でお願い。客分という形だから一応、貴方の方が立場は上。いいわね？」

一息に伝える事を伝えた。

「……やれやれ」

肩を竦（すく）め、紅は苦笑と共に溜息を吐いた。

「了解（ヤー）」

丁寧という程度の礼を見せ、謁見の間を出た。
その姿を眺めるレミリアは苦笑の理由を正確に把握する。

「……懐古主義は流行らないわよ」

と、それとは違う、若干の呆れ、笑いの意味を含む苦笑を生んだ。

紅はさして長くない距離を歩く。

すぐ近くにヴワル魔法図書館に続く扉があるのは知っている。

地下の扉から入るとなれば少々遠いがヴワル魔法図書館には一階と地下一階の二箇所に扉が設置されているのだ。

両開きの扉を視界に入れた。

「……変わらんな」

華美というよりは荘厳。

巨大というよりは重厚。

そんな扉は数百年の時を変わらぬ姿で刻んでいた。

……保ったのは、イッヒなのだろうか。

過去を、そして優秀な補佐を想い、取っ手に手を置いた。

押し開く。

「――」

脳裏に叩き込まれた映像は、記憶に残るソレと様相を呈していた。

一段しかなかった本棚は、三段四段と積み重ねられ、天井から吊るされる物すらある。

空間も歪んでいるのだろうか。見渡せたはずの壁も闇に閉ざされてる。

「……変わっているな」

感想も何もない。

ただ、事実を事実として認識する事で手一杯になるほどの変容だった。
歩いて客人、パチュリー・ノーレッジを探すのには無理がある。
何より視界が悪すぎる。
故に風による飛行を選択。
真実風の様に、或いは雲の様に目的の場所すらなく適当に彷徨う事にした。

「はぁ……本棚しか無いな」

迷い歩く事30分。
未だに人影のひの字すら見当たらない。
……視界で探すのには無理が……む？
自分の思考の中に重要なヒントの様な答えの様なものを感じた。

「……ああ、しまった。風で探せばよかった」

様変わりしすぎた図書館に動揺したのだろうと結論を下す。
路線変更し、紅は地に下りた。
風を更に生成して円形に展開。
目的の人物はすぐに見つかった。
飛ぶ。

時間にして2分。
時間では短く、距離にすれば恐ろしく遠い。
漸く視界に件の少女を入れ、降下。

「――失礼する」

着地と同時に先んじて口を開く。

言葉と同時に観察すれば、其処には、白いテーブルクロスが掛かった楕円形のテーブルが一つ。椅子が三つ。樫の木から作られてる。テーブルに積まれた書物を照らすのは十センチ程度の炎を纏う少女型の精霊だ。

使役していると思われる紫色のワンピースに身を包んだ少女に動きは無い。

「私は先程、ヴワル魔法図書館司書を拝命した紅という者だ」

やはり反応は無い。

いや、正確には反応が消えた、だ。

文字を追う視線が止まっている。

「貴女はレミリアの友人の魔法使い、パチュリー・ノーレッジで間違いはないか？」

ゆっくりと視線を本からこちらへと移した少女は深い知性を感じさせる。

視線が絡み合う。

感情を含まない視線だ。

常に冷静さを要求される魔法使いとして申し分ないと判断する。

お互いがお互いを観察し続け、静かに少女が口を開く。

「私がパチュリー・ノーレッジという名であるのは事実だけれど、貴方の求めるパチュリー・ノーレッジかという保証は出来ないわね」

抑揚の少ない、感情に依存しない抑えられた声。

「……ふむ？」

「誰と誰が友人であるかという定義は個々によって定められる物よ。私がどう思うか、レミィがどう思っているかなんていつ揺らぐか解らないもの」

「だが、レミリアは君を友であると言い、そして君もまたレミリアを友と思っている。ならば少なくとも今は友だと言えるだろう？」

パチュリーが一瞬硬直。

その間に紅は椅子に腰を下ろす。

数瞬で戻ってきたパチュリーが問いを発した。

「……何故そう言えるのかしら？」

「レミリアからは直接聞いた。君からはレミィという愛称を聞いた。十分だろう？」

眉を顰め、自身の発言に気が付いたのだろう。

紅へと向けられていた視線は本へと下ろされた。

「この図書館の元管理者を前にして緊張でもしたのかしら……」

「……知っているのか？」

「イングヒルト。かつての管理者の名前だけど、この図書館の至る所に言葉が残されているわ」

「言葉……？」

イングヒルト。紅が紅魔館に勤めていた頃に随分と世話になった侍従の一人。

フランドールとレミリアを繋ぐ切欠を作る役目を負わせた女性。

「彼女の残した言葉は多く存在するから要約するけど、まとめれば大体これね。『初代司書長の紅という男性が戻ってきたのなら、手伝って上げて欲しい――』」

「――」

紅は息を呑んだ。

イッヒは紅の成そうとしている事を知らない。

……それでも戻ってくると判っていた……？

女性の勘なのか。或いは他の何かか。

何にしても、そこまでの想いを残されて無視出来る紅ではない。

「私はイッヒが慕った『紅』という存在に興味を持ったわ。余りに多く残されているから目にする機会が多かっただけかもしれないけど」

顔を本へと向けながら、視線を寄越すパチュリー。

探るような、と言うよりは眺めるという程度だ。

「……そう、か、――そうか」

彼女は紅魔館を好いていた。

ならば、誠意を以って紅魔館と関わろう。

それが、

……私の答えだ、イッヒ。

そう考え、紅は穏やかに微笑んだ。

「そんな顔も出来るのね……」

「誰しも複数の顔を持っているものだ」

そうね、とパチュリーは本と閉じた。
ほぼ同時。
悪魔チックな少女が新たに本を十冊ほど運んできた。

「――よいしょ、っと。あれ？　どちら様ですかー？」

可愛らしい、と表現するのが一番しっくりくる声で少女が紅を指差した。
首をコテンッ、と傾げるしぐさは妙に似合っていて逆に容姿とマッチして犯罪の匂いがする。

「ああ、私は紅。今日からここの司書になった。よろしく頼む」

と手を差し出す。
おずおずと少女は手を出し、握手して、

「あ、えっと、小悪魔、です。パチュリー様の使い魔やってます……？」

「――莫迦な事言ってないでコーヒー淹れて来なさい……！」

「は、はいぃ～！」

パチュリーは使い魔の微妙な発言に顔を顰めて、語気を強めて命じた。
小悪魔は主の立腹な様子で涙目になりながら走り去った。
その様子に小さく笑ってしまった紅だが、スルー。

「クク……いい使い魔じゃないか」

「ふん、そんな事はどうでもいいの。私が興味を持ったのは貴方もだけど、それ以上にその『魔術』よ」

一瞬にして感情を抑制。

知るべき事象の原因へと『武器（ことば）』を向けた。

「――答えなさい。貴方がこの館に刻んだ魔方陣とその思惑を」

妖怪の山の頂上に、一件の日本家屋が存在する。

中で言葉を交わすのは一組の男女。

一人は老齢の男性で、一人は妙齢の女性だ。

女性は妖艶な容姿だが、余りに鋭い眼が全ての印象を覆している。

そんな強烈な視線を柳の如く受け流す男性も普通ではない。

長い鼻が特徴的過ぎる。

「――無理だのぉ。『八雲』の名で宣言された以上、無碍にする訳にはいかん」

「撤回しようにも妖怪達には通用しない、と」

「……すまぬ、わしが迂闊じゃった」

「無意味ね、天魔。必要なのはこれからどう動くか、よ」

天魔、と呼ばれた老齢の男性は下げた頭を上げて思案する。

「そうだのぅ……手が無い訳ではない、といった程度か。紫に案はないかね？」

二人に共通の案件。

紅魔館のスカーレット姉妹悪魔（ツインデビル）の勢力拡大。

幻想郷のパワーバランスを大きく崩す行為だ。到底見逃せるものではない。

しかし、

「何をするにしても……紅が問題、ね」

人里と妖怪の山は八雲の名で動くな、と宣言されてしまっている。

妖怪の山、その他勢力から戦力を出す事は不可能。

つまり戦力として考えられるのは紫と藍の二人。

「後、二人。拳法家と魔法使いを抑える駒が要るわね」

本来ならば紅魔館組と拮抗する十分な戦力ではある。

しかし、紅が紫を長時間抑える術を持っていないとは考え辛い。

藍一人で吸血鬼二人を倒すのも難しい。よしんば出来たとしても時間が掛かる。

「……一人なら、無理が利かぬ訳ではない」

苦々しい、という表情で天魔が告げた。

「我らは新聞の発行をしておる。故に――」

「取材なら可笑しくはない、と」

けれど、と紫は続けた。

「……後、一人」

どうやって後一人、戦力を捻り出さねばならない。

しかし、適当な人員では戦力として不足する。

「ううむ……。何かせねば幻想郷が荒れてしまうのぉ……」

「え？」

「む？」

思案に暮れる中。天魔が呟いた一言は天啓だった。

「――それだ」

「――それね」

「……答えろ、と言われてもね。しがない半妖には何のことだか解らんが……」

パチュリー・ノーレッジ。

ただの１００年で属性の魔法を全て修めた紛れもない天才。

故にほとんど確信に近いものを持っている。
術式の概要自体は既に掴まれている、と。

「説明して欲しいと言うなら教えるわよ。解除言語（キーコード）こそ解らなかったけど、これは霊脈から紅魔館に魔力を蓄積させる魔方陣ね。ここまではいい？」

「……いや、十分だ」

「なら――」

「が、魔法使いならばわかるだろう。魔術とは人生そのものだ。対価も無しに得ようなどと……愚かしいにも程がある」

パチュリーが魔方陣がどういうものかを理解しているのなら。
……狙うのは魔力の使用権か。
それは許してはならない。
一部を許せば、少しずつその範囲が広がってしまう。
堤防が、蟻一匹程度の穴で決壊に繋がるように。

「現実が見えてないわね、私はこれを”適当に”改竄してもいいのよ？」

魔法使いは無表情を僅かに歪ませた。
使えないのならば破壊するという脅迫だ。

「隠蔽工作を怠ったのが運の尽き――」

「――ははは！！」

呵呵大笑。
そう表現するのが適切と言えるほどに大声で紅は嗤った。

「下らん！　実に下らんな！！」

「……？」

「ははは……！　全く、本当に笑わせてくれる……！！」

パチュリーは考える。
笑いの根拠を。
それが一体なんであるのかを。
……けれど、情報が足りない……足りない？
情報とは、魔方陣そのものについて。
足りないという事は、解析が不十分だという意味だろうか。

「まさか――」

「一部を全力で、残りを適度に。見せびらかす場所は明け透けにする。常套手段だよなぁ？」

パチュリーは肩を竦めて、視線に笑みを含ませる紅を見た。
そんな行為が癪に障る。
当たり前の罠に引っかかっていた自分にすら腹が立つ。
そして、紅が口を開く。

「さて、パチュリー・ノーレッジ」

名を呼び、続けた。

「君は破壊という行為の代償に、私の研鑽の結果を掠め取ろうとした。しかし、私は君の行為の結果、君自身の命が失われる運命を回避した訳だが……何か代償として支払ってくれるのかね？」

紅からの問い掛けをパチュリーは聞いた。

それは確かに問い掛けだった。

……敵対しないという意志を示しているつもり！？

だが、それ以上に対等の存在であると示してるのだとも考えられる。

ならば、

「……証明する術（すべ）なくして弁は意味を成さず、よ」

「ふむ、異論は無い。――お互い流すとしよう」

「ええ、そうね」

そしてお互いがお互いを認め、静かに微笑む。

と、そこに香ばしい匂いが割り込んできた。

コーヒーの香りだ。

「……随分楽しそうですね？」

運び手の小悪魔は、紅とパチュリーの”談笑”を横目にコーヒーカップを配膳する。

紅は一口、口に含む。

中に注がれた飲料は適度な温度を保っている。

今まで何度も淹れさせられたのだろうと紅は内心で判断する。

「まぁ、それなりにな」

「それなりにね」

二人が同じ言葉を呟き、姿勢を整えた。
その反応について行けずに小悪魔が、えっ、と声を漏らす。
当然の様に無視し、

「さて、難しい話は止めにして気軽に応えようか」

「さあ、難しい話は止めにして適当に寛(くつろ)ぎましょうか」

「……？」

紅とパチュリーは視線を交わし、しかしそこに険は無い。
既に対決は終わったという認識を持っているのだ。
口火を切ったのは、パチュリー。

「私は、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット両名と友誼を結んでいるわ」

「私は、姉妹の魂魄の垣根を薄くする事で破滅の運命から解き放った」

紅が応え、パチュリーは内心のみで驚愕の感情を作った。
あの姉妹の溶け合うかの様な在り様はそのせいか、と。

「……貴方に彼女達を害する意志が有るのかどうか、確かめた」

「同時に私を対等に扱うべき存在かどうかも、だろう？」

紅は笑いを含ませて言った。
対するパチュリーも同じように笑って言った。

「――そうね」

「……ふ、む。ならば私はどうだったのかな。合格かね？」

「貴方がそう思ったのなら、そうなんじゃないかしら？」

返答は直ぐに返された。しかし、
……意地の悪い事だ。
いや、と紅は思考を訂正する。
意地が悪くなければ”魔”を志す事など有り得ない、と。

「では……合格祝いとして一人、従者をプレゼントしよう」

「……従者？」

パチュリーの疑問に紅は応える。

「――”永遠の従者”」

「！？」

それは、禁書として蔵書されている一冊の題名。
レミリアが、フランドールが興味を持ち、欲しいと願った禁書。
禁書の名を耳にしたパチュリーの隠し切れない驚愕を紅は見た。

「レミリアならば、従順かつ、優秀な従者を欲するだろう。――欲

しくはないか？」

パチュリーが感情を押し殺し、無表情を作った。
紅は反応で感情や、状況を読み取れなくなった事を僅かに悔やむ。
しかし、行動を変えることはしない。
……パチュリーに警戒されても尚、レミリアからの恩は欲しい。
そして待った。
パチュリーの対応を。

「……莫迦な事を言わないで。あれには改竄の痕跡があった。だから――」

「私が原本に書き加えた注釈の事か？」

「……注釈？」

秀麗な眉を歪め、パチュリーは言った。

「あれは……貴方だったのね、そう。そういうこと」

「何か、拙かったのか？」

「ええ」

きっぱりと即答された。
余りにも躊躇無く告げられた邪魔者宣言に呆気にとられてしまう。
数瞬で我に返り、しかし矢継ぎ早に紡がれた言葉を叩きつけられた。

「悪辣極まりない原文自体は解読しているわ。けれどその”注釈”

のお陰でどれが罠でどれが真実なのか図りかねたのよ。つまり貴方が余計な事をしなければ今日もその優秀な従者を生み出せていたかもしれないの。――ご理解出来て？」

「……私が悪かった。改変は無事に出来るか？」

肩を竦めてパチュリーに謝罪の言葉を送る。

「当然よ」

返答もまた、解りきったものだった。

そして唐突に、紅が席を立つ。

「そうか。では、私はもう行こう。そろそろ時間なのでね」

「え、どちらに――」

小悪魔が席を立った紅に問おうと口を開き、軋みの音を聞いた。

満月の見下ろす夜天の下。

紅魔館上空に二人の女性が居た。

「……そろそろ突入ですね、紫様」

戦意を滾らせる妖狐が紫と呼びかけた女性は声にそうね、とだけ答えるに留めた。

ほとんど無視に近い対応だが、妖狐は気にした風でもなく、変わらず紅魔館を睨み付けていた。

「藍」

「はい」

藍と呼ばれた妖狐は短く応答し、指示を待つ。
式神とは、主の指示通りに動くのならば、その力を倍増させるのだから。

「――打ち倒しなさい」

「――はッ！！」

ガラスの割れる音とも取れる破砕音が紅魔館に響く。
と、ほぼ同時。
謁見の間に二人の妖怪が姿を現した。
スキマを潜り、悠然を歩を進め玉座の前に立つ。

「八雲……紫」

「式神の、藍」

幻想郷の強者を前にして呟くのは紅い姉妹悪魔（スカーレットツインデビル）。
幻想郷のバランスを崩壊させる愚者への制裁に出向いた二人は『

八雲』だ。

「初めましてこんばんわ。ご存知の通り八雲紫よ」

微笑み程度の顔の歪み。
ただそれだけを見れば美人の秀麗な笑み。
この場に存在する全ての妖怪が、笑みを浮かべていた。

「あらあら、こちらこそ初めまして。レミリア・スカーレットよ」

手を最愛の妹に向け、

「こっちが私の妹、フランドール・スカーレット。――妹共々よろしくお願いしておきましょう」

玉座を立ち、恭しく一礼。
同様にフランも立ち上がり、実に華麗に一礼し、

「初めまして、オバサマ。よろしくお願いしますわ」

空気が凍った。
一瞬の静寂が漂い、打ち破ったのはレミリアだった。

「ぷ、あははは……！」

幾度と無く、は、の音を重ね続け、小さな身体を震わせる。
漸く収まったと思えば、口元を手で隠しながら上品に嘲笑した。

「おば、オバサマですって……！　ぷ、くく……！　やだ、もう。
――似合いすぎ」

「お姉様も”やっぱり”そう思う？」

「……」

吸血鬼二人は楽しげで、それを眺める二人の心中は穏やかではない。

紫は怒りで。

藍は恐怖で。主に紫の。渋面になってしまうのも無理はない。

紫が口を開くと同時。

「――すまない。少々遅れてしまったが、問題ないか？」

「遅いわよ、紅」

謁見の間を扉を押し開いて入室するのは紅。

不甲斐ない司書を叱咤するレミリアに、悪い、とだけ返す。

そして視線は室内を見渡し、吸血鬼姉妹を、藍を見て、八雲紫に行き着いた。

ゆっくりとした歩みで紫の背後まで歩を進め、

「ああ、紫。招待状は届いたかな――？」

慌てて藍が間に立つ。

紅は元より紫も気にせずゆっくりと振り向いた。

その表情は”勿論”微笑みだ。

「ええ。これ以上ない程に素晴らしい招待でしたわ」

「気に入ってもらえて何よりだ」

紫は苛立ちを賞賛に隠し、紅は恐怖、そして畏怖を皮肉の中に隠した。
互いに警戒という賛辞を隠し持っている。

「へぇ、紅。そんな事してたの？」

「ああ。とはいえ紅魔館の人手は多くない為、彼女達のみにだが」

つまり、今回敵対する大妖怪は一人だという事。
事実を事実として把握したレミリアは司書の仕事を褒め称えようと拍手。
瞬間。
窓ガラスが一枚割れる。
粉砕されたガラス片は内側へと振り撒かれた。

「――！？」

驚愕の声を漏らしたのは誰だったか。
確認する間もなく音程の高い声がした。

「あややややや、事件の匂いです！　これは新聞記者として見逃せないスクープの予感ですッ！！」

「――射命丸文、だと……？」

「おや！　紅さんじゃないですかー！　お久しぶりですねー？　今回の事件に関して何かご存知ですかあ？　でしたら独占インタビューに行ってみましょう！　ね！」

窓を高速で突き破り紅魔館に突入したのは、鴉天狗の射命丸文。
紅は天狗に対して手を出すなと言った。しかし、
……ブンヤとして送り込んできたか、天魔……！！
卑怯とは思わない。
こちらの思惑を超える手を打ってきただけだ。
わざと声を張り上げる文を無視し、吸血鬼に声を掛ける。

「……レミリア、フラン」

「何かしら？」

「うん？」

「――八雲紫はどうにかする。後の二人を頼む」

返答は無い。
しかし、動きは有った。
レミリアが藍の前に。
フランが文の前に立つ。

「――」

「まぁ、就任祝いくらい贈ってあげる。感謝しなさい」

「ふふ、お姉様も素直に言えばいいのに。戻ってきてありがとうって」

うるさい、と妹に声を荒げる姿を目端に捉え、紅は紫へと足を向ける。
感謝の念を胸に抱き、視線は既に敵を捕捉。

「……さて、八雲紫」

「何かしら」

真正面から向き合い、視線が絡み合う。
紫という大妖怪と戦うために代償とした紅という半妖の５００年。
悠久の時間を、たった一日に凝縮して臨む。

「決闘の場は整えた。今、ここに試させてもらう」

「……貴方って意外と強引なのね」

「多少強引な位が丁度いいのさ」

「そう」

紫が妖気を滾らせる。
紅が魔力を猛らせる。

「――愉しい夜になりそうね」

「――永い夜になりそうだ」

第三十三話：吸血鬼異変　異変薫る月下（後書き）

遅くなりますたー。

いやー、パッチェさん話長くなってしまいましたｗ
はっはっは。

今回は吸血鬼異変の前夜って感じで。
次回から本格的に戦闘です。

つーか色々難しいですね、描写ってのは。
やっぱり言葉は使わないと使えないんですよ、うん。
巧い文章を見てると良くわかりますね、自分の拙さっていうのが。

精進します。

ＢＧＭはＤｅｍｙｓｔｉｆｙ　Ｆｅａｓｔ　ですかね。
この辺りを意識してました。

ではまた次回更新でお会いしませうー

第三十四話：吸血鬼異変　転機俯瞰の麓

●

幻想郷の中心に位置する湖。
霧の湖。
そこには小島があり、一棟の紅い洋館が聳(そび)え立つ。
紅魔館だ。
陽光を拒絶する館の最奥、謁見の間では六の人型妖怪が視線を交えていた。
うち四名は二対二の構図で向き合っている。
一方の子供と見紛う程度の体躯しかない二人。
その背面には翼が存在している。
コウモリの様な翼のレミリアと、その機能を為し得るか怪しい色彩鮮やかなひし形宝石が吊るされた翼を背負うフランドールだ。

「さて、あっちは燃え上がっている様だけど……貴女達は来ないのかしら？」

魔力壁で遮られた反対側、紅と紫を視線のみで示すのはレミリア。
既に玉座から降り立ち、妹のフランドールと並び立っている。
視線を戻して妖狐と天狗を眺めれば、

「いえいえ、私はあくまで新聞記者ですよ？」

天狗が嘯(うそぶ)き、

「……一つ」

「？」
「一つでいい。答えてくれ」
妖狐が強い視線で見据えた上で問いを投げかけてきた。
意図は読めなかったが、鷹揚に頷くことで了承の意を伝える。
「君等は、一体何のために幻想郷の調和を乱す？」
「調和？」
疑問というより疑念を返したのはフランドール。
レミリアはフランの感情と成長を考え、自分で言葉にさせるべきだと判断。
「言ってみなさい、フラン。解らないのなら、問えばいいわ」
「あ、うん。えっと……藍、でよかったかな？」
「ああ」
「調和っていうのは、釣り合いが取れてるって意味だよね。幻想郷の状態を見る限りだと、八雲紫が一人で勢力として存在してて……。人里を護る勢力の絶大な守護になってるのは分かるよ？　でも結局は妖怪なら程度の差こそあれど人間を必要とする。必要数の人間、餌を供給してるのは、それが可能なのは一人だけ。――これじゃあ統治じゃなくて、支配だよ？」
おかしいかな、とフランは“意見”を提示した。
フランとて、幻想に追いやられた妖怪だ。少なくとも幻想郷という土地を保つ為には外界との遮断が必須だと理解している。していないはずが無い。
その上での発言は、明らかな挑発だ。
「……もう、いい」

藍からフランの笑みを含んだ表情と口調を受けてか、それまで有った優しさの様な雰囲気が消え去った。
喉から発せられる声の震えは憤怒の感情だ。
「火遊びの代償は贖(あがな)ってもらうぞ、紅い姉妹悪魔(スカーレット・ツインデビル)……！！」
激情に彩られた心が、妖気を生み出す。
式神として受けた命令通りの行動が、更なる妖気を藍に与える。
力を付与する効果の重複は、妖気と戦意の相乗効果。
紫の命令に忠実な行為は、藍を紫と並ぶの大妖怪へと押し上げた。
「――黙りなさい」
「――黙りなさい」
一人にして二人。
二人にして一人。
魂すら共有する最も近しき姉妹は妖気の強弱に頓着しない。
「我ら気高きスカーレットが系譜。庇護を求める領民は拾い上げよう」
「我ら気高きスカーレットが系譜。庇護を求める領民は拾い上げよう」
アルカードが去り、領主としての立場を半ば強制的に存続する事になった二人。
知識が足りぬ、経験が足りぬ、知能すら。
全てが幼きため。
「されど、血族に逆意を示すならば叩き潰す」

「されど、血族に逆意を示すならば叩き潰す」

しかし、誰よりもお互いを理解し、共に在り、己を研磨し続けた。
侍従たちに何度も助けられながら。
そして得たモノは義務か、権利か、――誇りか。

「涙には怒りを、怨嗟には決意を、慟哭には暴虐を。そして、感謝には」
「涙には怒りを、怨嗟には決意を、慟哭には暴虐を。そして、感謝には」

如何なる難事も、二人であれば超えられた。
その事実は何事にも変え難い絆。

「――無欲を」
「――無欲を」

二人の言葉を一つの行為として、意思を顕した。

●

レミリアとフランは藍の左右へ回り込む形で跳ぶ。
翼による変則移動は速く、鋭く、何より急制動が基本だ。跳ぶというよりは飛ぶに近い。
床や壁、果ては天井すらも足場に出来る高速移動だ。
高速の動きの中でレミリアは考える。
レミリアは戦闘が開始したと同時に後方へと一息に後退した藍を追い、視線で新聞記者、文を捉える。
藍と同じく退避はしている。しかし速度は天狗というには遅く、なにより緩慢だ。

……本気で戦う気がない？
否。自分の思考を即座に否定する。
この場に来ているという事実こそが、少なくとも戦闘に介入する意思を持っている事の証明だ。
だが、積極的な介入も現状では無いと判断する。
は、と短い呼気と共に加速。藍へと一気に接近。
想定以上の速度だったのか、藍は若干の驚愕の表情を浮かべ、迎撃として爪が逆袈裟気味に振るわれる。
当たるはずのない位置からの攻撃を見て、

「！」

ほとんど反射のみで移動に急制動。更に左へと身を飛ばした。
一瞬前までレミリアの身体があった空間を妖気を固めた斬撃が凪ぐ。
一つのミスが死に繋がる。
事実として受け止めるが、それ以上は考えない。
更に空気を弾き、腕を振るった体勢のままバランスを崩している藍へと直行。
視界の隅に映るフランと自身の行動にシンクロを確認。

「く――！」

レミリアとフランによる十字を描く爪の凪。縦と横を抑え、タイミングも完璧。
当たる。
耳を打つのは堅音だ。
肉を打つ鈍音でもなく、刃で防がれたような快音でもない。
防がれた。
藍が両の手を支えにする形で構える盾。

「それは――」
「『――四重結界』」
多重起動された淡い蒼に輝く二枚の結界が、左右一枚ずつ。
対の爪を受けとめていた。
ほぼ同時。藍が両の手で支える結界を直角からわずかに反らす。
しかし、やはり想定以上の速度、威力に対しての支えとしては不十分だったのか。
藍もまた反りが捻れへと変化し、バランスを崩した。
「ちっ！」
「あっ！？」
推進力による打撃力をそのまま受け流される形でレミリア達の身体が風を押しのける。
このまま吹き飛ばされてしまえば壁を背負い、後を追う様に放たれるであろう攻撃を受けとめざるを得なくなる。
だから、レミリアはフランを呼んだ。
……フラン！
直後。空中を吹き飛び、すれ違う一瞬の中で、要求通りにフランの胴回り蹴りを受ける事で藍の頭上方向へと進路変更。
即座に鎖の形をした紅い妖気の塊、『チェーンギャング』で藍への牽制と同時にフランを自分が居る藍の直上に回収。
向かってくる紅い鎖を見た藍の行動は反射的な物だ。
上半身の捻りを戻す動きで腕の振りを加速。
更に縦回転の捩（ねじ）りを追加する事で上への動きを作る。
「は、ふっ！」

捩り、加速。
呼気を二度吐くことでリズムを鎖に合わせ、方向を頭上のレミリアに狙いを定める。
放つ。
藍の手から放たれ、虚空を疾(はし)るのは、光弾の密集体だ。
手を離れ、距離を駆ける程に光弾は散じ、生まれる結果は、

「――散弾！？」

幾らかの弾幕は『チェーン』に阻まれ、しかし墜ちない。減衰したが、それでも直線に飛行を続けている。
光弾の向かう先は直線だが規則性がない。その上に高速だ。
故に読めない。読めなければ避ける事もできない。
だが、

「お姉様下がって……」

誰も耳にも届かぬ程小さくきゅっとして、と呟き、一瞬の間を開けてフランが叫ぶ。

「――どかーん！！」

同時。
わずか1メートル前方の“空間”が爆砕した。
空間そのものが砕け散り、同空間上に存在した光弾もまた同様に破砕。
鳴り響く音は硝子(ガラス)が砕けた音に近い。
……今だ。
砕け散る空間が視線を遮り、お互いがお互いを確認する事ができない。

だが、レミリアは確信を持っている。
……やつも今が好機と信ずるはず……！
お互いが確信を持って好機だと言うのならば、それは契約だ。
必ず履行される現実。
フランと入れ替わるように前に出て構えて、極々最近の未来を予測し、勝利するために、レミリアは妖気に形を持たせた。
妖気を固めた紅い魔槍は言葉に力を与えられたかの様に脈動を一つ。

「『――ハートブレイク！』」
「『――知能と脚の境界』」

響く声は同時。
しかし、破砕の余波を貫くのはレミリアの槍だけだ。
視界に映らない何かを探し、レミリアの能力が告げた。
……ヤバい……！！
明確に何かを理解してるのではない。
漠然とした危険をその能力が察知。
レミリアが地上へ、フランが更に上方へ１メートルだけ高速移動。
瞬間。
一瞬前に二人が居た場所に桃色に光を放つ結界が発生した。
その結果、生じる現象は、

「……槍が、切断された！？」
「見れば解る事だろう？」
「！」

レミリアが声の聞こえる先に視線を向ければ、正面。
爪を連想する固定化した妖気を携える藍が居た。
放たれた貫き手の一撃は致命。

しかし、

「――！？」

藍は手に返された生木を無理矢理引き裂いたかの様な感触に眼を見開く。

気がつけば、既に眼前に広がるのは明るい緑色をした弾幕の壁だ。

藍がレミリアの姿を探し、周囲を見渡せば、

「な……」

「――カゴメカゴメ」

緑色の弾幕が壁を成し、天井を成し、部屋を作り上げていた。

周囲を確認する藍に対し、フランは勝利の喜色を露わにする。

「――捕まえた♪」

「駄目よフラン。外からきっちり確実に弱らせて消すまで油断しないの」

「……はーい」

レミリアは勝利の前に舌なめずりをしている妹に釘を刺す。

すぐさま弾幕を張る姿を確認し、小さく微笑み、しかし行動を忘れない。

妖気を槍型に固定化し、槍投げのフォームで構え、

「！？」

視界を白い闇が覆った。

●

同じ謁見の間に、二人の男女が相対する。
紅と紫だ。
紫は普段と変わらぬ出で立ち。
対する紅は服装こそ外界に行けばどこでも見られる程度のラフな格好に、不釣り合いな無骨な手甲が自己主張している。
二人に動きは無い。
互いが言葉を探している。
顔に険は無く、無に近い表情だ。
幾ばくかの時間が経過し、口を開いたのは紫だ。

「一応、聞いておくわ」

視線は鋭利な刃物を連想させる程に鋭い。
紅は思う。
恐い、と。
八雲紫とは、世界でも五指に入る大妖怪。その域に届く存在と相対したのは、理性を損失した沙夜のみ。
故に、真に対峙するのは初めての経験だ。

「ここまでの大事にしたのだから、当然覚悟は出来ているわね？」

文面は疑問の様相を呈しているが、口調は断定だ。
彼女が何よりも愛する幻想郷をこれだけ乱したのだ。仕方ないだろう。
しかし、

「覚悟？　何を言うかと思えば、そんな事か」

八雲紫は強大で、とてもじゃないが太刀打ちできる相手ではない。

そんな事は分かりきっている。

「そんな事は５００年前に済ませた。私はただひたすらに臨むだけだ」

紅は、迷わない。
いつだって、そうだった。
ただ一人の最愛のヒトを――。

「――そう」

紅の意思を感じ取った紫は油断も、嘲りもなく決闘に臨む。
それが礼儀であり、そして表明になる。

「なら、死んでも文句は無しよ」
「――当然だ」

意思の確認と同時。
空間を固定。魔術的に異相をわずかにズラした。
これで邪魔は入らない。
そして紅は悟る。
……紫から遊び様な感情が抜け落ちたか。
即ち、圧倒的な戦力でこちらを押し潰しにくるという事。
恐怖も、畏怖もある。
だがそれは怯えではない。
故に、十分だ、と紅は判断する。
……行け。脚よ、前に出ろ。初心を刻む一歩を踏み出せ……！！
駆ける。

「シッ！」

気合いを呼気として排気すると同時に3メートルを踏破。
軸足を蹴り足として前への推進力に変換。
繰り出す一撃は右正拳突き。
十分な初速と加速を得た拳撃はまさしく高速だ。

「様子見なんてしている余裕があるのかしら？」

紫はわずかに身体を反らして回避。
一泊遅れて傘の逆袈裟が来た。
暴威のそれを小さく屈んで潜り、一歩を踏み出すことで懐に入り込む。
踏み込みの動作と連動して拳をアッパー気味に振り上げた。

「どっちがだ……！」

手に返る感触は硬質。
傘の柄だ。

「当然、――貴方よ」

アッパーカットで伸びきった身体に、流れるように膝をぶち込まれた。
肉を打つ鈍い音が体内で反響。

「ぐ！？」

紫は小さく舌打ちし、後ろへ吹き飛んだ姿を追う。
後ろへ跳ぶ事でダメージを軽減した紅は、着地と同時に後ろへ一回転する事で衝撃を放流。

「はっ！！」

気合いと共に突かれる傘を見据え、２５センチ横に動く事でかわす。

顔の横を突き抜ける風を無視。

突きの挙動で動けない紫に中段の横蹴りを見舞う。

しかし、紫は動じない。

胴体部を動かせない程度では揺るがない。

緩やかな動きで傘を持つ手とは逆の手をかざし、

「――四重結界」

紅の蹴撃と接触。

黒板を引っかく様な不快な高音が響いた。

紅は動揺も驚愕もなく目の前を光景を認め、更に打撃を重ねようとし、

「！」

不意に妖気を察知して後方へ跳躍。

紅は空中で先ほど間で自分が居た空間を妖力弾が貫くのを見た。

……いつの間に……？

疑問を覚え、しかし深く思考を巡らせるべきではない。

着地と同時に紫へと水弾をバラまき牽制。

紫が呼応する様に射撃。

水弾をかき消し、接近する妖力弾は６線。二条に別れ、交差点で紅を狙っている。

紅は視界で交差点を確認。判断は一瞬だ。

風を纏う事で一気に加速。射撃と接触する前に空間を通過。

抜ける。
抜ければ既に紫まで5メートルの距離だ。
加速した身体はそのままに氷をナイフ状に形態を固定して投擲。
手首のスナップを利かせた一投は軽い分速い。
空気を切り裂き強引に進むナイフは払い落とされるが、紅が紫を射程圏内に捉えるのには十分な時間を作り出した。

「――結界を展開するには近すぎる懐からならどうだ？」
「その程度……えっ？」
「おおおお……！！」

気合と共に拳を叩きつけた。
纏う風は既に暴風だ。その威力は台風をそのまま受け止めるに等しい。
紫は疑問の声を上げ、とっさの動きで後ろに跳ぶ。
だが拳速がその動きと比べて速すぎた為に衝撃を逃がしきれず、吹き飛ばされた。

「あ、ぐ……！！」

苦悶。
紫の様を見て、紅は策が一つ成った事を悟る。
……肋骨に罅（ひび）でも入ったか……！
あまりにも上手くいきすぎた結果に、口の端がつり上がりそうになるのを意思で押さえ込む必要が出てしまった。
……まだだ、まだ“公表”する段階ではない。
紅は内心で冷徹に状況を判じて紫を追いつめるべく、接近。
だが、

「――仕方ないわね」

「！」

紫が呟くと同時。
周囲を碧が埋め尽くした。
引き起こされた現象は、

「……四重結界の、多重起動……」

いくつもの四重結界が紅を囲う様に蠢き、脱出の牽制すらしている。
恐らく、強行突破を敢行しても堅牢な障害となって時間を稼ぎ、紫からの追撃を受けてしまう。
そんな未来を幻視させる程に自由に動き回る無数の結界の壁だ。

「――その通り。貴方程度にスキマなんて使うまでもないの」

紅は表面上から紫の内心を悟る努力を半ば放棄。
弱らせたのならば違うかもしれないが、今のままでは役者が違いすぎるという考えからだ。

「弾幕結界。この無限に流転する弾雨の渦に飲まれて潰れなさい」

●

赤い寂れた鳥居を構えた社。
月下に映えるのではなく、趣を雰囲気として感じ取らせる。
そんな静謐に包まれた社に女性が一人。
黒く長いストレートヘアを腰まで流す女性は、縁側で月を眺めている。
中年という域に片足と突っ込んだ女性は、何故か袖がついておら

ず、白色の袖を別途腕に括りつけ、肩と腋の部分を露出させており、下は袴ではなくスカートという特徴的なデザインの紅色を基調とした特徴的な巫女装束に身を包んでいる。
抹茶の香りを楽しむ彼女は頭上の月ではなく、彼方の宵闇を見てからため息を一つ。

「やれやれ……放っておこうと思ってたんだけどねぇ」

よっこらせ、という小さなかけ声をタイミングにして一息で立ち上がる。
言葉と違い、その動作に年齢程の淀みはない。
和室の奥へと向かい、箪笥から目的の物を取り出す。
大幣（おおぬさ）だ。
埃（ほこり）を被ったそれは、もう何年も仕舞われていたのだろう。時間の経過を感じさせる。
女性は埃まみれの大幣を一瞬の躊躇いなく掴み取る。
瞬間。
強烈な、しかしどこか清涼感を感じさせる優しい光を発し、次の瞬間には収束。
主の帰還を喜ぶ臣下の様な反応にも思えるそれが過ぎれば、新品同様の大幣がそこにはあった。
彼女は現象に驚愕する事なく静かに微笑み一つ。

「――来な」

続く言葉は一瞬の間をもって効果を顕す。
社の奥から白と黒で構成された球体が尾を引く速度で彼女に接近。
あわや衝突という所で、手を差し伸べる。
ただそれだけで飛来する球体は速度を落とし、女性の周りをゆっくりと旋回する。

「さ、行かないとねぇ」

全ての準備を整えた女性は幻想強を左右する騒ぎを目指す。

面倒であるという感情を醸しだし、しかしそれ以上に視線に込められた力は強い。

「……博麗の巫女としての、最後の仕事に」

●

薄暗がり中。

江戸時代の京の都を連想させる都市がある。

光源は、至る所に釣り下げられた提灯のみ。

空にあるべき星々の輝きはなく、存在するのは闇を想起する天井だ。

有り得ざる空間を人々に混じって舞子などの芸者も道を行く。

だが、ただの一人として人間が居ない。

角を生やす者。四肢が人間より多い者。そもそも人型ではない者など様々な妖怪が行き交っている。

地底界。

忌み嫌われる妖怪たちの楽園だ。

そんな中。

子供程度の身長しか持たず、二本の角を持つ少女が上を見上げている。

「――やっぱり活気が違うね、活気が」

どこか別の場所と対比し寂寥と喜悦を半々に呟いた。

と、不意に少女が振り返る。

そこには人混みしか見えない。

「おーい、待ちなって」
「なんだ勇儀か」

人混みが恐れ慄く様に割れ、勇儀と呼ばれた女性がゆったりと歩いてくる。
上は体操服に、妙な輝きと透明性を兼ね備えるロングスカートで、足には下駄という奇怪な出で立ちだ。
そしてやはり額に一本の立派な赤い角を生やしている女性は、

「何さ、わざわざ迎えに来てみればソレかい？」

勇儀はやれやれ、と肩をすくめる。
だが、その表情に険はない。

「優しい姉貴分にそれは些か酷いと思うよ、萃香」

その台詞に、萃香、と呼ばれた少女は自身の発言を考え、

「あ、ゴメンゴメン。別にそういう意味じゃなかったんだ」

苦笑混じりに謝罪。
受ける勇儀は、手をぷらぷらを振り、

「気にしてないさ、ソレよりも」
「？」
「母さんが呼んでる。萃香も来いってさ」
「ママが？　分かった、すぐに行くよ」

二人は並び歩き、旧都を行く。
途中屋台に足が向かうのは不可抗力だ。
成果の酒と焼き鳥を手に萃香は、
「で、ママが勇儀を呼び出しに使うなんて。一体何があったのさ？」
隣を歩く勇儀の手には、やはり酒。
「さてねぇ……」
「？」
「あたしも知らされてないんだよ」
「へぇ」
会話と楽しみつつ練り歩くこと半刻。
鬼子母神の居城……というには余りに寂しい母屋が一件。
二人の鬼は躊躇い無く風化の激しい戸を開き、潜る。
居間を越え、暖かみのある和室に入れば、
「――遅いぞ、馬鹿娘ども」
不敵な笑みの中に、僅かばかりの苛立ちが見え隠れする母が仁王立ち。
美人が怒ると怖い。だが、その上間違いなく神話レベルの戦力があるのなら最早天限突破。
……ヤバ、死ぬかも。
萃香は表面こそ平静を装えたが、内心では戦々恐々。
勇儀は既に戦意喪失。残るは自分だけ。必死の悪足掻きをし、
「い、いやー久しぶりに鍛錬もない日だったから羽を伸ばしたくて――」

「明日は覚悟しておけ」
「……！！」

終わった。

「まぁ、今は良い。今日呼んだのはコレを見せる為だ」
「？」

顎で示されたのは、一つの陰陽玉。

「それ？」
「……む、すまぬ。少し待て」
「え、あ、はい」

陰陽玉を見て鬼子母神、桔梗は稼働していないと気づき、修正を加える。

「――良し」

と、桔梗が陰陽玉に触れる。
瞬間。
平面映像が虚空に映し出された。
画面は、紅魔館の戦場だ。

「！」
「……これは？」

萃香が驚愕に目を見開き、勇儀が桔梗に問う。
一瞬の間をおいて、桔梗が口を開く。

「これはな、――幻想郷の未来の在り方を左右する一戦だ」

●

緑色の弾幕に囲われた藍は己の窮地を思い知る。
……スキマが使えない！？
壁に囲われようと、異世界に送られようと関係なく絶対的な力の行使を可能にする八雲紫の境界能力。
契約によってその権能を借り受けているはずの自分が能力を使えない。
即ち、藍への能力貸し出しを紫が禁じたか、
……紫様が能力を使えないのか。
如何なる原因であろうとも現状でスキマが使えない事実は変わらない。
紫の救援に向かうにしても、まずはこの死を回避しなければならない。
既に自身のみで脱出するのは不可能に近いが、

「――射命丸」

藍が虚空に話しかける。
返答などあるはずのない独り言に、しかし声は返された。

「はいはい、3秒後に強行突破してください～」
「分かった」

動く。
1。
フランドールの妖気が一瞬膨れ上がる。
2。

緑色の壁を透過、貫通し藍へ迫る。
3。
何かしらの機械音が小さく聞こえると同時。妖気を高め、強引に壁を突破。

「――見えた」

視界を焼かれた二人の吸血鬼を視認。
今は好機。
だから、という様に藍は更に加速を重ねる。
過剰とも言える加速は背後の空間を爆音に曝す。
……急げ……！
目を焼いたと言っても、強烈なフラッシュを喰らっただけだ。
制限時間はせいぜい二秒だが、
……間に合ったか！
空中に身を踊らせるフランドールには届かないが、レミリアだけならば間に合う。
一撃で狩り取ろうと妖気を収縮した直蹴りを放つ。
側頭部を打ち穿つ蹴りだ。
同時。

「あら、危ない」

言葉と共にレミリアが小さくスウェー。
驚愕と共に眼を向ければ、レミリアの眼は、左目が閉じられ、残る一方が開いている。
悟る。フラッシュから逃れた方法を。
予め片目を閉じ、片目で見ていたのなら、

「――左目を犠牲に片目を残したのか！」

藍の叫びにレミリアは答えない。
ただ笑みを口の端に浮かべただけだ。
そのまま流れるように固定化された槍を横薙ぎに振った。

「――喰らいなさい……！」

回避の間に合わない速度とタイミングを有する一撃だ。
藍は軸足で地を蹴りつけ、跳躍。

「く、射命丸、頼む……！」
「幻想郷最速の天狗、清く正しい射命丸ですっ！」

その要請からコンマ1秒と経ずに言葉を残して風が藍をさらう。
藍は衝突の衝撃程度は覚悟していたが、予想以上に柔らかい感触を得た事に疑問を覚え、

「藍さん、人の乳をこねくり回さないで下さい。それとも、――バラされたいの？」
「あ、いや、その……すまん」

一瞬にしてレミリアたちの射程圏外へと退避を完了。
会話こそ馬鹿らしいが、

「速い……！」

レミリアが思わず感嘆を口にする程の速度だ。
だが、引き起こされた暴風が少ない。
それはつまり、

「……風の能力者かな、お姉さま」
「で、しょうね」

吸血鬼の回復力によって焼かれた視界を取り戻したフランが降りつつ判断を仰ぎ、レミリアも賛同。
元々が風を扱い、すばしっこい天狗が風を統べる。

「……厄介、ね」

対応を思考する二人を見て、文は笑みを浮かべ、振り向いた。

「いやー、速いって言われるのは快感です。そう思いませんか？」
「い、いや私は別に……」
「ふむ、もう一度だけ言います。――思いませんか？」
「あー、うん。思う、思うよ」

お手上げ、とばかりに投げやりだったが、その回答に満足したのか、満面の笑みが返された。
直後。
ふ、の音を無駄に重ねた不気味な笑いが聞こえ、

「そう、快感です。当然の結果ですが。なので巻き込まれた新聞記者は自己保身の為に全力で戦いましょう、そうしましょう。――構いませんね？」
「もう……どうにでもしてくれ」
「はい、では前は私が行きますね！」

文のテンションは異常だが、士気は高いという事なので我慢。
あれ、我慢する事が多いかな？　と思わない事もないが、今は戦う事が先決なので考えない事にして前を向く。

「……もう、いいかしら？」

そこには、呆れた顔をしたレミリアが居た。

意識を切り替える。

「ああ」

「よかった。折角の秘奥を見せても反応がなければつまらないものね」

「秘奥……？」

無意識に呟けば、満足気に頷き妖しい笑みを浮かべたレミリアが口を開く。

「――フラン」

「――うん」

二人が手を絡ませ、愛おしげに手を取り合い、口付けを交わす。

……何をするつもりだ……？

ここは今間違いなく戦場だと、藍は認識している。

刀刃煌めくこの場所で、想いのままにお互いを貪り合う。

そんな異様な光景に、藍も、文も行動を忘れていた。

たっぷり一分。

その間ずっと求め合っていた二人が離れ、ようやく視線を向けてきた。

「……まさか、惚（のろ）けるだけなのか？」

問いかけには、失笑の二重奏が返される。

くすくす、と小さく上品な笑いを噛み殺す事に苦心する二人は言

う。

「……ま、解らないのも無理はないわ」
「派手にどうにかなる訳でもないからね」

敵に教える義理はない。
それは当然の事だ。知らせてわざわざ対処される愚を犯すはずがない。
だが、外見的な変化はない。
内面だとしても妖気も何も先ほどまでと何も変わりない。
ならばそれは、
……はったりだ。
虚勢という行為は一貫して一つの目的の為に行われる。
自分の情報を知らぬため。
状況によって細かな点においての差違はあるだろう。
だが、
……今回のこれは、時間稼ぎだ。
故に藍は行動を開始する。
この時間稼ぎが、何らかのトラブルによるものか、それとも射命丸の速度を計っておきたいのか。
待たせては主導権を持っていかれる。
だから、行った。

「射命丸……！」
「お先！」

駆ける藍を置き去りに、文は一瞬にして亜音速に到達。
後の動きは瞬間的なものだ。
直線的な動きで接近と同時。速度を乗せた後ろ回し蹴りを向かって右の吸血鬼――フランにぶち込む。

圧倒的なまでの速度だが、フランはとっさの動きで腕で受け、吹き飛ぶ。
後方へ弾き飛ばされたフランを追う様に小規模の竜巻を突撃させると同時。
自分も後を追った。
直後。

「！」

視界の端から緋色の熱波が迫る。
熱波の根本を見れば、フランが緋色に輝く剣をその手に持っていた。
尋常ならざる熱量に旋律を覚え、更に加速。
前方を飛翔する竜巻に潜り込み、風に牽引される様に上空へと逃げる。
直後に起こるのは蒸発だ。
空間そのものには何の影響を残さず、小型の台風のみを一瞬にして消し去った。

「――レーヴァテイン！！」

殺せていない、とフランは返す動きで剣を頭上に逃げた文へと振り抜く。
しかし、圧倒的なまでの速度差があり、十分な距離があるなら、

「――当たるものではありません！！」

ある程度の余裕を持って炎剣を回避しつつフランへ突貫。
肌に熱を感じるが、ダメージになる様な熱は届かない。
……行ける……！

そう判断した時だ。
横から何かが迫ってきていると風が伝えてくる。

「……？」

殺気はないが、かなりの速度だ。
無視する訳にもいかない。
かなりの有利を捨てる事になるが仕方がないと自分に言いきかせ、振り向く。
と、そこには藍の顔があった。

「うわぁ――――！！」
「ちょっ！？　な、まっ、うわぁ――！？」

妖狐が放談の妖怪大砲に直撃して吹き飛ばされた。
吹き飛ぶ最中。
視界を掠めた光景の中でハートブレイクよりも巨大な紅槍を構えるレミリアが何か言っているのを見た。
嗜虐的な笑顔で紅槍が放たれ、

「――よくできまちた♪」

ぶちぎれた。

●

第三十四話：吸血鬼異変　転機俯瞰の麓（後書き）

吸血鬼異変のプロットが8割。
そのうちの大体3分の一程度しか進んでないのは何故でしょうか。

いや、詳細なプロットを書き上げるのに時間掛けすぎたんですけどね。
しかし、ポメラという心強い仲間ができたおかげで電車内で執筆可能になったマネーに不可能はあんまり無い。

やっぱりほのぼのより戦闘の方が筆の進みが早いです。
しかし、最近小説を読んで思った事が一つ。

情報を小出しにする事で、読者を騙す事こそが筆者に求められている技量なんじゃないかと思ってきた。
というだけですが。

戦闘内の複線をいくつか出してますが、分かるように、或いは勘違いするように書くのって難しいですね、鋭意努力します。

第三十五話：吸血鬼異変　転機俯瞰の中腹

●

紫は弾幕の射角を計算しながら、内心で焦りを感じていた。
……何故……。
同じ言葉が幾度となく思考を巡せ、自分の負傷の原因である状況を思い出す。
紅の放った右拳は鋭く、重いものだった。懐という至近からのそれは自分では回避不可能なもの。
それは事実として理解している。故にこそ防ぐのを放棄し、回避ではなく退避を選択した、はずだった。
……何故、スキマが開かなかったの……？
紅の拳が砕いた肋骨の5番と6番が軋む。
スキマが開かないなど、欠片程も予測していなかった。
今も開こうとして、しかし開かない。
理由は解らない。
……いいえ。
そうではない。龍神という守護神が使った能力の封印を紅が使えるなどと認めたくないだけだ。
原理も、手法も解らない。だが分かる事が一つだけある。
……紅が、少なくとも私の能力を封じる術を持っているという事実。
それだけ理解していれば、構わない。
紫は思考をクリア。
代わりに己に言い聞かせる。
龍神に能力を封じられ、無能と化した己を恥じ、研磨した時間をここで試せる、と。
念じる。行け、と。

「――行きなさい。結界という狭間の煌めきと蒼き弾幕の瀑布！！」

●

蒼い妖力弾が荒れ狂い、しかし理路整然と理詰めで紅を追いつめていく。

紅は既に風を全力で生成、展開している。

全包囲を関知して物質が存在すると伝えるシグナルとなり、死角を殺す。

しかし、

……数が、多すぎる……！！

回避に回避を重ね、転移すら駆使して退避する――否。

それは既に逃走に域にある。

死角があろうと無かろうと関係なく追いつめる圧倒的なまでの弾雨。文字通りの弾幕が迫る。

逃げ場はない。何度目になるかも分からない袋小路だ。

風を把握し、転移すべき空間を探索、――発見。

紫の近辺に空白地帯がある。しかし、これは明らかな罠だと判断できる。

「――ちっ」

悪態の代わりに舌打ちを一つ。

紅はその行為で覚悟を決めた。

……虎穴に入らずんば虎児を得ず、だ！

跳んだ。

転移先は、――紫の背後2メートルの位置。

視界には紫の背中が見えている。

……良し。

内心で頷き、初速を得ようと前傾姿勢で一歩を踏み出した。
瞬間。
薄い桃色の光条が視界を覆う。
わざわざ行ける空間を誘導し、限定する。
その上で獲物が通る瞬間に放たれるそれは、

「――これはっ！」
「――知能と脚の境界……！」

割断の力が奔る。
否。既に奔っている。解っていても避けられない。
音もなく腰から上下に断ち割られた。

●

「幻想郷の将来……？」
「そう、これからの幻想郷の姿を占う一戦なのだよ」

母の声を聞く萃香と勇儀は思う。
どういうことだ、と。
確かに八雲紫がわざわざ戦うのだ。生半可な事態ではないだろう。
だが、それだけ。それだけなのだ。
何よりも、

「……以前。以前あった母さんが天魔と紫と、沙夜という妖狐と共に龍神様と戦ったのは違うのか？」

疑問を提示する勇儀を桔梗は笑みを以て見据え、

「確かにあの一戦も幻想郷を左右するものだった。だが、あれとは

違う。あれが幻想郷の外枠を決定したのに対し、今回は内面だ」
「内面……」
八雲紫が博麗大結界を担っているのは周知の事実であり、真実だ。
その紫が侵略の最先端を行く吸血鬼たちと戦う。
それはつまり、
「――戦乱と、安寧。あるのは対極の欲求……！」
「その通りだ、萃香。八雲紫が手傷を負わず圧倒した上で勝利すれば、幻想郷の平穏は盤石。八雲と敵対する愚を知るだろう。しかし――」
「――敗北は当然、負けずとも苦戦すれば叛意の火種はいつまでも燻る、と？」
勇儀の確認を桔梗は頷く事で肯定する。
そんな母の反応を、そうなのだろうな、と彼女は予想していた。
今は多少違うのかもしれない。
だが、紅が危険な因子を保有している事実は変わらない。
その因子が発露した結果の一つなのだと判断できてしまう。
八雲紅。
今、幻想郷の均衡を不用意に乱す半人半妖。
陰陽玉の映し出す映像を見て、萃香を目端で捉える。
……萃香。これでもヤツを友と呼ぶのか――？
萃香の内心を想うと直情な分、心配になってくる。
不意に萃香が叫ぶ。
「――ああ！」
「？　……む」
見れば、八雲紅が砕かれた所だった。

●

紅魔館の床を途轍もない勢いで転がるのは二人の妖怪。
九尾の八雲藍と鴉天狗の射命丸文だ。

「ぐぇ！？」
「ふぎゅ！」

勢いのまま壁に激突し、奇妙な呻き声が肺から漏れた。
数秒ほど激突したままの状態だったのが、ゆっくりと万有引力に引かれ、床で全身を殴打。
しばらくして、ゆっくりの二人の身体が起き上がる。
お互いが至近に居るために、紅い魔力光と粉塵に遮られることなく視認。
次に文は藍の胸ぐらを掴みあげた。

「ぶち殺されたいの……？」

声が震えている。
そこに自分への怒りを感じ取った藍は、

「い、いや、それよりもだな？　ええと……そう、そうだ。あの二人に何か違和感を感じなかったか？」

かなりあからさまな話題転換だが、実際に違和感を覚えていたので文は乗ることにした。

「……ええ、一応は。まるで私だけでなく、そっちの動きも予測していた、もとい出来ていたって感じでしたね」

圧倒的な速度差で接近されて、焦りはおろか緊張の色すら無かったフランを思い出す。
それは、
「まるでそうなるという確信を持っているかの様にも思えましたね……」
文の呟きに藍は、
「やはりな」
「……やはり？」
ああ、と一つ頷き、推測を述べる。
「彼女らの能力は『運命』と『破壊』だ。フンラドールは『破壊』の具現である剣と『運命』を最低でも見ていたと考えられる」
ならば、
「レミリアとフランは能力を共有している可能性がある」
「そんなことが……」
「――可能不可能はここで論議するべき点ではないよ」
「そうね。おっと、そうですね。『運命』は天魔様の『因果』と同等のだと考えますか？」
文は取り乱すことなく、短い時間を効率的に使う事に思考する。
「……いや、私の感覚だと劣化だな。『因果』の様に自分の好きな未来を呼び寄せる事はできないだろう。ある程度以上の可能性を持

つ未来を採択するものだと推測している」

なるほど、と納得の意を示す事で文は続きを促した。

「後は……そうだな。対象を目視している事が条件だと思う」

「うーん、何にしろ確かめない事には始まりませんね」

「そうだな、なら行こうか」

答えもなく、弾丸の様な速度で文が魔力光と粉塵のカーテンを飛び出した。

入れ替わるように紅い槍が幾重にも投げ込まれる。

「痺れを切らしたか。まぁ、丁度いい」

藍も文と同じように一直線にレミリア達が居る方向へと飛翔。

一瞬にして最高速だ。

歪んだ視界が、正しく戻る。

居た。

左右に並ぶ吸血鬼と、その背後に回った文だ。

数秒と経過していないはずなのに、容易くそれを叶える文の速度に舌を巻く。

……やはり速い。常軌を逸しているとしか思えんが、心強い。

口元に笑みを浮かべ、藍は無数とも思えるクナイをばら撒く。

無作為に投げ放たれたクナイは、軌道の予測を許さない。しかし、それだけでは問題にならない。数が多くとも初戦は一方向からの弾幕に過ぎないからだ。

だからレミリアは後退しようとして、

「そんなものでどうするつもり？」

「こーするんですよ！」

文の声で気付く。
周囲３６０度全方位から蒼く染められた風が圧倒的な物量で押し寄せている。
視線を走らせ、しかしレミリアは動じない。不敵に微笑むだけだ。
「……もう一度言ってあげる。この程度でどうするつもりかしら？」
「――レーヴァテイン！」

呼応する様に動きが来た。
フランドールが腕をほぼ一回転に振るう。
破壊の剣が生んだのは、周囲空間の破砕。上下を除く全ての弾幕を巻き込んで空間が砕けた。
破砕の音は水の飛沫音に近い。
怒涛の飛沫が剣に散らされ、僅かに差し込む月明かりを反射する。
神秘的な空間を上下から割って迫る撃ち洩らしの弾幕は、

「この程度じゃ眼くらましにもならないわよ」

翼を大きく羽ばたかせる事で前方に回避。
だが、そこには既に藍が攻撃態勢を整えた上で陣取っている。

「！」

藍は腰を入れた貫手を放っている。
先程のレミリアの行為は回避にはなっているが、頭が前に出て、身体が後ろに流れてしまう。
故に次の攻撃動作に入るまで、
……一拍の有利がある！
飛翔行為で前に向かうレミリアに狙いを絞る。後ろを追従するフ

ランドールは文がどうにかするだろう。

「仕方ないわね……！」

見れば、レミリアは流れた腕の先。掌だけをこちらに向けている。
本当に破壊の力を行使出来るのであれば、
……まずい、か……？
正反対に急制動を掛け、貫手に込めた妖気を妖力弾へと変換。
自分の身体を無理矢理後ろに戻した。
その場に残された妖力弾は弾幕として拡散し、視界を遮る煙幕が完成する。

「――壊れなさい！！」

引き起こされた現象は、まさしく破壊だ。
空間が破砕し、ガラスの砕ける様な快音が響く。

「！」

……使えるのか……。
内心で驚愕する藍は、わずかに眼を見開いていた。
直後。
直ぐ後ろを黒い風が左から右に通り抜けた。

「呆けている暇がありますか！」

文だ。
彼女の叱責は藍に現実を認識させるのに十分なものだった。

「ち……！」

「逃がさない！」

追い縋るのはフランだ。

フランは前方への回避行動で後ろへ流れた腕を、反動を利用して最終的な速度を倍加して振り抜く。

だが、それよりも速く、文の霞む様な速度で回り込んで放たれた蹴りがフランの側頭部を打ちつけた。

「ぐ！」

衝撃で身体が揺らぎ、破壊の剣は軌道を上に流された。

……好機……！

藍はレーヴァテインの下を潜り抜けて体勢を崩したフランへと接近。

そこで気付く。

フランドールの表情に険はない。それが意味するのは危機が迫っていないという確信だ。

藍の攻撃は食らっても問題ない程度のものではない。ならば、自分を狙う敵である藍を打ち落とす何かがあるはず。

周囲を探れば、自分を狙う妖気が迫っている。妖気が迫っていて、レミリアの攻撃ならば、

……投げ槍か！

速度を求めて前傾になる姿勢を強引に引き戻す。

瞬間。

先ほどまで顔があった空間を赤い槍が突き抜けていく。

戦慄が、そして天啓が藍の中を駆け巡った。

可能性の分岐までだとしても、先見されたのでは倒すのは不可能に近い。しかし、

……完璧なんてモノは存在しない。甘いぞ吸血鬼。貴様の弱点、見切った！！

●

「――文！」

策士の九尾の叫びを受けて文は行動を変更。
完全なヒット&ａｍｐ；アウェイから速度で翻弄した上で吹き飛ばす足止めが役目だと文は認識する。

「ここが勝負ドコロ、『――人間禁制の道！』」
「風程度で――！？」

それまでの貧弱な風とは違う全てを踏み躙る様な圧を伴った暴風が叩き付けられる。
例え吸血鬼であろうとも押し退ける程の暴威だ。
場が場なので飛来物こそないが、十分な威力を発揮する。

「く――！」
「きゃ――♪」

レミリアは屈辱的に、フランはどこか楽しげに姉に縋り付いて壁まで吹き飛ばされた。
壁に叩きつけられ、僅かに呻くもダメージは無いと文は判断する。
……若いっていいわね、楽しそうで……いや。

「――私もまだまだ若いわ」

たかだか１０００歳程度で先達気取りなど、幻想郷では命取りだ。
実に素晴らしい。
若輩らしく、常識のじの字も知らない幼児に暴力で教育を施すべ

きだろう。

「という訳で追い討ちしましょうか。『――天狗道の開風！』」
「何がという訳なのよっ！」

無視。
団扇を横に一閃。手元から旋風（つむじかぜ）を射出する。
生まれるのは豪風による圧殺だ。
淡く蒼に染められた旋風は一直線に身動きを風に阻害されている吸血鬼姉妹へと向かう。

「やれやれ……。やるわよ、フラン」
「ええ、お姉様」

文は遠方で馬鹿をする二人を視界に捉えていた。
蒼い風を無視する様にお互いを深く抱きしめ合う吸血鬼を。
直後。
妖気が膨れ上がり、赤いオーラを纏った。

「！」
「『――ツイン・ドラキュラクレイドル！！』」

一瞬にして蓄えられた妖気が爆発した。
響く声は二重奏。
弾丸と化した二人の撒き散らす破壊の爪痕の範囲は広い。
直線上にこそ藍は居ないが、
……余波に巻き込まれてしまう。
故に、文は動いた。

「『――天狗報即日限！』」

周囲の風の動きを味方につけ、自身の移動速度を大きく上げる。
亜音速で錐揉み回転しながら突撃する二人の吸血鬼の下へと移動。
まともに受けては吹き飛ばされる攻撃だ。

「あああ！　『――天孫降臨の道しるべ！！』」

ならば、横から力を加えて方向を無理矢理変えてやればいい。
あ、から始まる気合と共に自分自身を巨大な竜巻で包み込み、上昇する暴風を発生させる。
直後。
上空を通過する吸血鬼を斬り刻みながら天井へと押し退けた。
激突。

「――！」

掘削機が岩を削る様な音の中に聞こえた声は誰のものだったか。
莫大な妖気を注ぎ込んだ大技を放ち、脱力感に襲われて座り込む文には判断が付かない。
しかし、一つだけは確かな事実が存在する。

「……仕事はきっちりこなしましたよ、八雲藍さん？」
「――十分だ。もう休んでいて構わない。後は私が終わらせる」

天井を穿ち、数秒。
二人は重力に身を任せるように落下した。
しかし地に激突する直前に姿勢を整え、静かに着地。

「『――多重四重結界』」

藍が言うと同時。
藍を含めた空間を囲う様に12の四重結界を展開。
月の光を館の外で集め、やはり四重結界を用いて窓から照射。月光を展開された四重結界に分散させ、レミリアとフランを全方位から照らす。

「……何のつもり？」

集められた月光の光量に目を細め、フランを背に庇いつつレミリアが問う。
その訝しげな視線を送る気持ちを文は理解する。
……吸血鬼にとって月光はこの上ない栄養。それを何故態々与えるのか、ですかね。
もし詳細を聞いていなければ、文も同様の疑問を覚えていただろう。
そして、これで終わりだという想いも同時に抱いていた。
藍はレミリアの疑問に答えるのではなく、

「――投降しろ。そうすれば命に支障が出るような目には合わない」
「……馬鹿にしているのかしら？　それとも、知識という物を蔑ろにする愚者だったのかしらね。――死になさい！」
「そうか」

月光で消耗した体力を若干回復させられたレミリアとフランが飛び掛る。
瞬間。
四重結界が、僅かに角度を変えた。

「――視界なくば運命は読めまい？」

それまで眩しい程度だった照射が、熱量を保有するほどに輝きを増したのだ。
文は見た。
レミリアとフランが照射が強烈になる直前に、眼を“瞑った”のを。
そして、藍は懐から一枚の符を手にするのを。

「一瞬でも見えたなら十分なのよ！　『――スピア・ザ・グングニル！！』」
「楽しかったから念入りに壊して上げる！　『――禁じられた遊び！！』」

藍の眼前へと踏み込んだ二人は目を開き、終焉を確信する。
藍もまた、勝利を確信する。
……光に焼かれても、焼かれずとも。眼を瞑ったのなら次に見開いた瞬間はまだ見えまい。

「――開け！　この場と星の裏を照らす太陽の直下とを紡ぐ境界よ！！」

符に予め封じ込められていた境界が開く。
無数の眼が蠢く異界すら無く、ただの扉の如く空間が裂けた。

「――フラン！」
「え？　きゃっ！？」

レミリアは渾身の蹴りをフランへ見舞う。
陽光の届かぬ位置へと吹き飛ばす為に。

「恨むなら吸血鬼に生まれたその身を呪え」

藍の呟きと同時。
吸血鬼を灰になるまで焼き尽くす光がレミリアを貫いた。

「――――――！！」

●

「……！！」

叫びを上げる暇も無く二つに分かれた物体が地を転がる。
二転三転して、ようやく止まったソレ。
死んではいない。ただし、死んでないというだけの物体だ。
最低限の治療をしなくてはならない。
しかし、

「……」

勝利を成したはずの紫にあるのは警戒の二文字だ。
５００年という長きを経てようやく実を結ぶ程の計画が、これで終わるなど呆気なさすぎる、と。
わずかな間をあけて紫は溜め息と共に、緊張を緩めた。

「……考えすぎね」

上半身と下半身に斬り分けられては致命傷だ。
そうではない妖怪は居るかもしれないが、少なくとも紅は違う。
しかし念のために四肢を裁断してから最低限の治療を行おう。
決めてからの行動は即座。
死に掛けの紅の手足を踏みつぶそうと脚を持ち上げ、叩き降ろす。

半ば無意識的に視線を周囲に巡らせれば、

「藍たちは上手くやってるのかしら……」

「――知る必要もあるまい……！」

「――！？」

直後。

銀の煌めきが来た。

日本刀。

紅が逆手に握り、振り上げるそれには強大な破魔の気が込められている。

「く――！！」

自分は紛れもなく妖怪だ。喰らう事はできない。

とっさの動きで傘を水平に構え、刀を受けた。

快い金属音が火花と共に飛び散る。

なかなかに重い一撃だ。

だが、圧倒的な妖力で腕力と傘の強度を強化すれば、押し退けられるのは紅だと判断し、

「ふっ！」

多重に強化。

結果。

一瞬の均衡が発生し、直後に新たな動きが生まれた。

それは、

「――傘が、断たれ……！？」

違う。
断たれたのではない。
崩壊したのだ。
それも、
……妖気の過剰含有による存在率の膨張崩壊！
らしくないミスに内心で舌打ちして、逆袈裟気味に迫る刃に対応する。
傘との接触で稼げた時間で半歩下がり、行動の自由度を確保。
日本刀の側面に手を当て、ベクトルに修正を加える。
紅の応答的な反応への応対を追加してさらに修正。
人外の中でも群を抜いて驚異的な演算能力を用いて生みだされたのは、

「これは、――合気だと！？」

理合を演算で強引に成したそれは、紫を断ち切るはずだった一撃を服一枚の犠牲で受け流す事を可能とした。

「だけじゃないわよ」

手が離れる瞬間に莫大な妖気を日本刀に流して、崩壊させる。
同時。
紅を、紅の力で吹き飛ばす。
追撃を加えようと妖気を傘に集めようとして舌打ち。代わりに拳に込めた。
しかし、見れば彼は前面を縦に断たれた服をホールド。
着地と同時。
そのまま距離を取るように小さく跳躍し、

「……ふむ、空間を疑似的に固定すれば……っと」

紫は煽情的（せんじょうてき）なランジェリー姿だが、頓着しない。
それよりも些か以上に怪しい上に不可解な行動を取る紅を優先し、足を止めて話しかけた。

「……何をやっているのかしら？」
「見て分からないか？」
「分からないから聞いているのよ。――理解したくないだけかもしれないけど」

ふむ、と一つ頷き、紅は空間固定を終えて、妖気のみを破魔の気で浄化。
作業を終えたのか、こちらを見て、手元を見て、もう一度こちらを見て悠然とした笑みを浮かべ、

「もうお分かりだろう。――商品の確保だ」
「……いいわ、詳しく言ってみなさい」
「では遠慮なく」

と、紅はこの戦場を俯瞰する全ての者が見ている方向へと向いた。

「今日私が確保したのは、――これ、八雲紫の脱ぎたてホヤホヤ衣服だ」

服を見やすい形状で固定された空間を掲げ、

「人間も妖怪も関係ない。欲しいという者は人里の守護者、鬼殺しの八雲紅まで来るといい。法外な値段か、私が欲する何かとなら交換しよう」

紫が反射的に発言しようとするのを手で制止し、続けた。

「しかし、残念ながら彼女を殺したいと考えている訳ではないので、残留妖気等は排除した。研究狙いではなく、温もりという事実のみを求める紳士淑女諸君。いつでも来たまえ」

話終え、ややあってから紫の方を向き、

「これで危険はない。安心するがいい」

「出来る訳ないでしょうが！！」

脱力と共に肩を降ろすが、再び憤怒を瞳に宿らせる。

「全く……ここまで虚仮にされたのは初めてよ。――殺すわ」

「光栄だ。八雲紫の『初めて』を奪ったのは私らしい」

最早紫は反応しない。

思考にあるのはどうやって後悔させるかのみだ。

「しかし、そんな事よりも、――そんな格好で恥ずかしいとは思わないのか？　とんだ痴女が居たものだね」

「――貴方にやられたのよっ！！」

●

「うわ、剥いたと思ったらモザイク掛かったよ！ほら勇儀これこれ」

「……顔だけ残されてると妙にエロいな。うん、すいかは見るな」

「え、あ！　手ぇ邪魔ぁ――！！」

●

紅が動く。
接近を試みては、破壊され、再生。再び損傷を省みない接近。
……なるほど、異常なまでの魔力による超速再生ね。
確かに自分に挑んでくるだけの事はある、と紅対する認識を改める。
殺せず、殺さぬ程度の負傷であれば即座に回復する異常性。

「厄介極まりないわね……」

殺せないという状況ではこれ以上ない武器だ。とはいえ対応は解っている。
ただし、スキマは使えない。
……なら、止めるしかないわよね……めんどくさ。

「ま、今ならなんとかなるでしょう」

呟き、周りからの弾幕結界は補助程度の射出に変更。
紅が若干の驚愕と困惑で足を止めた。

「……どういうつもりだ？」

紫は答えず、ただ微笑む。
一瞬の躊躇が見える。
瞬間。
紫は飛び出した。

「！」

紅の感情は無視。挙動のみに傾注する。

紅の次の行動は、軸足への過重と速度を鑑みれば、予測は上段への蹴りだ。
来た。
躊躇のない横からの蹴撃。
受け流し、自分の力を倍加して返してやろうと手を紅の蹴り足に添え、

「な――」

薄く纏う風に弾かれた。
……このまま受けるは拙(まず)い。
だから、というように紫は深く一歩を踏み出した。
前へ。
足先は十分な速度があって威力が高いが、太ももは支点に近いため、
……大したダメージにならない……！
小さな打撃音が骨を伝わる。更に肩に受ける事で、激突の衝撃も軽減。
結果として紅の懐に入り込んだ。その勢いをそのままに妖気を込めた左拳を放つ。
弧を描く軌道のそれは、正確に紅の顎を狙い打つが、首を捻る事で受け流された。

「まだよ……！」

紫を視界から外した紅は、展開する風で次の打撃を関知していた。
右正拳だ。
紅は衝撃を逃がすために後方へ跳躍。
当たる。
打撃の衝突は、むしろ風が窓を叩きつける音に近い。

「――ぐ、ぬ……！」

吹き飛ばされ、高速に流れる視界を見ながら思う。
理不尽なまでの重い一撃だ、と。
そして見た。
紫の構える右手に桃色の光が集められるのを。

「――今度は手加減無しよ」

次の瞬間、それが来た。

「『――知能と脚の境界！』」

5条から成る輝きは、如何なる防御も許さぬ割断の力の具現だ。
紫は己の生み出した結界という割断の光を美しいと思う。
そして、この美しい程に断つという一点のみを極めた一撃の死を紅が回避したのなら、
……脅威であると認めるわ。

「――見せてみなさい。貴方が八雲を名乗れる力を持つと。私が失うには惜しいと思える力を！」

そうすれば、殺さぬ行為の大義名分になる。
ゆえに紫は思う。
……頑張りなさい。
紅は応える様に右腕を中空に突き出した。
悠然な笑みを浮かべる彼は、

「――シヴァ！　砕け！！」

言葉は力の発露となり、手甲『シヴァ』が光を放つ。
それは、

「結界が――」

割れる。
ガラスを無理矢理砕いたような音が響く。

「――終わりだ……！」
「！？」

背後。
高速で虚空を翔る紅が居た。
周囲に散らばる残留魔力に紅の行動を悟る。

「……砕きの力に紛れての転移！」

致命の貫手が放たれた。
紫は即座に身体を捻り、

「その程度で……！！」

振り向き、全身の妖気を漲らせる。
次の瞬間。
再び鳴り響いたガラスの砕ける様な破砕音は怒濤の連続だ。
同時。
紫は横からの爆圧に吹き飛ばされた。

「くっ――！？」

見れば、紅も同じ様に弾かれ、更には周囲の空間全てが砕け、崩落している。
異相空間が破壊されたのだ。
紅の狙った一撃ではない。
……なら、誰が……！？

●

「――――――――――！！」

慟哭とも、雄叫びともとれる絶叫が紅魔館に居る全ての存在の耳を打つ。
声の主は緋色の剣を振り回し、破壊をもたらす吸血鬼。
フランドール。
破壊と破滅に呪われた運命の歯車は、５００年の時を越えて回りだす。

第三十五話：吸血鬼異変　転機俯瞰の中腹（後書き）

一応書き上げたのに、微妙に納得できないような、手出しの仕方が分からないような＾＾；

なんだかんだでまだまだ続きます。
と言っても大体あと2話くらいで戦闘も終わりますが。

手甲ですが、一応名称の元はシヴァ神です。破壊神として有名ですね。
ただシヴァ神は破壊神としてだけでなく、その他様々な名称を持つ神様なんですねー。

では、次回『吸血鬼異変　転機俯瞰の山頂』で、お会いしましょう。

第三十六話：吸血鬼異変　転機俯瞰の山頂

●

蝋燭の小さな炎が連なる廊下。
窓から差し込む月光が、本来であれば闇に近い場所を照らす。
薄暗い不気味な空間だ。
そこを、一人の女性が迷う事なく走る。赤い髪が鮮やかに風に靡き、僅かに見える紅い装飾品を引き立てる。
女性は非常事態という言葉を脳裏に浮かべ、

「こんな時にわざわざ呼びつけるなんて……」

一体何を考えているのか、という言葉は口に出さずに悪態を吐くのは紅美鈴。
チャイナドレスに身を包む女性だ。妖艶というよりは健康的なのは彼女の性質だろう。
彼女は内心で疑問を思う。
紅魔館内部で大規模な戦闘が行われている時だからこそ、外部からの侵入者に対する警戒を強めるべきではないのか。

「本当に何を考えてるんですか、パチュリー様は……！」

数分程度走り、辿り着いたのは荘厳な両開きの扉。
紅魔館が所有するヴワル魔法図書館の一階入り口だ。
一息に開け放つ。

「――」

途端に視界を埋め尽くすのは無数の本棚だ。
何度か見ても慣れる物ではない。
威圧感する感じる本棚は、現在警戒態勢なので幻惑作用を併せ持つ迷宮と化している。正しいルートを記憶していなければ図書館の主の元へ辿り着くことを許さない大迷宮。
美鈴は記憶の中にある、正規の道筋をなぞる。

「……こっちだ」

数分も走らず中央に到着する。
据え置かれた円形テーブルに三つだけ置かれた椅子に座るのは紫色の衣服に身を包む少女が一人。
テーブルの上には巨大な水晶球が置かれ、謁見の間を映し出している。

「遅いわよ」
「……無茶、言わないで下さいよ。パチュリー様」

パチュリー、と呼ばれた少女は美鈴に目を向けることなく、テーブルに置かれた本のページを捲る。
既に数えるのも億劫になるほどの書籍が積み上げられてるのも見慣れたものだ。
本から目を離さないのが常なので、美鈴は気にせず続ける。

「それで、わざわざこんな時に呼び出すなんて、私に何の御用ですか？」
「もうすぐ敵戦力が紅魔館に到着するはずよ」
「……は？　増援ですか？」
「似たようなモノね。けれど、決して妖怪の味方ではないわ」

「？」
「これだけは覚えておきなさい。彼女は『博麗の巫女』という幻想郷の天秤よ」
座りなさい、とパチュリーは顎で向かいの椅子を示す。
「あ、失礼します」
「続けるわよ。天秤と言ったのは、幻想郷のパワーバランスを保つ役割を持つ事を言ったの。見なさい」
言われ、水晶を見る。
映されているのは八雲の勢力と紅魔館の勢力の決戦だ。
パチュリーは八雲紫を細い指で指し、
「八雲紫。彼女が人里の守護者であるのは覚えてるわね？」
「は、はい。人里の後ろ盾で、実質的な幻想郷の支配者ですよね」
「そ。私達紅魔館の勢力は勿論妖怪側。妖怪側の戦力が増えたという事は天秤が妖怪側に傾くという事よ」
意味は分かる？　とわずかに首を傾げる事で質問してきたパチュリーに若干萌えを感じつつ、美鈴は情報を整理する。
博麗の巫女というバランサーがこれからやってくる。
自分達が来る前は保たれていたバランスが妖怪側に傾いている。
元に戻さないといけないという現状。
「……あー……えっと、人間側の戦力増強？」
「一応正解ね。はじめは妖怪側の戦力の私達を圧倒する事で、居ても居なくて同じっていう結果にしたかったみたいだけど」
「けど、紅さんが居たことで不可能になりましたね」
「ええ。境界能力なんて反則を紅が封じているお陰で同等戦力にな

っているわ」

それは紅魔館の存在を幻想郷に知らしめる結果を齎した。

しかし、

「そこに問題があるのだけどね」

「え？」

「八雲紫という絶対者は、能力ありき。それはまだいいのよ。能力封印なんて彼以外にできる訳ないもの。それよりも問題は博麗の巫女。彼女はあらゆる干渉から『浮く』事ができる。紅はそう言い切ったわ」

「……浮く、ですか？」

「私も詳しく聞いた訳じゃないけど、所謂無敵化ってヤツよ。こっちの攻撃はすり抜けて向こうの攻撃は当たるらしいわ」

「反則っていうか、ええー……」

パチュリーは疲れた様子の火精を帰す。

そして新たに呼び出した火精がパチパチと音を鳴らし、光が揺らめく。

本を捲る音だけがヤケに響く。

「曲りなりでも八雲という勢力と戦える紅魔館が、博麗の巫女一人に負けたら？」

「――」

「そういう事よ。八雲紫の最終的な狙いはソレでしょうね」

「博麗の巫女の神格化……！」

「流石に紅が能力を封じることができるとは知らなかったんだろうだけど、今の状況なら狙いをそう変更してるかもね」

パチュリーは言い終えると今日はじめて美鈴の眼を見る。

美鈴は、その瞳に真摯な色を感じて背筋を伸ばす。

「美鈴」

「はい」

レミリア・スカーレットとフランドール・スカーレットの友人、魔法に愛された少女、パチュリー・ノーレッジが要請する。

受けるのは、紅魔館の主、紅い姉妹悪魔に仕える妖怪、紅美鈴。

「紅魔館が今後、強者という立場を明確に為にするべき事は分かるわね？」

「お嬢様たちと紅さんが八雲紫勢力を撃破するまでの時間稼ぎ、ですね」

「理想はね。八雲の勢力を打ち倒せなくても、追い詰めたという実績があれば十分。そこはあちらに任せて、私達は1秒でも長く博麗の巫女を足止めするわ。協力なさい」

「――はい！」

●

雲海が実に鮮やかに波打っている。

しかし、その素晴らしい景色を見るものはいない。

山頂に居るはずの天魔は、今、玄武の沢で一つの映像を眺めている。

陰陽球の映し出す映像だ。

回りを直径1キロ程度に渡って天狗や河童、様々な妖怪や神々が同じ映像を眺めていた。

紅魔館の決戦。

ふと、天魔の横に一人の鴉天狗が現れる。

「天魔様」
「……なんじゃ」
「博麗の巫女が、まもなく紅魔館に到着する模様です」
報告を受け、天魔と呼ばれた老齢の、しかし筋骨隆々たる男性は動かない。
ただ、そうか、と呟くだけだ。
「……どうか、なさったのですか？」
「紅が居る」
天魔は視線を映像から外さずに、言う。
「能力の封印など、誰が想像した？　あやつは既に脅威。否定できるモンはおるまい。博麗の巫女に対する何かすら持ち合わせてても可笑しくないのぉ」
「……」
「下がって良いぞ」
「はっ」
天魔は紅の狙いが明確ではない点に不安を抱いていた。
かつてであれば、復讐と断定したが、
……濁りが無い。確固たる信念を持つ者の眼をしておる。
故に推測が難しい。
ふと、風が吹き、雲が流される。
「全く……。何を思って八雲を背負い、八雲と戦うんじゃ、阿呆め」
●

月下を飛翔する紅白の女が居る。
博麗の巫女だ。
幾らかの悪戯妖精を問答無用で叩きのめし、向かう先は悪魔の館――紅魔館。
魔法の森上空を通り抜け、霧の湖の北側に位置する陸続きの小島に立っている。
速度を緩めず上空から洋館を眺め、彼女の眼は魔術的文様を捉えた。
円と六芒星、五芒星を基本とした複合魔方陣。

「西洋魔術かい、面倒だねぇ」

普段から館を覆っていたであろう結界は砕かれ、その内側に秘匿されていた魔術防壁。
術式の方向性はまるで違うが、
……強行突破しての奇襲は無理くらいねぇ。
博麗はそう判断し、正面からのルートを選択する。
改めて見れば、唯一の進入ルートである黒い艶のある格子門は施錠されている。南蛮錠の巨大な鍵だ。
1秒考え、彼女は精神を集中。

「よっ」

という短い掛け声と共に姿が掻き消える。
直後。
格子を挟んだ向かい側。紅魔館の敷地内に姿を現した。

「ふぅ。ババァにゃ響くねぇ、亜空穴は」

館に何の損害も与えずに、博麗は侵入を果たす。

周囲には立派な花を見事に咲かせた庭園がある。
……年取りゃあ誰だって自然ってモンに惹かれるんだねぇ……。
視界に入るそれに小さく笑みを溢しつつ、駆け足に紅魔館の入り口へと向かう。
合った。
鋼鉄製の両開きの扉だ。
その前に立つ。躊躇なく横に引き、しかしビクともしない。
一瞬考え、直ぐに気付く。

「……あ、向こうはそうだったか」

今度は間違いなく扉を押し、――開く。
瞬間。
妖気を混じらせた風が頬を撫ぜ、白髪の混じり始めた髪が流される。
それは、紅魔館で暴れる妖怪たちの戦力を十分に感じさせる物だった。

「怖いモンさね、全く」

ぼやき、　闇夜に映える満月の光が薄く照らす廊下を走り出した。
最低限とすら言えない明度の中を駆ける彼女に恐怖や躊躇いという感情は無い。
妖気を辿り、目標までの最短を駆け抜ける。
1分か2分。何事もなく走り回り、

「！」

突如。
薄暗がりを渡る影のような物が視界を掠めた。

「と、通しませ～ん！」
「妖精、うんにゃ悪魔かい？」
「あ、悪魔ですよどう見てもっ！！」

心外だ、という意思を込めて無い胸を張って言うのは小悪魔だ。
それを見た博麗は即座に重ねた札を構え、

「ははは。――祓えばどっちも一緒だよ。『拡散アミュレット！』」
「ひどっ！？」
「ほれ逃げな！　『封魔針！』」

……ほれほれ、とっとと“吸血鬼の”ご主人サマんとこ戻りな。
逃げ惑う下位悪魔を追い立て、博麗は異変の首謀者を狙う。

●

小悪魔を分厚い弾幕が追い、更に狙ったように物陰との間に魔を封じる針が打ち込まれる。
わずかな輪郭までしか見えない所に正確な一撃が撃ち込まれる。
上手い。
弾幕が逃げを強制しつつ、針が隠れる事を許さない。
圧倒的な戦力を持つ存在が下位の獲物を嬲るのは、余裕がある時か、何らかの思惑がある時だ。小悪魔もこれが明らかな誘導だと理解しつつ、

「うひぃぃぃっ！？」

余裕など欠片もなく本気で逃げ惑う。
レミリアたちの居る謁見の間はもちろん、図書館に逃げ込む事も

簡単にしてはいけない小悪魔は廊下を無様に駆けずり回る。
その間に地の利を上手く利用して、若干でも間に距離を作らなくてはならない。

「逃がしゃしないよ――！」

曲がりなりにも紅魔館に住んでいる身だ。最低でも図書館周りの構造くらいは把握している。そう易々と捕まるものか。
幾度と無く迂回に迂回を重ねて走り、視界の先は９０度のコーナー。
スピードを殺す訳には行かない。
しかし、少しでも緩めれば捕まる。だから小悪魔は全速力のまま走る。
アウト・イン・アウトの要領で緩い弧を描き、曲がろうとするが、スピードに乗りすぎている。このままでは壁に激突してジ・エンドだ。
だから、というように翼を羽ばたかせた。
その動きは後ろの空気を押し込み、莫大な推進力を生む。
緩やかだった弧の最後が、角となり、曲がる。

「ここだ――！！」

難所を抜けたと同時。
巨大な円形の弾幕と無数のクナイを後方へとばら撒く。
狙うのは博麗ではない。弾幕そのものだ。
進行方向を変えるという不安定な場所で被弾すれば、
……針は無理でも、アミュレットの壁くらいは破壊出来るはず――！

「いやいや、可愛らしいお嬢ちゃんだねぇ。そりゃあ無理ってもん

さ」
「は――？」
圧倒的どころか絶望的な戦力差は思考する暇を作らせないということか。
拡散アミュレットは、小悪魔渾身の弾幕を諸共飲み込んでしまった。
いや、多少は削れている部分がないとはいわないが、
「ちょっと欠けただけ……？」
「ははは、積み重ねた叡智ってモンさね。――で？　次はどうするんだい？」
「そんなぁ――――！？」
反撃の意思すら摘み取る状況は小悪魔の精神を着実に削る。
……いやぁ――！　何これ怖いよパチュリー様もう無理です――――！！
逃げ方が変わった。
●
先ほどまでの一貫性の無い逃げ惑い方とは明らかに違う。明確な目的地がある逃げ方だ。
……ようやくかい。意外と粘ったねぇ。
追いかける事7分。やっと目的が成就した。
時間が掛かり過ぎた事を内心で嘆息するが、過ぎた事は仕方がない。
「さて、ご対面かね……？」

涙を流し、決死の逃亡を図る小悪魔が飛び込んだのは、絢爛豪華な扉。
続いて飛び込み、
「！」
背にした扉が閉められた。
心の中で舌打ちし、現状を確認する。
本棚が無数に乱立し、空中に吊るされている空間――恐らく図書館の何者かに閉じ込められた。
肌に感じる視線と、見通すことを許さない深い空間が眼前に広がる。
……虎穴に入らずんば虎児を得ずってぇ“ノリ”で誘いに乗ったんだけど……。
そして、
『――よおこそ』
「ここのご主人サマかねぇ？」
反響し、何処から響いてくるのか分からない少女の声。
即答して質問を返す。
気付けば、いつの間にか小悪魔の姿が見えない。完全に撒かれた様だ。
『いいえ。ただの友人よ』
「はン。ただのオトモダチが邪魔するってのかい？」
『あら、不躾な不法侵入者の排除くらい自宅警備員なら職務の内よ』
「ご近所付き合いあるなら家ン中入るくらい日常茶飯事さ」
何よりも警戒するべきなのは、充満している魔力の気配そのもの

だ。
いつ仕掛けられてもおかしくない。

『物騒な風習があったものね。ああ、怖い怖い』
「確かに物騒さね。――アンタ等みたいな他所モンは一度叩いておかなきゃ安心出来ないタチだからねぇ」
『変質を恐れているのね、実に人間らしい。本当に……愚かしい性質だわ』
「ははは。だからこそ人間は強いのさ。とりあえず、――痛い目見てみるかい？」
『一度挫折してみる事ね。思い上がりって物を自覚出来るわよ』

言葉は十分に交わした。
少なくとも人間ではない事は理解できた。博麗の巫女がこの場で動くのには十分な理由だ。
博麗は警戒を強め、飛翔する。
ここは迷宮に近い。いつ、どこに敵が潜んでいるかも定かではない。
しかし、行かねばならない。
この図書館のどこかに潜むオトモダチを見つけ出す為に、本の森へと進んだ。
不意に、それは来た。

「！」

通った空間に、魔方陣が浮かび上がる。
発光と同時に顕れたのは、『ノエキアンデリュージュ』という名称で呼ばれる圧縮された水の掃射だ。
弾速が速く密度も高い水の弾幕は博麗を後ろから強襲。
気配のない完全な奇襲に彼女は咄嗟、という速度で反応し、札を

投げつけた。

「く、『――警醒陣！』」

蒼い結界が瞬時に展開。

水の圧力を防ぎきる。

同時。

眼下の地面にまたも魔方陣が浮かび上がった。

刹那、という時間の中で天井近くまで高水圧の噴水が発生する。

水柱は標的を飲み込もうと猛進し、

「――虎の尾っぽ、踏んじまったのかもねぇ……」

声と共に博麗の姿が掻き消えた。

●

八雲紅。

彼の判断の唯一絶対の基準は沙夜であり、誰よりも強いと信仰する彼女に勝るとも劣らない戦力を用意できる敵――八雲紫との舞踏は、最愛の彼女の居る遠く霞む山の頂に近づいている。そんな実感を得られる。

それは最高の快楽だ。

テンションは最高潮。

だったのだ。

今の彼は冷や水を浴びた様に青ざめている。

「――――――！！」

フランドールの破滅の運命が解き放たれてしまったのだ。それは

つまり、

……レミリアがここまで早く敗れるとは……！！

レミリアの理性をフランに、フランの衝動をレミリアに分配する事で保たれていた綱渡りの様なバランスは、レミリアが不意に意識を失う事で狂った。

解き放たれたフランは衝動のままに『破壊』を振りまくだろう。最悪ここで討たれる事になってしまう。

真っ向から打ち倒せるのは紫の様な規格外のみ。

しかし対応可能な紫の能力は封印しており、解放する訳にもいかない。とはいえ、紫は能力がなくとも殺すだけならいくつか手段を持っているとも思っているが。

対応を思案する紅に右方から声が掛けられた。

同じように吹き飛ばされた紫だ。

「紅。私の能力を解放なさい」

フランの危険性を把握しているのだろう。

止めなければ、幻想郷に重大な損失を生みかねない。結界だろうと何だろうと如何なるものも破壊する能力の暴走など赦せるはずがないのだ。

表情こそ見えないが、声に遊びは感じられない。

しかし、

「……断る」

能力封印を成しているのが、紅の意思であると知られてしまうが回答する。

自分の行使した術式の結果であると知られる程度なら問題はない。この決戦を覗き見している連中の大体は既に悟っているはずだ。

条件こそ分からないが、八雲紅は能力を封印する事が出来る、と。

「言っている意味は分かっているわね？」
「……ああ」
「そう。ならあの娘、殺すわ」
「……」

紅の意識は紫との会話に比重を置いていない。
あからさまな視線を向けぬよう注意しつつ、視界の端に横たわるレミリアの身体の位置を記憶する。
紫は答えぬ紅に一度視線をやり、すぐに哄笑するフランへと向かって走り出した。

「藍、文！　紅を抑えておきなさい！」
「はい！」
「ええ、私もっ？」

入れ替わるように二人は紅の前に立った。傷らしい傷は見当たらないが、服の一部が無かったり、疲労の色が濃く窺える。
特に文の疲労はかなりのものらしい。妖怪である文が顎から汗を滴らせる程だ。
紅はそれを眺め、ゆっくりと立ち上がる。
二人を視界に置き、文に意識を多く割いておく。

「紅さん」

声を投げかけたのは藍。
やはり何も言わない紅へ送るのは警告だ。

「何もせず、大人しくしていてください。そうすれば、一度は共闘した仲ですし、融通くらいはします」

「――八雲、藍」

藍に返されたのは、肯定でも否定でもない。ただひたすらに冷たい声だった。

……今の時期ならば、既に居るか……？

「貴様は『式神を使う程度の能力』を持つらしいな」

「そうですが？」

「あの妖猫、なんと言ったかな？　確か……」

「……まさか」

その反応は紅に確信を抱かせるには十分なものだった。

つまり、八雲藍は橙と式神の契約を結んでいる。

口元が釣り上げるのを必死で堪え、あくまで冷静を装った口調で言い放つ。

「――橙（ちぇん）、という名だったか？」

「貴様……！」

「フリーズ（動くな）！」

「！」

思わず掴みかかろうとした藍は、紅の強い語調に身体を硬くする。

既に顔は怒りと混乱に彩られ、逆らえぬ状況で憤慨を露にしている。

「フランが正気を取り戻し、状況が一変するまで動かないでいればそれでいい。そのまま突っ立っていろ」

「……これだけは答えろ」

「ふむ。一つだけなら構わん」

藍の強く握り締めすぎた拳からは血が零れ、怒りが歯軋りを強制する。
だが、
「橙は……いや、紫様の能力を封じているのは、なんだ？」
「……ほう」
その問いに、紅は感嘆の声を上げる。
そして感情のままに行動せず、実に冷静に状況を鑑みた藍を面白いと、そう思った。
「素晴らしい。ここで安否を問わぬとは……」
「……」
藍は、視線こそ紅から外さないが、後悔や不安、疑念などの感情が渦巻いているのだろう。
葛藤する姿はまるで人間の様だ。
「その選択は実に正しい。故に褒美をやろう。能力封印だが、――ただの魔術にすぎん」
「な、に？　あれが……？」
「……能力を任意に封じられる、ね。大スクープ、いえスキャンダルかしら」
「待て」
文の戯れ言をスルーして藍は懸念を問う。
「ならば何故幻想郷を覆う二つの結界が解除されない？」
「後にしろ。貴様の式神なんだが……」

藍は呻き、すぐに緊張で喉を鳴らす。

「いつでも殺せる状況かもしれんな」

「……！！」

「問答は終わりだ。少なくとも今は無事で、貴様次第だと覚えておくがいい」

「――ならまず貴方が死ねばいいわ」

「！」

文を見失わないようにしていたのが功を奏した。

言葉と同時に飛んできたのは顔面への膝蹴りだと認識し、電気を使った反射神経を超える反応で下がる。

膝が額を打ち、硬質な音が額から骨を通して鼓膜を奮わせた。超反応の退避は衝撃を小さく抑えることには成功している。

そして紅は内心で文を賞賛する。

……速い……！

やはり速度では圧倒的に不利だ。

一対一で絶対的な優位を作る擬似時間停止の義眼も幾度と無く肉体を破壊された時に衝撃を受け過ぎたのだろう。不具合が発生して使用不可だ。

この不利を覆す妙手はない。

「ちぃっ」

紅は多くの妖怪と戦ってきた。

その中には自分よりも強大な妖怪も含んでいる。が、自分より速い妖怪は初めてだ。

そんな初めてのタイプと藍をまとめて相手にする状況だけは阻止したが、

……レミリアはまだ生きているが、時間が無い……！

夜は昼と違い、陽光の侵害を阻害する術式を何一つ施していない為に自然治癒も難しい。
だからこそ時間制限があり、猶予がほとんど無いというのに、

「邪魔を……！」
「幾らでも邪魔するわよ！」

疲労特有の倦怠感が身体を蝕んでいるだろうに、文が紅の周りを飛び回る速度は尋常なものではない。
その代償は体力の急激な消耗だと理解しているはずなのに、だ。

「く――！」
「貴方は！　鬼が友と呼ぶ貴方が、人質など――！！」

いつの間にか鴉天狗の証である黒い翼が文の背から生えている。
天狗の翼は妖怪としての本質であり、誇り。
つまりは、全速力。
急所を腕で隠し、縮こまりながら視界を掠める黒を観察し、その上で判断する。
……常軌を逸した速度だ、追いきれる様なものでは……！
風を纏い、流動させる事で多くの衝撃を軽減させているが、手数が多すぎる。
さらに風という防壁自体が削られているのが分かる。別の空気を使おうとしても既に文の支配下であり、補充が出来ない。
紅は動けない。

「天狗は鬼に隷属させられていると思っていたが、存外慕っていたか！」
「黙れ。確かに彼らは腕っ節だけで飲兵衛で馬鹿騒ぎばかりしてる馬鹿だけどね」

最高速で飛び回りつつ団扇で、脚で、風で紅を攻撃し続ける文は激昂を露にする。
妖怪にとって、感情とか力の源だ。今の文は、乏しい攻撃力を補って余りある。
「――誰一人として真正面から向き合わないヤツは居なかった！！」
憤慨の意思を込められた文の風は、紅の操る風諸共その右腕を切り落とす。
激痛が熱となって紅の脳を焼いた。
「がっ――――！！」
「これで終わり！　『――紅葉扇風！！』」
生まれた隙を、文は見逃さない。
高速の渦巻き状の気流が発生し、上昇気流を伴う。
竜巻だ。
その猛烈か暴風は紅を補足。渦に巻き込んだ。
「が、あ……！」
妖気の染み込んだ竜巻は声が鳴く度に赤に染まってゆく。
切り刻まれ、紅が流す血液を巻き込んで血風を形成しているのだ。
一緒に巻かれた妖気の抜けた腕など既に肉片と化している。
竜巻はやがて効力を失い、霧散。
「ぁ……」
長い時間ではない。

しかし、短くない時間を嬲られた紅は、全身に無数の切り傷を付けられている。その全てが浅いものではない。
そしてぐったりとしたままと重力に引かれ、落下する。
天井近くから床に激突し、肉を打つ鈍い音が響くが、動かない。
仰向けに倒れたままだ。

「……」

それを見て、意識を失ったのだと、文は判断する。
戦闘が終わったと周りを見渡せば、赤い部屋に血がこびり付いていない箇所が見えない程に血塗れだ。
竜巻の凄まじさが如実に現れている。

「ふぅ……、あや？」

それを確認して文は一息つけば、視界がグラついた。

「あややや、意外とぎりぎりだったのねぇ。――疲れた」
「待て文！　まだ終わってないぞ！！」

緊張の糸が切れた瞬間。
藍の緊迫した声が掛けられた。

「――電磁投射砲（レールガン）」
「……え？」
「――！」

紅の突き出した手から、赤黒い物体が電磁誘導によって加速し導かれ、超高速で発射。
藍の叫びを掻き消す爆音が響いた。

●

博麗はヴワル魔法図書館の中央。
自称オトモダチの居る場に居た。

「――」

人形の様に感情表現の乏しそうなお嬢さんが驚愕に眼を見開いているのは気分がいい。
ついついクツクツと喉を鳴らすように笑ってしまったのも無理はないだろうと自己弁護。

「いや、悪い悪い。そんな眼で睨まないおくれよ、お嬢さん。そんなに不思議かい？」

歳を取ると少女の外見をしているだけで、からかってしまうのは悪い癖だと分かっていても止められない。

「……亜空穴、ね。言い得て妙だわ」
「へぇ、知ってるのかい？」
「あの状況で避ける事は不可能。予測だけだったけど、確かみたいね」

言葉に流されず、あくまで冷静な精神力は賞賛に値する。
思わず聞き返してしまった失態も見逃さない上にわざわざ口に出して挑発する所も面白い。

「なるほど、これが魔法使いか。いいねぇ異文化交流」

言って、ほとんど不意打ち気味に妖怪バスターを撃ち出す。
発射が早く、弾速も申し分ない。
しかしオトモダチさんは動かず、横から赤い影が割り込んだ。

「『水形太極拳！』」

影が突き出した手を中心に渦状の気の流れが作られ、妖怪バスターが飲み込まれた。

「――は？」
「お返しですっ！」

と、バスターを飲み込んだ渦を打ち返された。
咄嗟に身をかわし、博麗のすぐ後ろで溶けるように消えた。
面白い。そんな感動を言葉にしようとして、

「ははは、いやぁ……」
「――――――！！」

暴虐そのものの様な咆哮が紅魔館を揺るがした。
ただの声。
それだけで、緊迫させられた。
驚愕を漏らしたのは美鈴だ。

「この声、まさか……」

聞いたことのない絶叫だった。
まるで泣いているかのような、怒っているような苦しい感情を感じられた。
少なくとも博麗にはそう思えたのだ。

「……急がないといけないみたいだね。――通しな」
「させるとでも？」
「そうさね、『明珠暗投』」

上を位置取り、地面でバウンドする陰陽玉を発射。独特の軌道を描き、迂闊な行動を牽制する一手だ。
空中を滑空し、魔女との距離を殺す。

「――博麗の巫女、博麗妙（たえ）。押し通る！！」
「ふん。知識と日陰の少女、パチュリー・ノーレッジ。『スティッキー・コンデンスドバブル』」

直径１０センチメートル程度の水球が無数にばら撒かれる。その内のいくつかがバウンドする青い陰陽玉に接触。
その瞬間に生まれたのは、爆発の一語だ。
結果。全ての明珠暗投は爆砕したが、危険を知った。
……触れば爆発。恐らく手動でも可能だろうねぇ。
弾幕は緩やかに動くのみ。無作為にばら撒かれた様に一貫性がなく、回避して突破しきるのは難しく、至近に来れば触れずとも爆発させられるだろう。
が、熟練の巫女なら突破不可能ではない。ただし、

「――紅魔館の門番・華人小娘紅美鈴！　破ァ！」
「ちぃ……！」

美鈴が割り込み、回避行動を阻害してこなければの話だ。
本来であれば美鈴が空中で戦える道理はない。拳法という物は、人間が練り上げた大地の存在を前提としている闘法だからだ。
しかし美鈴は空中で博麗と対等に戦えている。

それは、

「爆発球体は足場代わりって訳かい……！」
「ご名答っ！！」

足腰の力を拳に伝える為に踏みしめているのは、水球だ。
凄まじい気合いと共に崩拳が放たれる。

「甘いさね！」

中段への打撃を大幣で横から打ち払う。
不規則に動く球体を足場にして空中を自由飛翔する自分に追い縋る身体能力と空間把握能力に確信した。
接近戦での勝機は薄いと。故に判断は一瞬。
打ち払った勢いで身体をそのまま水平に回転。全体重を乗せた後ろ回し蹴りを見舞う。

「ぶっ飛びな！！」

打撃音。
美鈴をガードの上から弾き飛ばした。
水平に図書館を飛行し、球体を身体で弾きながらも美鈴は口元に笑みを浮かべていた。
……何を……？
博麗の疑問に応えるように、魔女の声が届いた。

「『――フォトシンセシス』」

緑色の光が、祝福する様にパチュリーの頭上に舞い降りる。
周囲の魔力を凝縮させた場だ。濃度が高まった魔力が発動した魔

法の日木属性を、日の光の様な暖かい緑色として錯覚させている。
緑光の下に居るパチュリーは、あらゆる回復を促進させている。
体力気力、そして霊力も例外ではない。

「今宵は満月。夜の世界に住まう者達の天下なれば、日陰に追いやられた『魔』もまた夜天の祝福を願う。故に受けなさい、日の下を歩く人間よ。――魔法に愛された女の１００年の研鑽を！」

喘息を抑制し、全力での魔法行使を前提とした魔女の魔法が発動する。
それは、一つや二つではない。

「～～、――――、～～、～、～～、――、――」
「なあっ！？」

最早言語として聞き取れない程に高速の呪文詠唱は、文字通りの弾幕を生み出した。
火水木金土。
五つの色が混じる色彩鮮やかな壁だ。
それも一枚の壁ではなく、無限に連なる壁の連続。
あらゆる存在を殺しつくす死の具現を前に、博麗は避けようにも風が博麗を本棚に押し付けて回避を許さない。

「ははは、こりゃあ酷い。亜空穴しても姿を出した瞬間に消し炭ってね」

既に壁は数メートル先だ。
だが、博麗はうろたえない。

「ま、それなら受け止めようか」

あるのは、防ぎきれるという確信。
不敵な笑みを浮かべながら手を地に置き、札に重ねて霊力を注ぎ込む。
札の名は、
「『――八方鬼縛陣！！』」

第三十六話：吸血鬼異変　転機俯瞰の山頂（後書き）

オリジナルスペル『スティッキー・コンデンスドバブル』
小さな水球（泡）をばら撒き、敵を拘束するスティッキーバブルと
巨大な爆発する水球を、防御壁として利用するコンデンスドバブル
の複合スペル。
水属性で、５コス相当。（弾幕ごっとだと色々制約がついて３コス
相当）

新年あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

こんな作品を読んで頂き、感謝の極みです。もしこれからも読んで
頂けるなら幸いです。
良いお年を。

第三十七話：吸血鬼異変　定まる戦場

●

「藍、文！　紅を抑えておきなさい！」

指示を出す。返答は聞いていない。聞く必要がない。

藍は優秀な従者だ。最低限の仕事はこなせる。そうでなくとも鴉天狗が居る。足止め程度なら問題はないからだ。

既に自分の意識は一人に集中している。

フランドール・スカーレット。

自分の『境界を操る程度の能力』と同じく、規格外の能力『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』を保有する吸血鬼。

悉くを灰燼と帰す事を可能にする能力だ。その範囲には、博麗大結界も含まれている。

紅が駒として用意するのも頷ける。

脅威であり、八雲紫が見逃していい存在ではない。全力で対処する事を強制させられる。

「アハハハハハハハハハハ！！」

哄笑。恐怖を振り撒く狂気の権化。

その歪んだ妖気を幻想郷に撒き散らすのを赦さない。幻想郷は全てを受け入れる。しかし、そこに住む者が受け入れるかどうかは別問題だと思い知らせなければならない。

「『――深弾幕結界！　夢幻泡影！！』」

フランが突如として弾幕の結界に囲まれる。そして当然の様に振り回したレーヴァテインで破壊した。対象の強度も密度も量も技巧も研鑽も性質も、関係ない。

破壊。

破壊。

破壊。

一振り一振りが、津波の如き弾幕を切り裂いてゆく。何一つ例外なく、等しく破壊するのみ。故にこそ、

「予測してしかるべき結果に過ぎない……！」

「アハッ」

八雲紫には最大の切り札がある。たった一度しか使えぬ、しかし使えば勝利を約束する最大の一手が。そこで問題になるのは、使用から発動までに掛かる時間だ。

1秒程度とはいえ、切り札を使うにはフランドールの身体機能、反射神経、どれを取っても危険が大きい。合気でどうにか出来るかの賭けをする気もない。

だから、というように紫は胸の谷間から数枚のカードを引き抜き、

「お披露目には随分早いけど、魅せましょう。幻想の結晶を」

指の先で挟んだカードを掲げて詠う。

次代を担う、闘争の在り方を。

「――スペルカード宣言！　無制限！空餌『狂躁高速飛行体！』」

直後。

フランドールの周囲に立方体のレーザーサイトが出現、更に横軸に光弾が飛来する。

そして当然の様に破壊されて消滅。
次の瞬間。サイトが出現した位置目掛けてレーザーが収束する。
しかしフランは視線を向けない。
向ける必要が無い。
視界に入っていないはずのそれを、“予定調和の如く”半身になるだけで回避した。
――運命操作能力。
狂気の吸血鬼は口を歪めた。笑みの形だ。

「アハハハ！　こんなのでどうにかなる訳ないじゃない」
「あら？　何故一度しか飛来して来ないと思ったのかしらね？」
「ハハッアハハハハハ！　無駄ね無駄無駄！　何度来てもぶち壊て終わりだッ！！」

再び収束レーザーと光弾が、狙い済ましたように飛来する。
幾重にも弾幕
紫は十分理解している。こんな刃引きした玩具では倒せない。
しかし、

「――結界『夢と現の呪』、結界『動と静の均衡』、結界『光と闇の網目』、罔両『ストレートとカーブの夢郷』、罔両『八雲紫の神隠し』、罔両『禅寺に棲む妖蝶』、魍魎『二重黒死蝶』、『人間と妖怪の境界』、結界『生と死の境界』、紫奥義『弾幕結界――！』」

無限にも等しい弾雨がフランドールを襲う。
……無駄に物量があれば疲労くらい溜まるでしょう――？
妖怪の賢者は口元をわずかに吊り上げて小さく笑っていた。

ついでだが、紫は『キマイラの翼』を使用し、スキマの中から肩口の開いた洋服と取り出して着用した。流石に紅と対峙している状

況では出来ないし、スペルカードの事を知られたくなかったから使わなかった。が、使用せざるを得ない上に若干の余裕があるなら着替える。

羞恥の感情くらいある。

●

「――！」

妖気を込められた血塊は蒸発という対価を支払う事で周囲に業火と陽炎、衝撃波を撒き散らす弾丸と化す。

絶大の威力を保有する純粋な物理接触は、奇策の介入を許さない。

弾体の激烈な爆音は全ての音を塗り潰して空白を、そして一瞬ですら長いと断じる程の刹那を突破する。

あらゆる音を、空気すらも押し退けて死が奔った。

迅い――と思った時には既に終わっている。

レールガンが文と接触した直後。

固形物すら蒸発しきった血液の蒸気が靄となって周囲を覆い、そして吹き荒れる爆風によって散らされてゆく。

「……」

「文ッ！」

電磁投射砲、レールガン。

電位差のある二本のレールの間に伝導性の弾体を挟み込んで直流の電力を還流させて電気回路を形成する。ただのそれだけの簡単な物理回路に過ぎず、磁場の相互作用で弾体を加速して発射しているだけだ。

しかし、莫大な電力の供給がなければ発生せず、可能とした場合の初速は常軌を逸する。

秒速7キロメートル。
弾体が得る空気摩擦が爆炎を生む程の速度だ。大抵の物質では摩擦で燃え尽きてしまう。故にこそ使い勝手が良いと、紅は思う。
何故なら絶大な破壊力の距離を調節できるのだから。

「ちっ」

靄が霧散して視界がはっきりすれば、其処にあるのは内蔵をぶちまけた残骸ではない。
射命丸文の無事な姿があった。

「流石に仕留めるのは無理か」

紅が嘆息した様に呟く。
とはいえ、そこまで狙っていた訳ではないので問題はない。

「――凄い威力ね。大した妖気を込めた訳でもないのに」
「私の声が届いたか」

藍の安堵を感じさせる溜息交じりの言葉を聞いて文は苦笑を溢した。
届いた言葉は“摩擦”。
防ぐ事も避ける事も許さない超高速の物理打撃に対する策は、過剰摩擦で弾体を燃焼させる事。文が風を扱う能力者であり、能力も反射で使えるからこそ生き延びたのだ。
死を身近に感じすぎて高ぶった神経を落ち着け、口調を新聞記者に戻してから返答する。

「ええ、藍さんの声が聞こえなかったら死んでいたところですよ」
「……木霊法、か？」

紅の反応に意外だという表情を浮かべた文は言った。
「へぇ、天狗にのみ伝わる異能の技能なんですけどね」
「これでも風使いの端くれでね。見聞きして便利だと思った手法は大体モノにしている。参考になったぞ？　――使う機会には恵まれなかったが」
木霊法とは風に声を乗せ、遠隔地まで伝える伝声法の一般呼称。事実、種族の特性として風を読めなければ取得出来る技能ではない。一般に広まらないのも当然だろう。
「しかし、そうか。そういうカラクリか」
「……殺せなかったのが悔しいんですか？」
その言葉を聞いて文は嘲るように嗤った。
切り札が通じなくて悔しいのか、と。
「いや。射命丸文と八雲藍。共に強大な妖怪だ。一対一では勝機は薄いが、1と1を5にも10にも倍増するスカーレット姉妹の連携には及ばないと踏んでいてな」
文と藍の二人を見て納得した様に頷いた。
「ふむ、なるほど。それならば食い下がり、それどころか撃破したのもそれ程可笑しい事ではない。境界能力をまともに使えぬ状態でよくやったものだ」
「……虚勢を張っても無駄です。貴方が満身創痍という事実は変わりませんし、切り札も不発に終ったんですよ。降伏しては？」
「――降伏？」

紅は純粋に感嘆を発しただけだ。
だが文からすれば虚勢に見えている。それはつまり、自身の狙いが発覚していないという事に他ならない。
……勝った。
意図せず口の端が釣り上がるのが分かる。2対1という不利な状況を打破したのだから仕方ないと自分で自分を内心で弁護してしまう程の歓喜だ。

「ははは、気付かないのかね？　今の私に“負傷など無い”と」
「――？」

文と藍は二人ともが紅の身体から滴り落ちる赤い雫へと視線を向けた。
先程までの体中から流れ落ちていた流血が減っているのが確認出来た。
しかし、ある程度の回復は妖怪であるならそこまで不思議な事ではない。

「……いや、何故血溜りが広がらない？」
「え？」

藍の呟きで文の視線が下に行った。
視線を凝らせば、赤い床に薄く道が見える。行き着く先は――、

「……吸血鬼ガッ！？」
「――邪魔よ、退きなさい」

視界の外から言葉と同時に蹴りが飛ぶ。
文の顔面を蹴り飛ばしたのは、永遠に紅き幼き月。

レミリア・スカーレット。
弾かれる様に吹き飛んだ文を見る紅は薄く哂う。
「そう。私は半人半妖だ。ならばその血は吸血鬼の糧になる」
「質は悪かったみたいだけど？」
「それは失敬。何せ、――半妖なのでね」
紅の傷は既に修復されている。
藍と文との戦闘中、そのままにしておいたのはこの時に為だ。
半人半妖という血液は、吸血鬼にとっては十分な食料になる。純粋な人間の血ではないので量こそ必要になるが、それだけだ。
超回復の出力を調整すれば問題なく供給出来る。
「助けて貰ったのは感謝しておくわ。けどこれ以上はフランを優先させて」
「分かっている。早く行ってやれ」
「ええ。……ありがとう」
小さく微笑んだレミリアはこちらに背を向けて飛んでいった。
藍が動けない事は知らないはず文が体力的に脅威でないが、……後ろは私に任せる、か。
労せず信頼に応えられるのは非常に美味しい状況だ。将来の布石にしたいものだ。
その機会を無駄にしない為に意味の異なる不動を強制される二人に向かって言った。
「さて、――まだやるか？」
●

都合２０枚。
紫が使用したスペルカードの枚数だ。
スペルカードは性質上、事前に妖気を消費して作成する必要がある。威力を減じるとはいえ、実践でも使えない事はない。固定された弾幕が生成されるだけだが、その物量を鑑みれば、膠着した場を動かすには十分な武器と明確に分かるだろう。
そしてこれが試作品であり欠点があるという事。それは、
……戦闘の代替品としては、威力がまだまだ高い。
欠点であり、しかしこの場においては確実な利点だ。

「あと少し。あと、少し」

荘厳流麗な弾幕がフランドールを襲い、襲っては破壊されるという無限循環を眺めて呟いた。
フランドールの保有する破壊能力は極めて強力なチカラだ。そこに疑う余地はない。しかし、万能ではないという確信も持てた。
空間破壊が可能なはずなのに、多用しない。明らかにそれをすれば切り抜けられる全方位からの弾幕すらも被弾しながらも剣のみで切り抜けている。
その行為が意味するのは、代償が大きいのか――
……使いたくても使えない状況下に居るのか。

「判断するには、材料が足りないわね」

思案の渦を思考から削除。
今できる事を成す為の思考へシフトする。構築するのは『勝利への方程式』のみ。
紫は服の至る部位に隠されたカードを一枚取り出し、不意に逆の手を横に突き出した。

「『――永夜四重結界』」
「『――スピア・ザ・グングニル』」

紅槍と紫鏡の削り会う硬質な不協和音が鼓膜を打ち鳴らす。
盾を構える紫。
矛を突き立てるレミリア。
紫電を撒き散らす妖気越しに二人の視線が交わった。
脳味噌を突き刺す様な音波など意にも介さない。そして互いを突き刺す視線、敵を射抜く瞳に篭る意思は鋼の如く堅い。

「……！」
「――」

濃密な一瞬の邂逅。
刹那の“会話”が終わる。

「……なるほど」

レミリアは紫を無視してフランドールを救出しに弾幕へと突入していった。
紫もわざわざ手を出さなかった。
幻想郷への危機でもなければ、本当の切り札を使いたいとは思わない。故にここで攻勢に出る事はしない。
当然、弾幕を止める事もしない。ただ維持するだけだ。
自分は手札を伏せたままで済むし、レミリアは最愛の妹を助けられる。
相互に利益のある素晴らしい取引だ。
ただし、殺傷力に劣るとはいえ圧倒的物量を誇る弾幕の嵐と絶対の破壊の剣戟の波を変えてゆければ、だが。しかも、

「スペルカードブレイクまで、――あと１８秒」

それまでに救い出せなければ、諸共消滅してもらうしかない。

●

弾幕が構成する嵐に突貫したレミリアは、その瞳に運命を映す。

前後左右正面背後あらゆる方向への移動を考慮し、その先にある運命を読み解いていく。

一手では足りない。

二手でも足りない。

三手あって漸くだ。

足りないならば、幾らでも重ねていけばいい。吸血鬼の思考速度なら十分に間に合う。

紅のゲロ不味い血液もある。多少の負傷など憂慮する必要もない。

否。

腕の一本。足の一本など捨て置け。

……そんなものよりフランが惜しい――！！

読み解き、組み立て、なぞり、突き進む。

いくらかを受ける事もある。しかし、回避の連鎖は止まらない。

止まらせない。

生まれる結果は、超高速機動の連続回避だ。

回避して回避して回避して回避して回避して。

四方八方から迫る弾雨に身を晒しながら、そして突破してゆく。

レミリアは自覚する。己が体験する現在が、得難い経験という糧になっていると。

初めは幾らかの被弾があった。無駄があるから被弾するのだと己を奮起し、躱す。躱す躱す躱す躱す。より近くで。より近くでより近くでより近くで。

決して長くない、それでいて何よりも濃密なそれは驚愕の境地へ

と、レミリアを高みへと押し上げた。
――透り抜ける。
物理的には有り得ない。しかし、数多の弾幕を躱していった結果。
防御が、体捌きが、荷重移動までも、極限まで無駄が削ぎ落とされ、回避するという概念を超え、透り抜けるという境地に達したのだ。
ここに至れば弾幕など、物の数ではない。
突破する。そこに居たのは、

「――フラン！！」
「あ……！！」

呼び掛けに返されたのは、破壊の一撃。
あ、の音で始まる気合と共に放たれた剣撃は強烈の一語だ。
一泊遅れてフランドールも気付いたのだろう。眼を見開いた。

「おね……ッ！？」

刃は既に振り切られている。
躊躇なく放たれた全力の一撃を止めるには、それ以上のパワーが必要だ。
止めようとして止められるものではない。
あらゆるものを破壊する力が迸り、音が消えた。
薙いだ空間には何もない。
当然だ。自分が破壊のだから。

「あ、ああ……」

フランドールが自分の行為の結果を見て、喘ぐ。
最愛の姉を自らが葬ったのだ、と。

直後。
不意に、温もりが己を包み込んだ。

「――フラン」
「……えっ？」

フランドールを抱き締めるのは、レミリア。
……間に合った。
レミリアがフランドールの元に辿り着いたの確認したからなのか、既に弾幕は止まっている。
そんな事よりも今はやるべき事がある。

「貴女の姉は、この程度で死ぬ程弱いのかしら？」
「――」

腕の中でフランドールが必死に、それでいて弱弱しく首を振る。
か細い。だが、自分が救い上げた結果だ。
満足するべき点であって、悔いるべき事象ではないと断ずる事が出来る。

「……大丈夫。私は、ここに居る」
「うん。……うん」

ほとんど意識も残っていないだろうに、フランは縋り付いてくる。
レミリアも応え、更に強く抱き締めた。
足りないとでも言うように。強く。温もりを逃がさぬように。自分という存在が、確かに此処に存在していると知らしめるように。

「――そろそろ、いいかしら？」
「――駄目」

至福の時間に割り込む紫の無粋な声に即答する。
努めて冷たい声音を出したが、それ以上に底冷えする声が再び割り込んできた。
そして思い出す。ここが戦場であるという事を。

「勘違いしないで欲しいわね。これはお願いじゃなくて命令。足りない頭でよく考えて行動なさい」

八雲紫。妖怪の賢者。幻想郷の守護者。
その妖気が威圧となって襲ってくる。
フランドールはレミリア自身の妖気で囲っている為、気付いていない様だが中々キツイ。

「その消耗した身体で私と戦うか。敗北を認めて戦線離脱するか。選べ」

敗北を認めるつもりはない。
この場に居る全員が疲労している。連戦に次ぐ連戦はお互い様だ。
だが、フランドールは既に戦える身体じゃない。
暴走によってフランドールの消耗は危険域にある。これ以上の戦闘行為は命を消費する事と同義。させる訳にはいかない。
紅の血液があるが、吸血行為は無防備にならざるを得ないし、元々純度が低い血液だ。大量に用意する必要がある。
つまり、血液の為に回復不可という枷を付ける事になる。当然却下だ。
……フランは戦えない。いえ、戦わせない。

「それから一つ。忠告よ。貴女が戦うと言うなら、私はまず妹から消す。……それが嫌なら言いなさい。――許して欲しいと。――勘

弁してくれ、と。貴女の口から告げなさい」

自分が戦えば、フランを無防備にしてしまう。護りながら勝てる様な甘い相手ではない。

始めから、選択肢など無かったのだ。

……仕方が無い。

「私の――」

「終われるはずがないだろう」

レミリアの言葉を遮り、二人の間に身を置いたのは、

「……紅」

「弱みを見せたな、八雲紫」

●

八雲紅。

八雲紫をその他の妖怪対等まで墜としめる鍵。

「弱み、ですって？」

「分からないのか？　この『吸血鬼異変』は、幻想郷のその根幹に関わり過ぎた」

「そうね。見逃せる訳がない」

「然り。これ程深く関わった相手との決着。どちらかが死ぬか、――敗けを認める以外に方法はない。ならば」

紅は言葉を溜めてレミリア達を振り返り、改めて紫を見据えた。

「レミリアの口から敗北を認めて欲しいという願い。それは敵に勝

利を哀願する虚弱に等しい」
「……な、る、ほ、ど。成程成程、成程。は、はは、ははははは！！」

紫は心底可笑しいという様に哂う。
しばらく高らかに哂い、声を抑えても尚、顔を笑みの形に歪ませながら口を開いた。

「そうね、私が愚かだったわ。それで？　貴方はどうしたいの？」
「八雲藍、及び射命丸文は既に戦力にならん。フランドールは言わずもがな。レミリアも八雲藍と同様の形で無力化されている」
「そうみたいね」
「お互いに、これ以上に消耗するのは巧くない。ならば、この場で動ける我々が雌雄を決し、それをこの異変の終焉としたい」

その言葉に対する最初の反応を示したのは、レミリアだ。

「ま、待ちなさい！　これは元々私が――」
「――黙れ」

しかし、それは紅の当初の目的の妨げでしかない。
故に否定は当然の流れだった。

「どんな理由であれ、動けぬ者に選択権などない。そこで見ていろ」
「な……！？」

紅はレミリアを見ない。意識からも除外されている。
既に一つの事のみを追っている。
他に気を取られる心配もなくなったのだから。

「八雲紫。返答は？」
「いいわ、受けてあげる」
「感謝は言わん」
「当然」

八雲紫と八雲紅。
自然と二人は部屋の中央に陣取る様に立ち位置を変える。
ゆっくりと、お互いの動きを見逃さぬ様に、僅かな反応にも対処出来る様に。

「――“鬼殺し”八雲・紅。参る」
「――“神隠しの主犯”八雲・紫。推して参る」

●

パチュリーは高速に流れる思考の中で驚愕を露にする。
あらゆる属性の精霊魔法を潤沢に使っている。一つ一つの威力よりも連射性を重視しているとはいえ、その破壊力は類を見ないと自負している。
……そんな有難い魔法を使い続けても突破出来ないっていうの！？
視線の先に存在する光の柱。図書館の天井まで届き、防御魔方陣が描かれていなければ紅魔館を貫くだろう高密度の霊力の塊がある。
――八方鬼縛陣。
博麗の巫女を護る切り取られた世界が、そこに在った。

「……これが、博麗の力……！」

自然と攻撃は散発的なものへと変化していく。
幾ら撃っても無駄だと理解させられてしまった。あの防御の前に、攻撃は意味を成さない、と。

攻撃も出来ず、パチュリーの周囲で警戒するしかない美鈴には酷な状況だろう。
対応する上司が苦痛に歯を食いしばる情景を見ているしかないのだから。

「パチュリー様……」
「手がないわね。――でも攻撃されないのも事実。あれは戦場を停滞させる。それはこちらにとっても都合がいい」

ただし、この身体が万全であるなら。
慢性的な喘息持ちの身体では長時間のマジックスペル行使は不可能に近い。
今日は調子がいいが、やはり健康体ではないのだ。
これだけ続ければ反動が身体を蝕んでいく。
そして、その時は来た。

「！　ん、グ……！」
「！　パチュリー様！！」

喉の奥からせり上がる何かを無理矢理飲み込む。
発作によって詠唱が途切れてしまう。
……まずっ……。
待っていたのだろう。唐突に、霊力の柱が跡形もなく消え去った。
何の前触れもなく。何の音もなく。消滅したのだ。
そうして姿を現すのは、博麗妙。

「案外保ったねぇ。流石におばさんも疲れてきたさ」
「く、嫌味ですか……！」
「アンタらこそ嫌味かっての。ババアの癖して姿形だけは若々しいったりゃありゃしない。――まぁ、そんな事より危ないよ、そこ」

博麗の言葉と同時。
美鈴の足元に黄金色の結界が発光する。
中心にある符に込められているのは、霊力。

「美鈴！　飛びなさい！！」

肉体に刻まれた反射は危機を察知した瞬間に筋肉を鳴動させた。
地面を蹴り付ければ結界を踏み込む事になる。

「――破ッ！」

故に美鈴は、足を空へと投げ出して身体を水平に倒す様に投げ出す。
数瞬の猶予を生むだけの無意味な行動だが、

「『――スティッキー・コンデンスドバブル！』」

重力に引かれ、結界へと引き寄せられる美鈴を救い上げる水球がある。
パチュリーの詠唱によって、幾つもの小さな水球が地面と美鈴の間に割り込んだ。
これで美鈴の無事は確保できた。

「おや、そんな無防備で。何かあったのかい？」

喜色を孕んだ声音が横から聞こえてきた。
『常置陣』という地雷は囮。
博麗にとって討ち取りにくいのはパチュリーを狙っていたのだ。

「しまっ……！」
「『――陰陽宝玉！』」

博麗の翳した掌に円形の攻撃フィールドが形成され、掌打として打ち付けられる。
自分と美鈴の二人で万全を期して尚、勝機の薄い相手。
このまま喰らってしまえば、それがそのまま決定打となってしまう。
しかし、

「なんてね。『スプリング・ウィンド』」

スプリング・ウィンド。
木属性魔法の基本発展形に過ぎないが、その効力は強烈な風圧で敵に攻撃をいなすと同時に敵を押し返して距離を作り出す。
生粋の魔法使いの戦闘はいつだって遠距離爆撃殲滅型だ。当然、接近してきた敵への対処魔法くらい存在する。
西洋では有名な話だが、東洋では知られていないのだろう。
その結果生まれた魔法の行使は円形フィールドを博麗ごと押し退ける事に成功する。

「ち――！」
「ねえ、そんな無防備で。何かあったのかしら？」
「何を……」

押し戻したパチュリーの視界にははっきりと映っている。
博麗の吹き飛んだ方向で待ち構える頼もしい門番の姿が。

「『地龍――』」
「やばっ……」

七色に輝く気を以って大地を踏み抜く震脚。
十分な時間があった。パチュリーが一身を掛けて稼いだ数瞬が。
おかげで美鈴自身に扱える気の総量と大差ない気を練りに練った上で注ぎ込めた。アフリカゾウだろうと恐竜だろうと粉砕する自信がある。
地中に打ち込む振動と気の反動で博麗が浮い上がらせる。
準備は整った。

「『――天龍脚！！』」

七色の気が目映く燐光する跳び蹴りが博麗を蹴り穿つ。
地中に打ち込む気の反動を利用した跳び蹴りは、空を翔る龍の如く。
虹色の気が牙となって博麗を食い荒らし、ドドメの一撃に爆発と見紛う程に強力無比たる打撃が炸裂する。
衝突事故の様な強烈な打撃音が空気を振るわせた。
しかし、そこで終わらない。
博麗が吹き飛ぶ先は再びパチュリー眼前。

「『エメラルドシティ』」

地中から宝石の壁が一瞬にして生える土属性魔法。
極めて高い速度を持った質量は打撃となる。
それは一人の人間を空高くに打ち上げるのに十分な威力を持っていた。

「お疲れ美鈴。今日の貴女、最高にカッコイイわよ。『――サイレントセレナ！』」

魔方陣が展開。
パチュリーの魔力で碧く染められた月光の矢が無数に発射される。
碧く輝く月光は幻想郷でも尚美しく輝く至高の宝石の如く。
流星の如く天へと翔る。
そして、

「『夢想、天生』」

博麗の周りを漂う七つの陰陽玉が回転し、力場を形成。すべては一瞬。
紅く波打つ円形の霊力の波動は月光を容易く破砕した。
破砕音は飛沫音に近い。
博麗の力を引き立てる様に、周囲に散らばるのは月光の粒子。
そして、そこで光が消えた。
力場は本棚をなぎ倒す。が、博麗は構わず飛翔する。
パチュリーに接近する形だ。

「見せようか。幻想郷の安寧を司る博麗の力を！」

一瞬にして大量の霊力を練り上げ、陰陽玉を形成する。
地上に到達すると同時に博麗は一つの動きを見せた。
パチュリーと美鈴の位置を確認したのだ。
三人が一直線に並んでいる。

「『――陰陽鬼神玉！』」

『陰陽宝玉』の上位互換。巨大な陰陽玉はゆっくりと前進していく。
パチュリーは魔力を一気に消費した為動けない。美鈴も同様だ。
つまり、二人が被弾を避けるには受け止めるしかない。

だが、それをする為の燃料が無いのだ。
……これが博麗の巫女。なるほど、確かに反則だわ。

「美鈴……ごめん」
「――いいえ。私もです」

蒼く輝く博麗の至宝が全てを飲み込んだ。

●

陰陽玉が蹂躙した後の図書館はなんら変わりなく存在していた。
変わったのは、二人の妖怪の姿のみ。
パチュリー・ノーレッジ。
紅・美鈴。
両名の負傷は容易く癒える物ではない。
博麗の秘宝たる陰陽玉を潤沢に使い、陰陽鬼神玉、更には夢想天生すらも使って漸く得た勝利。

「――――勝った、か」

喜びなどなく、むしろ悔いに満ち溢れた声音で呟いたのは博麗妙。
ゆっくりと座り込み、意識を失った倒れる二人に視線を向けた。

「確かに勝利したのはこっちかもしれない。けど、博麗の巫女でなければ。……夢想天生が使えなければ、勝利すら得られなかった」

舐めていたわけではない。
侮っていたわけではない。
後を考えて温存していた。
温存する必要が、あった。

……その結果がコレかい。
美鈴の跳び蹴りを受けた右腕。右腕上腕骨及び尺骨粉砕骨折。
パチュリーの宝石を食らった左脚。左脚緋骨不完全骨折。
その他様々な攻撃やその余波。打撲十数ヵ所。

「……立派にボロボロさね」

出来る限り無傷で吸血鬼の元に辿り着く。
その上で打ち倒すのが“役割”だ。
しかし、阻まれた。阻まれてしまった。
これから必要な符の多くを消費させられた。
そんな状態で更に強大な妖怪と相対しなくてはならない。
気が重くなる重圧だ。しかし、これ以上休んでもいられない。

「勝った気がしないね、全く。――外の妖怪もヤるモンだねぇ」

それでも、博麗の巫女としての役割は果たさねばならない。
その意思だけは違えない。
地に付くだけで激痛を訴える脚を引きずる様にして歩き出した。
全ての原因の喉元を食い千切る為に。

●

第三十七話：吸血鬼異変　定まる戦場（後書き）

大変長らくお待たせいたしました。
待ってねーよとか言われたら泣きます。

難産、という部分もありましたがなんとか書き上げました。
そして吸血鬼異変も残すはあと一話。次でこの異変は終了です。
と、いうかこの異変を伸ばしすぎた感がですね＾＾；

いえ、伸ばそうと思って伸びたわけではないですよ、勿論。

Ｄｒａｇｏｎ　ａｇｅ　がいけないんや

第三十八話：吸血鬼異変　楽園への道程

●

紅は思う。
沙夜を打ち破ったのが八雲・紫であると知ったその日からの日々を。
憎悪に身を委ねた時があった。
研鑽を積み重ねた時もあった。
日常で心を暖めた時もあった。
それは全て、
……今日この日の為に。そして、この瞬間すらも――。

「それが、沙夜への愛と信じるが故」

一歩を踏み出す。
吸血鬼異変の終わりを告げる、最後の戦争の始まりを。
意思は既にただ一つの目的を求めている。

「勝利をこの手に掴む瞬間を！」
「魅せてみなさい、八雲・紅。貴方の全力を――！」

吼える紫の妖気を歯牙にもかけず、５メートルの距離を踏破する。
前に踏み出した右足を軸にして、踏み込んだ。
同時に左肩をカタパルトとして左拳を発射した。
風と水による加速が付与された一撃は高速。
だが基本に忠実な正拳突きは、基本故に多くの対応が存在する。
これだけ判りやすい攻撃を合気を修めた者が見逃すだろうか。

紅は八雲・紫が緩やかに動くのを見た。

「――！」

正確に鳩尾を穿つ一撃は容易く捕捉される。

紅の高速の拳を掴もうとする紫の手が迫り、しかし弾かれた。

「！」

紅の拳を覆う力場の様な物がある。

風だ。

紅は身体の周りを風で覆い、小規模な乱気流を発生させているのだ。なによりも正確な体捌きが必須となる合気を封じ込める手段として考案した一手。

しかし、

「――甘い」

「な――！？」

視界が右に回った。

一瞬遅れて気付く。

「風に影響されぬ程の妖気で掴んだのか！」

力任せの行為は状況を開拓するのに十分な効力を発揮している。

……このまま地面に叩きつけられるのは拙い……！

だから、という様に紅は動いた。

続く動きは全てが一瞬。

掴まれた腕を掴み返し、空中で身体を丸めたのだ。そうして生まれるのは更なる回転。

「おお……！」

お、から始まる気合の声は咆哮に近い。

上下の反転した世界で掴んだ腕を捻りながら”下”へと放り投げる。

次に脚を伸ばせば回転によって、

「地に足が着く……！」

上下の反転もなく、世界を正しく認識。

中空に投げられた紫の位置を確認する前に蹴りを放つ。先に着いた左足を軸にしての直蹴りだ。力任せの方向転換は筋肉に多大な負荷を及ぼすが、妖怪の筋力と回復力はそれを可能とする。

見れば、紫は足を天井に向ける体勢。

普通であれば首を粉砕する上段の蹴りは、腹部へと着弾する。

対する紫は冷静に防御姿勢へと姿勢を変えた。食らった衝撃で距離を取るつもりだ。

……それほど単純には済まさん……！

紅は蹴撃の軌道を変化させた。

「――！？」

紫の驚愕を無視して続行。

上段の蹴りを風で見えないレールを作り、なぞる事で中段へと移行した蹴撃は、紫の首を殴打。

衝突。

「が……！」

骨を通して鈍い打撃音が伝わってくる。手応えは十分だがダメージがあるとは信じない。

空中を時計の様に回る紫を視界の端で捕捉する。

流れるように直蹴りの右足を旋回させて紫に踵（かかと）を向ける状態で着地。後方への攻撃体勢ができた状態だ。

勢いをそのままに左の後ろ回し蹴りを放った。全力の一撃だ。

「ふんッ！」

「つ――うあっ！」

額を狙った一撃は無理矢理姿勢をねじり、クロスした腕に阻まれた。

同時。

吹き飛ばされながらも紫は受けた衝撃を身を捻ることで脚へと流し、次の瞬間には衝撃を利用した蹴りを放っていた。

蹴り方こそ乱雑だが、円運動によって十分な荷重を得た一撃が紅を襲う。

……なんと器用な……！

妖気のほとんどは攻撃に込めてしまっている。防御に回す妖気は残っていない。

腕を構えて防御するしかない。構えた腕以外で脱力し、衝撃に備えた。

「ぬぅッ！」

激突。

ほぼ正面から押されるだけの一撃だが、途轍もなく重い。

お互いが後方へと吹き飛んでいった。

紫は玉座を粉砕して、紅は扉横の壁に叩きつけられて停止。激突の音は響かず、肉体のみを震わせた。

床に這い蹲りながらも紅は思う。

「……強い」

能力を封じられて尚、己よりも強い。
間違いなく強いのだ。
そして、それ以上に自分が弱い。
風も。
水も。
妖気でさえ、全てが借り物。
雷は充電式。長期戦には向かない。
反射神経を強化する術なくして相対出来る相手ではなく、無駄な消費は抑えたい。
彼らの居る領域に駆け登るなど夢のまた夢だ。だがそれでも、諦められない。
この意志だけは、

「譲れぬ」
「――譲る？　違うわ」

声は目の前。
かつては玉座だった粉塵を割って姿を見せる紫の物。
万全に近い姿を見せる紫は言った。

「貴方はここで敗北するのよ。無様に、無慈悲に、容赦なく、ね」
「……風は突破出来まい」
「馬鹿ね。正確に捉えられないならその身体」

紫が接近してくる。一歩一歩をしっかりと。

「――砕き割る」

無防備な歩みだと、紅は思う。
迎撃が本領たる合気で攻めるなど愚の極みだからだ。
そして同時畏怖している。
先に攻めてはいけないからだ。
……いや。
違う。間違っている。それは八雲・紅の戦い方ではない。相手に対応して戦っていては、自分を発揮出来るはずがない。

「！」

迷う内に互いが間合いに入っていた。手を伸ばせば触れられる距離だ。
これ以上の思考は隙となってしまう。だから、我慢しすぎだ、行けと、己を叱咤する。
瞬間。
紫が動いた。中段突きだ。
機先を制するタイミングのそれは、

「うまい……！」

完全に出鼻を挫かれた。
既に紫は攻撃準備を終えている。対する自分は一瞬に遅れていて、無防備に近い。
しかし、動揺はない。
……焦るな、逸るな、撓(たわ)めるな。冷徹に状況を俯瞰しろっ！
正々堂々正面から出し抜くのが、八雲・紅の戦い方だ。
見る。
攻撃は単純な物理打撃だ。ただし速度、妖気ともに申し分なく、

威力は計り知れない。
防御、回避は間に合わない。風も水も盾には強度が不足する。拳を振り抜かれれば、それが致命打となってしまうだろう。
だからと、紅はキーワードを詠唱した。

「『――雷人（いかずちびと）』」

雷が体表面を覆う。
紅の妖気に蒼く染められたそれは鼓動とリンクするかの様に脈動し、生命の息吹を感じさせる稲光だ。
雷は体表面上を流動する事で消費を最小限に抑え、その上で継続して攻撃力を保有する。
持続力の無さという欠点を補い、攻撃面と防御面の両方を強化する業。
紫が驚愕に目を見開き、右拳を止めようとするが遅い。
紫の一撃は、紅へと着弾した。

「――――！！」

声にならない悲鳴が紫の口から上がった。
紅の雷は、１０億ボルト２０万アンペアという本当の意味において地球規模最大級の雷と同等まで高められている。
如何に一人一種族の大妖怪でも筋肉が電気刺激によって硬直し、脳の指令を無視して停止させられたのだ。
紅に致命打を与えるはずのそれは不発に終わった。しかし、紅は無傷で切り抜けたのではない。

「く……ッ」

吹き飛びはしない。だが、その場で呻き声を上げて膝を着いてし

まう。
痛覚の問題ではない。原因は内蔵の損傷。
紫が感電して硬直しても既に放たれた物理的運動の慣性は残る。
紫の拳は加速がないだけで、慣性のまま腹部を抉っていた。
十分な妖気を保有する一撃は強力無比だ。
圧倒的弱者である紅が受けて無事で済む道理はない。

「――相打ち！？」

誰かの驚く声が鼓膜を震わせた。
幼稚さと賢さを合わせて感じさせる声は、レミリアのものだろうか。
だが今は確認する余力、意義共に存在しない。
早急に魔力を回す。

「……良し」

都合3秒。全ての物理的損失は再生。
立ち上がる。
視線を上げれば、既に紫は起立していた。目立った負傷もなく、三半規管や、筋肉への影響も抜けていると判断。だが、動かない。

「攻めてこない……？　違うッ」

紫は妖気をカードに込めていた。
それは、攻撃準備。自分はかつてコレを見たことがある。頭の中から記憶を見つけるのと、現実の状況が重なった。

「――電車か！」

八雲・紫の妖気が染み込んだ特別製特攻車両。3両の廃電車は並列に走行し、空間を圧し潰してゆく鉄塊だ。
快走の音は金属の摩擦する不協和音。
一瞬で状況を把握する。
八雲・紅という一個人では、回避も防御も不可能。雷人は強力だが、圧倒的質量の衝突を耐えうる様な耐久値を得られるものではない。
ならば、立ち位置という前提を変更する。
故に紅は一瞬で術式を組み上げた。その魔方陣の効果は、

「『――空間転移！』」

時間を置かずに紅が姿を表すのは紫のすぐ後ろ。
転移前の前方移動のベクトルを攻撃のベクトルとして利用して正拳を放った。
そして、紅は二つのモノを見た。
一つは、転移前に自分が居た場所の後方に位置する壁に電車が激突し、瞬間的に魔術的な防護壁が形成されて電車が強引に止められた瞬間。
そしてもう一つは、自分の放った正拳が亜空間に飲み込まれていく瞬間だ。

「――！！」

そして理解する。
紫は間違いなくこちらの転移を、そしてその移動先すらも読んだのだと。
瞬きする間もなくスキマが肥大化する。
巨大にして無数の視線は、獲物を逃がさない。

「くそ……ッ」

紅は、スキマに飲まれて消えた。

●

「き、消え――？」

スキマに飲み込まれた紅を見て呟くのはレミリアだ。
その独り言に近い呟きに対する答えが飛んできた。
藍だ。

「……終わりだ」
「終わり？」

藍は永い夜の終わりを悟る。
疲労を吐き出す様に深く吐息して、

「アレは紫様の境界能力。対象を自分の世界に取り込んだんだ。逆転の可能性はない」

あの世界では絶対者なのだ、と言う藍にレミリアは理解する。
あれこそが幻想郷を統べうる反則。

「一人一種族の大妖怪……！」
「そういう事だ」
「い、いや、待ちなさい！　なら八雲・紫は紅の能力封印魔術を超越したって言うの！？」

藍は僅かに思案し、

「……昔、紫様がおっしゃったんだ。自分の能力を先んじて符に込めておけ、ってね」
「それって」
レミリアの驚愕に答えるように、藍は続ける。
「――ああ。能力を封じられるという事象に対する対処をしてあったんだろう」
圧倒的なまでに強大な主への諦観か、藍は肩をすくめて言った。
その反応を見たレミリアは、眉間に小さな皺を寄せて、
「……まるで、前にもそんな事があったって言いぐさね」
「有ったさ」
「――」
藍は絶句するレミリアに、教える。幻想郷の住民全てが知る真なる神を。
「たった一度だけ、有ったんだ」
●
あらゆるモノを覗き込む様な眼が無数に存在する空間に、紅は居た。
どこを見ても、そこには必ず不気味な眼が存在していた。
どこかに光源が有る訳でもないのに視野の通る世界。
スキマの中の境界世界。
周囲を確認する紅に声が届いた。

『――ここに来るのは二度目かしら？』

反響して耳に届く声は、間違いなく紫のもの。

しかし、その姿は確認出来ない。

視界、風の触覚、妖気、そして魔術。あらゆる探知が無意味だった。何の手ごたえさえが帰ってこない。

ささやかな抵抗と理解しつつ、それでも警戒の体勢を崩さない。

「……初めて会ったとき以来だ」

『そう。なら改めて紹介しましょう』

極めつけは、紅魔館との魔術的なリンクが引きちぎられた事。

これが単に接続を切っただけなら再度接続する事も出来たが、無理矢理だ。

術式効果には顕れないだろうが、術式が損傷している可能性が高い。

修復するには数時間掛かる。もはや今夜中での使用不可だ。

『よおこそ、私の世界へ』

「……招待状を貰った覚えはないがね」

再生に近い域の回復魔術は消費が大きく、地脈から吸い上げた魔力がなければ多用できない。紅自身は良くて一回使うだけの魔力しか保有していない。

つまり回復は許されず、無茶は出来ない。だが万全であったとしても、

……この世界で勝てるはずもない、か。

この場での非常に宜しくない出来事を予期する紅は内心で吐き捨てた。

『ごめんなさい。何せ急なお祭りだったから用意も追いつかなかったのよ』

けれど、と紫は続けた。

『メインイベントは準備してあるの』

「……何だ？」

『――蹂躙よ』

「！」

やや右後方。

前兆すらなく、突如として空間に生まれた妖気弾は発生と同時に紅に向けて加速。

弾丸と化す。

続く紅の判断は全てが一瞬の内だ。

高速の一撃をギリギリのタイミングで身を躱して回避。

そして見た光景は、

「――」

戦列。

あらゆる種類の弾幕が、砲台となって紅に狙いを付けていた。

余りに理不尽な戦力差に背筋が凍る。

それは、紛れもなく隙だった。

畏怖か恐怖か、それは定かではない。

だが事実は一つ。紅が硬直したという現実だ。そしてその一瞬は、弾幕を形成するのには十分すぎる時間だった。

圧倒的優位に立つ紫は、それでも油断なく紅に問う。

『降伏する気は？』

字面だけを見れば疑問系だが、それは是非を聞く為の質疑ではなかった。

ただの確認。

故にこう言おう。答えの解りきった問いは、

「――愚問」

回答すると同時。

返されたのは弾雨だった。それらは怪しく瞬き、姿を現した。

紅の周りだ。

そしてこの世界では、まさしく周囲の空間が妖気そのものであり、威力は減衰どころか存在し続けるだけで増していく。

圧倒的なパワーと無限波状攻撃。上下左右正面背後、その全て。

全方位が危険地帯。

「――――……」

絶望的な死が、紅を押し潰していった。

●

原始的な光源が怪しさを伴って光を放っている。

長型の提灯（ちょうちん）だ。

風に揺らめかぬように和紙の囲いが小さな炎を護り、闇を照らしている。

そんな日本家屋が在るそこは、太陽ではない人工的な光が照らす大和。

地底界。

そこに居を構える一軒に、球体の映し出す映像を前にする計４本の角を持つ三人の影があった。
鬼だ。
「これで終わりか。存外粘ったものだ。勇儀、お前ならどう対処する？」
勇儀、と呼ばれた額から角が生えた女性は少しの間考え、
「力で無理矢理逃げられないなら手はないね、相性が悪すぎる。萃香は？　――萃香っ」
「あっ、えっ、何！？」
萃香と呼ばれた二本角の少女は、映像に見入っていたのか、呼び掛けに肩を跳ね上げた。
微笑ましい子供を見るような生暖かい眼を向ける健康的な魅力に溢れる女性、桔梗は言った。
「萃香。お前はあの状況にどう対応する？」
「あっと、紫のスキマに？」
確認の問いに桔梗が頷く。
萃香が考え、あー、とか、うー、とか呻くが、やがて案が纏まったのか、首を傾げながら、口を開いた。苦笑いと共に、
「んあー、やっぱり霧になるとかしてなんとか捕まらないようにするくらい？」
「ふむ」
と桔梗は前置きし、

「霧となる。それも一つの解かもしれんが、良策とは言えぬ」
「え、そうなの？」
「ああ。一度間近で見た故、アレの性質は見知っている」
桔梗を息を吸う。
「アレは異世界そのものだ。入る前であればこちらの法則に従うが、一度飲まれてしまえば、そこでの法則は全く異なったものとなる。ヤツの設定した、な」
勇儀は腕を組んで思考する。
母の言葉を吟味し、眉間に皺を作って、
「じゃあつまり、捕まればその時点で敗北か」
「簡潔に言えばそうなる。わらわの様に高次元に避難する等の例外を除けばだが、対応はない」
「……」
四天王と呼ばれる様にまで至った二人は視線を落として考え込む。
自ら思考する意志は成長へと繋がる重要な糧だ、と桔梗は考える。
故に思考を諦めない二人の更なる成長を期待している。
「母さん」
勇儀が呼び掛け、桔梗は鷹揚に頷き、続きを促す。
口元に手を当てて考え込みながら、
「能力には、強弱が在っても無敵化や蘇生などは出来ない。――そうだったね？」

「うむ。限定的な無敵、というモノなら幾つかあるがな」

桔梗の持つ『次元を操る程度の能力』も、限定的な無敵状態を作り出せる稀有な能力だ。

自身を高次元存在に変換する事で下位次元存在の干渉を不可能とする反則が可能だ。

能力を使用している間はほぼ完全に無敵だが、妖気の消耗が激しく長時間の使用が出来ない。長時間使って尚、敵を打ち倒せていない場合には圧倒的な劣勢に立つ事になってしまう。

完璧な能力など存在しない、と桔梗は思う。

桔梗にも紫の能力に対する考察はある。

当然ながら正解かどうか等は解らない。だが、一見無敵に思える能力にも抜け穴が存在するのが普通だ。

「んー、ママ」

まだ自分の中で整理こそ出来ていないが、一応の案は浮かんだのだろう。

思案中だといった表情で萃香は桔梗に声を掛けた。

「紫は、スキマの中では無敵なのは間違いない？」

「抜け道が無いとは限らんぞ」

龍神。

彼の真性の神には、一目見ただけで真似られた様に。

「じゃあ、スキマは一日一回しか使えないとか、そういう制約が解れば対策も出来そうだね」

有効かどうかまでは分からないけど、と萃香は苦笑して酒を一口。

良質な酒の匂いに惹かれつつ、桔梗は言った。

「制約は何か。推察出来るか？」
「正直さっぱりかな。勇儀はどう？」
「……強引かもしれないけど、一応」
「ほう。言ってみよ」

桔梗の催促に一度頷き、

「大結界騒動と今回で計二回。鋼鉄の箱を使ってる。『デンシャ』というらしいけど、あれを使うときは必ず数秒の間があった。それ以外にも、八雲・紫はスキマを開くという行為を戦闘に於いては無駄打ちしていないんだ。なんらかの形で多用出来ないんだと思う」
「ふむ。だがそれだけでは弱いな」
「だから強引かもって言ったんだよ。そうやって勘違いさせる狙いかもしれないけどねぇ」

と、そこで萃香が勇儀の背に抱きついた。
背から顔を覗かせるようにして、桔梗を見据える。
表情は真剣だ。
元々が幼い容姿なので、微笑ましいという感情が先だってしまう類のものだが。
萃香が聞く。

「で。ママは結局どう思ってるの？」

問いかけに、桔梗は思う。
このまま自分の考えを教えてもいい。教えてもいいが、
……面白くない。

「ふむ。――さてな」
『……えええええ!?』
声の揃った甲高い疑問系が飛んできた。
更に矢継ぎ早にまくし立て、
「どっ、どうしてだよっ！　ここはカッコ良くビシーッと決めるトコでしょ!?」
「そうだぞ母さん！　アタシにだけ言わせておいて逃げるのは無しだっ!!」
淑女、という概念を外界に投げ捨てた醜態を見ながら桔梗は言った。
浅く眉を立て、
「阿呆、言ったろう。明確な解など問いただされねば分からぬ。それはわらわの推察とて同じ事。信頼されていると自惚れるが、不確かな推測を並べてお前達の先入観にしたくないのだ。理解せい」
「む……」
「それなら、うーん」
信頼する相手にこの様な言い方をされて納得出来ずとも異を唱えるのは難しいだろう。
無論、狙った。
●
「ゴブッ！」
紅は腹に受けた衝撃で意識を覚醒させた。

誰かの蹴りに吹き飛ばされたのだと認識する。
何度か転がり、しかし何も出来ない。勢いのままに転がった。
幾度かの回転を経て、ようやく紅の身体が止まった。
動かない身体の代わりに視線だけを巡らせて確かめる。
自分が今居るのは紅魔館。
こちらを心配そうに見る人影が一人。
寝ている人影が一人。
ただ眺めている人影が一人。
そして、

「――起きたわね」
「……っ。ぁっ……」

掛けられた声に、紫か、と言おうとしたが、気道を傷つけたらしく声が掠れてうまく発声出来なかった。
改めて自身の状態を診れば折れた肋骨が何本か肺に刺さっている。
その他にも無数の打撲などがあり、全身無事な箇所が一つと存在しない。
満身創痍。
魔術で抑制していた痛覚は防波堤を失い、最大の痛波となって紅の脳を襲っていた。
だが、身じろぎですらが痛みとなる状況では何も出来ない。

「黙って聞きなさい。貴方の魔術は一時的に封印したわ。これで再生は出来ないでしょう？　貴方はどうするべきか。――分かるわよね」

一片の感情も籠もらぬ冷酷な声音で投げかけられたのは、降伏勧告。
しかも、魔術を人質代わりに盾としているからタチが悪い。魔術

を失えば、能力封印が出来ないという考えだろうが、実際はそれ以上に困る。
これから全ての事象の為に、魔術は必須。
だから、
……確かめなくては……！
声帯を震わせる事が辛い。ゆえに、口だけを動かして紅は聞いた。
――一時封印とは？
「現時点から二十四時間の魔術行使不可。単なる阻害よ。けれど――」
――これ以上逆らうなら永遠に使えなくする、か。
「ええ。それを踏まえてもう一度だけ聞いてあげるわ。――貴方はどうするのかしら？　八雲・紅」
紅は状況を整理する。
魔術の二十四時間封印。
これは境界能力による干渉と推測する。
そして、これ以上の抵抗と同時に、永劫の魔術技能消失を意味する。
紫はこの条件で私を降したつもりなのだろう。
確かに普通ならばどうしようもない。
しかし、
――私は退かぬ。
「！」
同時。
紅の身体が発光現象に包まれた。
ほぼ身体の中心から漏れ出すそれは、夢幻の如き泡沫（うたかた）。
光が損傷部位を覆えば、瞬く間に紅の肉体を修復していく。その

様はまさしく福音とでも言うべき光景だろう。
能力ではない。
魔術でもない。
妖術でもない。それは、

「――陰陽術！」

叫ぶ紫の顔は驚愕に歪んでいた。
予め長い期間を掛けて作成した符は、膨大な時間という対価を支払う為に強力な一枚となる人間の戦闘手段。
紫とて陰陽術を知らぬ訳ではない。元々が人間であるなら誰でも扱える術だ。
なればこそ紫は己の失態を悔いた。
己を人間と自称する者が使えないと思い込むとは、と。
その様を見て僅かに歓喜の感情を得た紅は立ち上がる。

「八雲・紫。……私は人間だ。肉体の半分、或いはそれ以上が人で無かろうと、――確かに私は人間なのだよ」
「妖怪と人間。決して相入れないととでも言う気？」

険しい表情で威圧する紫に苦笑する。

「そんな事はない。慧音を否定する様な事は言わんし思わん。構図だけ見れば、そう思えるかもしれんがね」
「なら、それが何だと言いたいの？」
「人間は弱い。妖怪に比べて余りに脆弱だろう。だがその心は妖怪より遙かに強い。決して諦めぬ意思を持ち、決して折れぬ意志を持つ者こそが人間だ。ならば信念を諦めぬ私は人間で――」

そして、

「故に貴様等妖怪よりも強い」
「――――」

紅は二メートル先に立つ紫を見て、視線を反らさない。
己の言に嘘偽り無し。
荒唐無稽な意思表示だ。
それをどう思ったのか、紫は視線を伏せて言った。

「……そう。それが貴方の信念なら、私は否定しないわ」
「ははは、有り難い。不毛な言い争いがしたいとは思わないんでな」

紫は笑わず、突き放す。
紅は笑って、言い放つ。

「――ただ私が蹂躙するのみよ」
「――ただ私が勝利するのみだ」

瞬間。
紅が動いた。
次の一瞬で紫が行動を開始する。
続く全ては刹那の中だ。
紅の動きは、左の貫手を中段で放つもの。
対する紫は貫手の対処をするのではなく、跳躍。
後方へと大きく跳躍する事で貫手は空振り、紅に一瞬の硬直が起きる。それは十分な隙だ。しかし紫は攻撃をしなかった。
隙を突くよりも距離を稼ぐ事を優先したのだ。

「……！」

紅は思う。
距離を離されれば二度と接敵の機会はないだろう、と。
八雲・紫はそれが出来るだけの頭脳を、そして能力を保有している。再生魔術無くして突破出来る壁ではない。
故に時間を与えてはならず、
……今この時が最大にして最後の好機！
だから、という様に叫んだ。

「『――雷神（らいじん）！！』」

力を発現させる為の言霊は効力を視認させる。
紅の身体が発光したのだ。
先に使用した『雷人』と同じく蒼く瞬く雷光が辺りを瞬間的に照らす。
瞬間。
紅は雷速で飛んだ。
『雷人』が全体的な強化であるのに対して、『雷神』は超攻撃的高速移動特化の能力。
『雷人』と大きく違うのは己の肉体すらも雷と化す点だ。
超々高速移動する雷は、敵の物理接触を透過するだけでなく、触れ得た全てを感電させるという大きなメリットがある。

「――！」

紫を透過し、感電させながら背後へと一瞬にして移動する。
紫は感電による硬直に身を固められてた。
この瞬間には、呻き声すら満足に上げられないはず。
故にこのまま『雷神』を解除して攻撃すれば勝利は確定するだろう。
しかし、

「ぐがあああ――！」

『雷神』を解除し、着地した瞬間。
紅が激痛に悶えた。
ただの一瞬で太股から下が消失。左足が完全に粉砕したのだ。
これが『雷神』の代償。
理論上、完全に制御すれば無敵化に近い能力ではある。
しかし併せ持つ雷が散らされ、自分自身を喪失するという危険を防ぐのが紅の限界だった。
自由自在に動き回る事など出来はしない。
つまり電子と同様に雷化している限り目的地まで止まらない特攻でしかない。
だから雷速で物質に衝突するエネルギーをそのまま受け止める事しか出来なかった。
そのエネルギーは膨大であり、両足が粉砕されるのを防ぐ為には片足を犠牲にするしかなかった。
だがそれでも、片足を粉砕してでも、
……この一瞬が欲しかった……！
紅が激痛に耐えて器用に振り返るのと、紫が硬直を逃れて振り向くのは同時だった。

「――どうした紅。我に会いたかったのではなかったか」
「――どうしたのメリー。秘封倶楽部は休みだったの？」

紅魔館に立つ二人、女性と少女は互いを見て動きを硬直させた。
八雲・紫が居るはずの場所に沙夜が、八雲・紅が居るはずの場所に宇佐見・蓮子が居た。
陰陽術”変化”。
これは短時間だが、姿形のみならず気配すら変化させる詐術。妖

怪を騙す為に陰陽師が練り上げた傑作の一つ。
奇しくも八雲・紅と八雲・紫が同じ術で互いを騙そうとした瞬間だった。

「……！」

先に我に返ったのは、蓮子（紅）だった。
蓮子（紅）は見開いた眼で、瞬きを一つ。
次の瞬間。
残した右脚で地面を全力で蹴り飛ばした。
全ては一瞬。
生まれる動きは、踏み込みを必要としない身を投げ出す様な特攻だ。
一瞬遅れて沙夜（紫）が動きを見せた。

「くっ――！」

床の上の滑る様に一歩退いたのだ。
しかし、出遅れた沙夜（紫）の一歩よりも後先すら考えずに飛び出した蓮子（紅）の方が速い。
距離が潰れた。
蓮子（紅）は右の片足で飛び出した為に左肩が下がり、体勢が崩れている。
右肩から突っ込む形だ。
だから、という様に蓮子（紅）は左肩が下がった分の距離をカタパルトとして利用。
貫手を発射した。
その際に前に出ていた右脇を締めれば、背筋を十分に生かした一撃となる。

「逃が、さんっ！！」

全力で踏み出し、轟声を上げる蓮子（紅）から光が舞った。
霊力だ。
追い抜いた風に剥ぎ取られる様にして”変化”の残滓が霧散しているのだ。
そうして姿を現すのは、満身創痍の紅だ。
同じく紫も姿を取り戻している。
そして、その口の端が怪しく歪む。
笑みだ。
紅が認識すると同時。
紫は一メートルもない紅との空間に、扇子を下から縦に走らせ、叫ぶ。

「『――開け！』」

異世界への扉を開き、勝敗を決する能力は、
しかし発動しなかった。

「――――」

紫は状況を一瞬で掌握。
自分に問題が無いと確認し、即座に原因へと到達する。
発動するはずの能力が発動していない。
そんな事が出来るのは、

「……能力封印魔術！？」

紫は驚愕を眼を見開くのみで押さえ込み、動く。
続くの判断は一瞬。

考えるよりも早く動いたのは本能だ。
振り上げた腕を突き出し、

「『――四重結界！！』」

蒼く輝く四枚の結界を一瞬にして起動。
頑強な防御壁を展開する。
しかし、

「――砕け！」

紅の持つ『シヴァ』は対結界魔術具として最上の部類に入る。
結界は手甲との接触と同時に破壊され、音が空気を振るわせる。
響く音は硝子の破砕される音に近い。
紅を阻む全ての障害は排除された。
故に紅は確信する。
……勝った！
貫手は標的へと運ばれ、

「『――“穿て”！　シヴァ！！』」

肉を貫き、砕き割りながら体内で真の効果を発揮した。

●

「……どういう事だ……？」

八雲・藍は呆然と呟いた。
理性が理解する現実を本能が頑なに否定する。

「何故だ」

倒れ伏す一人の少女。
紅に肉体を穿たれた少女。
ここに居るはずのない少女。
その少女は、

「何故橙がここに居るんだあああああっ！！」

右腕が無かった。
死に瀕する橙は、信奉する主の両の腕に抱かれている。
自分には回復系の技能は無い上に式神を扱う能力は封印されている。
しかし、主であるならば必ず救ってくれるという信頼がある。
故に自分が為すべき事柄は邪魔をしない事のみ。
そして、その行為に及ぶ可能性のある人物の、排除。
或いはただの逃避だったかもしれない。
それでも大義名分まで用意出来てしまうなら、抑えられるはずがなかった。

「紅――――！！」

咆哮と共に憤怒に猛り、翔ける。
状況を俯瞰していたレミリアは阻止に動こうとして、

「……おねえ、さま……」
「――――」

フランドールに衣服の端を摘まれ、紅と迷った。

その迷いは、藍を見逃すのに十分な隙だ。
藍はレミリアをかわし、射程に紅と捕捉する。

「しまっ――」
「あああああ……！」

理性を押し込める激情を発露させ、突撃。
対する紅は無防備に立ち尽くし、藍を見て口を開いた。
音が生まれた。掠れた声だ。
肉体に力は無く、しかし眼だけをギラつかせて、

「……八雲、藍」

藍はそれ以上、何かを言われる前にぶん殴った。
防ぐ事も避ける事もなく紅は吹き飛ぶ。
いい様だ、と藍は思う。
しかし、この程度で終わる程、藍の怒りは浅くない。
追い縋り、捕まえ、馬乗りで殴った。
手加減など微塵もない暴虐は筋肉を押しつぶし、骨を砕き割り、
内蔵すらも破壊し、

「……紫、さま？」

止まった。
橙の声だ。
か細く、今にも事切れそうな程に弱々しい橙の声は、藍を呼ぶのに十分すぎた。
紅の事など一瞬にして意識の外に吹き飛ばし、橙の元へと駆ける。
……橙！
向かった先で見たそれは、まるで触れ得ざるモノの様な光景だっ

た。

「大丈夫、ですか……？　もう終わったんですか？　橙と一緒に、居ても……大丈夫な、んですか？」

「――ええ。貴女のおかげでね。ありがとう、橙」

母の如く慈愛に満ちた紫の雰囲気は聖母を思わせる。

長年従者として生きてきた藍をして初めて眼にする優しさを携えた微笑み。

神聖な絵画の様な情景は見る者全てを魅了する禁忌。

アガペに触れた橙は、はにかんで言った。

「えへへ、……よかったぁ」

安心して気が抜けたのだろう。

言い終わると、眠るように気を失った。

その直後。

「――藍ッ！」

「！」

紫の一喝。

そして、

「藍！　今直ぐ紅を連れてきなさい！！」

「はいっ！」

常ならば感じられる優雅さ、或いは怪しさとでもいう、いわゆる”余裕”が全く無かった。

有ったのは焦燥。

八雲・紫という賢者が焦る。それは、
……それほど橙の容態が芳しくないという事！
即座に飛んだ。
紅の横に膝を着き、状態を診察する。

「……ち、まだ死ぬなよ」

左足は付け根から欠損。
胸筋と腹筋はスリ潰され、肋骨はそのほとんどが粉砕され、折れた数本が内蔵を傷つけている。
更に、削り取られた様な小さな傷が無数にある。
妖怪と言えども死んでいておかしくないレベルだが、

「関係ない。来てもらうぞ……！」

頭髪を掴み、無理矢理引きずった。行為自体も手荒い。
嫌悪、憎悪、怨恨。
或いはそういった類の感情が働いたからかもしれない。
橙を瀕死の状態に追いやったのは、紅なのだから。

「――紫様」

声を掛けると同時。
乱暴に紅を放り投げる。
片方しか残ってない足は床に投げ出されたまま、頭だけが放物線を描き、床に激突。
丁度、紫の前だ。
紫に動きはない。

「――紅。今すぐ魔術を解除なさい」

橙に話しかけたのとは全く違う温度の無い声音で紫が言った。
視線だけで紫を見上げる紅は口を開き、

「……っ、い……は……」

音は声にならなかった。
肺の損傷と、気道も傷ついているかもしれない。
そこで紫が動きを見せた。
紅の喉から胸部に掛けて、手を翳(かざ)したのだ。
掌に淡く儚い乳白色の光が灯り、触れた部位を修復していく。紅が使った物と同じ陰陽術だ。
紫はゆっくりと這わせていた手を離し、

「これでいいでしょう。もう一度だけ言ってあげる。魔術を解除しなさい」

紫の眼下。
紅は唾液を飲み下すなどをして、幾度か調子を確かめてからこう言った。

「……能力封印の魔術なら、既に解けている」

眉を立てた紫は、横の空間にスキマを開き、

「なるほど」

境界能力の発動を確認して呟いた。
次に橙の腕の無くなった右肩に手を置いて眼を閉じる。
失った右腕は時間を掛ければ再生する。

それが妖怪だ。
しかし、橙は元々がただの猫。それ故に出血が致命的になる可能性がある。
なにより衰弱が酷い。
このままでは間違いなく橙の体力が保たない。
だから紫は橙に備わる治癒力を一時的に高める事で腕ごと治そうとして、

「!?」

有り得ない現象に眼を剥いた。
橙の失われた右腕が少しずつ再生するのではない。
傷口が塞がってしまった。
妖怪の再生能力は人間の比ではない。半人半妖の紅を見てもそれは明らかだ。
それなのに腕が再生せず、傷口から塞がってしまうという事は、

「これで全快だと言うの!?」
「なっ、どういう事ですか紫様!」

藍は想定外の事態に
紫は歯を噛みしめ、紅を見た。

「く……。紅、貴方何をしたの?」
「答えろ!　紅!!」

紅は珍しく取り乱す紫を一瞥し、眼を伏せた。
そして、乾いた笑いをこぼし、

「は、ははは、これは勝利……か?」

「この状況で戯れ言を言えるとはね。敗者は潔く頭を垂れなさい……！」

苛立ちを隠さない様子の紫に対して紅は、とても穏やかだった。
それが更に紫を苛立たせる。

「そうだな。目的を達したとは言え、私は動けず、君らはまだ戦える。明確な結果だ」
「――紅！」

同時。
藍が叫び、鋭利な刃と化した爪を喉元に突きつけた。

「お前がしていいのは回答だけだ！　それ以外の答弁をするな！！」
「ああ、そうだったな。何が聞きたい……？」

完全に生殺与奪の権利を握られていながら、紅は不思議な程に穏やかだった。
藍は思う。
水面に揺られているかの様だ、と。
この状況下で、異常なほど穏便で居られるのは、死が訪れないと思っているか、
……死を受け入れているか、だ。
もしそうであるなら、生命を対価とする脅迫は意味を成さない。
……どうする！？
そこに声が来た。
その声には驚愕と、それ以上の烈火の如き怒りがあった。
紫だ。

「……紅、貴方……！」

「流石は八雲・紫だ。気付いたか。……ごふっ、ぐっ……。だ、伊達に、境界を操る能力を保有してる訳ではないか」

簡易の治療を一部に施されただけであり、途中せき込みながら紅は感嘆を言葉にする。

八雲・紫への純粋な賞賛だ。

だが、紫は顔をしかめて、

「……魂まで”破壊”したのね」

●

「――魂？」

藍が疑問をオウム返しに口にした。

返す様に紅は口を開き、

「細かい疑問は時間の無い今は置いておこう。結論として、右腕を魂ごと破壊された橙を“通常の手段”で治す事は不可能だ。――魂に手を入れるのだからな」

「……」

「そこで取引だ、紫」

「……。何？」

観念する様に紫が聞き返した。

それは間違いなく紅が引き出した対等という立場であり、権利。

「大した事ではない。この異変の首謀者はレミリアかもしれないが、ここまで大事にしたのは紛れもない私だ。引責は私だけで頼む」

「な――」

声を漏らしたのは、レミリアだ。
だが、紅は続けて言う。

「レミリア。二度言わせないでくれ。この場で口を開く権利は私のものだ」
「ふざけないで！　私はこの紅魔館の主、スカーレット家の当主！！　その私を置いて引責なんてさせる訳ないでしょう！？」

紅はレミリアの言葉を聞いて、優しい子だと、そう思う。
この子がスカーレット家に生まれなければ。
義務を伴った巨大な一族に生まれなければ。
自由を謳歌する権利と共に生まれたならば。
……きっと、穏やかに死ねただろう。
或いは、それを望まず今のように奔放に生きるかもしれない。
内心で苦笑を押し殺し、言った。

「藍、交渉の邪魔だ。黙らせてくれ」
「誰が貴様なんかの――」

紅の”指図”を受けて鼻白んだ藍は、当然反発する。
大切な橙を傷つけた怨敵だ。素直に聞くはずもない。
しかし、紫が静かに藍を見て、

「藍」
「……分かりました。――黙れ吸血鬼。これ以上喚くならもう一人の安全は保障しない」
「……ッ」

歯を噛みしめ、レミリアは黙らされる。だが意志だけを屈しまい

と鋭く紅を睨みつけた。
レミリアに睨まれながらも紅は微笑んだ。
それが、優しさだと知っているからだ。
紅は意識を切り替え、紫を見る。
彼は感情を込めずに淡々と問う。

「で、返答は？」
「却下よ」
「ふむ」

下された判断に紅は頷き、何も言わない。
紫には時間が無いからだ。
時間を掛ければ掛けるだけ橙の危険が増していく。
不用意な事は出来ないと誰もが理解している。

「と言いたいけれど、時間がないわ。現状では全て保留し、後日第三者を交えて交渉。それでいいわね？」
「ああ。ただし今すぐに誓ってくれ。交渉の結果は必ず私と共同で公表すると」

紅としては、先に治療を施して無かった事にされる訳にはいかない。
だが、正式に宣誓として幻想郷に対して伝わったならば問題はないと判断出来る。
もしも破られれば八雲の名声は地に落ち、１あらゆる妖怪が八雲勢力に敵対とまで行かずとも友好的ではなくなるだろう。
この提案を断ってもそれは同じ事だ。
公正さを欠いた行動を取る者について行く馬鹿は居ない。
交渉でどうなるかまでは推測になるが、紅は取りあえずの余裕と、武力に裏付けされた対等のテーブルに座るだけの権威も手に入れて

いる。
そこまで悪いようにはならないと理解した上での発言だ。

「ええ。八雲・紫は、その名に誓い、公正かつ厳正な判断を持って判を下し、その結果を幻想郷に報告するわ」
「――感謝する」

頭を下げる動作が出来ないので、眼を伏せる事で謝意を提示する。
それが終われば、やはり感情を見せずに紫が言う。
今成すべき橙の治療についてだ。

「じゃあ橙を。実際はどうするつもり？　魂を直接どうにかする術があるとでも言うのかしら？」
「無い訳ではない、と言っておこう。だが臨床実験になる」
「却下ね」
「当然だ」

と、紅はほとんど動かぬ身体で、被害の少ない右腕を突き出し、

「――持っていけ。この場に居る妖怪で、腕を移植しても橙が侵されずに済む程度なのは私だけだ。スキマで魂ごと切り取り、形を整えて使うといい」

紅が提案するのは、無いなら余所から持ってくるという単純な手法。
肉体を移植する。
妖怪の肉体で行う移植は人間と比べて危険という比ではない。無謀に近い暴挙だ。
自分よりも強い妖怪の肉体を移植すれば、その妖気に侵され、最悪自我が崩壊する。

逆に弱い妖怪を使えば、自身の大幅な弱体化に繋がってしまう。
そして妖怪としての性質が違いすぎる場合、基本的に変質してしまう。どの様に変化するのかは未知の領域だ。
故に紫は顔をしかめて、言った。

「いえ、親和性に不安があるわ。橙は猫で貴方は人間。それも妖怪の血を受け入れた特殊」
「――私の中の血は人間と、半妖の妖狐が二種、純粋な妖狐が一種。内二種は体型も橙に近い時期に受け入れたものだ。イヌ科だが同じネコ目だ。そう違いはあるまい」

問題はあるか、と続けて紅は言うなり黙った。
僅かな間、紫は押し黙り、

「……激痛よ？」
「覚悟の上だ」

そう、と言って紫は扇子を紅の右肩に添える。
そして紅の眼を見て、こう言った。

「馬鹿ね。――貴方のそういう所が大嫌いなのよ」

同時。
肩と腕の間にスキマが開いた。
一瞬にして紅の右腕がスキマの中に飲み込まれ、消えていく。
その直後。

「――があああああああッ！！」

脳が右腕の切断を訴えてくる。

生命が魂の切除を訴えてくる。
余りの激痛に気絶と覚醒を繰り返し、その度に生への執着が削られてゆく。
魔術を封じられた紅は痛覚を緩和する事も出来ない。
死ねば楽になれるという甘言すらこぼれてくる。
……それだけは出来ない……！
紅はただ繰り返す。
忘れるな。
目的を。
忘れるな。
生きる意味を。
忘れるな。
――待つヒトが居るという事を。
次の瞬間。

「！？」

痛みが消えた。
余りの仰天に表情すら動かせずに思う。
……どういう事だ？
視線を巡らし、確認する。
紫は橙をスキマに飲み込んでいる。
藍はレミリアとこちらを監視している上に、驚きを隠せていない。
紅魔館組も同様だ。
つまり、この場に居る者の仕業ではない。
……なら誰が……！
紅が考えに耽る時、謁見の間の扉が乱暴に開かれた。

「――全員動くんじゃないよ！！」
「！」

当代博麗の巫女、博麗・妙。
啖呵を切った彼女は常とは異なった様相を呈していた。
右腕は複雑に折れ曲がり、大小様々な痣が目立つ。
左足を地に着く時も余り体重を乗せない様にしているが分かる。
それでも尚、彼女は吸血鬼の前まで危なげなく歩を進め、言った。

「アンタがこの異変の首謀者かい？」
「ええ、私が紅魔館の主。レミリア・スカーレットよ」

腕の中のフランドールを撫でながらレミリアが答えた。
紅は思わず、待て、と遮ろうとして、

「――――」

紫が口を塞いでいた。
ただ手を当てるだけだが、今の紅に逆らう力が無い。
……黙れというのか貴様ッ！
憤慨を視線に載せて訴える紅を無視して紫は口を開いた。

「待ちなさい、妙」

呼ばれた巫女は視線を動かさずに、

「なんだい紫」
「事を収めたのは私。事後処理は任せて貰うわよ」
「はン、妖怪が妖怪を裁くってのかい？　道理が無いねぇ。妖怪は人間を襲う。人間が妖怪を払う。それだけの関係であり、妖怪に横の繋がりは無いはずだろう？」

違うわ、と前置きして紫は続けた。

「道理が無いというならば、人間に直接被害の無い今回の異変に置いて調停を司る“博麗の巫女”が出張る方にこそ、道理が無いわ。妖怪同士の諍(いさか)いは妖怪に任せろ、と言っているの」

「……チ。ま、いいさ。博麗の巫女は異変を収めるまでが仕事。今回は間に合わなかったし、譲ってやるよ。ただし」

妙はゆっくりを眼を紫へと向けて、

「贔屓なんかがあったら容赦しない」

「好きになさい」

紫は言うなり、スキマを開き、妹を抱きしめるレミリアに視線を向けた。

「レミリア・スカーレット。妖怪の山にも手を出していたわね？天魔との協議の後、沙汰を下す。――紅。貴方もよ」

言われた二人は各々で肯定の意を示し、

「ええ、大人しく待つわ」

「私は私で行動する。そちらで捕捉してくれ」

「そう。何処へでも失せなさい。今日限りで貴方から八雲の名を剥奪よ。――それでは御機嫌よう」

言いたい事だけ言って、紫は藍を連れてスキマに消えた。

いままで戦闘していたのに、随分あっさりとした去り際だと言えるだろう。

状況の推移を見届けた妙は、一息。

「――やれやれ。やる事がないね、あたしゃ帰るよ」

誰に言うでもなく呟き、扉から退出していった。
敵対していた人物が消えて若干の静寂が生まれた。
室内で意識を残す二人は視線を交わし、

「……負けたのね、私達は」
「……負けたとも、我々は」

レミリアは一度俯き、そして穴の開いた天井を仰ぎ見て、

「私が領主として生きる必要はないのね」

紅は紅でしかない。
だからレミリアがどういう意思を支えに、どういう信念を抱いて生きてきたのかなどは分からない。
しかし、空虚に言った言葉が虚空に溶ける前に言える言葉を持っている。
それは、

「スカーレット家の当主という立場こそ消えないが、領主ではない。レミリア・スカーレットという個人がここに居るだけだ」

紅は息を吸う。

「――君は自由だ」
「――――」

呆然と、レミリアは紅を見た。

戸惑いや驚愕、疑念の入り交じった表情が見て取れる。
決して得られなかった個人としての自由。
しかし突然の自由は、束縛に等しい。
だから、紅は言った。この異変を利用させてもらった恩は返そう。

「君は君として、したいように生きればいい。最低限のルールさえ守るなら、幻想郷は楽園だ」
「……らく、えん」
「誰も君を束縛しない。ここが妖怪にとって安住の地である限り、な」

レミリアは答えない。
カーテンの焼き切れた窓から差し込む月光と、星空を見ているだけだ。
だが、それでいい。
己で考え、受け入れる事こそが肝要だ。

「『――癒し賜え』」

紅は最後に残った僅かな霊力を使って、陰陽札を発動。最低限の治療を施した。
……いくらかは歩けるか。
自身の状態を確認し、ゆっくりと歩き出す。
レミリアはもう大丈夫だろう。これ以上は必要ない。
あとは、自分の目的地へと辿り着くだけでいい。

「さあ、行くか」

●

紅魔館を出て、北へと足を向けて紅は歩く。
湖の孤島から唯一陸続きの狭い道だ。
霧の湖の直中（ただなか）を行く道の為、特に多くの妖精が姿を見せる場所でもある。
しかし、珍しく妖精の姿が無い。
紅魔館での強大な妖気の衝突を感じたのだ。ほとんどの妖怪、妖精も危険を察知し、一時的に避難している。
……もし居たら、やられたかもなぁ。
負傷に悲鳴を上げる身体を無理矢理歩かせる紅の速度は遅い。
人間がただ歩く速度にも劣っている。
ようやく対岸に辿り着いた時には、既に1時間が経過していた。
そして、紅は見た。
霧の向こうに大きな影のシルエットを。

「……俺に、何か用か？」

一歩近づく度に少しずつ視界が開け、影が姿を取り戻していく。
一歩、また一歩。
ゆっくりと歩み続ける。
そして何歩を進んだときか、紅の瞳に妖怪の姿が映し出された。
そして、耳に残る深い声が言う。

「――見事だった」
「……戒良」

かつて、大結界騒動で紫に鎮圧された集団の一匹、犬の大妖怪・戒良がそこに居た。

「確かに貴様は実力を証明した。なおかつ、八雲・紫を打ち倒す可能性すら示した」

「……どいてくれ。行かなければならない」

紅は歩みを止めない。

歩き続ける紅は、戒良に口でくわえられ、

「！」

上へと放られた。

なにを、と抗議の声を上げようとして、紅は見た。

「――――」

戒良の背に、乗せられていたのだ。

「故に貴様に敬意を示し、我が背を許そう！」

戒良は大きくほうこうして、言った。

「場所を言え！　貴様が死する前に送り届けようぞ！！」

「……！」

紅は驚いたが納得する。

状態を見れば、紅は生き残るとは思わないだろう。

つまり、これは可能性を示した同志に対する最後の友誼だ。

「そう、か。ならば、白玉楼へ」

紅は首から上だけを北に向け、

「あそこに行けば、私は死なん」

白き獣が空気をかき分けて突き進む。

●

第三十八話：吸血鬼異変　楽園への道程（後書き）

大変遅くなりました……。

オンゲとか信長の野望とかｅｌｏｎａとかがいけないんや
いえ、毎日２０時にならないと帰宅できない状況なのに遊ぶ俺が悪
いんですけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4584i/

東方世界で今を生きる。

2011年6月16日02時19分発行